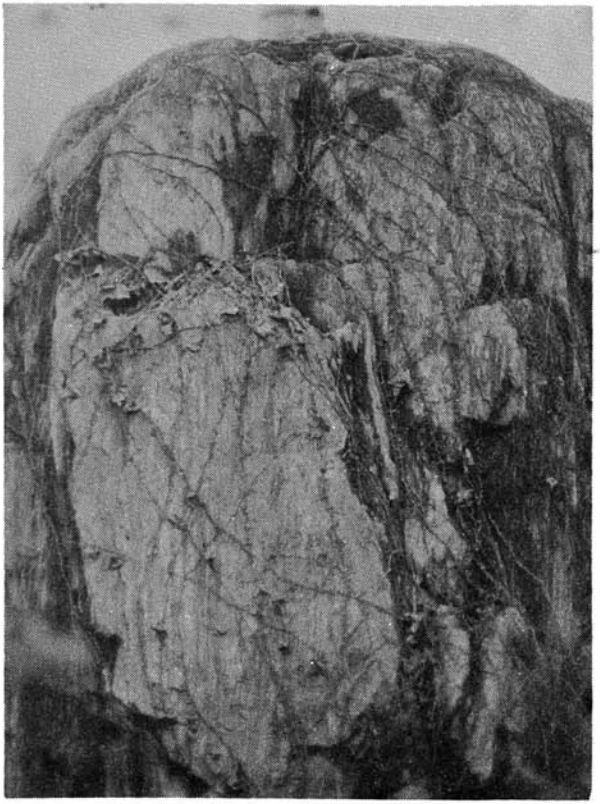
# 創立三十周年

# 記　念　誌



昭和46年11月

千葉県立千葉東高等学校

# 巻頭言

学校長　村田泰次郎

本校は、昭和十六年、当時の有識者各位の非常な御尽力により、千葉市立千葉高等女学校として創設された。

その後三十年の歳月を閲して来たのであるが、この間、学制の改革により昭和二十三年、千葉市立女子高等学校としてその機構が新たに認可された。翌年、新校章が制定されたが、この校章の由来は、「千」の文字と数葉のオリーブの葉で、わが郷土「千葉」をかたどるとともに、その若葉は、生々伸長してやまない本校の意気と栄光とを象徴する。とあるように、新興の気魄を燃えたぎらせている。まもなく、県立移管の機運が生じ、二十五年の春、千葉県立千葉第三高等学校となり、男女共学制がしかれ、次いで通信教育部が併置された。やがて校名変更の動きが県下におこり、現在の県立千葉東高等学校と改名されたのは、昭和三十六年四月である。

現在本校は、普通科二十四学級、衛生看護科三学級、通信教育部生徒約千三百名という大規模な組織をもつ学校として発展した。この発展を築くための努力が、長年にわたって多くの人々によって続けられて来たわけであるが、学校教育の重要性から、その内容の充実についてはもちろん、あわせて施設・環境の整備に対して果された御尽力に強く胸をうたれる。教育を思い本校を愛する関係の方々の恩情の賜物である。今日の我々は、幸いこの恩恵に浴して、立派な校舎とすぐれた設備を利用させていただい

ているわけであるが、この施設設備を十分に活用して、学習の効果を一層高めることに、我々の責務を痛感する。

とくに、先年来、創立三十周年を目指して、校舎の全面改築等、多くの記念計画が立てられて来たのであるが、幸いに大方の御支援と御協力を得て、普通教室棟・特別教室管理棟・体育館兼講堂が完成した。昨秋十一月二日に、創立三十周年記念並びに新校舎落成記念の式典が盛大に挙行されたが、この機会に往時をふりかえり、将来への指針の資たらしめるための記念誌刊行のことが進められて来た。編集係職員の並々ならぬ苦心により、創立以来の思い出や、記念事業の概要等を集め、ここに待望の発行を見ることとなった。

本誌は、本校の歩み来った三十年の足跡を示す一断面図とも言うべきものであるが、これを本校の発展に寄与くださった方々に、満腔の感謝を捧げつゝお届けしたい。往時を偲ぶよすがとして御高覧たまわれば幸いである。また、同窓生各位には、母校の懐しい思い出となるものであろう。在校中のよき思い出を胸に、本校卒業生の誇りをもって、一層の御活躍あらんことを祈ると同時に、母校もまた、ますます発展していくことを御期待願いたい。

我々は本誌を読むことにより、先輩各位が今日の輝かしい伝統と立派な学園を築かれた御功績を偲ぶとともに、現代教育の使命を自覚し、生徒指導の充実強化に一層の努力を注ぎたいと思う。生徒諸君は本校のよき伝統を受け継ぎ、新たなる意欲をもって、一段と精進せられんことを切望して止まない。

常に理想を掲げて、日々その達成に励みつつ、向上進展をめざす千葉東高等学校の弥栄を称えて、巻頭の言葉とする。

# 創立三十周年記念誌目次


巻頭言……学校長　村田泰次郎……一
校歌……七

**創立三十周年・新校舎落成記念式典**

式辞、挨拶、感謝状、表彰状贈呈、祝辞、祝電、工事概要
来賓名簿、会計報告

**沿革史**

一、創立……三九
概説
1. 創立とその前後の時代的背景……三九
2. 千葉市の発展と高女新設を望む声……四一
3. 設置案議決と認可……四二
4. 市立高女発足とその全容……四四

二、市立千葉高等女学校……四六
概説
1. 敷地と建物の変遷……四六
2. 施設・設備……四九
3. 校外学習……四九
4. 生徒会活動……五一
5. 卒業生の進路……五一

6. 戦前の教育……五一
7. 学徒動員……五三
8. 勤労奉仕作業……五四
9. 戦後の荒廃期……五五
10. 戦前の教科書……五五
11. 戦前の通知表……五六
回　想……五八
三、県立千葉第三高等学校……九〇
概　説
1. 千葉市立女子高等学校から県立第三高等学校へ……九〇
2. 施設・設備……九四
3. 創立十周年記念行事……一〇〇
4. 男女共学の実施……一〇二
5. 生徒会活動……一〇四
6. 伝統的行事の出発点……一〇六
7. 帽章の制定……一〇七
8. 女子制服の制定……一〇九
9. 努力目標の設定……一〇九
◇　通信教育の部……一一〇
1. 本校に設置されるまでの概況……一一〇
2. 千葉第三高等学校時代……一一一
回　想……一一三
四、県立千葉東高等学校……一一四
概　説

1. 校名の変更……一四二
2. 施設・設備の充実……一四二
3. 制服その他服装のこと……一四四
4. 卒業生の進路活動状況……一四五
5. 生徒会活動……一四八
6. 修学旅行の変遷……一五八
◇ 通信制の部……一五九
1. 千葉東高時代……一五九
2. 現在の姿……一六一
◇ 衛生看護科……一六三
回　想……一六五

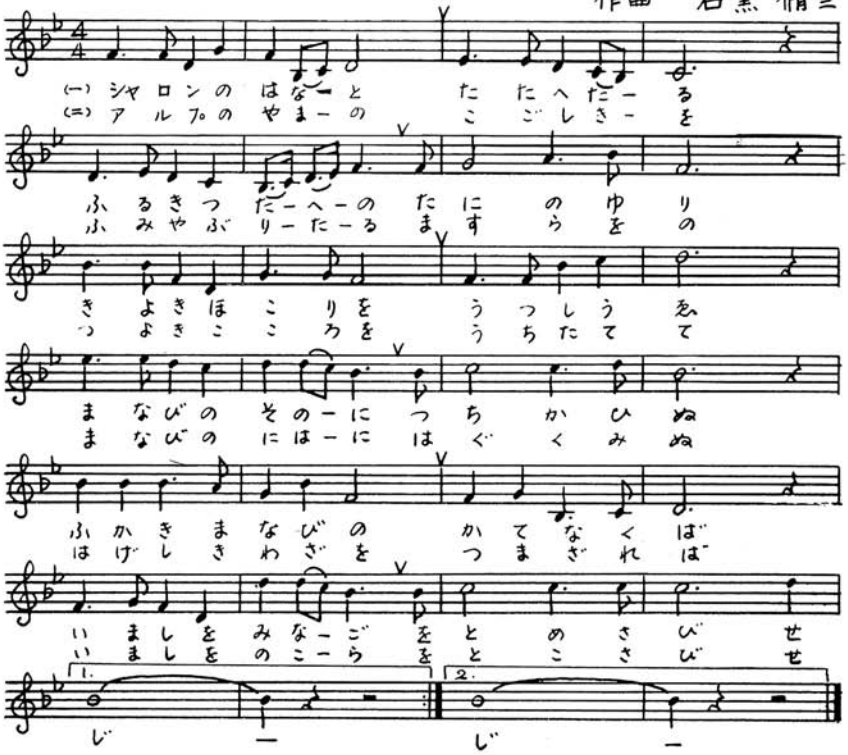
## 付　記

千葉東高等学校平面図……二〇一
教育課程……二〇三
生徒状況……二〇八
昭和四十六年度ＰＴＡ顧問、役員、委員一覧……二一九
職　員　表……二二一
旧職員表……二二七
沿革年表……二四〇
編集後記……二四五

# 校　歌

Moderato 心をこめて

作詞　沢田繁二
作曲　石黒脩三



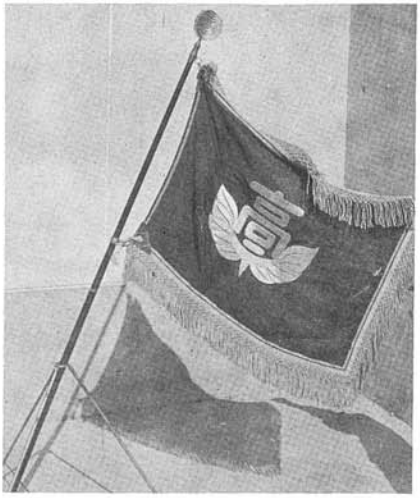

(一)

シャロンの花と　たたへたる
古きつたへの　谷の百合
清きほこりを　移し植ゑ
学びの園に　つちかひぬ
深きまなびの　かてなくば
汝をみなご　をとめさびせじ

(二)

アルプの山の　こごしきを
ふみやぶりたる　ますらをの
強きこころを　打ち樹てて
学びの庭に　はぐくみぬ
はげしきわざを　つまざれば
汝をのこら　をとこさびせじ

県立千葉東高等学校校歌
沢田繁二作詞
石黒脩三作曲



校　　旗



学校長　村田泰次郎



校舎全景

# 歴　代　校　長



初 代　滝 熊之助先生



2 代　楠原 信一先生



3 代　親泊 朝晋先生



4 代　諸川 芳雄先生



5 代　石毛 貞雄先生

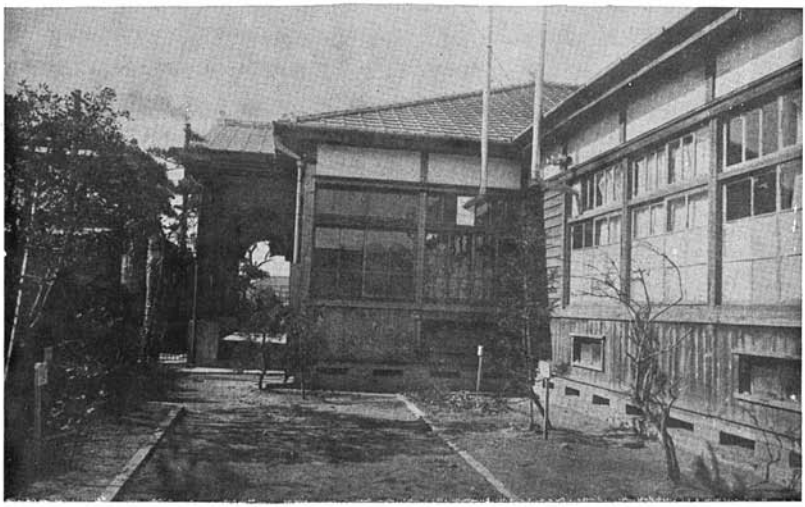


6 代　内藤 貫一先生

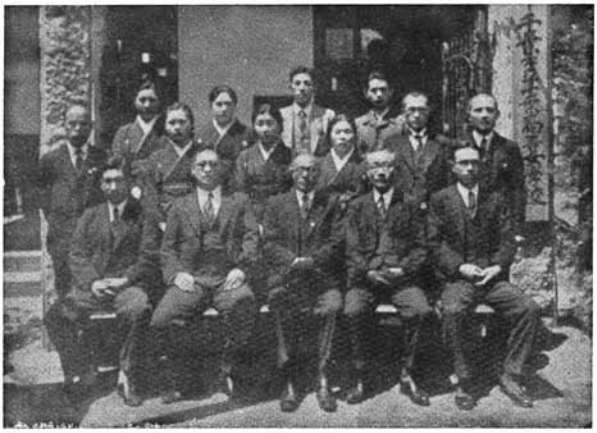


7 代　沢田 繁二先生

# 千葉東高の変遷・発展

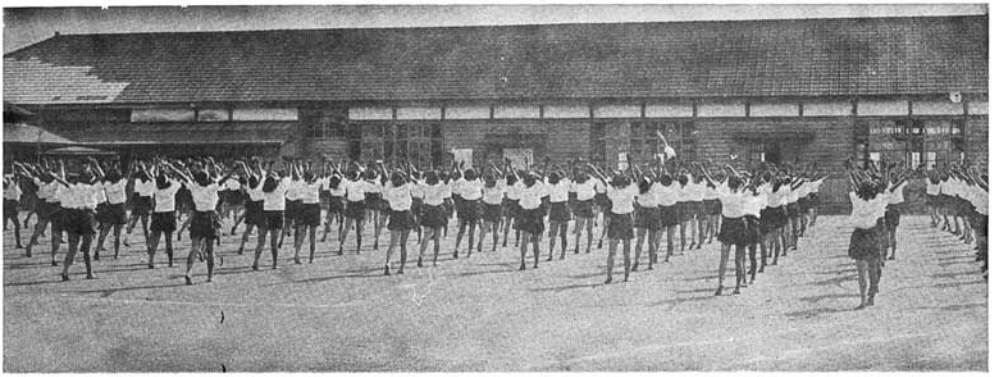


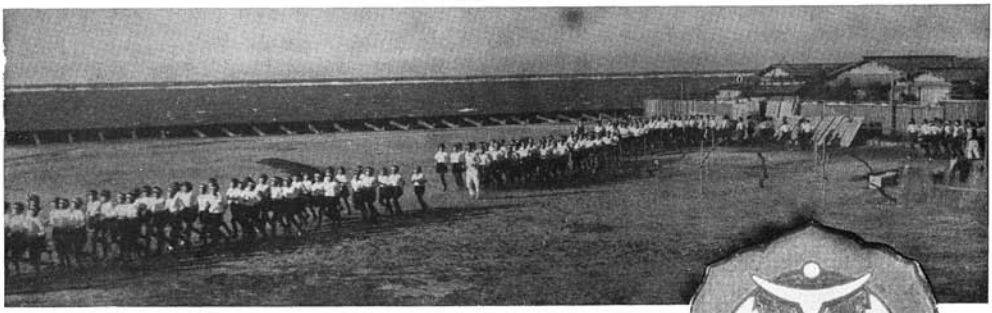
△創立当初港町校舎
（千葉市港町十九番地）
（昭和十六年四月～二十年七月）



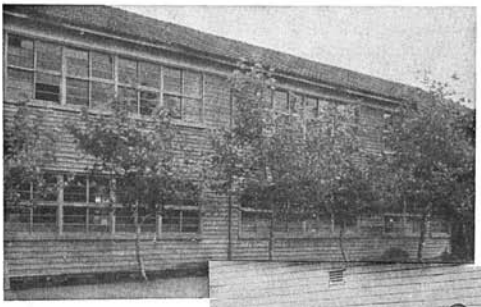
▷当初の職員（創立記念）

体操の授業▽





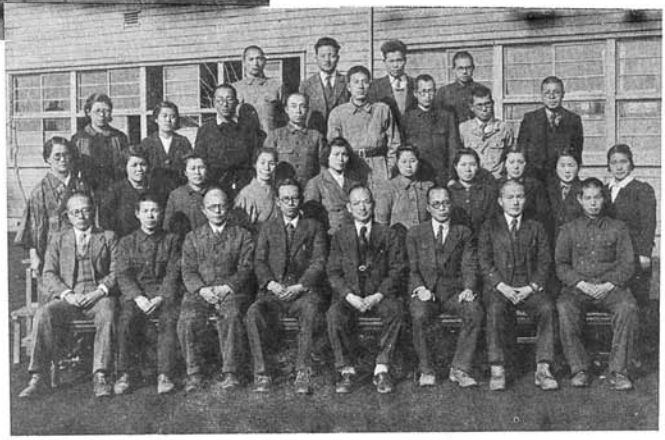
△耐寒訓練



葛城町校舎

◁(昭和18年11月～23年3月)　市立高女時代の校章

当時の職員▷

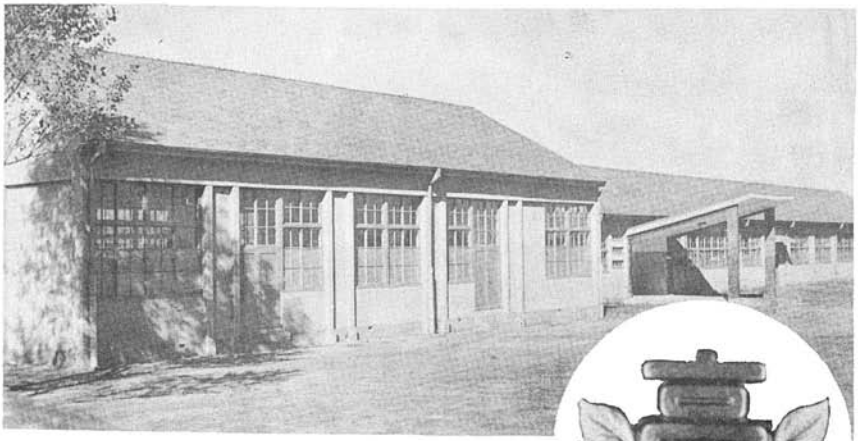




◁食糧増産



△森町旧校舎と職員・卒業生
（昭和二十三年四月～二十六年八月）



△同前校舎（本館）
（昭和二十六年九月～四十四年三月）



▽同普通教室

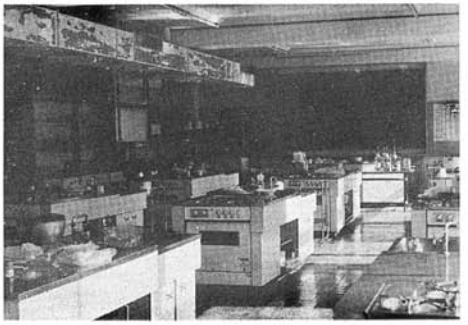
# 新校舎完成

―― 第一期工事竣工（昭和42年11月）――

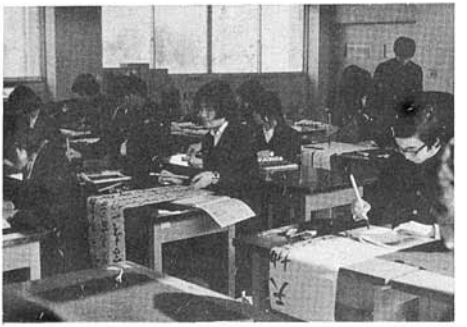
▽第二棟全景



▽家庭科教室



▽書道教室

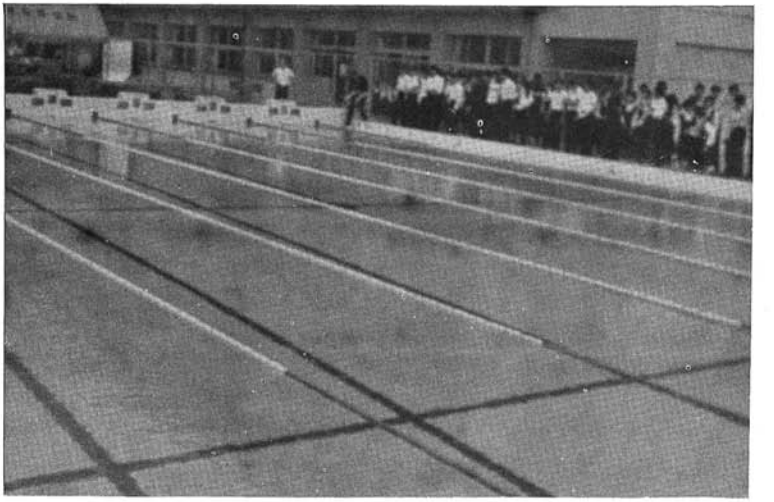


▽美術教室



▽普通教室





▷プール竣工（昭和四十三年七月）

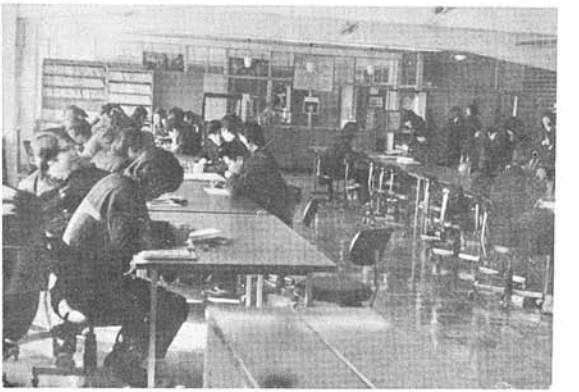
―― 第二期工事竣工（昭和45年3月）――



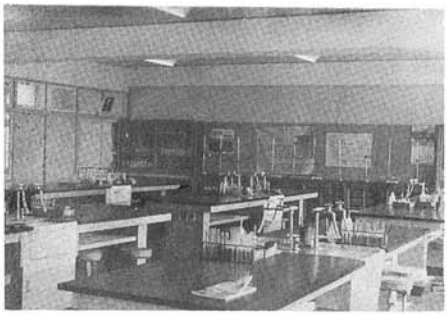
第一棟全景



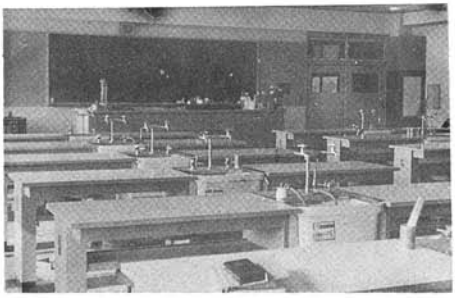
◁玄関



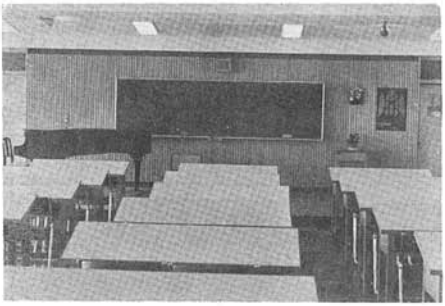
△図書館



◁化学教室

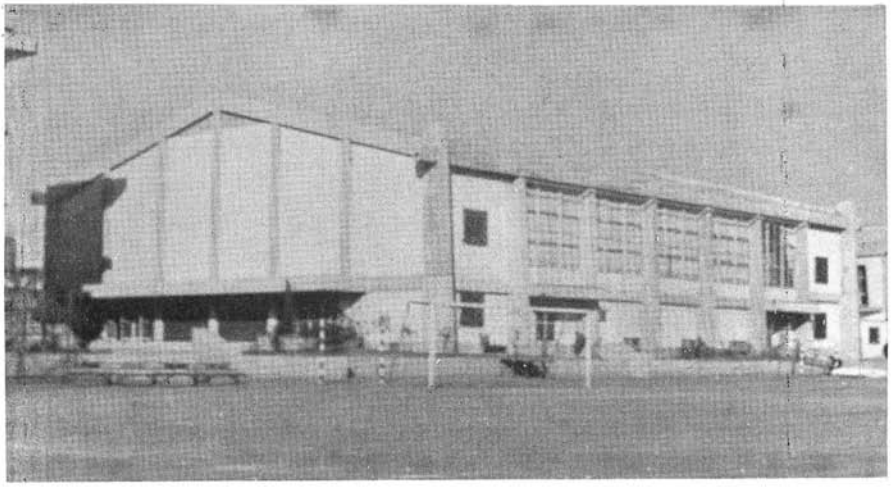


生物教室▷



◁音楽室

## —— 第三期工事竣工（昭和46年3月）——



◁体育館兼講堂全景

# 衛生看護科



△実習風景

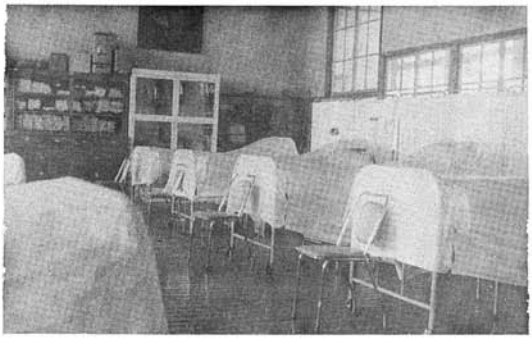


実習風景▷

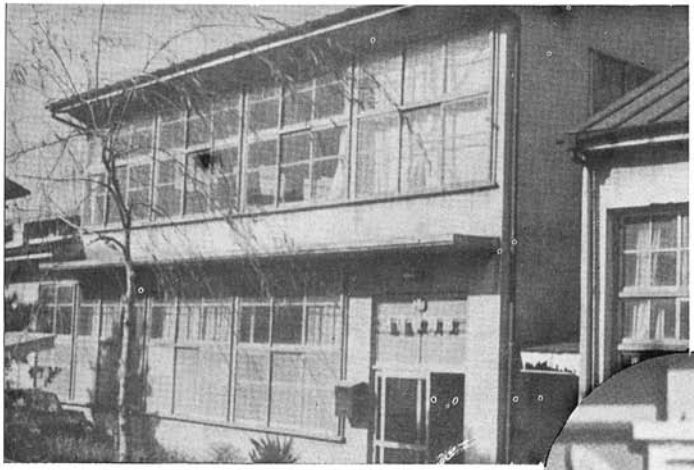


戴帽式◁

▽実習室



# 通 信 制 課 程



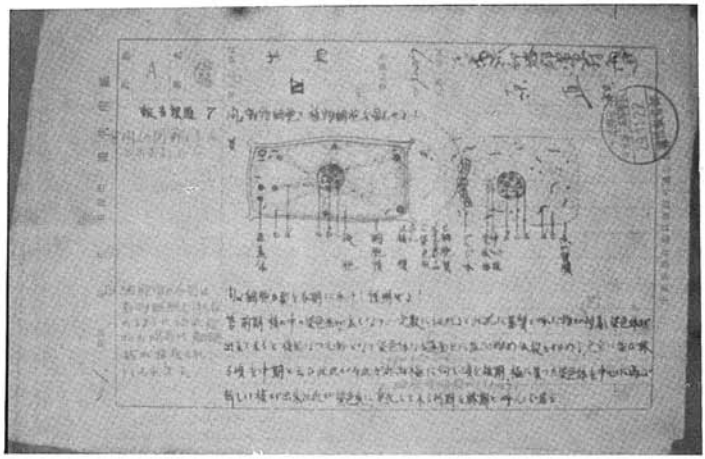
◁通信制課程専用校舎



通信制バッチ。Correspondence Courseの頭文字CCを配してある ▷




◁昭和29年頃の教科書・学習書と報告用紙５～６枚にぎっちり書きこまれたレポート ▽





▷第一回合宿スクーリング（女子組）
鹿野山・九十九谷展望台にて。
昭和三十一年八月二十日朝。



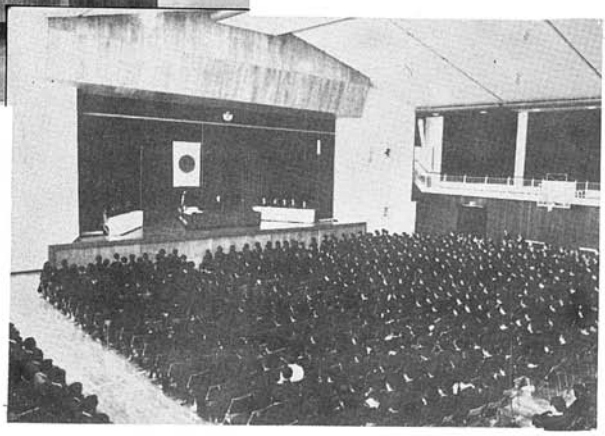
卒業生の今昔 ▽ ▷
全職員に囲まれた第２回
卒業生（９名）と、
職員をずらりと取囲んだ
第14回卒業生。



# 三十周年
# 記念式典



△学校長式辞



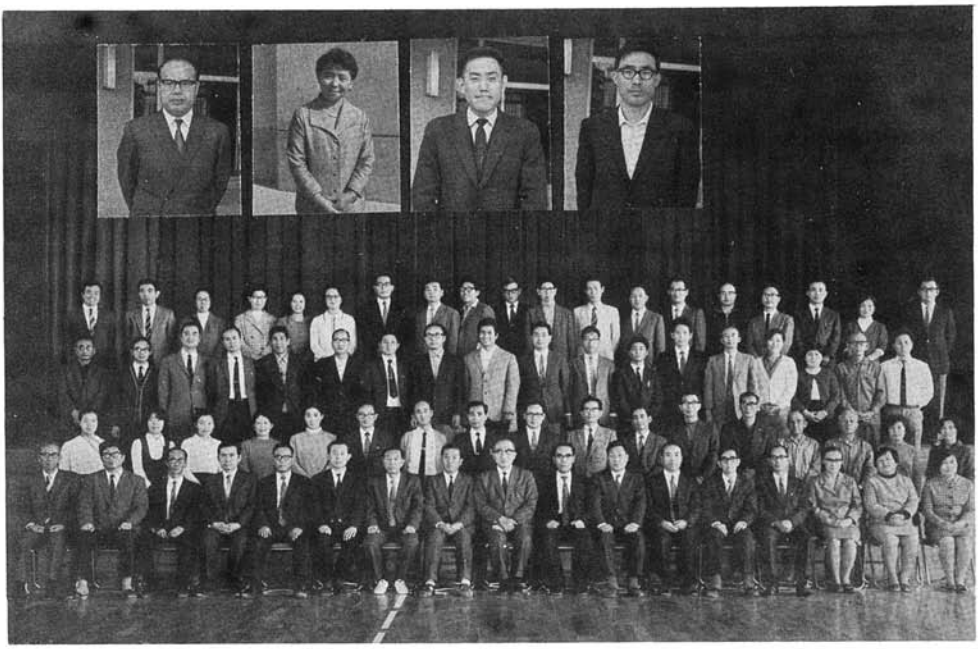
式典会場▷



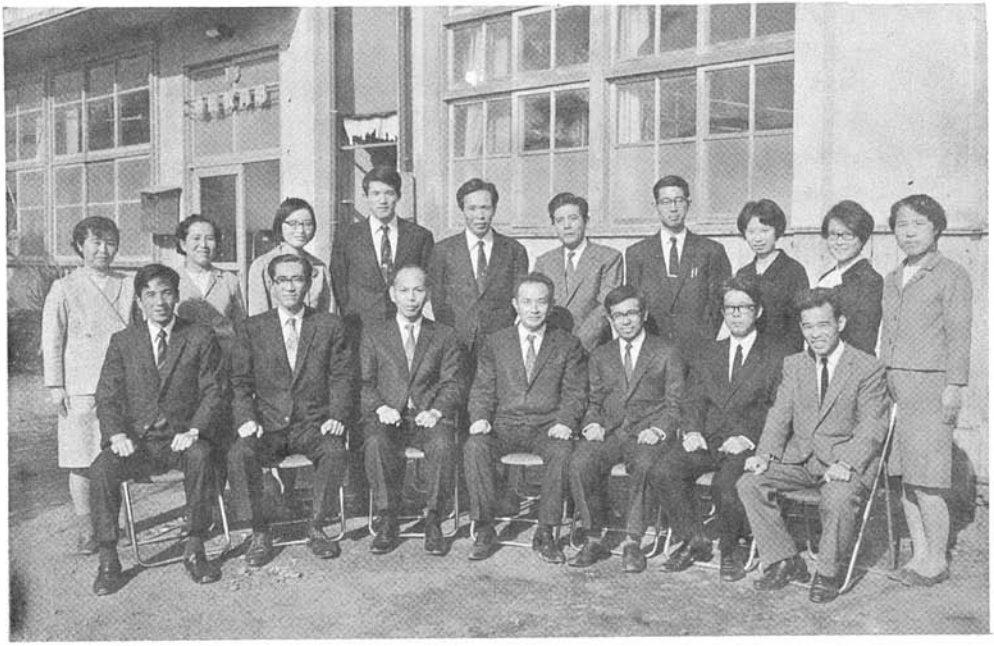
◁感謝状贈呈



受付風景▷



▲現　職　員（全日制）



▲現　職　員（通信制）

# 創立三十周年新校舎落成　記念式典

# 創立三十周年
# 新校舎落成 記念式典

## 式次第

開式の辞

学校長式辞

県教育委員会挨拶

感謝状・表彰状贈呈

祝　辞

千葉県議会文教委員長

千葉県高等学校長協会代表

祝電披露

校歌斉唱

閉式の辞

# 式辞

千葉県立千葉東高等学校長　村田泰次郎

秋気さわやかな菊香るこの日、県教育長大橋先生をはじめ多数の来賓をお迎えしてここに創立三十周年および校舎落成の記念式典を挙行できますことはまことに慶びに堪えないところであります。

顧みますと本校は昭和十六年、千葉市立千葉高等女学校として、時代の要請にこたえる女子教育のまなびやを市内都川沿いの一角に築き、初代校長に県視学官滝熊助先生をお迎えして開校されました。先生は「明朗・真剣・錬磨」を校訓とされ、率先垂範、本校教育の発展を図られたのであります。時あたかもわが国は第二次世界大戦突入の年で、国際情勢はとみに慌しい重大時局でありました。本校はそうした戦乱のさ中に揺籃期を過してきたのであります。当時は時局がら時間差による二部授業や、各所での分散授業が行なわれ、また学徒動員のため学校を離れて勤労奉仕につくなど、不自由な学園生活が続いておりました。一方戦局は日増しに逼迫し、国内には次第に悲壮感が漂うようになってきました。このような時代背景のうちに、昭和二十年三月第一回の卒業式が挙行され、はじめての卒業生を社会におくり出しました。この時の職員生徒の感懐はおそらく言葉につくせぬものであったかと察せられるのであります。翌二十一年四月、それまで四年制でありました本校が、五年制の高等女学校に昇格いたしました。この間の終戦直前に、戦災で一部校舎の焼失という痛恨事がありましたが、この局面は当時の楠原校長先生をはじめとする教職員・生徒の涙ぐましい努力と結束とによって支えられ、他校の校舎を借用しながら授業時間を確保して来ました。二十三年に至り学制改革があって、本校は千葉市立女子高等学校となり、この機会に現在の所在地に移転してまいりました。親泊朝晋先生が学校長としておられた時であります。旧軍隊の建物を利用したこの轟町の校舎で、新たなる意欲に燃えて、五月十五日開校式がおごそかに行なわれました。創立時の開校式も同じ五月十五日でありましたが、以後この日をもって本校の創立記念日と定めたのであります。昭和二十四年四月に、諸川芳雄先生が四代目校長として赴任され、この年生徒会が発足して今日の生徒会の基礎をつくりました。翌二十五年・本校の所管が県に移り、校名も県立千葉第三高等学校と改称されて、男女共学制が採用され、はじめて男子の生徒が入学して来ました。かくて創立十周年を迎えた二十六年に記念の式典を挙行いたしましたが、その際校歌応援歌が制定されました。作詞は本校七代目の校長澤田繁二先生ですが、先生は当時本校の教頭としてご在職中でありました。やがて二十九年四月、通信教育部が設置され、勤労青少年のために日曜日スクーリングや郵便によるレポートの添削指導が始まりました。一方校舎校庭の整備も着々と進行し

校舎本館の落成につづいて、屋外運動場や庭球・排球のコードが完成し、体育館も新築されることになりました。三十四年の春、県立銚子商業高校より石毛貞雄先生が本校五代目の校長として着任され、先生の教育理念に基いて、「学力充実自立節制・体力増強」の三つの努力目標が定められ、全員一致してその達成に邁進いたしました。

昭和三十六年四月に校名が、千葉県立千葉東高等学校と改称され、三高時代からの男女共学制による教育もしだいに根をおろしはじめると共に、女学校から発足した本校も男子生徒が年年に増加してまいりました。そして全日制、通信制ともにその生徒数は千名をこえる大型校に成長いたしました。この発展に伴って、校舎の全面改築が叫ばれ、施設整備期成会が発足し、四十一年の暮に基礎のコンクリート杭が打ち込まれて、六代目校長内藤貫一先生の手によりこの大工事の鍬入れが行なわれました。また教育の内容面においても、学力の向上・クラブ活動の盛況はめざましく、千葉東高の存在を誇りうるようになりました。このころ地域社会の要請を受けて、県下唯一の衛生看護科が設置されております。四十二年四月、澤田繁二先生を七代校長にお迎えし、新校舎第二期工事が着工されましたが、これによって生徒昇降口・管理室および特別教室等が整えられ、恵まれた環境の中で日常の学習ができるようになりました。懸栄の水泳プールもつくられました。なお今、皆様が入っておられるこの立派な新体育館兼講堂は、第三期工事として本年三月に竣功し、第二十三回卒業式をこの場で挙行いたしました。そのご体育関係の行事、もちろん、各種の式典や会合のために多く役立っております。

かくて四十四年四月、私はこの輝かしい本校に着任して以来、先輩校長の後を受け継ぐことになりましたが、本校の伝統に寄せる皆様のご支援と信頼とに支えられて今日に至っております。きょうこの記念すべき日に当り、改めて本校三十年の歩みをふり返り、先輩各位が孜孜営営として築かれました創立以来の精神をかみしめつゝいよいよ教育の本道に徹すると共に、社会に貢献のできる有為な人材の育成に精魂を傾けるべく決意を新たにいたしております。今日の降盛を迎えるまで本校の教育に深くご理解とご協力を賜わりました県御当局、施設整備期成会・PTAの方方並びに同窓生各位、さらにその発展のために献身的努力を惜しまれなかった歴代校長と教職員の皆様に対し、学校を代表して心から感謝のまことと敬意を表する次第であります。

終りに本日この意義深い式典に、ご多忙のところご臨席くださいました方方に厚くお礼を申し上げますとともに、今後も変らぬご指導とご支援を賜わりますようお願いいたしまして、式辞といたします。

# 千葉県教育委員会挨拶

千葉県教育長　大橋和夫

千葉東高等学校の創立三十周年ならびに新校舎落成の記念式典にあたり、千葉県教育委員会を代表して一言ご祝辞を申し上げます。

菊華香るこのよき日、澄み渡る秋空に新装なった校舎の偉容を仰ぎながら、関係者が一堂につどい、本校の三十周年をお祝いできることは、まことに慶賀にたえません。

本校は、昭和十六年に市内港町において、千葉市立千葉高等女学校として創立されました。時あたかも太平洋戦争が勃発し、以来戦乱の中に苦難の星霜を重ねて来たのでありますが、二十年七月には不幸にも戦災をこおむり、更に大きな試練を受けたのであります。しかしながら、学校関係者の教育にかけた情熱と努力は、現在の轟町に校舎を設けて学校再建の途をはかりました。その後二十五年四月に県立学校への移管を果たし、男女共学制を実施して、千葉第三高等学校の名のもとに遂年その規模を大にしつつ教育の充実強化をめざして来ました。

また、二十九年には県下唯一の通信制の課程を招致して、勤労青少年のために広く教育の門戸をひらき、さらに四十一年度より衛生看護科を併置して社会の要請にこたえるなど、すでにして教育の多様化に沿う貴重な実績を数々あげて来たのであります。

この間に校名が千葉東高等学校と改められるなど、変動する社会情勢の中にあって幾多の変遷こそありましたが、よくその初志を貫ぬき教育の推進をはかって来られた本校は、現在名実ともに県都千葉市における代表校としての地位を築いたのであります。

三十年という歳月は、必ずしも長いとはいえませんが、創立以来の本校の業績は実に輝かしいものであり、この尊い歴史をつくって来られた学校関係者に対し、心から敬意を表するものであります。懸案の校舎全面改築も、大方の尽力によりこゝに見事完成し、今日の降盛を迎ええましたことは、まことに喜ばしい限りであります。

論語に「十有五にして学に志し、三十にして立つ。」という一節がございますが、今日の本校はまさに草創の志を受けはるかなる理想を望んで立つ、意気盛んな年代にあたるのであります。一方、人類の平和をめざす国家、社会の現状には幾多の困難が横たわり、教育の力にその解決を期待する声の今日ほど大なる時はありません。かかる重要な時機に直面して本校の前途に期待を寄せ、その使命を思えば、本校教育の真の発展向上はむしろ今後の運営にかかっているというべきであります。こよなき伝統がたくましく受け継がれ、時代の進展に即応した青少年の健全育成をめざしつつ、本校がさらに大いなる躍進をとげられることを念願してやみません。

所懐の一端を述べてお祝いのことばといたします。

# 感謝状および表彰状を受けた人々

県教育長感謝状

中村作次郎殿

期成会長、学校長感謝状

株式会社銭高組殿　武田建設工業株式会社殿

学校長感謝状

労網由雄殿　永江　栄殿
伊藤清夫殿　磯貝　豊殿
茂手木幸忠殿　森　俊雄殿
山崎一郎殿　吉田さゆり殿
勅使川原安芸子殿　一条あき子殿
山崎百合子（旧姓麻生）殿

永年勤続職員表彰状（学校長表彰）

安塚正一殿　松本正子殿
野村松三殿　須藤明子殿
佐藤敏之殿　川添章彦殿
青山康子殿　中村勝次殿
栗林武夫殿

## 祝辞

千葉県議会文教委員長　佐久間　正　夫

本日いよいよ三十周年を迎えられまして、非常に盛大にしかも厳粛に、この記念式典が行なわれましたこと、ほんとうにおめでとうございます。事の成るは成る時に成るのではなくって、必ずよって来たる原因があると言われますが、今しみじみその言葉を思い出しました。今日三十周年を迎えるわ

けですが、この立派な殿堂を築きあげるまでには、ほんとうに多くの方々の並々ならぬご苦労があったと思います。そしてその結果が本校の今日を築きあげたのだ、という感にうたれたのであります。私は長いこと隣の商業高校におりましたので、本校の様子は比較的よく知っているわけでございますが、きょうもこゝで何か一言お祝いを言えということも、そういったかっての隣同志のよしみで、私に申しつけたのではないかと私は感じております。そこで、いろいろの事がらにつきましては、もうすでに、るるこの三十年の歩みについてお話がございまして、私がお話することはもうないようでございますが、思い出すままに二つ三つお話してみたいと思います。

本校が誕生いたしましたのは、さきほどのお話にもありましたように、かの港町の港川のほとりであります。こゝは千葉市の教育にとりましては、ゆかりと言いますか、尊い歴史と言いますか、深い関係をもっております。かっては小学校の校舎であった。そこへ千葉商業が大正十二年に誕生いたしました。そして昭和十一年松波町に商業学校が移転するとともに、そのあとに生まれましたのが千葉工業であります。千葉工業がまた検見川に新築移転いたしまして、そのあとに生まれましたのが本校でございます。千葉市立高等女学校ということで、やはり同じあの寒川の、いや港町の小さい校舎、教室が三教室しかなかった。そこに特別教室の理科室を設けて、小さい屋内体操場があったきり、運動場は　球と庭球コート一面とるとあとは何もなかったという状況の所でありましたが、千葉市高校教育の発祥地であります。本校もこの港川河畔で誕生したのであります。ちょうど戦争のまさに激しくなろうという時に誕生したので、本校がそれから以後非常に苦しんだことは私たちもよく知っております。

しかし一つ今思い出すことは、その時の生徒さんは全部女子でございましたけれども、その行進している状況を見るとすぐこれは市立高女の生徒たちであるということがわかったのであります。当時は非常に学校が集まる機会が多うございまして、そこへ行進をしてくる。非常に姿勢が正しく、そして手を大きく振るので、前にあげるのも大きいし、後ろにあげるのも大きい。そして、からだがある程度なびくくらいの手の振り方でありまして、整然と勢いよく、実に目立ったものであります。これは当時の滝先生の好みであったらしい。とにかく戦争中、かちっとした態度の女学生という、どこにもない女学生という感じを、非常に強く受けました。

それから、もうひとつの特色といえば、これはまあ、あなた方にお話するのはどうかと思いますけれども、さきほど本校の校長先生から、いろいろと今までの校長先生のことを申されましたが、どの先生も、これは千葉県において第一級の校長さんばかりでありまして、三高へ来るには大物校長でなければ来られない。第一級の校長が三高へ来る。それほど本校の校長さんというものは、県下において優秀なもっともすぐれた人が来ておりました。それとともに先生方が非常に優

秀である。そういうことを常に私は感じておりました。したがって、先生方が非常にある特色を出され、また教科書のうちにおいても、本校においては非常に特色ある教科が出ております。クラブ活動においてもまた、相当のものが出ており、ひとりびとりの先生に接してみましても、ほんとうに立派な先生方ばかりであります。校舎が寒川から終戦後越しまして鉄道連隊の材料置場であったために、非常に粗末でありました。それをいろいろと改良いたしまして、そうしてそこで勉強しておったんですから、決して立派なものと言えない。校舎がぼろであっても、先生は非常によかったという感じが、非常に私の頭には強く残っております。

現在みなさん方も、こうして顔つきを見ても、ほんとに英知にあふれたような生徒さんばかりであります。ほんとうに諸君に感心をし、諸君の将来がたのもしく思えてなりません。先生はよし、また、こういう立派な校舎が今日出来上がってそしてここに集まる生徒たちは非常に優秀である。こういう教育の殿堂こそ、ほんとに私はうらやましいような気持ちがすごくいたします。それとともに、この学校を取り巻くいろいろな方々が、ほんとに暖かい気持ちで皆さん方を見守ってくれる、育ててくれる。こんな恵まれた学校は数多くはないと思います。皆さん方は、ほんとうにこの恵まれた境遇をよく自覚し、この立派な所で思う存分勉強して下さい。そして立派な人間になってもらいたいと思います。学校は施設がいいとか設備がいいとかいうことは、これは立派な教育をする手段でありまして、けっきよくは諸君が立派な人間になるということであります。からだも健康であるし、人間としてもものの考え方もほんとうに立派で、その上に十分なる知識をもち、そして自分のもっている才能を、これを使って立派な社会活動をする。また社会のため国のために、うんと尽せる人間になるということが、将来の目的であります。

きようは、本校が創立されてから三十年という、ほんとうの壮年期を迎えました。これからが本校のもっともいいところであります。三十年ですから、もう第一回の卒業生は四十六、七歳になっているでしょう。社会で大いに活躍されていると思います。本校の卒業生が、ほんとうに社会で大きな活躍をし、貢献するということは、これが最後の目標でございます。したがって、責任は皆さん方の双肩にかかっておるのであります。教育の仕方はどんどん変わりつつあります。自分で自分の力を伸ばしていく。そのために、先生方、父兄あるいは施設を十分利用していく。自発的な自分の活動がなかったならば、これからは本当の力がつきません。自分で自分の将来を切り開いていかなければならないわけであります。もっとも恵まれた時代に、こうして教育を受けている皆さんは、十分な自覚をもって、立派に成長していっていただきたいと思います。

私としては、県会の方で教育を担当しておりますので、議会を通してタッチしております。とにかく、教育のことは学校でやりますが、しかしそのための施設・設備・あるいは、

いろいろの規則・方針、そういうものについては、できるだけの努力をいたしまして、皆様の成長のために尽くしたいと思います。私のほんとうの人生は、教育者として終わったわけでありますが、今後とも県議会を通して、教育の振興のために尽くせるならば、私はほんとうにしあわせだと思っているわけであります。きょうのこのおめでたい日に、ほんとうにお祝いを申し上げる機会を得ましたことをうれしく思うとともに、皆さん方がほんとうによく勉強されて、学校ともども発展されますよう、お祈りいたします。

## 祝　辞

千葉県高等学校長協会代表　伊　藤　英　雄

千葉女子高等学校の校長の伊藤です。校長協会の会長は、本校の村田校長先生であります。そこで私が、校長協会の一員として御祝辞を申し上げます。

実は千葉女子高等学校では、昨年度記念式典を挙行いたしました。その際に本校の村田校長先生からお祝辞をいただいたわけですが、私今日まいりましてその時を思い出して感慨深いものがあります。

同時に、それと比較して、本校が設備、三十周年を迎えて立派に出来上ったこの施設・設備のもとに式典を挙行されるということ、非常に羨ましく感じるとともに、また本校の職員生徒の方々、また関係の方々の感慨と申しますか、お喜びもさぞ深いものと拝察しております。

そこで学校という一つの機関ですが、これはやはり物的な面、精神的な面、物心両面があいともなうということが大事なことであります。そうしますと物の面ですが、本校は三十周年を目途とされて長い間の努力、また関係の方々のお骨折りで、このような立派な施設・設備が完成いたしました。本当によい環境、物的環境が整のいました。そう感じております。次に心の面ですが、これはどの学校でも、それぞれ特色と申しますか個性を持っていると思います。学校によってそれぞれちがいがあります。そこでその特徴、個性というものは、これは偶然に出来上るものではないと思います。創立以来長年の間の学校の先生方また生徒さん方各人のそれぞれの向上を目指しての努力、また学校全体としての発展を目指しての苦心の結果生まれるものであります。本校は先ほどからお話がありましたように創立の時は女子だけの学校であり、それから男女共学の学校となっております。また通信制の課程でもうけられ、また最近衛生看護科がもうけられ、いろいろ世の中の変遷あるいは社会の要求に応じて変化しておりますが、この三十年間を通じてきずき上げられたずっと一貫したものがあるのではないか、そう思います。それが言葉を変えていえば伝統ともいえましょうし、また校風というものに

なるのではないかと思います。私今日、記念要覧で本校の校歌を拝見しまして非常によい校歌だ、よい歌詞だと感じました。と申しますのは真摯な学びの心といいますかその姿、また苦難、苦しみ、あるいはきびしさに耐えて個々の向上に努力する姿、それが歌詞の意味であると思います。

私自身のことを申し上げて恐縮ですが、私が旧制中学校時代の校歌、これは誰でもそうだと思うんですが、今でも何かの機会で集まった場合に、あるいは私自身一人の際にも、歌うことがあるんですが、いいかえれば、その校歌の精神が身に泌みこんでいるというか、自分の一つの処世の指標になっているわけです。したがって、本校のこの校歌の心というものが、あなた方の現在の学習の心構えであるとともに、今後実社会に出て生涯を通しての、やはり処世の心構えになるのではないか、またその校歌の心が身についているのではないか、こう思っております。

実は本校に伺いまして、清々しい朝の空気の中に緑の色、立派な学校の施設を拝見し、同時にこの式典の姿を見まして本校の力強く伸びてゆく姿というものを強く感じさせられました。

同じく高等学校に身をおく者として、本校がますます発展されるよう期待してお祝のことばといたします。

以上

## 祝電

（電文・敬称略・順不同）

千葉県知事　友納武人
千葉県議会議長　原秀夫
千葉高校長　澤田繁二
匝瑳高校長　中村鎮亥
君津商業高校長　高山宏
千葉工業高校長　西澤正
茂原農業高校長　岩田保雄
船橋高校長　五十嵐一郎
佐原女子高校長　伊藤泰和
銚市水産高校長　大森敏夫
一宮商業高校長　糸井昇
東総工業高校長　片岡正令
安房農業高校長　武田清治
君津高校長　市原雄忍
小見川高校長　山口謙蔵
佐倉高校長　村上恒雄
館山高校長　斉藤清
下総農業高校長　林文夫
柏高校長　露崎節男

君津農林高校長　池田福寿
銚子商業高校長　森四郎
市立銚子高校長　久保田一磨
千葉聾唖学校長　富坂正豊
桜が丘養護学校長　宮原亮司
元千葉東高校長　内藤貫一
市川学園長　古賀米吉
東邦高校長　下村弘毅
成田高校長　川瀬信雄
科学技術学園工業高校長　飯田吉郎
国府台高校葛南分校主事（旧職員）久保木千寿
検見川郵便局長（旧職員）篠田義三
原子力情報センター（旧職員）菅宮和夫

# 校舎全面改築の経過と完成について

千葉県立千葉東高等学校事務長　田中　進

学校の近代化をめざした校舎全面改築への気運が高まり、その推進母体として施設整備期成会が結成されることになりました。

昭和四十年十二月十五日期成会結成の準備会が開催され、期成会の会則案と結成式の日程、協議題等の決定をみました。つゞいて昭和四十一年一月二十九日期成会の結成式を開催し会則の決定と役員の選出が行なわれたのであります。

全面改築は先ず、普通教室棟の着工により、昭和四十二年一月二十五日そのスタートをきったのであります。つゞいて水泳プール、特別教室・管理棟の竣工を見、昭和四十六年三月三十一日体育館兼講堂の完成により、一応本校の校舎全面改築工事は終了いたしました。

このように校舎全面改築が、極めて短期間に完成されたことは、期成会員、PTA会員の皆様方の温かい御理解と絶大なる御協力の賜であります。

一方、この事業にあたり、県議会・県・県教育委員会の関係の方々より、採択、予算措置、工事執行等について、格別の御取りはからいを賜わりました。

こゝに経過の概略報告を終るにあたり、関係者の皆様に厚く御礼申し上げる次第であります。

建築工事報告

摘要

1. 工事の執行にあたり、本体工事費は全額県の負担である。但し工事費の三分の一の金額を一時地元で県に立替をした。（立替方式）この立替金に対して県は一ケ年間すえおいて向う四ケ年間に償環するものである。
2. この立替金は、千葉銀行から借入れて、県に立替納入

したものである。借入れに伴う利子は自元負担である。

3. 内部設備・外構工事等の附帯工事費は全額自元負担である。

4. 以上の措置は施設整備期成会が主管したものである。

## 健築工事報告

| 工事名 | 設計管理者 | 施工者 | 工期 着工・竣工 | 建物の概要 | 工事費 主体工事費・附帯工事費 |
|---|---|---|---|---|---|
| 普通教室棟（一部特別教室） | 千葉県土木部営繕課 | ㈱八州建設 | 四二・一・三五<br>四二・一〇・三 | 鉄筋コンクリート四階建四、六五九平方メートル（一、四〇九坪）普通教室、家庭科教室、書道・美術・社考科教室等 | 計 一三、七二一、〇〇〇<br>四、八〇〇、〇〇〇<br>一、四二〇、〇〇〇 |
| 水泳プール | 千葉県土木部営繕課 | ㈱平山工務店 | 四三・一・一七<br>四三・七・二六 | 二五メートル七コース循環浄化装置、シャワー室・更衣室等 | 計 七五〇、〇〇〇<br>七八四、〇〇〇<br>一五三、四〇〇 |
| 特別教室・管理棟 | 千葉県土木部営繕課 | ㈱武田建設工業 | 四四・三・一〇<br>四五・三・三〇 | 鉄筋コンクリート四階建（接続廊下部分三階建）四、六五九平方メートル（一、四〇九坪）理科教室、視聴覚教室、音楽教室、図書室教務、事務、校長室、保健室、昇降口等 | 計 一六、二五〇、〇〇〇<br>二、四五〇、〇〇〇<br>一八七、〇〇〇 |
| 体育館兼講堂 | 千葉県土木部営繕課 | ㈱銭高組 | 四五・九・二<br>四六・三・三一 | 鉄筋コンクリート、平家建一、四四九平方メートル（四三八坪） | 計 六六七、五〇〇、〇〇〇<br>一一五、五〇〇、〇〇〇<br>七八三、〇〇〇 |

# 千葉県立千葉東高等学校
## 施設整備期成会々則

第一条　本会は千葉県立千葉東高等学校施設整備期成会と称する。

第二条　本会は事務所を千葉市**轟**町一丁目十八番五十二号所在の千葉県立千葉東高等学校内に置く。

第三条　本会は千葉県立千葉東高等学校（以下本校という）の施設整備の促進および円滑化に努めることを目的とする。

第四条　本会の会員は下記のとおりとする。

1. 本校ＰＴＡ会員
2. 本校同窓会役員ならびに幹事
3. 本校東雲会会員
4. その他本会の趣旨に賛同するもの

第五条　本会に左記の役員を置き任期は一年とする。ただし再任を妨げない。

会　長　一名
副会長　二名
常任理事　五名
理　事　四十名以上
監　事　二名

第六条　理事、監事は会員中から総会で選出する。会長、副会長、常任理事は理事の互選による。

第七条　会長は本会を代表し、会務を**統**理する。

第八条　副会長は会長を補佐し、会長**事故**あるときは、その職務を代行する。

第九条　理事は理事会を構成し、企画運営にあたり会務を処理する。
常任理事は緊急事項について審議するほか常務の処理にあたる。

第十条　監事は本会の会計を監査する。

第十一条　本会に監事若干名を置き会の会計、庶務を掌る。会長が委嘱する。

第十二条　本会に顧問若干名を置くことができる。会長が委嘱し会の顧問に応ずる。

第十三条　総会は定時および臨時に会長がこれを招集する。

第十四条　総会は会則、予算、決算その他本会活動の基本事項を審議決定する。

第十五条　総会および理事会の議長は会長とする。

第十六条　本会の運営は寄付金およびその他の収入による。

第十七条　本会の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る。

附　則

1. 本会則は昭和四十一年一月二十九日から施行する。
2. 第五条の改選の場合、前任者に対する義務負担事項については新任者が継承するものとする。

# 記念式典出席者名簿
## （敬称略・順不同）

### ○　県関係および一般来賓

| | |
|---|---|
| 県議会文教委員長 | 佐久間　正　夫 |
| 千葉県教育委員会教育長 | 大　橋　和　夫 |
| 千葉県教育研究所所長 | 新　谷　敏　夫 |
| NHK千葉支局所 | 小　沼　洋　二 |
| 千葉県土木部営繕課長 | 斉　藤　　正 |
| 千葉県土木部営繕課 | 堀　　貞　夫 |

| | |
|---|---|
| 校医 | 磯　貝　　豊 |
| 〃 | 伊　藤　清　夫 |
| 千葉県教育史編集委員 | 吉　井　孝次郎 |
| 千葉銀行副頭取 | 鈴　木　　久 |
| 千葉信用金庫理事長 | 白　石　信　夫 |
| 奈良屋社長 | 代理　杉　本　郁太郎 |
| 千葉刑務所所長 | 上　島　　清 |
| 株式会社中島書店社長 | 中　島　要　蔵 |
| 川鉄病院附属准看護学院事務主任 | 櫃　　八　郎 |
| 武田建設株式会社々長 | 式　田　菊　治 |
| 株式会社銭高組千葉営業所所長 | 東　野　史　郎 |
| 〃 | 馬　場　昭　夫 |

### ○　高等学校長

| | | |
|---|---|---|
| 千葉女子 | 伊　藤　英　雄 | 伊　藤　晴　男 |
| 京葉工業 | 大　森　　嵩 | 宮　本　文　彦 |
| 千葉商業 | 土　井　盛　夫 | 天　野　敏　夫 |
| 千葉工業 | 西　沢　　正 | 宮　下　典　男 |
| 薬円台 | 守　谷　謙　三 | 佐々木鉄太郎 |
| 国府台 | 南　波　　一 | 四街道　那須　正巳 |
| 国分 | 伊　藤　俊　一 | 八街　田附　正次 |
| 松戸 | 黒　岩　藤　太 | 佐原　斉　藤　晴勇 |
| 小金 | 須　田　義　男 | 松尾　畠　山　一郎 |
| | | 東金 |

東葛飾　斉藤　充
長　生　長谷屋武弘
茂原工業　秋山　利雄
大多喜　矢崎　敏郎
大多喜女子　鬼島　正雄
勝　浦　根本　日清
安　房　君塚　文雄
安房南　井上　敬三
安房水　須田　好衛
木更津　菱田　忠義
　（代）白銀彦太郎
木更津東　山本規矩雄
鶴　舞　大串　利武

○　中学校長

緑　町　竹下　三郎
松ケ丘　日暮　孟
稲　毛　大沼　洸一

○　旧職員

滝沢　虎雄　平山　利枝
林　勢司　高沢　武雄

東金商
京　葉
袖ケ浦養護
四街道養護
千葉市立
昭和学院
千葉経済
専大松戸
明徳
千葉高商
印

横橋弥寿夫
佐藤　清英
飯高　正誼
織田　真一
相川　勝衛
伊藤　一郎
佐久間　彊
高田　善之
谷川　久治
長戸路政司
佐藤　重次

那須　はる
田　吉郎

矢部みえ子
豊田　吉徳

斉藤　健
久保田清風
千田　恭一
吉田さゆり
村越　善雄

○　PTA関係および同窓会

PTA会長　市川安太郎
〃　副会長　根本　貫修
〃　幹事　戸田　四郎
〃　宮島　芳郎
〃　大野　利男
〃　福井　溢良
〃　菊地　留蔵
〃　野本　俊夫
〃　山崎喜久治
〃　平野勝二郎
〃　高井　嘉郎
〃　斉藤　功
〃　広方　功
〃　長浜正一郎
PTA顧問　楠原　信一
〃　大木　静

伊藤　静江
奥山　浩
伊藤　圭子
柳川
岩本　層三

金子　静枝
植田　兵衛
藤野　当栄
伊原　ヨシ
山崎　一郎

大森　菊野
勅使川原安芸子
石川　宏
池内　勝次
山川　達二

PTA幹事　安藤　弥吉
〃　千脇　五郎
〃　石井　四郎
〃　中村　廉
PTA顧問　諸川　芳雄
〃　中村作次郎
〃　網　由雄
同窓会会長　永江　栄
副会長　長谷川直和
〃　高橋　一郎
役　員　細川　悦子
〃　大木　進

○保護者

一年関係

坂本十九男　美里佗一郎　松原　義夫
中村　克人　岩元　綾子　大橋　禮子
吉本健次郎　亀山　力　安達恵三郎
秋葉　繁　長嶋　弘　加藤　満信

二年関係

中村　登　長嶋吉一郎　曽根　豊松
石川　弘　世良　泰　須藤　定吉
梨子本敬江

三年関係

坂本　太郎　平野　武　富田　喜一
長岡　寛二　山本　久一　竹野　三郎
秋本　清

# 創立三十周年並に新校舎落成記念行事会計報告書

収入の部

| | | |
|---|---|---|
| 一、引当金 | 一〇〇〇〇〇円 | |
| 二、寄付金 | 一〇〇三〇〇〇 | PTA会計より引当　へ〇〇三〇〇〇円<br>施設整備期成会計より二〇〇三〇〇〇円<br>千葉銀行四〇〇三〇〇〇円　千葉興業銀行一〇〇三〇〇〇円<br>千葉相互銀行一〇〇三〇〇〇円　千葉信用金庫一〇〇三〇〇〇円<br>奈良屋一〇〇〇〇〇円　扇屋一〇〇三〇〇〇円<br>千葉そごう一〇〇三〇〇〇円 |
| 三、雑収入 | 二八一四八七 | 祝儀及び預金利子 |
| 計 | 二三八一四八七 | |

支出の部

| | | |
|---|---|---|
| 一、会議費 | 七五四〇円 | 実行委員会会議費 |
| 二、印刷費 | 一七〇〇〇〇 | 記念式要覧、案内状、大封筒等印刷代 |
| 三、通信運搬費 | 一二五二五 | 案内状その他有送料 |
| 四、消耗品費 | 八五〇八四 | 式典消耗品代 |
| 五、記念品費 | 四五三〇〇〇 | 文鎮及び置時計（表彰者用）代 |
| 六、食糧費 | 二一〇八〇〇 | 武典当日昼食代 |
| 七、記念誌費 | 七六五〇〇〇 | 三十周年記念誌代 |
| 八、備品費 | 五七五三八 | 折畳椅子格納用台車及び体育館バック幕代 |
| 計 | 二三八一四八七 | |

# 沿革史

# 一、創立

## 概説

### 1　創立とその前後の時代的背景

県立千葉東高等学校の前身である千葉市立千葉高等女学校（四年制）の設置案は昭和十五年九月に千葉市議会へ提出されている。この時の市議会は税制改革案や追加更正予算等の問題でかなり紛糾した模様であるが、本議案は殆んど反対もなく議決されている。当時の市議会議事録によると

市会議案第五十九号

市立高等女学校設置ノ件

高等女学校令第四条ニ依リ市立高等女学校ヲ設置スルモノトスル

昭和十五年九月十六日提出　九月十九日原案可決

千葉市長　永井準一郎

設置要項

一、校地、校舎

校舎新築完成迄旧市立工業学校ノ敷地建物ヲ仮用スルモノトスル

二、入学資格

尋常小学校ヲ卒業シタルモノ又ハ**同等**以上ノ学力アルモノ

三、修業年限

四ケ年

四、生徒定員及学級数

定員六百人　十二学級

五、授業料

市内　一人一ケ月　四圓五拾銭

市外　一人一ケ月　五圓五拾銭

六、開校年月日

昭和十六年四月一日

とありこの段階で設置が本決りとなった。文部省の認可指令は若干遅れて翌昭和十六年一月十五日に出た。昭和十五、十六年といえばまさに大戦の危機が切迫して国際的緊張感が日増しに高まっていた重大時局であり、またわが国がいわゆる高度国防国家体制の強化を急ぎつゝあった時代であることは周知のとおりである。

ここで当時の日本の時代相を概観する意味でおもな出来事を述べてみると

昭和十五年九月二十二日　日本軍北部仏印へ進駐

二十七日　日独伊、三国条約（同盟）ベルリンにおいて調印

十月　十二日　大政翼賛会発会式、政党解消

十一月十日　宮城外苑で紀元二六〇〇年式典挙行
十二月七日　経済新体制確立要綱決定、企業経済団体再編成

昭和十六年一―二月　第七十六通常議会紛糾、政党不在の国会

四月十三日　日ソ中立条約成立
六月十八日　中華民国々民政府首席、汪精衛氏来朝、東亜新秩序建設に関し主要閣僚と会談
〃二十二日　新情勢（独ソ戦勃発）に対処するため重要国策決定
七月十六日　第二次近衛内閣総辞職
〃　十八日　第三次近衛内閣成立
〃二十六日　日本・仏印共同防衛成立、同時に日本軍南部仏印に進駐
〃二十六日　英米両国対日資産凍結
十月十六日　第三次近衛内閣総辞職
〃　十八日　東条内閣成立

以上のように平和が遠ざかり、次第に戦争の渕へ傾斜して行く当時の日本の姿が認められる。ことに昭和十五年十二月七日、閣議で経済新体制確立要綱が決定してから東亜共栄圏の確立を目指したいわゆる綜合的計画経済の遂行と、昭和十六年九月、重要産業団体令施行による統合経済の合理的な運営のため官民協力、職分奉公などの趣旨が強調されるようになると反射的に国民生活への締めつけが次第に強まり世の不安と絶望の影は漸く大きく立ちはだかってきたのであった。また他方では生産力強化を目指してあらゆる手段が構ぜられ、生産工場は昼夜の別なく黒煙を吐きつゞけて労働者も資本家もない有様であった。そうした状況下にも拘らず物資の不足はおゝい難く、国民生活は次第に窮迫して、いわゆる耐乏生活を余儀なくさせられていったのである。このような時代潮流の中で市立高女は呱々の声を上げようとしていたのである。また当時、県下の学校生活や社会生活の実状がどのようなものであったか、その一端を伺い知るため、千葉毎日新聞（現千葉日報）の記事を二～三引用してみよう。

（昭和十六年一月十八日）　△木更津高女生外套着用を禁止　▽「剛健の気風を養い銃後学生の本領とする質素の精神を涵養する目的で、木更津高女では三学期から外套着用を自発的に禁止する申し合せを行ない、さすが大和撫子と地元民から激励の声がしきりに上っている……」

△児童が炭焼製造　▽「君津郡鎌足村矢那小学校では五年生以上が炭焼製造を実習し村民を驚嘆させている……」

（〃　一月二十一日）　△花壇が変じて耕地に更生　▽「東金高女の新体制と専ら評判の花壇を利用しての同校の野菜作りは地元民の注目を浴びていたが……」

（〃　一月十八日）　△禁酒禁煙の実行　▽「君津郡周南村馬覚青年団支部では、農村新体制は先づ禁酒禁煙の断行からと団員の入営、応召の場合の外は茶話会程度と

なし、つとめて献金に拍車をかけるよう申し合せ、同地方の話題となっている」

（〃　一月十九日）　△　未亡人紊りに離婚し得ず、軍人遺族に福音　▽「司法省では今回家族制度の醇風美俗を保持するの主旨に立脚し『夫を失いたる妻紊りに離婚し得ず』との民法中改正法律案を今議会に提出することに決定……」

以上どれも時代の厳しさを物語っている。

ともかくこのような歴史的進行の時期に、市立高女の設置案が取り上げられ審議されていった訳であるが、率直にいってよくぞ設立が認可されたものと思うのである。それだけに当時設立の衝に当られた方々の並々ならぬお骨折りが偲ばれて本当に頭の下がる思いがするのである。

## 2　千葉市の発展と高女新設を望む声

市立高女設置を望む声はその一～二年前から強い要望として、市民の側から出されていたようである。

あたかも千葉市はその頃、軍都としてあるいは産業都市として大発展の時期にあった。その契機となったのが昭和十年七月の総武本線、お茶の水・千葉間の複線電化開通である。これにより本市は東京と直結していわゆる衛星都市となり、首都圏に入ったのみならず、その地理的位置から帝都防衛の一翼を担うという重要な役割を演ずることとなった。本市には以前から陸軍歩兵学校、鉄道第一連隊等の軍関係機関が存在していたが、昭和十二年に入って新たに陸軍戦車学校が穴川に、昭和十三年には防空学校が小中台に進出して、いよいよ軍都の色彩を深めていった。また昭和十四年には日立航空機その他の主要産業の進出があって軍需景気も大いにあがっていた。こうした時代的社会的情勢に伴ない、人口増加現象が目立ちはじめたのは当然である。昭和十年十月、人口わずか五七、〇〇〇余の地方都市に過ぎなかった本市が、昭和十五年には九二、〇六一人、昭和十六年末には九三、〇〇〇人に達した。こうした急激な人口増加現象は景気高揚には役立ったが、市民生活には良くも悪くも極端な影響を招く結果となったのである。若年層における上級学校進学の競争激化はその一つである。昭和十四年十二月現在、千葉市内に存在した既設中学校・高等女学校・実業学校（いづれも旧制）は、

県立千葉中学校　（現千葉高校）　千葉市葛城町
〃　千葉高等女学校　（現千葉女子高校）　〃　新宿町
私立千葉淑徳高等女学校（現明徳高校）　〃　登戸町
〃　関東中学校　（現千葉敬愛高校）　〃　穴川町
県立千葉商業学校　（現千葉商業高校）　〃　松波町
〃　千葉工業学校　（現千葉工業高校）　〃　花園町
私立千葉女子商業学校（現千葉経済高校）　〃　新宿町
〃　千葉精華高等女学校（昭和十五年四月廃校）

の八校であったが、このうち女子関係学校は、千葉高女、淑徳高女および千葉女子商業の三校で（千葉精華高女は昭和十五年廃校）、激増する志願者を受け入れるには余りにも定数

が少なかったのである。ことに千葉高女は県下唯一の五年制高女で、毎年志願者が多く競争率は最高であった。この現実は千葉市民に失望と不満をもたらす結果となり、それはやがて高女新設の声にかわっていった。

かくて市民の側から出た高女新設の要望は次第に高まっていったが、これを受けて市内の小学校々長、あるいは市関係有力者等が設置促進の労をとられたものといわれている。一方、当局もこうした強い世論の盛り上がりに応えて、ようやくその意志を固めるに至ったと伝え聞く。（設置運動に関する陳情、署名、請願等の文書は、議事録あるいは市の保存文書から発見することが出来なかった）

昭和十五年二月二十五日付千葉毎日新聞（現千葉日報）によれば

「県立千葉高女の入学志願者は年々増加の一途をたどり、昨年は二〇〇名の定員に対して三六七名であったが、本年は更に増加し四〇九名が『窄き門』を目指して押しかけ二・〇四倍の多数に上ったので、地元千葉市内有力者は一学級増加を要望した結果、二十四日の成績発表では定員二〇〇名の外に四八名の合格者を発表して可憐な少女群を喜ばせたが、これでも一・六一倍に相当し依然県下一の入学志願者を有することになるので、入学難緩和策として市立高女一校新設の儀がおこり、県議飯豊幸十郎氏は二十五日午後県庁に高瀬学務部長を訪問、市立高女新設問題につき県庁側の意向を打診した。市側の肚では県の補助金を得て明十六年度から実現を期する計画であるが、市立高女新設には県側も大乗気で、むしろ設立を慫慂している状態であるが、市の要望は補助金の交付にあるので現在のところでは海のものとも山のものとも判明せず、新年度に入ると共に同問題は表面化し市会の協議問題となるものとみられている。」

とありこの間の事情がよく記されている。

## 3　設置案議決と認可

そうした動きが次第に活発となり大勢が漸く設置の方向に傾きつゝあった時、更に具体的な構想を打出しその早期実現に尽力された方々が、当時、市視学であった尾形猛男氏や学務課長斉藤政次郎氏であり、あるいは永井準一郎市長、宮内三郎助役（前千葉市長）等であった。その構想によれば広大な市有地を予め確保し、当初は四年制高女として発足し、やがては家庭科の専門学校乃至は専攻科を設置するという遠大なものであった。また修業年限も五年制か四年制かで、だいぶ論議がかわされたようである。ともかくこうした市当局の姿勢と積極的な努力が実を結んで、市立高女設置の日は意外に早く訪れたのである。

丁度この年（昭和十五年）はいわゆる皇紀二、六〇〇年に当り、各地で盛大な奉祝会が催されて国中が湧きかえっていたが、この年の半ば、梅雨降りしきる六月四日の市会協議会で、それまでは時局がら支出増大や予算不足等で強い反対論

や慎重論によって遮られてきた高女新設案が満場一致の賛成を得たのである。

これは丁度時を同じくして市会に提案されていた市税賦課徴収条例や市税独立税新設案等がほゞ承認されるという見通しが立って、市予算にゆとりが生ずるようになったためと思われる。

こうして市立高女設立は決定的となり、それに伴って学校の輪郭も次第に明らかにされていった。この段階で市が示した内容は次のとおりである。

一、定員六〇〇名（各学年一五〇名宛）

二、第一年度より第一学年一五〇名宛を順次募集し第四年度を以って完成するものとする。

三、第一、二年度は旧工業学校々舎を仮校舎として使用し、第二年度において校舎を新築し、第三年度より新校舎に移転するものとする。

四、新校舎の設備概要（所要経費一八三、四〇〇円）

1. 敷地　五、〇〇〇坪
2. 教室　一二室（二五〇坪）
3. 特別教室　七室（一七〇坪）

講堂
裁縫作法教室
家事教室
理科教室
音楽教室等

4. その他　職員室、応接室、使丁室、図書室
器具室、便所等（一一〇坪）

五、開校年月日　昭和十六年四月一日

六月の市会協議会で賛成を得た市当局は、早速県学務課の了解を得た上、正式予算案を市会に提出した。これが九月十九日の市会で審議され、ついに原案可決の運びとなったのである。これについて同年九月二十一日付千葉毎日新聞は次のように報じている。

「中等学校の入学志願者が激増して試験地獄を現出し『小さい世界』を恐威せしめているが、県もこれを認めて来年度は千葉中並びに千葉高女に学級増加の計画中である。また一般から市立高等女学校新設を要望されていたが、資材や財源難から実現の見込みなしと永井市長も言明していたが、税制改革を機会に財源にゆとりをみせたので漸く実現することになった。その案によると港町の工業学校跡を暫定的の校舎として明年度に三学級一五〇名を募集し、校長、教諭は第一年度は一〇名程度を採用して開校し、第二年度より漸次増加させるもので、校舎に使用される工業学校跡は六学級しか収容できないので第三年度には敷地を物色して新校舎を建設するという段取りである。新設の市立女学校は高等女学校令による四年制で、完成後は十二学級六〇〇人を収容し得るもので、これによって女子中等学校の入学難は相当緩和されることになり試験地獄と親心の苦悩は解消されることであろう。」

また文部省の認可は翌昭和十六年一月十五日におりて、ここに千葉市民待望の市立高等女学校が誕生したのである。

## 4　市立高女発足とその全容

千葉市立高等女学校創立時の内容は当初の構想とは若干の相違があったが、ほゞ同じで次の通りであった。四年制、定員六〇〇名、一学年は一五〇名の三学級編成であり、所在地は、千葉市港町十九番地（都川大橋際、千葉職業補導所の存在した位置・旧千葉工業学校跡）。たゞし昭和十八年度までに総経費二〇万円（起債）を以って別に新校舎を建設する。その計画は次の通りである。普通教室十二、家事教室、裁縫作法室、理科教室、音楽教室等、特別教室七、修養道場（講堂）、図書室、その他職員室、応接室、使丁室、器具室等。ともかく当初は旧千葉工業学校跡の仮校舎からスタートすることになり、二月には早くも諸般の活動が開始された。またそれより、認可指令のあった翌一月十六日には生徒募集要項が次のように発表されている。

本年度四月　市立高等女学校に入学せしむべき生徒を左の通り募集す

一、第一学年募集人員　一五〇名
一、出願期日　二月一日より二十日まで
一、入学考査期日　三月八日、九日、十日の三日

県下の他の公立中等学校の生徒募集公示は、この三日後一斉におこなわれた。やがて二月に入り願書受付が始まると、千葉市内は勿論、船橋、市川、佐倉等の近隣都市はじめ遠く成田、木更津、一の宮等からも応募者が殺到する有様で、当時県内の向学の子女の市立高女にかけた期待が如何に大きなものであったかゞ伺えるのである。また二月二十四日には県視学、瀧熊之助先生が初代校長に任ぜられたのをはじめ、当時、人格、学識共に抜群の先生方が選ばれてつぎつぎに着任し、四月には殆どの先生方が顔を揃え、ここに市立高女発足の陣容は整ったのである。

以下は草創期の先生方の顔ぶれである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 校長 | 漢文 | 瀧 | 熊之助 |
| 教頭 | 理科 | 林 | 勢司 |
| 教諭 | 英語 | 市原 | 初雄 |
| 〃 | 美術 | 小川 | 恒雄 |
| 〃 | 体育 | 大関 | たか |
| 〃 | 国語 | 塚本 | 弥六 |
| 〃 | 理科 | 吉田 | さゆり |
| 〃 | 家庭 | 外山富美代 | 新姓　真田 |
| 〃 | 書道 | 安塚 | 正一 |
| 〃 | 家庭 | 金子 | よね　新姓　島田 |
| 〃 | 家庭 | 山越チエノ | |
| 〃 | 国語 | 森 | 俊雄 |
| 〃 | 家庭 | 鈴木 | 利枝　新姓　平山 |
| 事務長 | | 石井 | 恒之 |

三月八日から予定通り入学考査が開始されたが、定員一五〇名に対し受験生が二二〇余名の多きに達したため、仮校舎の狭い試験場では全員を収容することが出来ず二回に分けて試験を行なうなど係り職員の苦労は容易なものではなかった。この第一回の入学考査に当って大変興味深いエピソードが一つ残っている。

試験最終日の三月十日のことである。実は同じこの日に地元、千葉市議会では市立高女定員改正の議案が提出され審議されていたのである。これについては去る二月の願書受付の段階で応募者数の予想以上に多いのをみた市立高女職員が、出来るだけ地域社会の要望を充たそうという主旨から市へ一学級増の申請を行なったことに発したものである。したがって議案内容は「市立高等女学校生徒定員【六〇〇名】を【八〇〇名】に改正し昭和十六年四月一日からこれを施行するものとす」というもので、もしこれが議決すれば一学年の定員は直ちに一五〇名から二〇〇名となり受験生にとっては大変な朗報となる訳であった。そしてこの議案は同日議決された。あとは文部省の認可をとりつけるだけである。

そこで早速手続きをとり結果を待ったがなかなか返事がない。そもそもこの件ははじめから少し無理があったのであるが、折角ここまでことを運んだ以上なんとか合格発表の前日までには認可指令が欲しい－みんなそう願っていた。しかし一向に連絡がない。そこでやむを得ず合格発表の方法を定員一五〇名（三学級）と二〇〇名（四学級）の二口に分けて待機することにした。

このような状況で発表当日を迎えたのである。発表は午後一時であったが、この日の朝、係り職員の一人、石井恒之先生が直接文部省に赴いて接衝に当たることになり一同その結果を待つことにした。発表の時間が刻一刻迫りみんな気が気ではなかったが、直前になって認可の電話連絡が入ったという



市立高女港町時代敷地（白線の部分）
（手前都川）

ことである。―以上のエピソードは初代教頭、林　勢司氏（佐原市在住　62才　現千葉大教育学部教授）が当時を偲ばれて語って下さった回顧談であり一部は昭和十六年千葉市議会議事録から引用した。

こうして幸先よく一学級増を実現した市立高女は全学級共、在籍五五名の大型学級として受験生の大部分にあたる、二二〇名の入学を許可したのである。

昭和十六年四月八日、桜花咲き匂う都川のほとり新生市立千葉高等女学校の授業は第一期生二二〇名を迎えて開始された。



開校式祝賀会

生徒の意気ごみは高く、また真剣そのものであり期待通りのスタートであった。

そして晴れの開校式は五月十五日文部省普通学務局中等教育課長　石丸敬次氏、県学務課長　高瀬五郎氏千葉市長　永井準一郎氏、千葉市助役　宮内三郎氏（前千葉市長）、千葉市々会議長　鈴木亮氏等、多数来賓の臨席を得ておごそかに行なわれた。

挙式中特に、漢学者で人徳のほまれ高い瀧熊之助校長の挨拶（式辞）は進行するにつれて次第に熱気をおび「……本校の伝統、校風は皆さんの手によって創造されるのである。」と結ばれた時、生徒一同は感動して粛然とし、また不動の覚悟を新たにしたのであった。生徒代表、青木千恵子さん（新姓秋葉）の挨拶（答辞）も若さに溢れ溌剌たる意気を示して万場の好感を呼んだ。

この日以来、市立高女は瀧校長のもと、その訓えである　明朗、真剣、錬磨を軸とし智徳の涵養、人格の陶冶、身体の健強を目ざして中等教育の実を挙げるべく撓みなき努力を継続していったのである。

## 二、千葉市立千葉高等女学校

### 概　説

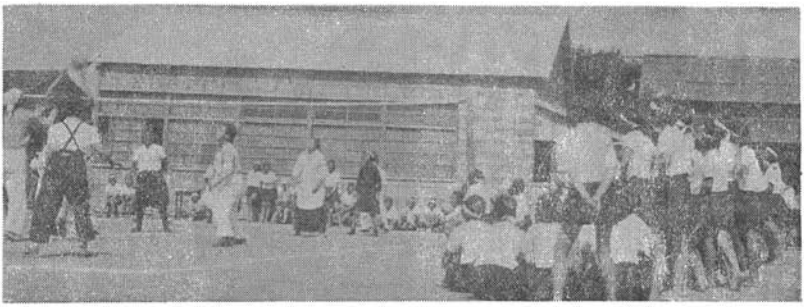
#### 1　敷地と建物の変遷

昭和十六年創立当時の市立千葉高女は、千葉市港町十九番地にあった。この港町の建物は、最初寒川小学校として建て

られたもので、せいぜい十二学級程度の小さい校舎で、敷地も狭く数千坪しかなかった。やがて寒川小学校が大きくなって、現在の地に移転した。そのあいた跡を、千葉市ではじめて作った市立高女の仮校舎にあてたのである。はじめ千葉商業、そのあと千葉工業が使い、さらに青年学校等がつぎつぎに入り、最後に市の職業補導所が使って、そのあとを払い受けて、市立高女の敷地・建物にあてたわけである。したがって創立当初は、職業補導所がまだ教室の一部を使用している有様であった。

最初の入試は三月上旬に行なわれたが、三学級百五〇名定員に対し、二百二、三十名応募者があった。できれば、特殊な生徒を除いて全部入れたいという職員の希望が強く、五十五人で四学級作りたいということで、一学級増加の申請をし、入試発表直前に許可がおりた。かくて最初の入試では、受験者殆んどを入学させたのである。受験者もはじめは市内のものが多かったが、やがて郡部（市原、佐倉、船橋方面）からも多く来るようになり、三年くらい立つと競争率もかなり高くなった。

当時の入試は全部口頭試問で、生徒の特性をみることに主眼がおかれた。伊勢神宮や皇居についての質問や、「親をどう思うか」といった考え方をただすものが多かった。中には考え方や性格に問題ありとして、いい成績で落とされるものもあったという。入試の時教室が不足していたため、午前午後の受験生をすれ違いにして、会わせないように苦心したこともあった。



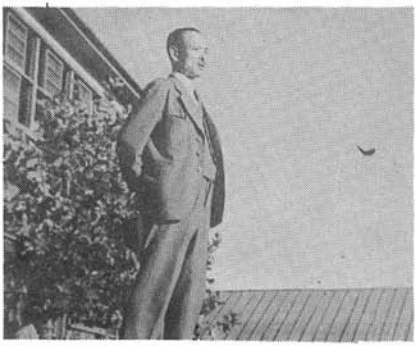
港町第一校舎と敷地

三年目に入ると、八教室しかないのに十二学級の生徒が在学することになり、四教室分不足したため、やむを得ず二部授業も行なわれた。敷地も建物も手狭で、もっと広い所がほしいということと同時に、できれば専門学校くらい併設したいという考えで、現在の葛城中学校のあたりに、五、六千坪の土地を求め、そこへ四教室と職員室を作った。後援会や奨学会が中心となり、千葉市と大差のない都市の学校を視察して、それを参考にして建築の予定だったが、いつになっても手がつかず、下三つ上二つの二階建ての校舎（五教室分）が、ようやく十八年七月ころに出来上がった。それまでの四か月は、教室不足の

ため二部授業を余儀なくされた。午前の部が帰るまでげた箱がないので、外に立って待っていなくてはならない。雨の日は、はき物・かさを持ってそばに置いて授業し、出口と入口を別にして入れ替えるわけだが、狭い廊下を六百余人の生徒が出入りする、その混雑ぶりはたいへんなものだった。二、三年生が朝七時ころから午前中授業、一年生が午後一時ころから四時過ぎまで交替で授業した。この二部授業は、葛城の校舎が出来上がる十八年七月ころまで続けられた。七月に葛城の校舎が出来て三年生（二百余人）が引っ越し、ようやく二部授業が解消した。

しかし四年目に入ると、またもや教室が不足し、隣接の高橋アパートを地所ぐるみ買収した。新校舎が順調にできないので、そのアパートを改造し、うなぎの寝床みたいな長いへやを三へや、四教室に繰り入れて、葛城の新校舎の四教室と合わせて八学級をどうやら確保することが出来た。しかし葛城アパートは、明かりがとれなくて薄暗く、また、柱が中にあったりして、授業もやりにくく不便だったらしい。雨天の時など、約二百米離れているので、わざわざかさをさして出かけねばならぬ不便さもあった。しかし職員も生徒も、戦時中のたいへんな時であり、わがままは言っていられなかった。かくて四年目の昭和十九年には、港町の校舎と葛城の第二校舎（新校舎）と第三校舎（元葛城アパート）の三か所で、分散授業が行なわれた。港町に半分（下級生）、葛城台に半分（上級生）と二つに分かれたため、職員の中には午前午後と分けて、掛持ちの人も少なくなかったという。

やがて、昭和十九年七月三十一日、学徒動員で、四年生はわずか三か月余りしかやらず、日立の蘇我工場へ動員した。そのため二年生が繰り上がって新校舎に入り、二、三年生は新校舎、一年生は旧校舎で授業することになった。つづいて、秋になると三年生が動員され、これも日立の蘇我工場で、主として飛行機の部品製作にあたった。やがて港町の仮校舎が工場になって機械がすえ付けられ、一、二年生はすべて新校舎で授業した。



葛城第二校舎と楠原信一校長

昭和二十年三月三十一日、第一回の卒業式は千葉中学の校舎を借りて厳粛に行なわれたが、戦争末期のあわただしい毎日であった。二十年七月十五日、港町の第一校舎が戦災で焼け、八月八日には、校長瀧熊之助氏が県立千葉高等女学校長に転任し、県立木更津高等女学校長楠原信一氏が校長に補せられた。そしてやがて終戦。

九月には、学徒動員で勤労奉仕に出ていた四年生が帰って

くる。以来、裏町の新校舎が出来るまで、千葉中学の一部（寄宿舎のあと）を借りて授業した。途中で千葉中の校舎が一部焼けたりしたが、葛城校舎の建築は、軍需向けが多くて材料が不足し、中途でとぎれていた。そこで農業小屋の予算五万円で、葛城校舎の前に収納庫を改造して二教室作り、急場をしのいだ。焼けた学校の復興や新たに中学校を建てなければならなかったので、女学校の増築までは、とても手が回らなかったのである。一学年四学級二百人の生徒が、隔日授業をしたりして、その苦労はたいへんなものであった。二十一年四月、五年制に移管し、翌二十二年十一月には、校長楠原信一氏が千葉市教育民生部長に転出し、代わって教頭親泊朝晋氏が校長となった。二十三年四月、千葉市立高等女学校と校名変更し、裏町の新校舎に移転したが、それは軍隊の建物で、てっとり早く、トタン屋根の倉庫四棟を改造したものであった。五月に開校式が行なわれ、やがて新校舎の建築にとりかかったが、二十四年四月には、建築中の新校舎第二棟が、台風のため未完成のまま倒壊した。しかしその年の十一月には、倒壊せる第二棟の改築が成った。かくて翌二十五年四月、県立移管により、千葉県立千葉第三高等学校と校名変更し、県立高校として新しく出発することになるのである。

## 2　施設・設備

港町の旧校舎は小さな建物があるだけで、戦前はいざという時退避できるように、防空ごうが掘ってあった。葛城校舎の方も、教室だけで手いっぱいで、特別教室や体育館もなかった。理科の実験どころではなかったのである。入学試験は教室を全部使えばどうにかやれたが、卒業式は校庭で立ったまま、あるいは千葉中学の一部を借りて、混乱した時期ではあったが厳粛に行なった。図書（蔵書）は多少あったが、終戦時にあやしいものは焼却し、焼却するに惜しいものは穴を掘って埋めておいたが、湿気をくってみんなだめになってしまった。

## 3　校外学習

### 遠　足

最初の二年間は、鵜の森・千城あたりに出かけた。寒げいこやマラソンの代わりに、実益を兼ねた麦踏みをやって、生産に役立たせようと、千葉寺あたりの農家に話したところ、たいへん有難がられた。それからヒントを得て、遠足を兼ねて検見川農場（現東大グランド跡）へ草抜きに頼まれて行ったこともあった。最初の入試のあと、港町まで父兄を連れて来て、校舎や授業を見せるつもりで、院内町の川島製作所に頼んで、机や椅子を運び込む予定だったが、約束に反して机が来ない。けっきょく授業ができず、急きょ鵜の森へ遠足に変更したこともあった。十八年五月ころ、体力測定があり、二キロの砂をリュックに背負って、港町から津田沼小学校まで、三里半の行軍をしたこともある。朝早く出かけて夕方帰る一日がかりのきつい全校訓練であったが、途中でへたばっ

た生徒はなかった。

### マラソン

寒げい古は、全校マラソンを三週間くらい連続してやった。校庭の外を朝の始業前に走るのだが、遊び半分ではなく本格的な鍛練であった。不平など言ったら、一日中座らせられてしまうほどきびしいもので、一時間目など疲れて授業にならないこともあったという。

### 武道

戦時中、なぎなたはよくやった。女性で当時二十七、八歳の若い小沢先生が指導された。

### 学芸会

たいしたことはできなかったが、三月の地久節の日、ひな祭りを兼ねて、演劇や音楽会など多少はあったようだ。戦後、佐野先生が中心になり、千葉中学の講堂を借りて、歌劇を作曲して音楽会などやったこともある。後にヨーロッパに留学し、歌手になって社会的にも名を成した今道（旧姓川口）絹代さんなども、このころ活躍した生徒のひとりであった。

### 運動会

体育競技的なものが中心で、クラス対抗・学年対抗で行なわれた。食糧難時代であったから、食糧豊かな家庭の元気のある人が多く選手に選ばれた。小規模ではあるが、質実な内容のものであった。

### 修学旅行

戦時中は食糧増産や勤労奉仕などで、修学旅行どころではなかった。戦後ようやく復活の気運が盛りあがり、父兄からアンケートを取ってみたところ、よその学校もやっているので、子供はやりたくて親にねだり、父兄の大多数が実施することに賛成し、職員の大勢も同意見であった。しかし不賛成の意見をみると、生活の苦しみを訴えて、今実施するのは無理だと切々と書いてあるものもあり、当時の校長楠原信一氏は、子供にせがまれて親はむりに賛成しているが、これが親の本当の姿だと考えて許可しなかった。しかしやがて二十三年ころから復活した。最初は三回生の四年か五年の時で、秋に伊豆・菲山



後列左から二番目が今道絹代さん　昭和26年写す

方面へいもなど背負っての一泊旅行であった。

## 4　生徒会活動

昭和二十四年四月以前には、生徒会はなかった。終戦後、民主主義の時代になり、ようやく生徒会活動の要望が起こってきた。当時の親泊教頭がそれをうまく指導していた。もともと生徒会の自主的な活動は、アメリカ（占領軍）が作らせたものであり、規約を作り、ＧＨＱのブラウンさんが教育の指導に当たって、生徒会の指導をしてくれた。県下の正副会長や顧問が千葉女子高に集められ、その運営方法などについて指導を受けたのである。かくて二十四年四月二十七日、生徒会が発足したが、当時の生徒会の幹部はみな優秀な人たちであった。クラブ活動が行なわれるようになったのは、生徒会ができてから後である。以後、生徒の自発的な活動がようやく活発化してくるのである。

## 5　卒業生の進路

戦中戦後の混乱した時期は、経済的にも家庭の貧しいものが多く、進学どころではなかった。進学者は少なく、地方にはまだ工場が少なかったから、大多数が東京方面に就職したのである。

## 6　戦前の教育

初代校長瀧熊之助氏は、開校以来口ぐせのように言っていた。「この学校を立派に完成するまで、絶対に出ない。きみたちを踏み台にするようなことはしない。」と。職員も瀧校長を中心に火の玉のように固まっていたし、その意気込みは大変なものであった。職員数は時間講師も入れて、普通の定数より多かったが、土曜の午後までも授業をやった。

教育は何よりも教師を信用しなくてはだめだという考えから、瀧校長みずから方々を偏歴して歩き、自分で信頼できる教員をさがしてきた。校長は自分が気に入ったら、誰が何と言おうと連れてきて、自分の思いのままに職員組織を固めた。教師の方も、校長が自分を信用し、目をかけて連れてきてくれたのだという気持ちから、しぜん情が移り、おのれを投げうって学校のために仕事した。

校長は部下の家族のことはもちろん、どこの部落のどんな子かなど、生徒の名前や家庭のことまでよく知っていた。教師たるものは、五十人程度の生徒の名前なら、一週間くらいで覚えなければだめだと、つねづね言っていた。瀧校長は自分の意に添わないと怒ることも怒ったが、いいことはさっそく取りあげて職員会議にはかり、決まればすぐやらせてくれたので、怒られても気持ちよかったし、やる気も起こさせた。

最初の一、二年の間集めた職員は、小学校の経験者だけであった。授業がじょうずだからという理由からだったが、反面自分の学級にたてこもる欠点があった。競争意識が強く、それも、たとえば掃除など、自分の級の区域だけピカピカに磨いて、目立たせようとする傾向があった。

また、教頭みずから半分くらいの職員を連れて、市内の小学校を片端から見て歩き、他校を見学して研修をつんだ。付属小学校を除いて十二の学校があり、ふた月に一校くらいの割で見学した。そのせいか、授業に対する巧拙、見方、考え方も、だいぶ変わってきたようであった。

校内では、教頭はどんな授業でも入っていって見て批評した。ことば使いや生徒の姿勢などが主であったが、裁縫や音楽の授業まで批評した。しかし、みんないやがらずによくやったという。

当時の平均持時間は二十二、三時間、教頭も十二時間、多い時には、修身の時間も入れて十六時間くらい授業したので、生徒の顔はほとんど覚えていたという話である。

瀧校長は漢学者であり、明朗・真剣・錬磨をモットーとしていた。礼法を根幹とした教育をしたいということで、礼ということにやかましかった。

敬礼は三十度からだをかがめて相手に注目する。最敬礼は四十五度。それを職員が見ていて直すのである。また、字を書く時は、三十センチ机から目を離す。それを、職員が教室をまわって、物差しをもって直したりした。ハチマキはまゆ毛の上一センチのところを、きちんとしめることになっていた。

また、体育の時間の集団訓練はすさまじかった。朝礼の時も、整列・ハチマキのしめ方・訓示など、激しい訓練をくたくたになるまでやった。いっせいにパッと揃ってできないとだめ、ひとりでもおそい人があると、やり直しである。罰として行進をやらされた。そのあとはくたくたに疲れていて、ほとんど授業にならないくらいだった。もちろん今のように、ストーブなど入っていなかったし、窓ガラスがなく寒くても授業したのである。黒くて、からだの色で市立高女の生徒だとわかるくらい、集団訓練は徹底していてみものであった。体操の大関タカさんは、二年目ですでに千葉県予選で代表となり、当時の千葉師範の女子部の先生を感心させたほどだった。それくらい、動作・礼法・体育など整然としていて、他校をしり目にかけていたのであった。

こうした瀧校長の教育方針や考え方は、末端まで徹底していたし、立派な考え方を持った人として、瀧校長の名は県下にひびき、信仰的にまで尊敬されていた。一般の気風として、当時の父兄は、瀧校長がえらいから、市立高女に入れて教育してもらうんだという気持ちで、子供を入学させていた。当時千葉高女は五年制だったが、市立高女は四年制であり、四年で早く卒業したいという人は、自分から希望して入ってきたのである。いやいやながらではなく、行きたいから行くんだという気持ちで入ってくるものが多かった。だから、職員も生徒も、四年制でも五年制の学校に比較して劣等感を持つものなどなかった。実際に、家が豊かでなく、成績のいいすぐれた生徒もたくさん入ってきた。体育や数学の方面で、女高師（現お茶の水女子大）に合格するような優秀な生徒が、何人もいたのである。親も学校を信頼し、生徒もみずから希

望して入ってくる以上、びしびし教育されても、強制されたような気は少しも持っていなかったし、それどころか、かえってしあわせになったとあとでふり返って喜んでいた。

校長は職員に対し、職員は生徒に対して人情が厚かった。瀧校長は漢学者であり話もうまかった。入学式の時、引き受けた生徒は、愛情をもって必ず立派に育てあげてみせると、熱意をこめて話した。その話を聞き、心うたれて父兄は泣いた。また、最初の年の十一月ころ、出身校の校長と受持ちの先生を呼んで、授業を二時間くらい見てもらい、本校ではこういう風に教育しているということを実際に知ってもらった。そのあと、二部屋つづきの教室で、小規模な学芸会をやって見せ、生徒の作ったいも料理などを出していっしょに食べ、意志の疎通をはかったという。このように、戦前の教育は、切迫した情勢の中でも、つねにきびしさと愛情とをもって生徒のことを考え、よくゆき届いたきめ細かな指導を心がけていたのである。

## 7 学徒動員

一九四一年（昭和十六年）十二月八日、日本はハワイの真珠湾に奇襲攻撃を加え、アメリカ・イギリスに宣戦を布告して、太平洋戦争が始まった。

日華戦争から太平洋戦争へと進むに従って、軍事費の膨脹はすさまじく、軍需工業は拡大に拡大を重ね、労働力を維持するため、学生や婦人まで工場に動員され、軍需品の生産に当たらなければならなかった。政府は、学徒の年間を通しての常時動員、教職員がこれを率先指導し、勤労管理するなどを強調した。すべて教育実践の一環として位置づけられ、勤労即教育という名目で、事実上、学校教育を破壊していったのである。

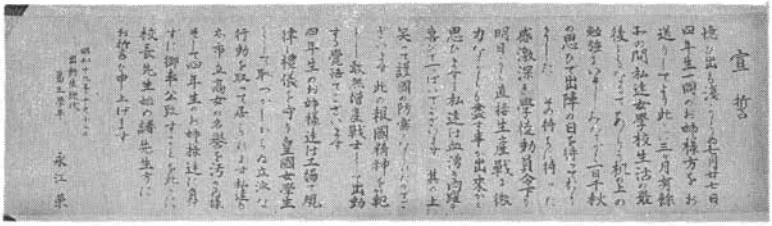
一九四三年（昭和十八年）、戦況が悪化すると、在学中の徴兵適齢の学徒は、いっせいに軍隊に動員され、中等学校生徒たちも工場に動員された。動員を免れた在学生も、報国団を結成し、戦時体制の強化にあたった。現同窓会会長永江栄さん所有になる認証書によると、昭和十八年四月六日の日付けで、「報国団第五分団分団長ヲ命ス」とあり、また同年八月二十一日付けの証書には、報国隊長の名前で、「報国隊第二中隊第一小隊分隊長ヲ命ス」と記されている。永江さんは当時まだ二年生であったが、もって学園をおおう戦時色が、いかに濃厚だったかがうかがい知られる。

またすでに記したように、昭和十九年七月、四年生（第一回生）が日立の蘇我工場に動員し、つづいて同年十月には、三年生（第二回生）にも動員令が下った。当時三年生であった永江栄さんは、十月十二日、出動生総代として、次のような宣誓文を巻紙に書き、全校生徒・職員の前で朗読して、報国の決意を述べている。

### 宣誓

憶ひ出も浅からぬ七月廿七日、四年生一同のお姉様方をお送りしてより此ゝに三ケ月有餘その間私達女学校生活の最後

ともなるであろう机の上の勉強にいそしみながら一日千秋の思ひで出陣の日を待って於りました。その待ちに待った感激深き学徒動員令下り明日から直接生産戦に微力ながらも盡す事が出来るかと思ひますと私達は血湧き肉躍る喜びで一ぱいでございます。其の上笑って護国の防塞となれたのでございます。此の報国精神を範とし敢然増産戦士として出動する覺悟でございます。



永江さんの宣誓書

四年生のお姉様達は工場で規律と禮儀を守り皇国女学生として恥づかしからぬ立派な行動を取って居られます。私達も亦市立高女の名譽を汚さぬ様そして四年生のお姉様達に負けずに御奉公致すことを此ゝに校長先生始め諸先生方にお誓ひ申上げます。」

かくて、あらゆる自由な文化活動は停止され、戦争をおう歌する軍国調一色に塗りつぶされた。銃後にある者は、ひたすら無謀な戦争に熱心に協力するよりほかない状態に置かれ、またそうした教育が行なわれていたのである。

## 8 勤労奉仕作業

日本は急速な先制攻撃によって、戦いのはじめは軍部の計画どおりの戦況であったが、やがて戦況が逆転し、戦争が破局に近づくにつれ、日本の国内ではあらゆる生活必需物資が欠乏し、衣食住のすべてが極度の統制を受けていたが、人々は餓死を免れるために、食糧の闇買いに血眼となった。



勤労奉仕作業

本校でも、校地一万坪の八割くらいを使って校庭を耕し、小かぶ・白菜などの野菜を作り、職員生徒に持たせてやったり、市場へ出荷したりした。さながら農業学校並みであったが、何よりも生産しなくてはならなかったし、授業するのがやっとの状態だった。夏休みは農家の手伝い

に行った。

こうして学徒動員を免れた一、二年生も、勤労奉仕作業等で授業時間を奪われ、その上、十九年十一月ころから、たび重なる空襲警報の発令で、そのたびごと待避したり下校したり休校したりで、学園生活はますます破壊されていったのである。

## 9 戦後の荒廃期

昭和二十年八月十四日、忌まわしい戦争は終わった。しかし、長い間の激しい戦争の犠牲はあまりにも大きかった。戦争末期に悪化していた食糧事情は、戦争直後その極に達し、その他の物質もますます欠乏し、戦災の痛手に悩む国民の生活は、著しい窮乏状態に陥った。

終戦とともに、工場に勤労動員に出ていた上級生は次々に帰ってきたが、校舎が不足し、また食糧増産で授業どころではなかった。生徒はもっぱら作業が多くなり、葛城の敷地を畑にして、麦やさつまいもを作ったりした。また、山武郡の松尾横芝方面の農家へ買出しに行き、生徒に分けてやってとても喜ばれたが、統制令違反ということで、読売新聞でたたかれた。しかし、法律より生きるためには仕方のないことであった。葛城台のアパート校舎の屋根に上って、とまっているハトをとって食べた宿直の職員がいたというが、それほど食糧難は深刻をきわめ、人々の窮乏は言語に絶していたのである。

戦後しばらくは、こうした荒廃した時代が続いたが、やがて人々は、その戦争の廃墟のあとに、民主主義と平和の日本を建設しはじめた。かくて一九四七年（昭和二十二）三月、教育基本法が制定され、四月から六・三・三・四制による新学制が発足し、戦後の教育は新しい段階を迎えたのである。

## 10 戦前の教科書

昭和十三年二月、三省堂から発行され、本校でも創立当時使用していたと思われる「新編女子西洋史」を見ると、「各国各時代の女性が、国家・社会・家庭に貢献した顕著な史実を授け、以て女性の自覚を促し、日本婦人として取るべき態度をも啓発しよう」とする目的をもって編述されていることが、その緒言に明らかにされている。今、その第五編、現代史の最後を飾る「第七章、西洋史上より観たる我が国の使命と国民の覚悟」と題する一文をかかげる。

| | |
|---|---|
| 平和の気運と戦乱の兆 | 大戦後に於ける世界の趨勢は、一面、國際協調の精神の盛んなると共に、他方、國家主義の強大なものがあり、ややもすれば他國の利權を抑え、自國のそれを伸展（シンテン）させようとし、平和のうちに争乱の兆がある。殊に最近に於ける日本の急激な勃興、満洲帝國との親交、将た同帝國創立に關する日本の聯明脱退、これらが相倚り相俟って列國の嫉視を招き、西に隣邦支那、北に共産主義ロシヤ、東に資本主義の米國等、そ |
| 世界に於ける日本の地位 | |

れ東亜の天地に注視の眼を向けつつある。しかもわが國土は比較的狭く、富力も亦充分とは言われぬ。されどこの間に處する吾人は徒らに卑屈・悲観に流れるを誡めなければならぬ。つらつら日本の歴史を考ふるに、國體の尊厳なるは云ふまでもなく、史的経過についても特異なものがある。即ちわが國の躍進を遂げた時代は必ず外國との交渉の頻繁な時代であり、しかもその時代は常に國民の自覺をよび起し、厳然たる自主的態度によって彼の長を採り、以て新興日本文化を建設するに努めたのである。世界一體の今日、聯盟脱退の日本とても、日本のみの日本ではあり得ない。同時に日本なき世界はあり得ない。されば日本精神・日本正義を世界精神・世界正義にまで高めることが、崇高な我が國の使命であり、現代に於て最も重要に感ぜられるのである。従って我が國民たるものは、今後の日本文化を正しく導くため、西洋史の発展に鑑み強固なる國民的自覺の上に立つ國際主義の態度によって、世界文化を正しく導くやう覺悟せねばならぬ。

日本歴史の特色

我が國の使命

我が國民の覺悟

このように、歴史の教科書では、わが国の使命を述べて日本国民の覺悟をうながし、着々と戦時協力体制を整えていったのである。

## 11 戦前の通知表

昭和二十年ころの通知表をみると、わら半紙半裁程度の粗末な紙きれ一枚に、一学年分の成績と出席状況が簡単に記されている。所見欄がなく、教科科目数は二十二科目と非常に多く、評定はすべて秀・優・良・可で記され、判定は何人中特・上・中・下で書かれている。




戦前の西洋史の教科書

# 成績通知簿　昭和二十年度　千葉市立千葉高等女学校

第　学年　組

第　号　氏名

昭和　年　月　日生

| 出席状況 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 出席 | 欠席 | 欠課 | 遅刻 | 早退 | 忌引 |
| 一学期 | | | | | | |
| 二学期 | | | | | | |
| 三学期 | | | | | | |
| 計 | | | | | | |

| | 一学期 | 二学期 | 三学期 | 学年 |
|---|---|---|---|---|
| 修身 | | | | |
| 国文 | | | | |
| 漢文 | | | | |
| 文法 | | | | |
| 作話 | | | | |
| 歴史 | | | | |
| 地理 | | | | |
| 数学 | | | | |
| 物象 | | | | |
| 生物 | | | | |
| 家政 | | | | |
| 育児 | | | | |
| 保健 | | | | |
| 被服 | | | | |
| 体操 | | | | |
| 音楽 | | | | |
| 書道 | | | | |
| 図画 | | | | |
| 工作 | | | | |
| 実業 | | | | |
| 外語 | | | | |
| 修練 | | | | |
| 平均 | | | | |
| 判定 | | | | |
| 主任印 | | | | |
| 保護者印 | | | | |

回想

# 思い出のままに

旧職員（元校長）　楠原信一

私は千葉東高校の前身である千葉市立高等女学校に昭和二十年八月二十日から仝二十二年十一月二十五日まで仝校の校長をしていた。

八月十五日終戦の詔書を拝して、全国民が全く虚脱状態に陥ちいっている時であった。千葉市学務課長の尾形猛男氏が木更津高女にお見えになって、今度千葉市立高女長の瀧氏が県立千葉高女長に転出することになった。ついてはその後任として「君の郷里の市立高女の復興に尽力願いたい。」ということであった。

市立千葉高女は現在の港町の元千葉市立工業学校の後地で発足したが、校地が狭隘のため現在の葛城中学校の敷地に移転することゝなって、一部が建築されたが、戦争が苛烈になったのでやむなく中止されて、両所に別れて授業が行なわれていた。然るに二十年七月二日の夜の空襲で千葉市の大半が烏有に帰した時に港町の校舎は焼失した。県立千葉高女長沼田先生が焼夷弾に当って殉職されたのもこの時であった。かねて市町村立の学校経営は県立学校に比較して困難であるように聞いていたので、自分の菲才をもって大任の遂行が出来るや否や不安であったが、君の家も復旧せねばなるまいという―木更津高女に赴任する時に家族を二分して、家内と小さい子供を木更津に連れていった。この空襲のため残しておいた家族は丸焼となった―非常なご理解あるお言葉に感激して、緊褌一番郷里のために御奉行させていたゞくことに決意した。

赴任した時の市長は永井準一郎氏、助役は渡辺良雄氏、学務課長は前記の尾形先生であった。校舎は前記の如く葛城町の新築の一部と運動場の隅に高橋荘というアパートを買収し教室に改造した誠に不体裁で狭い不便なものであった。それを併せても十教室足らずしかなかった。生徒は四年制度で一学年四学級であったので普通だけでも十六は必要であった。やむなく隔日授業、或は二部教授などを行なう状態であった。当時増産教育で農業を盛んにやっていたので収納庫がなくては不便と十万円程の予算があった。これを振向けて丸太組で二教室を急造した程であった。それでも教室不足は解消されない。県立千葉中学校のご好意によって校舎の一部を借用して二部教授だけは漸くまぬがれることが出来た。そんな状態であったから施設設備の如きは皆無といって過言でない。今日の視聴覚教育とか教育工学云々という声の高い時代と較べると、生徒諸君に対して申訳なかったという気持で一杯になる。

生徒の中には戦災者引揚者も多かった。したがって住むに

家がなく他人の家に同居したり、焼け残りの材料を利用してバラックを造って、その中に生活している状態で、机とか参考書とかいうものは殆んどない有様。衣服の如きも「欲しがりません勝つまでは」という耐乏生活が永く続いた上に戦災に遇って焼失したものが多かったので通学服など何でもよいということで、気の毒の限りであった。もっとも教員も国民服（木綿とスフ混織）に軍放出の軍靴というどたぐつをはいて、雑嚢を提げて勤務するというのも珍らしくなかった。

更に食糧にいたっては窮乏も甚だしく、国民の中一千万人は餓死するであろうという騒ぎで配給される食糧は豆粕（牛馬の飼料か作物の肥料にするもの）、芋粕（家畜の飼料）でたまに米の配給があるが、それも極めて少量でしかも玄米というわけ。それ故一般市民は毎日その不足を補うために闇買に駈けまわらなければならなかった。従って学校は戦中からではあったが運動場は全部耕して畑として小麦、芋、或は野菜を作って、生徒に平等に分配して少しでも家庭生活の足しにした。それでも生徒の弁当を見ては棄てゝおけづトラックを借り上げて山武郡から野菜を一括購入して生徒の希望者にわけた。そして統制違反だと新聞にたゝかれたり褒められたりしたことも忘れられない記憶である。

先生方は尾形課長、瀧校長の努力で立派な方々が揃っていた。そして前記のように苦しい、不便な環境の中にあって、戦災者、引揚者の多数を前にして、何とかこの子等を立派に教育しようと情熱を燃した。

たゞ私が就任して日が浅く、且つ千葉市新教育発足準備協議会の議長を務めさせられたり、千葉県教員適格審査委員会の委員を仰せつかったりして、学校をあけることが多かったために生徒の皆様に御迷惑をかけたことが多かったのは今更ながら漸塊に堪えない。

## 創設当時の想い出

旧職員（元教諭）　林　勢　司

昭和十六年三月、千葉市立千葉高等女学校の創設から、私の在任した終戦までの四年半は、戦争とそれに伴う物資窮乏がついて回わった、苦難の連続でした。既存の学校だったらあれ程困りはしなかったでしょう。教室の数さえ、学級数に足りない時代があった程で、教具も教材も、金があっても買えないご時勢でした。それだけに、あとで想い返すと、苦しいことといやなことの中に、平時では味わえない嬉しいことも、沢山あったのは事実です。一生のうち、最も充実した、悔いを残さない時代であったとも言えます。

三月初めに発令されたのは、瀧校長と石井書記を含めて五人、市役所の助役室の一隅に陣取って一ケ月、開校の準備をしました。椅子、机、戸棚類の発注、諸帳簿や文書類の作製。何のことはない木工所と印刷屋の交渉の明け暮れです。

入学試験が珍無類です。四月発令予定の二人と、師範学校

の体育の先生を臨時にお願いして、総勢八人です。場所は高等小学校（現末広中学校）を借りてやりました。なにしろ、不馴れな上に勝手のわからないよその校舎です。手落ちだらけで、受験生にいつどこで弁当を食べさせるか、計画のうちになかったんですから冷汗ものです。入学式も同校の講堂と、すべて借りものでした。

四月、いよいよ開校です。港町の仮校舎は、三月末まで市の職業補導所が使っていたのを、一部を残して明け渡されたんですが、最初行ったときには、事務室に電話器が一つあるきり、他にはなんにもありません。今さらながら前途の多難を感じさせられました。それでも、四学級に対して使える教室が六つもあったんですから、豪気なものです。物資もまだ当時はそれ程つまってもいなかったし、ある意味では一番恵まれた時代だった、とも言えるかも知れません。

職員構成は、県視学だった校長が、前々からひそかに目をつけていた人々を、諸方から集めた粒揃い。而も、平均年令が三十才をちょっと上まわるという若さ。人数も四学級には贅沢とも言える、専任十二人、時間講師三人という陣容です。卓越した識見と抜群の指導力を有つ校長の下、時局がらも手伝って、たちまち火の玉のような一団ができあがりました。何をするにも、先ず撤底的に研究討議を重ね、市原（前佐倉高等学校長）訓育部長を中心として、全員（書記の先生まで）が一致してあたりました。一人一人に実に行き届いた指導をしましたので、成果も亦顕著なものがあり、開校後僅か半歳足らずのうちに、一種の校風らしいものが出来上ってしまいました。

生活指導（当時は訓育と称しました）は、漢学が専門の学校長が最も得意とする、礼記に基づいて、礼法を根幹としました。放課後撤底した個別指導を行ない、敬礼は三十度上体をかゞめ相手の眼に注目しなければいけない。路上対向する場合は約十歩手前で停止、そちらへ体を向けて敬礼をする、といった具合です。繰り返し練習しました。

正常歩訓練にも同様に力を入れました。大関教諭（現金沢大学助教授）を中心とする指導で、朝礼後や昼休み等に二、三分づゝ、其の他時に応じて練習する。しばしば職員が八方へ散って、下校時や時には登校時の指導を、敬礼と併せて行ないました。その成果は大いにあがって、当時の女学生によく見受けられた。靴を引きずって前かゞみに歩く者など、一人もありません。後に市内の中等学校が集まった際、その節度ある行動は一きわ目立って、ある学校の教頭さんを賛嘆させた、という話もあります。

清掃作業は、心を磨くこととして極めて重視しました。家庭の座敷や廊下の掃除を基本としたやり方で、雑巾の大きさから研究してかゝりました。ゆすぎ方、しぼり方、二つ折りとしてその四面を使う順序、片手でふく巾、等々微に入り細にわたって指導、放課後作業服に着替え三角布をかぶって、全校一斉に十五分間、清掃に専念します。この時間には、校長も自分の机を清掃しました。一ケ月もすると、校内隅々ま

でピカピカです。そして大掃除など特別なことはしないことにしました。又する必要もありませんでした。

五月十五日に開校式を行ないましたが、来賓に出すスリッパは全部生徒の手製です。布片を寄付してもらい、金子教諭を中心とした女子職員の指導で作りました。これは後々まで永く使いました。因みに、式場は二教室打ち抜きの室で、雨天体操場代わりにも使われました。

十月には、生徒の出身校の、校長と受持訓導を招待しました。授業を二時間ほど見てもらい、山越教諭を中心とした女子職員の指導による、生徒手製の料理を出し、謝恩の挨拶や近況報告、学芸披露等をしました。参会者は半年間の教育成果に深い感銘を覚えました。

間もなく大平洋戦争突入です。それからがいよいよ苦難の途の本番だった、と言えます。

正月には、寒稽古として毎朝駈足をしましたが、唯走っただけでは大した意味がない、同時に食糧増産に役立とうと、行った先の畑の麦踏みをして、農家に感謝されました。

二年目は八学級となりましたが、予定の葛城台の新校舎は、到底できそうもありません。開校後使えるようになった一教室と、急造の一教室と計八教室でやりました。困ったのは入学試験です。三百人ほどの受験生を、どうにも扱いようがないので、前代未聞の二部制としました。当時筆記試験は禁止されていましたから、三ケ所ほど口頭試問場を作りました。受験生同士会わないような流れを作り、又午前ですんだ者が帰るのと、午後登校して来る生徒とも会わせないようにしたため、大へん複雑で、その計画を全員に理解してもらうだけでも、大骨を折りました。たゞ最初のときと異って、職員数は倍増しているし、生徒はよく訓練されていて、補助に使えましたから、大へん楽になりました。

この年の明るい想い出は、五月二年生の体操チームが、選ばれて県代表として、お茶の水女高師に於ける全国大会に出場したことです。四年生や五年生のチームに混って立派に闘い、入賞こそできませんでしたが、万丈の気を吐いて帰りました。

又正月に行なわれた市主催のマラソン大会には、女子の部で堂々優勝をしました。

十八年は最も困窮の年です。八教室の所へ十二学級となったんですから、二部授業を行なうより方法はありません。雨の日の惨めさは一入です。午前の部の四時間目の始まる前に、各自靴と傘を机の横へ持って来ておきます。授業の終り次第別の昇降口から出て行き、午後の部の生徒は、それまで外に待機していて、入って来るという寸法です。これが約半年続きました。

十一月になってようやく、葛城台の校舎が五教室分できました。いわゆる戦時中の粗悪な建物ですが、一同天にも昇る心地とはあのことでしょう。これで二部授業を解消できます。早速三年生が引き移って、本校（といっても仮校舎）には校長が残り、新校舎の経営には私があたり、二本立時代に入り

ました。新校舎の敷地は約一万坪で、現在葛城中学校が使って居り、その校舎はつい最近まで残って居りました。

運動場は校舎敷地と併せて、最少限度の約三千坪、残りは全部畑として、食糧増産に協力しました。なにしろ約二町歩（二ヘクタール）です。収穫物は市場からトラックで引き取りに来て、ドシドシ出荷しました。

それから炭焼きもしました。篤志の方から雑木を寄附していたゞいて、切り出しから全部職員生徒でやりました。運搬には集めた車で足りない分、生木を手で運ぶという有様です。運動場の一隅へかまを築いて、数十俵焼きました。焼きあがった炭をかまから、まっ黒になって取り出していた、三年生Aさんの姿が忘れられません。

昭和十九年度はいよいよ十六学級完成です。予めこれに具えて、敷地に隣接した民間アパートを、市が買収して中を改造し、三教室分曲りなりにも作ってあったので、からくも新三、四年生を収容できました。そして創立記念日には、療養中の軍人を招待して、心尽しの慰問会を、この新校舎で開きました。無論例によって、農場生産物の手料理のご馳走です。

間もなく、七月からは学徒動員で、四年生が蘇我の日立航空機工場へ行きました。その規律正しさとキビキビした働き振りに、工場関係者が舌を巻いて感心しました。

秋、有田作業主任が召集されてしまったには、ホトホト困りました。仕方なく農場経営には私があたりましたが、しろうとの悲しさ、今考えても思わず苦笑してしまうことだらけでした。馬鈴薯の種を、初めから畝の高い所へ植えてしまうといったような塩梅です。それでも兎に角イモはできましたから、土の恵みは有難いものだと思いました。

三月にはいよいよ第一回の卒業式です。千葉中（現千葉高）の講堂を借りて、空襲警報が出たらこうすると、細かい手筈を定めて、とにかく何事もなしに終了したときは、ホッとしました。思えば第一回生は、入学試験場からして借りものという、ほんとうに気の毒なまわりあわせの人達でした。

昭和廿年度、港町の校舎はついに学校工場となり、三年生が動員されて、新校舎には一、二年生が移りました。

本土空襲は段々激化、ついに六月十日朝千葉市に爆弾が投下されました。我が校の秋元教諭が悲しい犠牲となられ、学校長のお宅も大被害を受けました。そして七月六日夜から七日朝にかけて、再び大空襲、学校工場は全焼、市内の大半が焼野原です。大へんな混乱、そして終戦。永い永い苦難の時代でした。

## 追憶

旧職員（元教諭）　森　俊雄

昭和十六年の春、市立千葉高女開校間もないころ、生徒の下校した職員室の一隅で、男子職員雑談の間に、次のような会話が言い交わされた。本校も開校されたばかりだが、この

中で誰が本校に最後に残るようになるかね、という問いに対し、某先生思案の後、それは森さんだろうなあ、といわれた。今から三十年前のあの時、某先生の言われた予言の通り、市立から県立、女学校から高校と、学校の変遷はあったけれども、昭和四十一年の停年まで廿五年、私の人生の大半を、健康で無事に東高に在職して、学校と歩みを共にして来たことを、幸せに思いまた感謝もしている。

学校の創立は、昭和十六年の三月で、学校の位置は、現在の本千葉駅と寒川大橋とのほゞ中央、道路の北側、都川に沿った一角であった。校舎一棟、校長室、職員室、教室五、宿直室、附属建物として、小使室、便所各一棟であった。この校舎はかって、県立千葉商業高校、県立千葉工業高校の誕生した由緒のある校舎でもあった。学級数四、生徒の定員二百名、専任職員男女十名で発足した。

備品としては、まだ何も整えられていなかった。あの頃誰かが、机と椅子を除けば、黒板と電話だけだと言ったが、教育に必要な最低限度のものであった。その後少しは整えられたといっても、丁度大平洋戦争の起こった前後であったのでほんの僅少なものであった。設備充実期成会が設けられて、戦後まで父兄からの募金をお願いしたのも、この頃からであった。

初代校長瀧先生は、当時千葉県視学で、県教育界に名のきこえた人であった。市立高女創立にあたって、市当局によって初代校長に迎えられた。先生はまだ若く、体格もご容貌も堂々とした、それでいて何時も温顔で、職員にも生徒にも接しておられた。生徒達も皆、親しみをもって慕っていた。職員も皆若く、男女皆明るい先生ばかりであった。生徒達も、伸び伸びと張りきった学校生活をしていた。今もなつかしく思い、又深く印象に残っていることは、学校中のふんいきが非常にあかるいということであった。又生徒も、職員も、学校での生活が楽しく、また活気に溢れていたことなどが深く思い起こされる。学校での教育が決して甘やかすものでなく、むしろ厳し過ぎるような点もないではなかったけれども、学校での生活が楽しく、登校が待たれるなどの作文も見受けた。朝礼など、時刻に遅れて、列の後に並ぶ生徒を一人として見受けたことがなかった。私個人の長い生活をかえりみても、楽しい時代を過ごしたことは、何回か経験して来た中で、特に思い出に残るよき時代であったと思い返される。

開校してこれも間もない、或る日の放課後、職員会議が開かれた。なぜか、あの日の印象が、三十年を経過した、時間を越えて、あざやかに記憶がよみがえって来る。校長室の長テーブルを囲んで、全職員が集会した。その内容は、これからの学校経営の方針、始業以来の教育の反省、職員の心構えなどについて細かく話された。その一つは、本校の教育の目標は、市内ばかりでなく、県内の有名校と肩を並べるのが目標ではなく、又それらの学校の模倣でもない、広く日本の女子の教育はかくあるべきものであり、広く女子教育の模範となる教育を施すのが目標である。と。

尚これを達成するには、他の学校で十の努力で出来る仕事は、本校では、六か七の努力で成し遂げるような工夫をしてもらいたい。本校では、職員も、生徒も、何時までも長く学校に留めて置くようなことはしない。学校での授業がすんだなら、職員も生徒も、用事のすみ次第、帰られるように言われた。この頃校長自身も、授業終了後、「諸君お先に」といって帰られるのが常であった。

いま一つは、学校教育に対する態度について、私は、諸君を踏み台として、自分一人が出世しようとは思っていない。私の青春を本校の教育に捧げていくのであるから、諸君も私と一諸に本校の教育に尽してもらいたい。諸君の青春を捧げて悔いのない教員生活を送ってもらいたい。思う存分に働いて、その上で起こった失敗の責任は全部私が負いますといわれた。

また一つは掃除について、諸君の掃除の指導を見ていると、十分な掃除をしたといえない。障子の桟に塵があるようでは、完全な掃除とはいえない。諸君の掃除は、平面的であって、立体的な掃除をしなければ、掃除したとは言えない。尚本校では当番制でなく、全員でやるように。毎日行き届いた清掃が行なわれていれば大掃除の必要はないので、本校では大掃除は行なわないことにする。などの点であった。

この掃除のことについては、先生方の協議によって、新らしい方法の掃除が実施されるようになった。振鈴によって制服を脱ぎ、体操服にブルマの軽装になり、脱いだ制服は、腰掛の上にきめられた順序で置かれる。次いで各自に掃除の分担区域が配当される。机、腰掛の運搬、床掃き、窓の硝子障子、廊下の掃除、水汲み、便所、運動場、特別区域等、次の振鈴でそれぞれの責任区域の清掃に当った。清掃終了後、制服に着替えるまで、所要時間は十分であった。掃除終了によって、校内隅々まで、きれいに掃き清められるのが、授業終了後の毎日の日課であった。この外、生徒礼法のこと、髪のこと、衛生のことなども次々と処理されていった。

体育の面では、戦時中であったので、体位の向上も重視されていた。毎朝、朝礼のあと、レコードの伴奏で正常歩の行進で、運動場一周、静かな気分で教室に入るように訓練が繰り返された。体育の時間も、体操、香取流の薙刀の授業も行なわれたが、夏季には、校長以下男女職員全員で、出洲海岸で海水浴を行ない、皆泳の指導をした。冬季には、寒中耐寒訓練として、駈足訓練が行なわれた。大網街道を千葉寺を通って松ケ丘町まで、校長、男女職員全員が参加して行なわれた。女子の生徒には相当難行軍であったけれども、自分達の体力の自信をつけたよろこびがあったようであった。

また、開校二年目の秋だったか、選手だけだったか、相当数の生徒が参加して、学校から佐倉街道を通って、成田小学校までの、マラソン競技を行ない、相当早い記録をもって走った生徒がいた、ことなども思い出される。

斯のような、全校での行事が計画的に行なわれて、教育も順調に進展していくにしたがい、戦火も次第に拡大され、学

校の教育的な行事が、国の要請で、勤労奉仕に代るようになっていった。最初は、今の京成駅裏にあった参松飴工場のグルコース製造の勤労奉仕、続いては、検見川東大農場の畑作業、馬鈴薯の収穫運搬等の勤労奉仕に何日か、暑い炎天下に汗を流した。時には、弁天町の忠霊塔の建設作業の勤労奉仕にも何日か出動したりした。

月日の経つにつれて、校庭に防空壕を掘るようになり、校舎からの避難訓練、バケツリレーによる消火訓練、市消防署員による、消火指導訓練などが随時行なわれた。戦争の進展に伴い、現在の川崎製鉄の工場のある、出洲海岸に、日立航空機工場が出来た。上級生がこの工場に動員されて働くようになり、次いで港町の校舎にも、工作機械が備えつけられて、低学年の生徒が動員されることになって、生徒達も連日汗と油にまみれて、戦の勝利を信じて働き続けた。職員も応召されて、第一線に出陣する者が次々と出ていった。この頃から終戦、終戦後にかけて、学校の苦難の時代が続くようになった。

昭和十八年であったか、葛城台の一角現在の葛城中学校の校地に、新校舎が建設されつゝあった。あの校舎の上棟式を、ある風の日屋上で行ない、建物の安全を祈ったことなど思い起こす。その翌年頃から動員された生徒の授業をこの校舎で行なっていた。昭和二十年に港町の校舎が焼けてからは、この葛城町の二階建校舎一棟が、幸い戦災を免れて、学校唯一の建物となった。この校舎の周囲の敷地一帯が畑であった。

食糧の管理統制されていた当時は、畑は登録されており、作物も限定され、さつまいも、麦などを作らなければならない、生産されたものは、一定量の供出が義務づけられていたので、体育の時間など多くこれに充てられた。さつまいもの苗さし、収穫、麦の播きつけ、刈取り脱穀まで先生の指導で行なわれた。炎天下に手拭をかぶって、汗にまみれて生徒と一緒に足踏の脱穀機を踏んでいた女の先生の姿、生徒の顔が思い出される。

戦争も終りに近い、昭和二十年七月、千葉市が大空襲に見舞われて、市街の大半が焼失した。その際港町の校舎も類焼してしまった。辛くも残ったのは、宿直の先生の持ち出してくれた学籍簿と重要書類と、現在も使っていると思われる小金庫だけであった。

港町の校舎を失なって間もなく、広島、長崎に原子爆弾が投下され、遂に八月十五日、葛城町校舎で終戦を迎えた。

敗戦によって、軍が解体されることになり、その備品などが放出されることになった。学校も総てのものが入手困難な時であったので、机や椅子など沢山貰い受けて、それ等を生徒の手で運び、非常に役立ったことであった。あの時貰った将校用のテーブルなど、現在も校長室などで使用されているのではないかと思う。

あの時、豚一頭も飼料をつけて貰い受けて、しばらく飼育していたが、たまたま職員の歓送迎会が開かれた際、ご馳走として出されたが、そのと殺と料理に、素人の先生方が、苦

心惨たんされた事は、あの当時の先生方の忘れ難い思い出話の一つになっている。

終戦によって、動労動員されていた生徒が、学校に帰るようになり、葛城の校舎では、全校生徒を収容することが出来なくなり、今迄倉庫に使っていた一棟を、窓を取り付け、急造の壁代りの区切りをつけて教室に充てた。この二教室は教壇を反対側にしたけれども、先生の講義が混乱して苦しんだことが多かった。尚隣接地に葛城アパートのあったのを買収して、客室を教室に改造したりして急場をしのいだが、戦災を免れた、現千葉高の校舎の一棟を借りることが出来るようになって、分散した校舎ではあったが、一応落ち着いた授業が出来るようになった。

物資の不足していた当時　校舎の新築は容易なことではなかった。校舎の新築の見通しは、小学校の大半を焼失した市当局としては非常に苦慮されたことだったことと思う。当時校長であられた楠原先生のご努力で、地の利に恵まれた現在の校地に移転がきまった。昭和二十四年頃、葛城の校舎から現校地に生徒の移転が行なわれた。生徒と職員が、掘り取った植木、机、腰掛、黒板など肩やリヤカーなどで、千葉市内を通っての大移動が行なわれた。校舎の前などに植えられている柳などあの時植え込まれたもので、前の道路際のヒマラヤ杉は第四回生の記念樹、又玄関の黒松は、元兵舎の土手に生えていたものと、隣家から貰い受けて寄せ植えしたもの、現在手入れも行き届いて、見事な銘木に生長している。

現在の校地は、元鉄道連隊の兵器補給庫の跡地で、校舎は、その長い倉庫をそのまま利用して、窓を取り付け、床を張り、天井を厚ボール紙でふさいだ程度、貫を通した柱の穴は板を張って塞いだものであった。雨が降れば雨漏りがして天井に穴があいたり、風が吹けば窓硝子が障子共吹き飛ばされるといったありさまであった。

校長室は普通教室を標本戸棚で区切り、机と椅子を置いて急造したもの、宿直室も同様、校長室の隣りに戸棚で囲った中に畳五、六枚敷いて布団を置いてあるといった具合であった。小使さんは通勤々務で、宿直をしなかった。物資の乏しいあの当時、学校前の小屋の屋根トタンを盗りに来るもの、学校のミシンなどに目をつけて忍び込むものなどが頻繁にあった。塀もなし、隣は遠いので呼んでも聞こえない、追えば逃げる、床に入れば又侵入してくる。あの当時の宿直の先生のご苦労は容易ではなかった。

こうした苦境の時代が、親泊先生、諸川先生等のご努力と、先生方のご協力によって、学校内外の設備の拡充、教育の内容の充実等が次々に完成され、年を追って発展の道をたどり、石毛先生以降は教育本来の努力に傾注出来る状態に至ったことは、周知の通りで、改めて述べる必要もない様に思う。

東高三十年の歴史をふりかえってみて、戦前、戦後と、実になが い苦難のみちをたどって来たものだと思う。その中で、歴代校長のそのときどきに応じたご苦労と、ご功績、又多くの先生方の、たゆみないご努力、尊い熱情が、終始一貫して

たえることなく、引き継がれて今日に至っている。それが、現在の東高という語象の中に深くしみこんでいるように思う。

# 回　想

旧職員（元教諭）　山崎一郎

昭和十六年二月、太平洋戦争はますます熾烈をきわめていました時、全国的に見ても、あまり豊かな方でなかった千葉市でありましたが、学校教育の重要性を考慮されて、市立の高等女学校の設置を決定し、さきに、千葉商業学校（現県立千葉商高）、千葉工業学校（現県立千葉工高）の誕生のゆかりの地、千葉市港町の都川のほとり、竜蔵神社近くの校舎に四月から開校されました。当時市の当局者として尽力されました、宮内助役（後の宮内市長）、学務課長の尾形猛男氏は将来の発展を期待し、初代校長に広く人材を求められ、千葉県の首席視学で、県内最高の指導者として、絶対的な尊敬を受けていた瀧熊之助先生に幾度か懇請されて迎えられたのであります。就任後は期待通り、業績をあげられ、学校は発展しました。瀧校長先生は、やがて家政科の三年制の専門学校を併設し、県内唯一の専門教育の場にしたいという理想をもっておられたようであります。私はこのころ東京で教員生活をおくっていましたが、いま少し勉学したいと思い、東京高等師範学校研究科に入学し、日本史学の学習に努力しておりましたが、瀧校長先生からお話しがありました。私は当時現在の本千葉駅近くに住んでおりましたので、先生のお人柄については、うかがっておりましたが、直接お目にかかり、お話をうかがって、その教育者としての偉大さにうたれました。そして東京都から出向して、昭和十八年三月三十一日付で本校に赴任いたしました。そして敗戦という変革期を中心に、幾多の春秋を経て、昭和四十六年三月三十一日まで、わが家同様につとめさせていただきました。そして三十周年を迎えまして、感慨一入なるものがあります。次にありし日を回想し、その二、三を述べさせていただきます。

## 瀧　校長先生

瀧校長先生は典型的な学徒であり、偉大なる教育家でありました。静岡県生れ、郷里の高等小学校卒業後、独学で静岡師範学校二部を卒業され、その後独学で文検（国漢）に合格、後東京豊島師範学校に勤務され、その名講義は、学生諸君をうならせ、ついには至難の業とされた、高等学校教員検定試験（漢文）まで合格されました。これには令夫人が辞書を引くことのお手伝いもされたといわれる程の内助の功があったともうけたまわりました。その天性と努力の二重奏が先生のお人柄をつくりあげられたものと思われます。来県されて長生中学校（現長生高校）から県視学となられ、その名声をうたわれていたのであります。私は校長先生として日々ご指導をうけたのでありますので思い出はまことに多いものがありますが、次にその一部面を記したいと思います。

まずお話しが非常にすばらしいものがありました。学年はじめの教育方針の説明などは、むしろ教育実践の講話でありました。先生の尊い体験を通して、明解にその蘊蓄を傾けられ楽しいそして有益な時間でありました。

生徒諸君へのお話しは、よく行なわれましたが、校訓である明朗・真剣・錬磨の解説は、まさに印象的で、その実践を重視され、話術の巧妙、あくまでも生徒の心情をとらえ、心ゆくまで生徒にも考えさせる情熱的な話しに、生徒諸君もくいいるばかりに目を輝かせて聞きいる師弟とのやりとりはこの人であればこそと感激深いものがありました。

四月の入学式の、式辞も、校訓を中心とした教育方針・家庭教育のあり方、新入生の心得など、厳しい中にも愛情あふるる話しなど感激的で、父兄の中には涙する者さえありました。式場は教室を利用した簡素なものでありましたが、まことに有意義な入学式が行なわれました。

話しはかわりますが、私は就任後一年の担任となりましたが、五月末ごろと思いますが、担任の一生徒のことで、校長先生のところにご相談にいったことがありましたが、私がその生徒の氏名を申しあげた時、すぐその生徒の屋号を申されました。まったくおどろきましたが、校長先生の教育信念、学校経営に対する情熱を感じますとともに、教育実践の真随を教えていただきました。

瀧校長先生はこのように職員、生徒すべてに対してこうした態度で、しかも深い愛情と将来の発展にお骨折されました。

私が就任の年の暮（昭和十八年）チウスで、井上病院に入院し二月ほど病院・家庭で療養生活した時の深い思いやりにはいまもわすれることができません。

師弟同行

戦時中とはいえ、本校の特色をあらわしたものに、団体的な訓練がありました。しかも徹底した師弟同行のすがたで行なわれました。

ことに大関先生を中心にした団体訓練は、ものすごいものがあった。すべての動作に全員一致のすがたまで錬磨された。団体訓練の時には赤白の鉢巻をつけさせたが、全員が一挙にそろうまでの猛訓練であった。行進なども朝の集合時その他多く訓練を行なったが、よくそろい動作も大きく、はだ色も黒くやけ、行進だけで本校の生徒であることがわかるほどでしたが、このことを如実にしたのが、毎月八日に行なわれた護国神社での武運長久の祈願でありました。学校から本町を通って護国神社までの往復を、日ごろの訓練そのまゝに堂々と行進するすがたは実に見事で町の評判でもありました。また県下高等女学校の体育大会などは常に上位の成績で、一目でわかる本校生徒の、はだいろ、そして特に団体競技や合同体操などに日ごろの猛訓練を披露して十分なるものがありました。きびしさで知られた寒稽古も、全くの師弟同行で、相当の長距離を三週間にわたり全員参加で、苦しいながら元気に行なったことも深い思い出となっています。また毎日全員で体操服姿の軽装で、雑巾のかけ方まで相互研究して一斉

に全力投球で行なった清掃、そして教室の板を光るほどみがいたことも楽しい語りぐさであります。

生徒諸君に感謝

昭和十九年七月　私にも召集令状がきました。本籍地をまわってきたので入団まで短い期間でした。この間にあって生徒諸君は、千人針と多数の生徒諸君の寄書した日の丸の旗を送って武運長久を祈ってくれました。この真心を胸にいだいて、全職員生徒の皆さんに送られ本千葉駅（現京成ホテル付近）から出征しました。横須賀海兵団に入団してまもなく衛生兵として、土浦の海軍病院で三ケ月の基礎教育を受けることになりました。日本海軍特有の猛訓練がはじまりました。この時、生徒の皆さんから、毎日数多い慰問文をもらいました。これは病院そのものの慰問文ともなりまして、私はそのため病院の幹部の人達から大いに認められることになりました。私自身もその激励に応えるため勤務に努力いたしました。その結果人なみの成績をあげることができました。教育終了とともに、房州の州の崎海軍航空隊に転属となり、終戦まで勤務し終戦と同時に帰郷することができました。同じ教育をうけた人達で外地に行かれた者は、ほとんど戦死されました。思えば生徒の皆さんのお蔭で今日まで生きながらえることができました。心から感謝しております。そして出征の時、おくられた寄書きの日の丸を今日も大切に保存してあり、時折ながめては当時の思い出にひたるのであります。

終戦直後

戦後の混乱は言語に絶し、戦災都市の千葉市の惨禍は甚しいものがありました。全国的に衣食住の極端な不足は、日々の生活をおびやかし、マッチ三本（一日にマッチ三本配給）とか、ローソク電気（電力不足のための暗い電気）などの言葉が流行しました。九月から葛城台の校舎、葛城アパートの改築校舎、千葉中学校（現千葉高校）の一部校舎を借用して授業が開始されました。授業といっても、教科書、参考書、教具等全く不足し、作業は多く、校地は麦作り、甘藷作り、野菜作りの農園となり、職員、生徒の協力で、きびしいまでに行なわれました。ＧＨＱの統治下、軍国主義教育の排除、平和国家建設の方針をかゝげて種々の監督がありました。教職員の適格審査は全面的に行なわれたり、多くの図書は焼却され、地図はぬりかえ訂正して使用、武道に使用した薙刀（ナギナタ）は二つに切りはなされて焼かれた。六・三・三・四の学制改革の影響で、校地、校舎は新設の葛城中学校に譲り、本校は轟町の現在地に移転することに決定されました。（昭二三・四・一七）その移転作業も大変なもので、自動車では大きな植木や重量の大きいものを運ぶだけで、机、腰掛などは、全部生徒各自の労力で長い道中を運んだのです。うそのようなほんとうとはこのようなことをいうのでしょう。しかし教室も兵舎を改装した暗いそまつなもので、窓硝子のない教室まであり、冬季の寒さは想像以上のものがあり、何もかも、ないないずくしでありました。それでも生徒諸君は

たえて学習にはげみ、そしてがん張りつづけた。しかしここに問題がおこりました。学制改革により併設中学校の募集停止により、生徒数は減り、三百名程度までになり、学校統合問題がおこり、本校の廃校問題がおこったのであります。このときのおどろきは大変なものでありましたが、ＰＴＡ、生徒、職員の必死の存続運動が行なわれました。殊にＧＨＱの統治下にあった故一層複雑な問題がありましたが、熱意は功を奏し学校は存続と決定されました。特にお骨折りして下さった方として、市関係者としての楠原信一先生、ＰＴＡ関係者として、多田勇氏、大木静さん、県市議員関係者としての吉原鉄治氏は思い出の方達であります。その後、千葉市立女子高等学校、そして千葉県立第三高等学校と、校名変更のあった苦難の時代を経過しながら着実に発展しつづけたのであります。この間私ごとでありますが、一時歴史教育は禁止されましたが、やがて復活されました。これを機会に、戦後歴史教育の正しいあり方について、勉強したいと考えました。そして県に研究生制度（内地留学）が新設されましたので、応募しました。葛城台時代の苦難時代に、自分だけのことを考えていると、うしろめいたことがあったのですが、楠原信一先生はじめ先生方のご援助で、第一回研究生として勉強することができました。そして、高師研究科時代の恩師、和歌森太郎先生の国史学教室で指導をうけることになりました。特に日本古代史を中心として学習しました。苦難時代の学習は特に責任と意欲をかりたてました。二日間は学校に出校し授業し、あとの日は教育大学に通学しました。朝は五時起きして、混雑する列車での日々は、私に大きな勇気を与えてくれました。この研究の成果は、私の歴史教育に益することの大きかったことを省みて深い感謝の念にうたれています。

### 通勤列車

終戦後の通勤は、茂原市外、上永吉からでした。最初は茂原駅まで徒歩で約五十分（後自転車で三十分）茂原駅から汽車通勤でありましたので、二時間半から三時間程度かゝりました。終戦後の混乱は、列車不足、石炭不足にもあらわれ、房総東線は二時間に一本程度でありました。したがって列車の混雑さは、八十人定員に二百数十名のすしづめの状況でありました。土気、誉田駅などからの通学生などは、窓から乗ったり、取残されたりする程でありました。特に食糧の買出しなどは一層混雑させたと思いました。当時大網を（おおやみ）、八街を（やみまた）などといわれたのも食糧の買出しの中心地であったからです。石炭不足も甚しく、列車も粉炭まで使用されたため火力が弱いし、乗客は多かったので、時には大網と土気間の坂を登ることができず、大網まで引返して、火力を強めて登ったことも幾度もあります。したがって学校には遅刻することも度々ありました。或時は満員でしたので石炭車に乗りましたが、水をかけられたり、土気のトンネルで煙にまかれて死ぬ思いをしたこともありました。松本正子先生が自転車で白井村中野から（現千葉市）葛城校舎まで皆勤された有名な話しもこのころのお話しです。

こうした通勤状態は、葛城台から轟町へと移転しましたが、多少の時間のずれはあり、列車の数はふえ、石炭も増産されたといっても、衣食住の絶対的な不足は、相かわらずの混雑ぶりでした。よく近くの学校に転任するよう勧誘されましたが、全然そんな気持ちはおこりませんでした。思えば身も心も本校だけに集中していたのでしょう。

三十周年記念にあたり、回想の記を求められましたが、長い間お世話になったのみで、確実な資料もなく思い出のままに記しましたので、あやまりなどあるのではないかと心配しておりますが、お許し下さい。

## 瀧校長先生

教諭　安塚旭洞

校長室の前にしだれ柳が大きく育っております。幹の太さ約四十糎、見事なものです。この柳は女子の生徒が葛城台から手でさげて運んで来て植えたものです。樹齢三十年、一口にいいますけれども、この柳は本校の歴史とともに育ち、本校の歴史をつぶさに見て来た柳の木なのです。人は語るけれども柳は語りません。何もかも知っている筈のこの柳は、今なお静かに、而もどんどん育って偉大になりつつあります。今を語れば今があり、昔を語れば昔があります。その時その時に思い出もあれば、なつかしさもあります。私達はその時どきに、皆それぞれ精一杯の力を出しつくして活きて来ました。今本誌に原稿をよせるにあたって、校長室前の柳をしみじみと眺めながら感無量であります。

昭和十五年三月県視学の先生から、附属小学校の訓導になれと、五回も田舎におった私に話がありました。全部ことわりつづけた私が、とうとう四月末、千葉市立第一小学校に参る事になりました。六年生の担任です。このクラスの生徒が本校の第一回生として入学して来たのです。五月に新任訓導研究会が行なわれ、三名が授業をいたしました。県下全部の校長先生方の集った時の研究会です。その時の主席県視学が本校初代の瀧校長先生でした。四十五分の私の授業のうち、四十分間見てくれました。批評会の時、安塚の授業は最高である。諸君は、明日学校に帰ったら部下教員に、一度は安塚の授業を見せなさい。男女師範学校の卒業生にも必らず見せるように私から取り計らうとまで申されました。三十年前、二十才台の私は唯ひや汗を流すだけで、うつむいているだけでした。

初代校長瀧先生は静岡県の出身です。小学校だけの学歴で、専検に合格、静岡県師範学校の本科第二部に合格され、一年で卒業。成績抜群で静岡師範附属小学校の訓導になられました。更に文検、国語、文検漢文に合格されて、東京都豊島師範学校の教諭になられました。成田校長の信任が厚く（具体例は省きます）更に高文の漢文に合格されました。先生が勉強されて不明の所に赤線を引く。先生が学校に出られてから

奥様が字引をひいて書き込んでおくという、涙の出るような美しいお話を何度も伺いました。その後千葉県の長生中学校（現長生高校）の教頭になられ、更に県視学、主席県視学になられました。そして本校の初代校長になられました。先生はお話が実にうまく、職員も生徒も三十年前の先生のお話を今でも覚えている程です。身長も体重も堂々たる方で、実に見事でした。主席県視学をなされて、県下の学校を広く指導された方でありますので、教科指導にかけては文句なしのベテラン。音楽、家庭、英語、数学、あらゆる教科の先生の授業を、廊下を歩いただけで、そのよしあしを批評してくれました。誰もが先生の急所をついたご指導に皆頭が下がると申しておりました。校長は立派である。校長は偉い。皆創立当時は若い先生方ばかりでありましたが、私達は一生懸命に、教科の勉強を、人間的な勉強をしなければ、すぐれた教師にはなれないとしみじみと思っていました。

僕はね、学科の成績では誰にも負けなかった。唯体育だけはだめだった。この通り太っているので体育はいつも苦労だった。体育が普通の点数だったら平均点は九十以上は確実だったとよくいわれました。その校長が耐寒訓練には、長洲ー登戸ー本町通りー県庁前ー学校の長いマラソン距離を、一日も欠かさず、全校生徒の先頭に立って、走ったのですから恐れいります。

成績会議は校長の姿が一番大きく見えた時です。クラス担任は、一人一人成績を説明します。校長は全校生徒の家庭を、全部知っているのです。何年何組の誰の家庭は、父の職業は何、母は今何をしている、兄妹は何人、経済的にはどう、とまで知っているのです。クラス担任が不用意な発言をしようものなら、頭からどなられます。そんな教師でどうして立派な教育が出来るのだ。家庭をよくしってこそ、本人がよくわかるもので、教育の最も大切な所であるときびしく叱られます。私達は一生懸命家庭訪問をいたしました。生徒のどこにホクロがあるまで校長が知っているのです。

朝クラスの生徒の顔色を見ただけで、その子の昨日の家庭の姿がわかるくらいでなければ、本当の生徒指導は出来ない。生徒の顔色を見ただけで、その生徒のなやみがわかり、適切な指導が出来なければ、クラス担任の資格はないのだと、きびしくいわれました。

年に一回、出身小学校の校長を呼んで公開研究授業が行なわれました。全員が授業をします、あなたの学校から入学した生徒は、今この様に勉強しています。よく見てはげましてあげて下さい。これが趣旨です。私の教科は書道です。四月入学時の作品と十月末の作品を、全員二枚ならべて展示します。半年の間にどれ位変化したかを見て貰うというのです。用筆法は、布置法は、書体は、墨色は、凡ての面で評価されるわけです。特定の生徒がうまくなってもほめられません。全体のレベルが上らなければなりません。はっきり目で比較される教科です。夢中で頑張りました。県全体で五十点えらばれて中央の展覧会に出品された事がありました。私の学校

が五十点の中に四十三点入った時は、校長に君よくやったなぁと、ほめられました。今年の二月、全日本書写書道研究会、日本武道館主催の全日本書初大展覧会で千葉東高校が全国優勝いたしました。瀧先生もきっと喜んで下さる事と思っております。

校長を先頭に教師全員が一つの和の精神に結ばれて、それぞれの立場立場で、最善をつくす以外に教育の実績はあがらないと思います。創立以来本校に勤務させていたゞく私としましては何をおいても、学校の為にとつくさなければならないという気持で一杯でございます。

## 市立千葉高女のころの思い出

旧職員（元教諭）　吉　田　さゆり

千葉東高の前身、市立千葉高女は、支那事変がはじまって五年目、戦争気分も次第に身近に感じられるようになった昭和十六年四月、戦争の申し子のように誕生しました。その年の十二月八日には、大東亜戦争もはじまりました。そのころの思い出を、今静かにたどってみても、戦争のことがあざやかによみがえってきて、市立高女の思い出は、そのなかの部分部分を占めるといった程度で記憶もおぼろげなものが多いのですが、印象に残っていることなど断片的に記してみたいと思います。

### 創立について

当時、千葉市には公立の中等学校として、普通教育では、県立の千葉中学と千葉高女があり、実業教育関係では、千葉工業と千葉商業とがありました。戦前ですから男女別学で、女子の入学できるのは、県立の千葉高女だけでした。そこで、どうしても女子を教育する市立の高等女学校が必要ということで創立されたように記憶しております。

また、これは確かな記録によったわけでもなく、責任ある筋からの話でもないのですが、将来は、高等女学校の上に専門学校をつくるという遠大な理想のもとにはじめられたということもききました。

### 創立のころ

私がはじめて、今度創立する―市立高女へ行ったのは四月一日でした。千葉市港町、都川の海に注ぐ大橋のたもと、表通りからちょっと入ったところで、校舎、校庭は川に面しており、もと千葉工業の校舎のあとで、二、三年前、千葉工業時代、火災にあい大部分焼失し、焼け残りの建物を青年学校が使用していたところでした。古い平屋建数教室と校長室、職員室、宿直室、それにバラック建の雨天体操場だけで、各室とも小さく粗末な建物で、どうやら用が足りるといったものでした。床の破損箇所を修繕したカンナがらなど廊下や教室のあちらこちらにちらかっており、古い黒ずんだ床板に、木の香も新らしい継ぎはぎの板が目につき印象的でした。外形的にはほんとうに貧弱な校舎でしたが、瀧校長先生をはじ

め、十数名の先生方の意気込みは相当なもので、瀧先生などこれから理想的な学校をつくっていきたい。日本一の学校にしたいと最初から学校経営に非常な熱意を示されました。

それから数日、先生方全部で、まず入学式の準備や生徒指導に必要な種々のことを決めていったと思いますが、生徒が入学してからおいおい本決りになったものも多かったような気がします。

○入学式

四月八日は入学式。二一七名の生徒とこれに父兄、職員など四〇〇名あまりが、バラック建の雨天体操場に集り入学式を挙行いたしました。このときの瀧校長先生のお話の中の「鉄は熱いうちに鍛えなければならない。」ということと、「市立高女の先生は、この学校の先生方だけでなく、二一七名の御父兄（両親）の全部であります。つまり四百何十名かの本校の御父兄と職員が一体となって、今日からお子様方の教育にあたっていただきたい。」ということが強く心にのこりました。その他、今は記憶にのこっていませんが、このお話の一語、一語聴く人の心に深くくい入るような内容で、オカッパ姿の可愛いい新入生は眼をかがやかし、父兄の中には感激のあまり泣いていた者も数名見受けられました。私もこれまで何回も入学式は経験してきましたが、この市立高女創立のときの入学式ほど感激したことはありませんでした。

○開校式

入学式から一ケ月あまりたった五月十五日、いよいよ開校式が行なわれました。雲一つない青空、輝かしい陽の光、青葉をわたるそよ風、ありとあらゆるものが「千葉市立千葉高等女学校」の誕生を祝ってくれるような日和でした。校歌も校旗もなく、音楽隊のようなはなやかなものも何一つなかったのですが、市当局の主だった方々、来賓、父兄、生徒、職員等で、おごそかに式を行ない、戦雲の動きを感じるなかで、これからの多難を予想しながらも、みんなで力をあわせて、市立千葉高女の礎を築いていくべく心に誓い合い、希望にもえて第一歩を正式にふみ出しました。

○校訓

「明朗・真剣・錬磨」というのが校訓でした。これはただうたい文句だけでなしに、言葉のあらわす精神を自分の体を通し実践したように思います。したがって学校が校訓通りの雰囲気でした。たとえば、「明朗」であるということは、見かけだけの明るさでなく、明朗であるためには、責任をちゃんと果し、心の安定感をもつとか、他のためにつくしたよろこびを感じるとか、苦しいときにも心にある明るさをもって事にあたっていくとか、対人関係を明るくするなど具体的に指導しました。「真剣」は勿論、文字通りで、「錬磨」についてもすべて徹底的に修錬いたしました。たとえば、平仮名を正しく書けなかったり、正しい姿勢がとれないなど基礎的なことのできない人が多くおりました。そのため、放課後「平仮名練習」「礼法指導」といった特別の、今でいうカリキュラムが組まれ、平仮名練習の日は、全生徒に平仮名の練

習をさせ、全職員で生徒の書いているところを正しく指導してやり、これを何回も徹底的にやりました。「礼法指導」なども同様にして、立ったとき、歩くときの正しい姿勢、礼をするときの上体を曲げる正しい角度など職員全体で、これも放課後、一人、一人指導しました。或先生などは、常に物指をもって熱心に指導されました。こうしているうちに、文字はだんだん正しく、美しく書けるようになるし、歩き方などもよくなり、道行く人からも、市立高女の生徒は、街を歩いていても、姿勢がよく上品で、すぐわかるといわれるようになりました。

○運　動

運動も非常に盛んで、全国の体操大会などには、四年生や五年生を主力とした他校選手と肩を並べて優秀な成績を納めました。その他どこへ出ても、各種目とも相当な成績をあげていました。しかし、こうなるためにはふだんから試合前と変らず、放課後など狭い運動場一ぱいひろがって思い思いの運動をしておりました。体操の先生は女の方でしたが、とても熱心で、全校生徒が集合したとき、二〇〇人もの生徒のなかで、鉢巻のしめ方がちょっと悪くても、すぐわかるといった目のきき方でした。マラソンも市立高女の名物の一つでした。全校生徒がよく港町から末広町の方までマラソンしたものでした。顔や足の黒さも有名で、特に体操祭のときなど綜合グラウンドで他校生徒と並んだりすると目立ちました。

○清　掃

校長先生は何かするとき、いつも職員に「研究してみてくれ」ということをいわれます。そこで、生徒に清掃の指導をするときも、どのようにしたら最も能率的で合理的か、また全生徒に勤労の精神を養うことができるかなど、生活指導係の先生を中心に、実際に雑巾を持ったりして、全職員で研究しました。その結果、放課後の清掃は毎日全員でやり、学校中、清掃の手の届かないところのないようひとりひとり受持の場所と仕事内容をきめ、一週間で交代するまでは、その分担を毎日繰り返すようにしました。清掃がはじまりますと、全員サッと自分の持ち場の作業にとりかかり、ガラスを拭く者、桟をふく者、机をかたす者、水汲みにゆく者等々、私も一緒にしながらこの尊い姿に打たれるのが常でした。一人用の机も必ず二人で持ち―その方が仕事が早くてらく―、合理的な床の拭き方まで研究されていました。このようにして短時間で、どこもかしこもとてもきれいになりました。

清掃するための身支度は、体操服とブルマーに着替え、三角巾をかぶるまで一分二十秒、脱いだ制服をたたむのと合わせて二分ちょっとというのが当時の常識となっておりました。今考えてみますと、この清掃なども異色を放ったものの一つに数えられそうです。

その後

昭和十七年、十八年になってまいりますと、生徒も一年ごとに、一学年ずつ増加していったのですが、校舎の新築もな

く、十七年にはもう教室も不足し、雨天体操場を間仕切りして使用しました。翌十八年には、二部授業をしなければならず、いよいよ戦時体制下に創立した学校といった感を深くしました。それに加えて、十八年の四月十八日には、はじめて敵機襲来をみました。授業をしておりますと、けたたましく空襲警報が鳴りわたり、アメリカのB25が来たというので、みんな海岸の松林に待避しました。松の茂みの陰から空を見上げますと四機の編隊が何組か銀翼をきらめかせて東京の方に消えてゆきました。この時は結果的には何事もなく、間もなく空襲は解除されたのですが、はじめてのこととて、敵機が上空を通過するときはどうなることかと思いました。生徒も声を出す者などありませんでした。ずっと後でわかったのですが、これは、ドゥリットル隊のB25十六機がやってきて、川崎、横須賀、名古屋、四日市、神戸など銃爆撃して東支那海から中国の米軍基地に向ったのだそうです。これが本土への初空襲だったのです。このころから戦争気分も更に濃厚となり、どこの学校でも女子はモンペをはき、防空頭巾を背に登校し、学習のあい間に防空壕掘りや避難訓練など一層活発になってきました。そして勤労動員なども行なわれるようになりました。しかし工場にはまだ行かず、学校で、軍服につける肩章をつくる作業をしたり、検見川にあった東大農場の芋畑へ丈なす草の草取りにいったりしました。また女子でも軍事教練のようなものをし、代表の生徒は「頭右(カシラ)ノ！」などの号令もかけました。十八年の冬には、学校で使用する燃料の購入も困難になり、木炭の自家製造をするため、伐り出された炭材を市外の山までとりにいきました。太い丸太の材を二人でかかえて何㎞も持ち運ぶ作業はとても大変だったと思います。今にして思えば、生徒もよくやったと思います。戦争で緊張していたせいもあったと思いますが、創立以来かもし出された校風が、真面目で精いっぱいやるという精神の生徒をつくりだしたようにも思います。

○葛城の新校舎

港町の校舎はいうまでもなく、創立したときの仮校舎で、新校舎の敷地は葛城台に決まり、資材も労働力も乏しいときでしたが、十八年十一月に二階建の校舎一棟が完成し、三年生が移転しました。この移転もトラックなどはなく、リヤカーか、殆んどのものは手で持ち運びました。新校舎ができたといいましても、建築業の人も人手不足で建物は清掃などあまりしてなく泥でよごれており、最初、清掃しなければ使用できない状態でした。それでも港町の校舎と違ってガッチリしていて明るく、これで二部授業も解消し、少しは落ち着けると生徒は喜びました。しかし、先生方は港町と葛城町と両方の授業を担任するものもあり、一日のうちでも行ったり来たりしなければならず、また、日によってあっちの校舎、こっちの校舎といった有様で相変らず大変でした。職員会議のときは港町へ集まりました。

葛城の新校舎の建っているところは高台で、その校舎の二階から生徒の帰ったあと、夕暮の空を眺めたときなど、創立

三年目、やっと校舎の一部はできたものの、次第に戦況も思わしくなく、この学校もこれからどうなるのかと、うたた寂寥の感をいだいたこともありました。今考えると夢のようです。

あのころの先生方

数も少なく、市立高女の草分けといった共同意識もあったためか、先生方は瀧校長先生を中心によく融和しておりました。それぞれ立派な特徴をもった個性豊かな先生の集りで、生徒のため、学校のためには献身的につくされたと思います。働くときには力の限り働き、はじめのころは懇親会などもよくやり、明日の教育目ざして語り合ったものでした。真夏に汗を流しながらスキヤキを食べる会をしたことなど、今は忘れられない思い出です。

瀧校長先生、事務の石井先生は、もう亡き人となられましたが、もう一度、全員揃うことができたら……と思うことがよくあります。

あのころの卒業生

あのころの生徒と先生の結びつきは、とても強く、今でも名前をきけば、殆んどといってよいほど、その人を思い出せるくらいです。

今は主婦ざかり、婦人ざかりでお子様も大きくなられたようです。長く教壇に立っておりますと、ときどき、生徒に「私の母は、先生に教わったといっていました。」といわれることがあります。よくきいてみますと、大てい市立高女時代の教え子のお子さんです。こんなとき、ほんとうになつかしく思います。

最近、同期会など催され、私どももお招きを受けます。そして、あのころの生徒や先生方にお会いいたしますと、すっかり当時にかえったような気持で、時の立つのも忘れて、あのころの話に花を咲かせます。そしてお互いに胸をつまらせたりいたします。

後で送っていただいた記念写真をみるたびに、この生徒や先生方こそ、現代発展しつつある千葉東校の礎を築かれ、歴史の第一頁を書かれた人々であると感深くいたします。

（私は、家庭の都合で昭和十九年三月で一時退職いたしましたので、ここでペンをおきます。）

## 千葉市立千葉高等女学校
## 第一回生のあゆみ

卒業生　平野　登美子

進学にそなえて

六年間の小学校生活も大詰めを迎えた昭和十五年のある日、受持の先生から、千葉市立のしかも四年制の高等女学校が新設されることを知らされました。現在の高校進学ほど深刻ではなかったにしろ、やはり進学問題で悩まされていた私達には大変な朗報でした。当時公立の女学校といえば、千葉市内には、県立千葉高女（現千葉県立女子高校）が唯一校あるの

みでしたので、あまり成績の芳しからぬ私にとっては県立高女への進学など及びもつかないものでした。そこで早速進学志望校を、市立千葉高女に決定し、栄ある第一回生を夢みて、ひたすら受験勉強に励みました。三十年も前の事とは申しましても、千葉市内の小学校では、クラスの半数以上の進学希望者があり、ただ今のように学区制ではありませんでしたから、公立の中等学校への入学は、男女共にやはりかなり狭き門でした。したがって放課後課外授業も行なわれかなりしぼられました。しかもこの年から入試の方法が変り、従来の教科の筆記試験を行なわず、面接による口頭試問形式になったため、面接時の態度は言うに及ばず、出入口の戸の開け方から歩き方まで、こまごまときびしい訓練が行なわれたものでした。

### 高等小学校の校舎を借りての入学試験

このようにして、入試当日を迎えた私達は、新設の学校なるが故に、立派な校舎も先輩もなく、末広町にあった高等小学校の校舎をお借りし、女子師範学校の生徒さん達に手伝っていただいて、緊張につぐ緊張の二日間に亘るテストを受けました。第一日めは口頭試問、テスト場にあてられた教室へ入ると、机を前にして先生方がずらり……その前に生徒用の腰掛が間をおいて、たしか三個並べてあったようでしたから、三人ずつテストを受けたように覚えていますが、胸がどきどきして、足がふるえ、先生の質問に対して、とっさにうまく答えが出なくて困りました。そのひとつに「あなたが毎日こうして幸に暮せるのは、どなたのおかげですか。」との問について「父と母のおかげです。」と答えてしまい、先生から「天皇陛下の御恩を忘れてはいけませんよ。」と、たしなめられたことを今もはっきりと思い出します。現在の子供達が聞いたら「そんな馬鹿な。」と一笑に付されてしまうところですが……。第二日めは、体力テストと身体検査でしたが、どうやら無事終了することができました。

### 晴れの入学式も借りた講堂で

懸命なる努力の甲斐あって、見事難関（？）をパスした私達二百余名は、天下の風雲が急を告げはじめた、昭和十六年四月、大いなる希望に、乙女心をはずませて、名誉ある第一回生として入学式に臨みました。式場は入試の時と同じく、高等小学校の講堂をお借りしました。勿論、迎えてくださる先輩も居りませんでしたが、当時県下きっての名校長と謳われました今は亡き瀧熊之助校長先生をはじめとする先生方十数名と、並いる私達新入生、それに来賓の方々及び同伴の父兄等、総勢四百数十名の出席のもとに、盛大に且つ厳粛に挙行されました。始めてお目にかかる担任の先生から一人一人名前を呼ばれ起立した時の、何とも言いようのない緊張感は、今もきのうのことのように思い出されます。入学式終了後全員揃って、末広町から県庁前を行進し、千葉神社に参拝。神前に入学の報告を行ない、更に列を整えて、めざす私達の学舎へと歩を進めました。

## 都川のほとりのオンボロ校舎

街中を流れる都川が、やがて大海に出ようとする寒川大橋のふもと、港町の一角に、あこがれの私達の学校がありました。ここは、旧県立千葉工業学校のあったところですが、実験中の事故から火災を起し、その焼け残りの校舎が、そのまま市立高女として生れ変ったものですから、羽目板のところどころに焼け焦げのあともあり、女学校のイメージとは程遠い、木造平家建の非常にお粗末な校舎でした。職員室、校長室、宿直室各一、普通教室六、それに特別教室らしきもの二教室、この二教室がこれ又、トタンぶきのバラックで、外観は教室というより倉庫といった方がぴったりのものでした。このような校舎ですから、その設備もまことに貧弱で、ただ今のような立派な教具も何もなく、従って音楽と体育の他は全て各教室内で行なわれました。音楽室と申しましても、たて型のピアノが唯一台、その上にポツンとおかれたメトロノーム、それに五線黒板、あとは生徒用のいすと机、これらが音楽室のすべてでした。又女学校には、なくてはならない裁縫室や家事室等もなく、それ等に附随する教具、器具類ももちろんありませんでした。何もないのは教室だけでなく、校庭も木製の粗末な集合台が一台おかれただけでしたので、狭い校庭も比較的広いように見え、その西側の隅は、農業実習用の畑へと続いておりました。校庭は狭いばかりでなくその一方が川に面しておりましたので、ボールを受け損なってころがすと忽にして川の中へドボーン……あわてて長い竿の先につけた網でボール拾い。川の流れの速い時にはとてもたいへんでした。又その反対側へ少し力を入れて投げると、竹垣を乗りこえて、よその庭へ不法侵入（？）……等々。現在の立派な校舎、校庭からすると、ほんとうに想像もつかないことばかりでしょうが……。兎に角、お粗末の一言につきる校舎ではありましたが、その中で、市立高女の校風と伝統を築くべく、私達に対する諸先生方の熱意と慈愛に満ちた、厳しい特訓が行なわれ始めました。

## 厳しい校風づくり

校舎そのものは粗末であっても、新しい環境に女学生となった喜びを感じながら、毎日張切って楽しく通学いたしました。校風づくりは、先ず生活態度からと、入学式の翌日から、さっそくに厳しい訓練が始まりました。何しろ全校で四クラス、校舎は一並び、更に二百名の生徒に対して十数名の先生方、これでは目の届かないのが不思議、どこにいても、何をしてもすべて先生方からお見通しで、何ごとによらず実によく御指導の手が届きました。中でも教務主任であり私の担任でもありました市原先生の存在は、生徒にとって大変こわいものでした。スラリと背が高く、英国紳士風の一分の隙もない先生の、眼鏡の奥がキラリと光ると、思わず体中がひきしまり、又何か叱られるのかと、びくびくしたものでした。私達は、忽ちにして先生に「かみなりおやじ」という異名を贈り、先生の革スリッパの音がすると、すぐに警戒警報信号が発せられたものでした。この先生が頭に手拭をかぶって教室

にこられると、早速教室掃除の方法についての特訓が始まります。箒の持ち方、はき方、机を音のしないように運ぶ方法、はたきの使い方、雑巾がけの姿勢、とそれはそれは微に入り細に亘り、それこそ手に手をとってのことばそのままの御指導を受けたものでした。服装についても、その通り、髪の毛の長さも一定され、物指を持った先生方から、不意に呼止められて長さを計られたこともありました。礼儀作法については、殊のほかやかましく、中でも昼食は毎日先生方が交替で会食をし、お弁当箱の持ち方から食べ方まで、それこそ箸のあげおろしにまでも先生方の手が届きました。この食事作法が習慣となり、後日職場の先輩から「柄になく食事の仕方が上品だね。」とよく賞められました。又、登下校時の、道路の歩き方も同様で、帰り途など学校から解放された安心感から、ついおしゃべりをしながら、のそのそと歩いていようものなら大変、忽ち自転車で下校態度を巡視中の先生に御注意を受け、もう一度校門まで引返して、歩き直しをさせられました。その他、思い出してまいりますと、あれもこれも、あの時もこの時もと、枚挙にいとまのない程ですが、当時は戦時中の緊迫した体制の中でしたから、どんなことにも何ら抵抗を感ずることもなく、毎日を張切ってすごしました。「お前達は、市立高女の一回生で、この学校の先祖になるのだから、そのつもりでしっかりやれ。」と、どの先生方からも口ぐせのように言われ、明朗・真剣・錬磨の三つの校訓を、一人一人の心の中に叩き込まれました。このように徹底した厳しい教えが、卒業後の私達の人生に非常に役立っていることを、折にふれしみじみと感じ、今改めて当時の諸先生方のお骨おりを心から感謝申し上げております。

向う通るは市立高女生

校風づくりの第二は歩き方から、歩き方を見ればその学校の良し悪しがすぐわかるとか……。毎日朝礼のあと校庭で、校長先生以下全職員総出で、これ又徹底した歩行訓練が行なわれました。レコードに合わせて校庭を何周かするのですが、目の位置、手の振り方、足のつき方等々、一つ一つ細かな注意を受けつつ行進するのです。縦にも横にも列が乱れないよう、歩調を揃えて歩くのは、なかなか困難なことで、指導なさる先生方も歩かされる生徒達も、共に大変な努力と根気が必要でした。特に歩巾を合わせる事には苦労をしました。私のように背の低い者は足が短いものですから、背の高い人達からくらべると余分な神経を使わなくてはなりませんでした。兎に角始めのうちは、校庭に引かれた白線通りに歩くのが精いっぱいでしたが、訓練とは大したもので、いつの間にか路上を歩くにも二人揃えば二人の、三人揃えば三人のと、何人にふえても自然に足並が揃い、一分間百二十の速さの正常歩で、胸を張ってさっそうと歩くようになりました。その頃各女学校とも制服のスカートに線を入れ、その線の入れ方によって、白い直線二本は県立千葉高女、波線二本は淑徳高女等、遠くからでも一目で学校がわかるようになっておりましたが、私達にはそのような制服もありませんでしたので、始めのう

ちは「あなたたちはどこの学校。」とよく聞かれましたが、そのうちに、このさっそうたる歩き方が有名になり、遠くからでも歩き方を見れば『向う通るは市立高女生』と町行く人々にも言われるようになりました。

体操では県下一

歩行訓練と併せて、もう一つ有名なものに体操がありました。飾り気のない髪を七・三にきっちり分け、後で二つに小さく丸め、いつも白い体操服に黒のスカート、黒い靴下にこれ又、黒い皮のバレーシューズをお履きになり均整のとれた素敵なスタイルは、乙女心のあこがれの的であり、三十年近くたった今だもって忘れることの出来ない、大関たか先生、この先生の体操に於ける指導技術は抜群で、特に徒手体操は素晴しいものでした。先生の御指導により、私達もぐんぐんと上達し、秋に行なわれた県下中等学校競技大会での合同体操は、新入りながらも、歴史を誇る他校より優れた出来映えで、居並ぶ先生方をおどろかせ、市立高女は体操学校だとまでも言われたものでした。その翌年は創立二年目にして早くも、県の競技大会の徒手体操の部では優勝し、明治神宮の競技場で県代表として、大いに活躍したものでした。この時に教えていただいた、女子中等学校体操と女子青年体操は、今でもそのメロデーを口ずさむと自然に手足が動き出すほどです。「鉄は熱いうちにうて」とか、古い諺ではありますが、あの頃に徹底的に鍛えられ、身についたものは「なるほど一生忘れないものだなぁ」と感心したり、身体の動きはぎこちなくなっていても、三十年前のこの体操を、大して息切れもせずに、終りまでやり通せる自分の〝若さ〟を発見して、ひとりほくそえんだりしながら、この古いことばの持つ意味をひとしお感銘深く受けとめております。

新入生を迎えて

こうして、女学校生活もようやく軌道にのり始め、二学期もやがて終ろうとしていた、昭和十六年十二月八日、私達にとって、いや当時の日本国民全員にとって、それこそ一生忘れられない戦宣布告の日を迎え、この日から私達の学校生活も超戦時体制へ向って大きく変り始めました。そして翌年の四月、新しい一年生を迎え待望の上級生となりました。大して用事もないのに一年生の廊下を行ったり来たりして、先生方に注意を受けたり、登下校の途中ですれ違う一年生に、おじぎをされるとくすぐったいような、とくいな気持がしたり、けっこう上級生気分を味わっておりましたが、先生方の口ぐせのような「お前達はこの学校の先祖である」ことの上に今度は更に「上級生」であることが上積みされて、今まで以上に厳しい御指導を受けるようになりました。誰が見ても、学年の区別がすぐつくように、髪型を一年生はおかっぱ、二年生は横分けときめられましたが、この横分けが又々問題で、真横にぴったりビン止めでとめることになっていましたが、丁度おしゃれをしてみたい年頃ですから前髪を後の方へぐっとあげて、カッコよくしようものなら、忽ち大目玉をもらい、その場でやり直されてしまいました。生徒数も倍になりまし

たので、特別室兼雨天体操場に使っていたところも、普通教室となり、更にその先へ一教室増築して、ようやく裁縫室ができ、ミシンも備えられ女学校らしいムードになってまいりましたが、反面戦争も日増に激しくなってきましたので、授業の合間には忠霊塔の建設、陸軍司令部で事務の手伝い、兵器補給廠での兵器の手入れや荷造り、検見川の東大農場での草取り、等々、奉仕作業に出ることも多くなってまいりました。

葛城台の新校舎

二年生も終るころ、私達の待望の新校舎が、その名もゆかしい葛城台に建てられました。千葉中と千葉医大を対角線で結んだ、その中間の高台は、広々として眺望もよく、周囲は殆んど畑でとても静かでした。木造二階建て約十教室くらいだったと思いますが、戦時中の事ですから、現在の立派な鉄筋校舎からしますと、想像もつかないような粗末な校舎ですが、木の香も新らしい教室は、私達にとって大変な喜びでした。校門も塀もない運動場、でも今度は思いっきりボールを投げても、川へ落ちる心配もなくなり、何クラスか一諸に体操をしても、まだ余りある程の広さに満足していました。将来はテニスコートやバレーコートになるという場所は、食糧難の折から農場となり、野菜やさつま芋が植えられました。新校舎へ移って困ったことは、通学距離が遠くなったことでした。何しろ葛城台といえば千葉市のはずれでしたから、どの駅からもかなりの道のりでした。今のようにバスの便がよくない時でしたから、家から片道一時間近くの道を、テクテクと、いや例の市立高女式歩き方で、さっそうと歩いて通学しました。県庁の前から附属小の前に出て、千葉中の坂を少し上り、そこから左へ折れる細い道を通ると大分近道になり都合がよかったのですが、男子校の生徒と一諸になるということから、この道は早速通行禁止区域となりました。何しろ男女七才にして何とやら……という御時世でしたから仕方のないことと思いますが、いろいろな面から、がっかりもしました。この頃から、教科の中に教練や担架訓練、救急法等がとり入れられ、服装もスカートからモンペ姿の防空服となり、救急袋と防空頭巾を十文字に背負いこんでの勇ましい通学スタイルとなりました。新校舎に来ましても又々教室が不足で新しい教室で席を暖める間もなく、私達は隣の葛城荘へと追いやられました。ここは二階建のアパートでしたから、各部屋の仕切りをぶち抜いて、どうやら教室くらいの広さにはなりましたが、柱が部屋の中に何本もあって黒板を見るのに大へん困りました。授業が始まる少し前になりますと、畑の向うに見える新校舎から、先生方の歩いていらっしゃるのがよく見え、それに合わせて授業の仕度をしたものでしたが、その頃には、教室での授業よりも作業の方が多く、校庭での防空壕掘り、農作業、千城方面への木材運搬、これが又大仕事で、切り倒した木を、山から二人で一本ずつ持って、長い列を作り、東金街道を半日がかりで学校まで運ぶのですから大変でした。この木を同じ長さに鋸でひいて、校庭の隅に築か

れた炭焼きがまで焼き、木炭を作りました。野菜等は収穫時になりますと、全校生に分けて戴き、食糧のない時でしたのでとても助かったものでした。

いのちがけの学徒動員

戦争の拡大に伴い、私達にも日本の歴史始って以来の学徒動員令が下り、大学生は予備学生として戦場に立ち、中学生は兵器づくりに工場へと、それぞれ学業を捨て、ペンを銃やすりに持ちかえて動員されていきました。私達も、蘇我の日立製作所（現在の川鉄）に参りました。ここは戦闘機をつくる工場で発動機と機体製作の二つに分かれ、この中で約一万人近くの人が働いていたと記憶しておりますが……。工場の中へ一歩入ると、ものすごい機械のうなりと油の臭気で頭が「がんがん」しました。今まで見たことも、さわったこともない機械に取組んで作業をするのですから、始めはどうなることかと思いましたが、指導員の方の御指導を受けて、日増しに上達し、三カ月もすると、何とか自分の持場は自分で責任を持って作れるようになりました。学校にいる時は椅子に腰掛けることの多かった私達にとって、一日中立ちっきりの作業はとてもつらいものでした。その上に油とジュラルミンの粉で手も前掛もまっ黒になり石油をつけて手を洗わないとおちない程でしたから、ふっくらと柔らかい乙女の指も、忽ち荒れて節くれだってきました。しかし「何としても戦いに勝たねば」いや必ず勝つことを信じ、神風はちまきをしめなおして、どんなにつらい時でも頑張り通しました。動員当初は、それでも週に二日くらいは、学校へ帰って授業を受けましたが、やがてそれも出来なくなる程戦況が悪化し、連日のように敵機の空襲を受けるようになって来ました。殊に軍需工場は敵の爆撃目標になって居りましたので、それこそ毎日毎日が命がけでした。しかし戦いは我が方に利ならず、相次ぐ激しい空襲に工場も各所に分散し、港町の旧校舎も机や椅子を作業台と機械に換えて学校工場となり、下級生を指導しながら発動機の部品を作り続けました。

借りた講堂での卒業式

硫黄島玉砕、東京大空襲と、敗戦への道をたどり始めた昭和二十年三月、非常時態の中で卒業の時期を迎えた私達には、華やかな卒業式など思いもよらず、工場の人々の中には「卒業式なんか戦争に勝ってからやれ。」などという過激な言葉もあって、卒業式の日取りさえきめかねているような状態でしたが、先生方の御骨折りで、とに角卒業式をやっていただくことになりました。昼となく夜となくけたたましく鳴り渡る空襲警報下、卒業式を行なう講堂もなく、お隣りの千葉中の講堂をお借りして、先生と生徒だけの、本当に質素な質素な卒業式でした。式のあとの謝恩会といっても、極端な食糧難の折から食べるものは何もなく、先生方におにぎりを差上げたのが精一杯の御馳走でした。卒業証書をいただいても大半が学校工場に残るようになっておりましたので余り実感も湧きませんでしたが、それでもサインブック等を作り先生方やお友達に書いていただいたりしたものでした。借りた教室

での入学式験、借りた講堂での入学式、授業も仮校舎なら終りも又借りた講堂での卒業式と、すべて借り、仮り、借りに明け暮れた四年間。しかもその後半は学徒動員と苦難の連続の学校生活でしたので、学問的には環境にも恵まれず自信もありませんが、この間に鍛えられた忍耐力と、どんな困難にも立ちむかえる不屈の精神力には、絶対的なものがあると自惚れております。又当世流行の教師と生徒の断絶など私達には全く考えられないものでした。その証拠として一昨年二十五年ぶりにクラス会を催し感激の再会をいたしましたが、その会にお招きした諸先生方が私達一人一人の名前と特徴を今だによく覚えていてくださったのには、びっくりすると同時に大へんな感激でした。何百人、何千人といる教え子の中で、しかも三十年も前の私達を一番良く覚えておられるということは、当時の先生方が一回生を育てるのに、いかに御苦労をなさったかが偲ばれ唯感謝申上げるのみでした。つぶらな瞳にお下げ髪、みずみずしく愛らしかった女学生の私達も早くも四十路となり、大半が高校生の子供を持つ母親となった今母校も堂々たる鉄筋校舎となり県下でも屈指の県立高校に成長し、学区内高校受験生の過半数が、東高校進学を目指して猛勉強をしているとのこと。先輩として言い知れぬ誇りと喜びを感じると同時に、受験生を持つ母親の立場からすれば、東高校の余りにも狭き門に手放しでは喜べない反面もできてまいりましたが、何れにしても、創立以来わずか三十年にして、このように立派な名門校の一つとして数えられるようになりましたことは、歴代の校長先生をはじめ、諸先生方、生徒の皆様方の御努力の賜と深く感謝申上げ、母校の一層の御発展を心よりお祈りいたします。

（高女　第一回　昭和二〇年三月卒業）

## 学生時代の思い出

卒業生　永江　栄

母校が創立三十周年を迎えると言う事は、私の人生も中ばを過ぎたと言う事を改めて意識させ、感無量なるものがございます。一口に三十年といっても、随分かゝったような気もするし、又、アッと言うまに過ぎてしまったようにも思えます。

長洲町の川のほとりにあった古ぼけた教室四つと、事務室兼職員室と校長室、それに玄関の脇にくっついていた小さな畳敷きの宿直室、今も目の前にあざやかに浮びます。体操の大関先生はきびしかった。冬でも半袖の体操服の袖口から、シャツなどのぞいていたら大変、「これは何だ。」とどなれ、ぬがされてしまう。紅白のはち巻は、たちん二結びにして、五糎の長さと定められ、それ以上長くだらっとぶらさげていると、ハサミを持って来て、パチパチみんな切られてしまう。広くもない校庭は、海岸の砂地ではだしで体操をすると足が痛い。で体操の始まる前に、一同打揃って貝殻や小石

を拾うが、風が吹くと又もとのもくあみ、冬の耐寒訓練の時などは、校庭を幾周もするより、蘇我の方迄アスファルトの道路を駈けた方が痛くなくて良かった。（今は交通がはげしくて、とんでもない話だが）頭髪の形も、一年生はオカッパ目の上二糎、二年生は横分け、三年生は後で二つに分けて結ぶと定められ、違反するとハサミでヂョキヂョキ切られた。

入学式の時、初代校長の瀧熊之助先生は「「家の娘は女中のいないところへは嫁にやらないから、掃除なんかさせないでくれ。」と言うお母さんもいるでしょうが、掃除はなにも綺麗にする為にやるのにあらず、心の修養の為だから、そのつもりで…」と仰しゃったが、さすがそのお言葉通り、バケツの外に水をこぼさない雑巾のしぼり方から、坐って上品に板の間をふく方法、男の先生から手を取って教えられた。掃除の時は、トントンと言うツチの音で、机の脇にかがみこんで大急ぎで体操服に着がえ（おそいと廊下に坐らされてお説教）渡り廊下でも毎日持ち上げ、すみからすみまでズズィッと掃除させられた。丁度学校へ見えたお客様「オャ！　お宅の学校今日は大掃除ですか？」に瀧校長曰く「いや、いつもの通りです。」お客様「へえー」と声なし。そんな事はざらでした。瀧校長は、日曜日でも必ず学校へいらしていた。その頃和裁は、家へ持って帰れなかった。家で母にでもたすけて貰わないと仲々終らないので、日曜日にそおっと学校へ取りに行ったら、校長先生が廊下の角から、ヌーと顔を出され「何か用かネ」、「いえ別に……」しどろもどろになって飛んで帰って来た。それから日曜日に和裁を盗みに行くのはあきらめた。おかげで今もって和裁はぜんぜんだめ、あの時もっと身を入れて習っておけば良かった。後悔してもすでに秋声、慙愧にたえぬ。

それから今の生徒の方が、やりたくても出来ないのが、便所の汲取り、先生がまずお手本を示し、それから順番に汲むのだが、初めての時は膝ががくがくした。桶に六分目程入れ、天びんでかついで畑にまく。なれる迄はお昼のお弁当が喉を通らなかった。戦争がはげしくなってからは、学徒動員で工場へ行ったが、その前後学校でさつまいもの千切りをやった。冬の冷たい水で千切りのおいもを洗って乾かし、その洗い水からくず粉を取った。参松工場へ葡萄糖の袋づめ作業にも行った。帰りに甘い水が飲めるのが、とても楽しみだった。千葉郵便局へも勤労奉仕に行き、スタンプ押しだの、お札の勘定もした。

戦争が終った直後は、市営墓地へ草刈りに行き、二宮金次郎みたいに背負って学校へ持って来て、校庭へ並べて乾したが、あれは何に使ったんだろう。土気へ材木運びにも行った。何人かでかついだが、とても重たくてつらかった。兵隊姿の山崎先生をお見かけしたのは、その時で「山崎先生は、ご無事でお帰りになれて良かったなぁ。」とつくづく思ったのを覚えております。

こうしてあの当時を思い出してみると、随分きびしくしこまれたが、先生方にはきびしさの底に愛情がまんまんと脈う

っていた為、暖かいきびしさだった。不自由の中での、しっかりした教育、そして勤労奉仕や学徒動員で、色々な経験をした事は、その後の人生に如何ばかり役立っているか、はかり知れないものがございます。母校に学んだ私達は、本当に幸せだったとつくづく思います。創立当時から三十年の今日迄、母校に関係された先生方の御努力、御熱意に感謝しても、しつくし得ないものを感じます。母校には、創立当時から安塚先生ががんばっていて下さる時は、卒業生にとって大きな心のよりどころです。いつまでも御元気でがんばっていらしてほしいと念じます。

あの長洲の校舎の時、誰が今日の母校を想像したでしょうか。瀧先生にも、親泊先生にもお見せしたかった。残念でたまりません。

諸先生方に感謝しつつ、今後の母校のますますの発展を祈ります。

（高女　第二回　昭和二一年三月卒業）
現千葉県立千葉東高等学校同窓会々長

## 女学校時代の思い出

卒業生　小　林　美代子

四年制の高等女学校として発足したのは、昭和十六年二月で、私が入学したのは、翌年の四月、桜の花の美しい頃でした。

校舎は、大橋の近く、都川の下流の川べりにあり、元「千葉市港町青年学舎」であったという、木造平屋の建物を使用していました。（その後、徐々に増築され、かぎの手になりました。）

校庭は、貝がらのいっぱい詰った砂で埋め立てられていて、川沿いには竹の囲いがしてあり、ところどころに松の木が植えてありましたが、非常に狭い所でした。

私たちの国民学校（小学校）の担任の先生は、故瀧熊之助校長先生のりっぱさはいうまでもなく、それぞれ権威ある諸先生方の熱心さ、これから発展して行く学校経営の構想、未来像について、幾たびとなく話されました。期待と不安の入りまじった気持ちでしたが、私も急きょ受験することになったのです。

入学試験の当日は、上級生（一回生）が受付、案内係はもとより、短距離走（60米）のスタート、タイムはかり、高跳び、走り幅跳び、短棒投げの記録の仕事などを、すべて手ぎわよく運んでいたことが、ついこの間のことのように思い出されます。

面接の時、校長室では更紙位の大きさの一枚の紙を見せられ、その紙には、

「海ゆかば　水漬く屍　山ゆかば　草むす屍
大君の　辺にこそ　死なめ　かへりみはせじ。」

と書かれていました。それを読解するのです。

試験官は、文法を指導され、後に事務の方にまわられた現在官職にあるという、森俊雄先生でした。

いよいよ入学して見ると、一クラス55－56名で四クラスでした。

さっそく廊下にならび背くらべし、背の高い生徒から順に1 2……と番号がふられ、出席簿その他の名簿ができ上がりました。私は、四組の32番でした。

制服は、その頃栄町通りにあった「ノーブル」という洋装店など二、三軒で仕立て、冬は紺、夏は白地のへちま衿の上衣でベルト付きでした。スカートは、ひだつきを使用していましたが、四枚はぎのフレーヤーということになりました。

式の時は、くつ下は必ず黒というきまりでしたが、だんだんともんぺやズボンをはくようになったのです。くつは、黒のズックか皮でした。それらは消耗品でありながら、なかなか手にはいらなくて困ったものです。胸には、もちろん徽章をつけました。

髪型も統一され、学年毎に決められていたのです。

授業については、今の道徳に近いもので、君に忠、親に孝を強調した修身という教科があり、英語の担当をされていた市原初雄先生が指導に当っておられました。

英語講師の折茂益枝先生は、年配の先生でしたが、パンプスを上ばきにしていて、モダンな感じのする先生でした。当時、英語は、敵国の言葉であるということから敬遠され、女学校一年の時だけ習ったのです。

音楽の時間、竹村弥生先生が「ツエゲ」「ツエファ」……とドイツ語で階名を指導されていたことが印象に残っています。

美術の小川恒雄先生に、家庭学習で、裏の家に咲いていた花を描いて提出したところ、聞きこみで「なぜしこ」と書いておいたので「なでしこ」と訂正して貼り出されていたときの、うれしさと恥かしさの入りまじった気持ちは、今でも忘れることはできません。生徒をかわいがりますが、きびしさもあり、授業中よそみをしていたら、大声でおこられ、一瞬はっとしたが、愛のむちということが心に伝わり、うれしさと尊敬の気持ちがより深まったと思っています。

家庭科は、刺しゅう、被服科などあり、先生方がよく代わられました。紙のようなひもでできた手さげに、花の刺しゅうをしたり、男物のゆかたや羽織やかすりのモンペをぬったこともあります。

体育の時間は、大関たか先生でした。整列した時、すねに力がはいっているかどうか、後から見て歩き、ゆるんでいると大変です。鉢巻きは、髪の毛をきちんと押えるように真横に締めるという指導を受けました。

教練の時間には、四列に並び、貝がらのごろごろしている運動場を素足で行進し、集合台の前では、級毎に分団長（級長）が、「かしら右」と号令をかけるのです。そのほか「回れ右前へ進め」など、現在の消防団員の訓練のようなものでした。足の底が痛くて跳び上がりそうになると、大声で怒鳴られるのです。

耐寒運動の納会の日は、出洲から幕張までの往復、海岸沿いに競走しました。完走後飲んだ一ぱいの甘酒の味は格別なものでした。

学校全体が、体育面には特に力を入れ、なぎなたの練習も学習内容の一つになっていたことは、時代の世相を反映したものといえましょう。

校庭の竹囲い沿いには、今でしたらきっと美しい草花が植

えられた事でしょうが、食糧難の時代であったことから、きわめて現実的な果実の木ということで、有田保先生の指導でトマトが植えられました。

安塚正一先生は書道一筋に生き、生徒ひとりひとりに短ざく型の紙の表に楷書、裏に行書で名前を書いて渡し、個別指導を徹底しておられました。

国語は、三つ位に分かれ、一つは教科書を主にしたもので、橘健二先生の指導を受け、朗読、熟語の意味しらべなどの予習を楽しんでやっていたこと。また「一生懸命」ではなく「一所懸命」が正しいと教えていただいたことなど忘れられません。

漢文は、塚本弥六先生で、先生としてはできるだけやさしく教えてくださったのですが、初めて聞く私たちにとっては、読みかたがとてもむずかしかったです。教育勅語「朕惟フニ我カ皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ……」を暗唱したのもその頃でした。

大森菊野先生の国語は、熱弁を奮って授業が行なわれ、私たちも思わず熱心に勉強しましたが、一部の生徒の間では、先生の口角あわをとばす講義に辟易していた者もあったようです。

社会は、歴史、地理と分かれていて、田吉郎先生に地理の指導を受けていましたが、ある日「誠実」という答えを強く要求されたことがあり、正義、真実―など、本気になっていろいろ考えたものでした。

昭和十八年十一月一日、新校舎の一部が落成し（現在の葛城中の位置）三年生（一回生）が移転しました。高台で回りはずっと畑で、人家がほんの数えるほどしかなく、ぽつんと木造の二階建てが立ち、マッチ箱のようだといわれていました。俗にいうバラック建てだったので、風雨にさらされ、側面はまたたく間に板がはがれて、見る目も哀れに感じました。昭和十九年四月七日、元葛城アパートだった建物を市が買いとり、教室に改築するため畳を取り壁を抜いて、第三校舎ということになりました。昭和二十年七月七日、港町校舎は、空襲のため焼失してしまいました。

話はもどりますが、昭和十八年十一月頃、現在の京成ホテルの裏側に、参松というあめ会社がありました。勤労動員でぶどう糖（グルコース、グリコーゲン）を入れる袋作りや、箱に入れる仕事に二回ほど行き、そこで口にすることは許されていたので、甘い物が自由に手にはいらない時だけに、みんな大喜びしたものです。

郵便局には一週間位行きました。袋から出したばかりの、山のように積まれた郵便物を、市町村別に次から次へと、たなの中に仕分けして行くのです。

昭和十八年十二月から、二十年八月十五日の玉音を聞くまでの一年八カ月は、日立製作所（現川鉄の近く）での勤労動員生活でした。

からだの丈夫な生徒は現場、健康に恵まれない生徒は事務的な仕事に従事しました。今の学生には、願っても出来ることではないと思いますが、当時は、男女の別を問わず相当困難な作業にも取り組まなければならなかったのです。私が担当した仕事は、総組立てといって、飛行機のエンジンを組み立てる仕事で、組立てが終了すると係の手によって試運転が行なわれます。その結果、重油でよごれたエンジンを更に分解し、洗浄を行ない、改めてもう一度組立てなおします。この工程を再び繰り返し、完全なエンジンとして製品化されるのです。以上の作業工程の間、何回となく移動するシリンダ

ーが、両肩にずっしり重くても、また氷つくようなガソリンや、洗浄のための熱湯を使う必要があるので、特に冬季は、手の皮膚がおかされ、しもやけがくずれても作業を休むことは許されず「一億必勝」「何が何でも勝つまでは」と、歯を食いしばって堪え忍んだものです。

田吉郎先生が、工場の庭の一角で行なわれた学年集合の折、「生きた教材がある」と話されたことは、他の人にはわからないことかもしれませんが、私にとっては一生忘れることのできない思い出であるとともに、どんなことにも堪えぬくという根性がつちかわれたことであり、きわめて貴重な体験として生きています。

戦争中に学生として過ごした私たちは、以上のような波乱にとんだ人生をあゆみつつ終戦を迎え、再び学窓に復帰し、間もなく昭和二十一年三月二十九日、高女第二回生として卒業したのです。

戦争中の長く暗い幾年月、授業も満足に受けられなかったというブランクも大きく感じましたが、敗戦という現実により、更に苦しい修練の場に立たされ、それらを乗り越えることにより、人間として大きく成長し、社会のために役立つよう努めて参りました。

（高女　第二回　昭和二一年三月卒業）

## 遠い夏の日の思い出

卒業生　石　井　洋　子

今年学校が三十周年のお祝いを迎えるなら、この話しは二十七年前の夏の日の思い出である。今の校舎を眺めていると、当時の私達の校舎はくらべものにならぬ程、ちっちゃな木造平屋の十数教室しかない、かわいらしい学校で、校庭のすぐ下を都川が流れ、その名も千葉市立千葉高等女学校といった。入学後まもなく、私達一年生の四クラスの壁がぶちぬかれて、学校工場になってしまった。あの朝の悲しみを、私は今も忘れてはいない。しかし学徒動員という名のもとに、悲しみにくれるひまもなく、厳しい軍事教練や点呼が、毎日のようにくりかえされた。そして、先生や先輩や校舎を、次々と戦争で失ってしまった事は、あまりにも悲惨で今ここに書く事をさけたい。戦後、四年生と五年生を送ったのだが、この二年間も、又書き出したらとまらない程、思い出す事は沢山あるのだが、これから書く事は動員の前の、ある夏の日に起った思い出である。

私は、夏が来るといつもかすかに思い出していた。しかしこれを書くについては、あまりにも遠い思い出だから、自分でもフィクションだかノンフィクションだかわからなくなってしまった。そこで親しい友達におぼえているかどうかたしかめてみた。

友達の頬が紅潮し若やいで来た。

「あったわねえ。そうよ、そうよ、そんな事が。」

私はこの言葉に勇気を得た。そしてペンを握って、いっきに書きつづけた。私の気持も友達と同じに若がえった。それはまるで映画のひとこまをみているようにもおもえる。

授業が終ると

「おーい!!　乗るかあ。」

と、元気のいい男の先生の声に

「ハーイッ!!　乗りまあーす。乗ります。」

と、妙にはしゃいだ女学生の声だけが、耳の奥に残っている。

鞄を校庭の隅っこにほおりなげるようにして、バタバタとかけ足で校庭から和船にのりこんだ。そしてギッチラギッチラと都川をさかのぼって、鉄橋をくぐり大和橋近くまで行った。船を上手にあやつって乗せてくださった先生が、どなたであったか、誰と誰が乗ったか、ちっとも想い出せない。でも誰だっていいんだ。そんな事は。ギッチラ、ギッチラゆれる和船に、ベニスのゴンドラを思い浮かべ、両岸の景色に胸をときめかし、淡い感傷にひたっていた乙女時代だったのだ。都川もきれいだったし、千葉市も戦災も知らず、そして公害などましてない頃だった。

その頃、学校から水着に着かえて海へも行けた。そして水泳教室が学校から歩いて五分位の海でできたのだ。今は埋めたてられて、海が遠くの方にいってしまった。そして、千葉港には大きな外国船が入ってきているのだから、今の人が聞いたら嘘のように思えるだろう。でもありがたい事に、あの時の水泳指導のバタ足が、今でもしっかり身についていて、バタバタやれば進む事ができる。私達の水泳指導をしてくださったのが、色の浅黒い細おもてのハンサムなH先生だった。

「皆、一列にならんでえー。」

海の中に一列に並ばされ、最初顔をぬらし、体をぬらし、ドボンと風呂につかるように、水の中にすわる。というのが、一番はじめの指導だった。皆、先生のおっしゃる通りにした。先生がお手本を示された。

「わかったか。」

と、すくっと立ちあがった先生のパンツのひもがほどけてなにもなかった。まさに風呂上りの状態だった。

「わーっ!!。」

この時、女学生のすさまじいばかりの黄色い声と、木の葉一枚落ちてもおかしい時代。笑ったの笑ったの……。後日、いつまでもこの事件は話題にのぼった。なんてことはありゃしない。たゞ、おかしくておかしくて笑い転げる材料であったのかも知れない。しかし、いろいろ憶測する人が出て、

「わざとやったんじゃないの。」

なんて事をいい出す人も出たりした。でもわざとでもいい。あの時、先生はすかさずパンツを持ちあげたし、ほんの数秒のでき事なんだから。でも今、私は自分なりにこう考えている。軍国主義が次第次第にこうじていく時代だったから、もしわざとしたとしても、それは思いきった性教育を先生はして下さったのだと思って、さわやかな思い出としたい。でもパンツのひもがゆるんだのだとしたら、本当にお気の毒でたまらない。

遠い遠い夏の日の思い出である。

（高女　第四回　昭和二三年三月卒業）

# 三、県立千葉第三高等学校

## 概　説

### 1　千葉市立女子高等学校から県立千葉第三高等学校へ

昭和二三年四月、県下七十六校の旧制中学校が整理統合されて、六十六校の新制高等学校が発足した。うち十四校（本校はこの中の一校）が市立又は町村立の公立高校で、五十二校が県立高校であった。しかし、これらは旧制中学校が概ね

そのまゝ新制度によって昇格したものであったので、再検討をしなければならない問題点を多くかゝえていた。すなわち、新制高等学校の性格からみて、総合制の採用・男女共学の実施・通学区域の設定等の困難な課題を解決し、一方において高等学校としての内容や施設の充実を図らなければならなかったのである。しかるに、当時の地方財政の状況・動向からみて、これらの高等学校をそのままの姿で維持・発展させることは、極めて困難であることは明白であった。これらの諸情勢の中にあって、連合国軍政部からの勧告もあって（ブラウン氏の教育六原則）、県教育委員会は、県下公立高等学校の再編成を緊要な事業として鋭意それに取組まなければならなかったのである。

県教育委員会は、昭和二十四年十二月から翌二十五年二月までに開かれた。高等学校再編成審議会の答申を尊重して、学校配置の適正化及び通学区の合理化・学校経営の合理化による県民負担の軽減、高等学校の内容及び施設の充実・定時制教育の普及拡充・男女共学の促進を基本方針とし、総合制・学区制・男女共学及び市町村立高校の県立移管を実施し、高等学校教育全般の内容充実を企図するものとして、県下公立高等学校再編成の具体案を決定したのである。こゝに昭和二十五年四月、県下公立高等学校六十六校は県立四十三校、市立三校に整理統合され、新たに分離校舎十八が誕生したのである。

このような県下公立高等学校の整理統合の嵐の中で、わが千葉市立女子高等学校も廃校か統合かという重大危機に直面したのである。高等学校設置基準、適性規模（生徒数六〇〇名以下は整理統合）、県や市の財政状況、特に千葉市は戦災都市であり、小中学校の校舎建築等その復興に多額の支出を要し、県立高校への移管条件を具備させることは非常に困難なことであった。独立校としての存続と県立移管を目標として、本校関係者の多方面にわたる運動が展開されたのである。特に昭和二十五年二月二十二日、千葉市臨時市議会開会の当日、職員、生徒、卒業生、父兄の四者代表が合同で、加納市長をはじめ市当局への陳情が行なわれており、さらに三月には、県当局あるいは地元出身県会議員等の方々にも何回か同様の陳情が行なわれたのである。よくこの危機を乗り切り、独立存続、県立移管を達成したわけであるが、当時の諸川芳雄校長をはじめとして職員、同窓生、父兄その他の関係者の労苦が偲ばれるのである。

次に当時の状況を、毎日新聞、千葉市議会及び県議会議事録によって紹介いたします。

**毎日新聞千葉版**　昭二十五年二月二十三日

市立男女高とも存続　千葉市急施市会

千葉市市会全員協議会並に急施市会は二十二日午後一時から市議会場で開催、市の起債償還を延期する案と、高校再編成につき審議の結果、市立商業高校、市立女高校問題を次の通り可決した。〈1〉両校とも独立校として存続させる。〈2〉女子高校本館の平屋三百坪を新築しこれを寄附する。〈3〉学校敷地七、七六二坪を寄附金一、八一九万四千五八円を二十五年八月末までに寄附。

**千葉市議会議事録から**（本件に関する部分）

昭和二十五年二月二十二日、左記事項について急施臨時市議会が開かれた。午後三時四十五分開会

議案第一四七号　寄附をなすについて

議案第一四八号千葉市起債及びその償還について

〈白井辰次議員〉

本案件は急施を要する問題でありますもので、一切の手続を省略していただいて、直ちに採決をお願いいたします。

〈鴻崎豊吉議員〉

出席が少し遅れたので質問致します。市立の商業高等学校と女子高等学校を県に寄附することにつきまして、固より賛成でありますが、学校の設備内容を充実して立派なものとして寄附したいと考えますが、如何にして充実したものといたしますか。

〈楠原信一教育長〉

設備内容を充実したものとして移管することは、まことに立派な御意見で、市の方としても、県からの要求もありますので、出来るかぎりそのように計りまして、議案に記載してあります通りに実施するもので、其の他に於いては大々的に修理を加えまして、恥かしくないものとするに充分な手をつくす考えであります。

〈鴻崎豊吉議員〉

斯く言うものは、唯立派なものとして移管したいと思う他はないのであります。

（「異議なし」と叫ぶものあり）

〈石塚正二議長〉

御異議ないものと認められて、本案は可決確定いたします。

## 議案第一四七号

寄附を為すについて

本市立商業高等学校及び女子高等学校移管に伴い同校敷地建物工作物設備その他を左記条件を附して寄附するものとす。

昭和二十五年二月二十二日提出（同日原案可決）

千葉市長　加納金助　印

記

一、両校とも独立校として存続すること。

二、計画中の建物（女子高等学校本館平屋三〇〇坪）は新築の上寄附すること。

三、学校敷地中現在借地七、七六二坪は昭和二十六年三月三十一日までに買収の上寄附すること。

但し買収までの借料及び買収費は市において負担すること。

四、寄附金壱千八百拾九万四千五拾八円は昭和二十五年度において金六百拾九万四千五十八円を経常費の歳入歳出決算の差額見込額として昭和二十五年八月末日までに県へ寄附する。残金壱千弐百万円は昭和二十六年度、二十七年度において分納すること。

但し決算終了後差額金に不足のある場合はその不足額を更に負担すること。

注　職員の給与を三年間市が負担するための措置

五、新制高等学校は設置基準（但恒久基準）によって昭和二十六年三月以後設備拡張を要するので、この際所要経費は本市において負担すること。

右二項より五項までの条件を履行しないで県から県立移管を取消されても異議なく直ちに承諾すること。

寄附目録

借地中の土地

所在地　千葉市轟町三番地　坪数　七、七六二　所有者住所　東京都新宿区　所有者　大蔵省

建物目録
校　舎　波形鉄板葺木造平家建　七五〇坪五二五万円
便　所　日本瓦葺木造平家建　二〇坪　一〇万円
渡廊下　波形鉄板葺木造平家建　六七坪　二〇万一千円
計　八三七坪五五五万一千円

備品目録
理科用器具掛図標本模型（音叉、レンズ、顕微鏡、昆虫飼育器、テスター、動物解剖標本、鷲剥製、上皿天秤、足踏フイゴなど七十三点）　数学工作用具（大算盤、グラフ黒板、三角定規、コンパス、分度器など十点）　運動用具（拡声器、身体測定機器など六点）　その他図書十冊、机、椅子、黒板、下駄箱、戸棚、金庫、謄写版機、自転車、電話など　合計一、五五三点　金額　弐拾五万参百六拾四円八拾弐銭

県議会関係についてみますと、昭和二十五年三月三十日、三十一日の両日に開かれた臨時県議会において、審議されたわけですが、議事録から関連部分を抜き書きいたします。こゝでは八つの案件が審議されましたが、第一号議案と第四号議案が県立移管にかかわる事案です。

第一号議案　昭和二十五年度千葉県歳入歳出追加予算

〈土屋留治副議長〉

議案の配布漏れはありませんか、―ありませんければ当局より提出議案に対する説明があります。

〈佐藤秀雄総務部長〉

只今配布に相成りました昭和二十五年度千葉県歳入歳出追加予算その他の議案につきまして、その概要を御説明申し上げます。……昭和二十三、四年度の災害復旧事業の翌年度繰越しの為の予算説明の後……

次に県立高等学校の整備統合を図るために、市川市立国府台高等学校外十校を県立とする外に、定時制高等学校につきましても同じくこれを県立に移管するため、高等学校費において二千六十七万余円、定時制高等学校費において七十五万余円を計上いたしたいのでございます。……

第四号議案　学校財産の取得について

〈林英一郎議長〉

……第一号乃至第八号議案の総括審議を行ないます。別に質疑もないようですから、議案に対する各常任委員会の審議の経過並びに結果を求めます。文教委員長。

〈福原実文教副委員長〉

文教委員会の報告を致します。本委員会は昨日（三月三十日）教育長室において開催いたしまして、付託せられました第一号並びに第四号議案について審議致しました。

今県議会に提案されました教育費の総額は、歳入二千二百九十三万五千四百五十六円、歳出二千四百四十三万五千五百二十六円でありまして、主として市町村立高等学校の県立移管に伴う経費であり、その内容も人件費が主で、すべて既存の県立高等学校と同様の基礎をもって算出されておるのであります。

先に軍政部より勧告を受けました教育六原則（昭和二十四年二月九日勧告）に副いまして研究調査の結果、今般提案されたものでありまして、事務当局より詳細なる説明を受け、活発なる討論の結果、本委員会は原案に対して全員異議なく賛成したのであります。以上御報告申し上げます。

以下各委員会の報告の後

〈堀越英次議員〉

議事進行について動議を提出いたします。今次の臨時県会に提出された議案は事業繰越に伴う追加予算その他緊急止むを得ざる議案のみでありますので、討論を省略し、直ちに採決あらんことを望みます。
（「賛成」と叫ぶものあり）
〈議長〉
只今の堀越議員の動議に御異議ありませんか。
（「異議なし」と叫ぶものあり）
満場御異議ないものと認めまして採決いたします。第一号乃至第八号議案について原案に賛成の方は御起立を願います。
（賛成者起立）
起立満場　よって第一号乃至第八号議案は原案通り可決確定いたしました。（拍手）
午後二時二十三分（三月三十一日）

議会での審議状況は以上のように簡単なようであるが、こゝまでに至る経過の中に、いろいろと難かしい問題があったものと思われます。先に記述した県総務部長の説明の中に、市川市立国府台高等学校外十校の県立移管とありますが、この内容は次の通りである。国府台高等学校、千葉市立商業高等学校、千葉市立女子高等学校、東金商業高等学校、御宿家政高等学校、勝浦高等学校、習志野農業高等学校、中正農業高等学校、松戸農商高等学校、八街高等学校、佐倉高等学校の十一校である。このうち県立の独立校として存続したのは、国府台高等学校、千葉商業高等学校、そして本校の三校であり、他の八校は分離校舎として近隣既存の県立高校に統合されたのである。

かくして、千葉市立女子高等学校は、県立移管により校名が千葉第三高等学校と変わるとともに、再編成の基本方針に従い、男女共学校に生れ変わり、再出発をすることになったのであります。

## 2　施設設備

### 校舎建築等

昭和四十六年度、校舎の全面改築が一応の完成をみるとともに、分厚いトタン葺の平家建、長々と続く鰻の寝床のような旧日の校舎の面影は跡形もなく消え去ってしまった。母校の発展を喜ぶ卒業生もなくなってしまった〝わが学び舎に〟さびしさを隠せないようである。県立移管の頃から昭和三十五年までの旧校舎建築のあとをたどり、昔を偲んでみたいと思います。

千葉第三高等学校に名は変っても、校舎は勿論そのまゝ市立女子高のもの、前項で述べられているように軍用倉庫を改築したもので、百米にも及ぼうという長い平家が三棟並んでいた。屋根は黒い波形鉄板、柱は二度のお勤めで外から板を張って補強、窓にはガラスのないところが相当あったそうです。ガラスには全て盗難よけに「千三高」の名入、床には穴があいており釘の頭が出ているので上を向いて歩くことは不可能であったとのこと。電気工事と水道工事の完了したのが昭和二十三年三月六日、それ以前は職員室兼事務室に一ケ所しか電気が引いてなかったそうです。以下年度を追って建築のあとをたどります。

昭和二十五年七月十三日　本館建築促進運動を起す。これは県立移管について市の公約で、三百坪の本館を新築の上県に寄附することになっていたが、放任しておいては何時にな

るかわからないということで、PTAの組織を改めて役員を大増員して陳情団を作り、県や市当局に陳情を繰り返した。その結果、八月十五日、本館建築予算約五百万円が競輪収入により充当され、その経費として市議会で可決された。

昭和二十六年三月三十日、本館建築着工。九月一日、新築本館竣工（小講堂、校長室、事務室、職員室、小使室、研究室兼会議室、便所　二六一坪　四五〇万円）。後のバラック建三棟に対比すれば一応堂々たるもので、先生方や生徒一同大変な喜びようだったそうである。後に紹介するが、この年には運動場の整地作業が行なわれ、両者の竣工と兼ねて創立十周年記念行事が開催された。

昭和二十七年四月二十二日、正面玄関前庭に植樹実施。現在玄関真正面にある立派な松の木がそうである。五月一日理科教室棟増築運動を起し県当局に陳情を行なう。新築本館はできたが、生徒が授業を受ける教室がいかにもみすぼらし過ぎる。さればといって、本館建築を行なったばかりで、現に使用している教室を直ちに改築というわけにはいかなかったので、理科教育の振興という旗標のもとに、在学中に全生徒が勉強に使える木の香新しい特別教室をということであった。これも努力が実って、十二月二十二日、理科室棟建築着工。翌二十八年三月二十日、同竣工（木造洋瓦葺平家、物理化学準備室、化学教室、物理教室、地学生物準備室、地学教室、生物教室　一四〇坪　四五〇万円）。

昭和二十八年度から千葉市の人口増加とともに本校入学志願者が激増し、市内中学校関係の方々の猛烈な運動があって、学級増が行なわれ一学年七学級となった。三年後には都合三学級増加することになるので、それを見越して六月に再度校舎増築運動が起された。県教育委員七名が来校されて、視察、懇談が行なわれ、一挙に二棟増築の特別措置がとられる方向に事が運んだのである。

昭和二十九年二月二十四日、右の二棟の建築着工、六月七日竣工、新築家庭科教室棟（第三棟の並び、木造平家鉄板スレート葺、被服室、食物室、洗濯室、準備室等　一〇〇坪）普通教室五教室（木造平家原型スレート葺　一二二坪）両者計　二二二坪、六五〇万円。この工事と同時に、男子生徒の増加から武道場を整備するということで、二月に小講堂で柔剣道ができるようにするため床面の改装が行なわれた。さらにこの年には、昭和二十三年建築のバラック棟のうち、特に第一棟（最も細長い校舎）の腐朽化が甚しくなり、使用に耐えられないようになって来たので、五月に改築運動が起された。これも年次計画で逐次改築することが決定され、十二月十五日着工。

昭和三十年四月八日第一棟改築工事竣工（普通教室一〇、更衣室二、出入口四、通信教育部職員室三五〇坪、四五〇万円）。この年から全校二十一学級となり、一、〇〇〇余名を同時に収容できる講堂兼体育館がなければどうにもならなくなってきたのである。入学式、卒業式などの式典、講演会、音楽会などの文化的行事も、更には雨天体育、バスケット、柔剣道など他方面に利用できる建物が緊要になってきたわけである。これにはしばらくの時日を要した。

昭和三十二年四月三十日、体育館兼講堂新築着工。八月三十一日、同竣工（バスケットボールコート一面分、体育教官室、体育器具庫、ステージ、二階観覧用部分、二一七坪　八〇〇万円）。

昭和三十三年二月には自転車置場が新設された。

昭和三十四年二月二十日には年次計画にもとづき、第二棟

の改築工事が竣工した。（普通教室五教室、図書館一五〇坪）七月十日増築印刷室、応接室落成。九月七日、運動クラブ部室落成（理科室棟と体育館の間）

昭和三十五年十一月十九日、第三棟改築竣工（第二体育館柔剣道用、美術室、音楽室　一四〇坪）。

以上のように、年を追って校舎は整備されてきたとはいうものの、恵まれていたとはとても言うことのできない環境の中で、大勢の同窓生達が勉学にいそしんできたのである。

## 運動場の整備

市立高等女学校時代の項に述べられているように、本校が葛城町の校舎を新設の市立第三中学校（現葛城中学）に譲り、現在の轟町の地に移転して来たのは、終戦後まだ間もない昭和二十三年の四月十七日であった。この日全校の女子生徒はモンペ姿で、それぞれ机や椅子、戸棚などをたずさえて、はるばる歩いて引越して来たそうである。この轟町の七、七六二坪（二万五千六百平方米余……後に拡張されて一万余坪、三万三千八百平方米余になります。）の敷地は、当時の五百名足らずの生徒数からみると広大な土地であった。千葉市の中心街からはいささか離れてはいるが、理想の学園建設を目図し、一大決意をもって移転して来たものと存念されます。しかし、初めて見た校舎、校地のあまりのひどさに、生徒達は新しい土地に移るという期待が大きかっただけに、がっかりさせられたようである。この敷地は、戦時中の陸軍中の陸軍被服倉庫の跡で、校庭といっても庭ではなく、入口といっても門柱が二本立っているだけ、境界線もはっきりせず、校庭の真中を市民は勿論、荷馬車が通り抜け、夏草の中を窓際をかすめて、アイスキャンデー屋が通るというような状況であったそうです。軍施設であったので、空襲に備えた塹壕もそのまゝ、鉄棒の突き出た赤レンガとコンクリート造りの倉庫の土台の残骸、松の木と雑草の生い繁る土手とさつま芋畑。これらを取り片付けて簡単に地ならしをしたものであるから、運動場は高低、凹凸のひどい砂利だらけのものであった。体育の時間には整地作業、全校朝礼の後には必ず石拾いがあった。昭和二十六年、本館の新築工事と並行して、大々的な校庭の整地作業が計画実施された。この運動場造成の事業が、土建業者河瀬組の数名の労務者の助勢と、どうしても手に負えない巨大なコンクリートの塊（軍建造物の土台）除去のための県開拓公社のブルドーザーの応援を除けば、全く全校職員と生徒達の汗と血のにじむ努力によってなし遂げられたことは、現在の世道人心では至難の業であろうと思われる。当時の教務（学校）日誌によると、整地作業は、七月二十六日から九月十八日迄、八月十三、十四、十五日のお盆の日、豪雨の日、特別行事のある日を除いて、延べ四十八日間、職員生徒の作業割当計画にもとづいて実施されている。

七月二十六日　木曜　晴　整地作業開始　河瀬組三名　一ノ一、一ノ二、二ノ四、出席四十四名　監督　池内　松本隆教官

七月二十七日　金曜　晴　河瀬組二名、二ノ一、二ノ四、出席四十八名、監督　愛敬　早崎　松本隆教官

七月二十八日　土曜　晴　河瀬組監督二名、土工七名、一ノ四、三ノ二、監督　山崎　早崎　松本隆教官

……

八月二日　木曜　晴　整地作業（本日より編成替）　一ノ二、三ノ五、職員　朝比奈　大河原　石田順、能率よく上る　河瀬組監督二名、土工六名

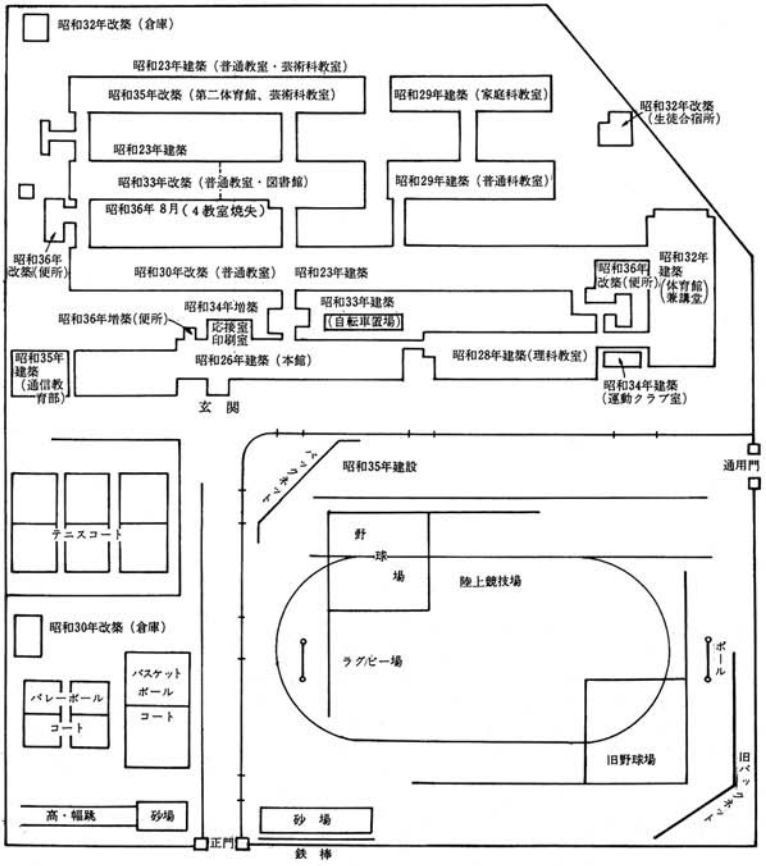
……
八月十日　金曜　晴　一ノ一、三ノ五、河瀬組監督一名、土工六名、職員　石田順　安塚　本日の気温三十五度、作業困難を極める。
……
八月二十四日　金曜　曇後晴　三ノ一、三ノ三、一ノ二、職員　石田誠　麻生　早崎　河瀬組監督二名、土工七名、県土木課伊藤氏整地作業にブルドーザー使用の件につき電話あり
……
八月二十七日　月曜　晴　一年五十名　二年十名　三年十七名、職員　大河原　兵藤　早崎　河瀬組監督一名、開拓公社のブルドーザー来り作業す。威力を発揮す、県土木技師伊藤氏来校し種々助言を与えらる。
八月二十八日　火曜　晴後雨　生徒八十五名　割当日に欠席せし者、職員　綱島　鎌滝　佐々木、ブルドーザー活躍す
……
九月十三日　木曜　雨　整地作業二年女子は中止、二年男子全クラス雨の中を実施
……
九月十八日　火曜　曇　男子生徒全員整地作業　作業組の女子生徒も除草、清掃に従事す。
　この日で一応作業計画終了
当時の教頭沢田繁二先生の克明な記録のうちから、その一部分を抜き書きしたわけであるが、連日このような記述がなされております。病をおして出席し叱られる生徒、病気の生徒にかわって参加する母親あり、先生方もみな土方姿。男子生徒は鶴嘴をふるい、もっこをかつぎ、女子生徒はリヤカーを引っ張り、担架をになう。酷暑の炎天下汗と土にまみれて、高所を削って穴や凹地（防空壕や塹壕跡）を埋めてならし、砂利、石は拾い集めて処理する（集められた砂利、石は大変な山をなし、後に骨材として土建業者に売却するほどであった）という整地作業が延々と続けられた。全く先生方と生徒達の母校愛に燃える勤労奉仕によって、漸く運動場らしい運動場ができあがったのである。運動場には、二〇〇米トラック、一〇〇米直線コース、野球場　ホームベースは東南隅三幸寿し側）、バスケットボールコート、バレーボールコートが作られた。九月二十二日にはこの完成を祝って、グラウンド開さの小運動会が催され、学年対抗の陸上競技、テニス、バレーボール、バスケットボールの試合が終日賑やかに行なわれた。自分達の手で作り上げられたグラウンドでの運動会である。生徒達の喜びと感慨は一入だったことでありましょう。
　翌、昭和二十七年四月、テニスコートが一面増設されて二面となった。さらに下って、昭和三十年の七月から九月にかけて、第二次校庭整地作業が行なわれ、第一グラウンド（トラック部分）が拡張されるとともに、野球のバックネット（東南隅）が新設された。同時にテニスコート、バスケットボールコート各一面が増設された。
　昭和三十三年には正門から入ってすぐ右側に鉄棒と砂場、左側に幅跳、高跳の助走路と砂場が作られた。翌三十五年には、バックネットの改築にあたり、近隣の民家からの苦情申し出（ファルボールが飛んで来て困る）もあって、現在の玄関そばに場所を移して新設された。なお、現在の大谷石造の正門は、昭和二十五年三月に卒業記念として寄贈されたもの

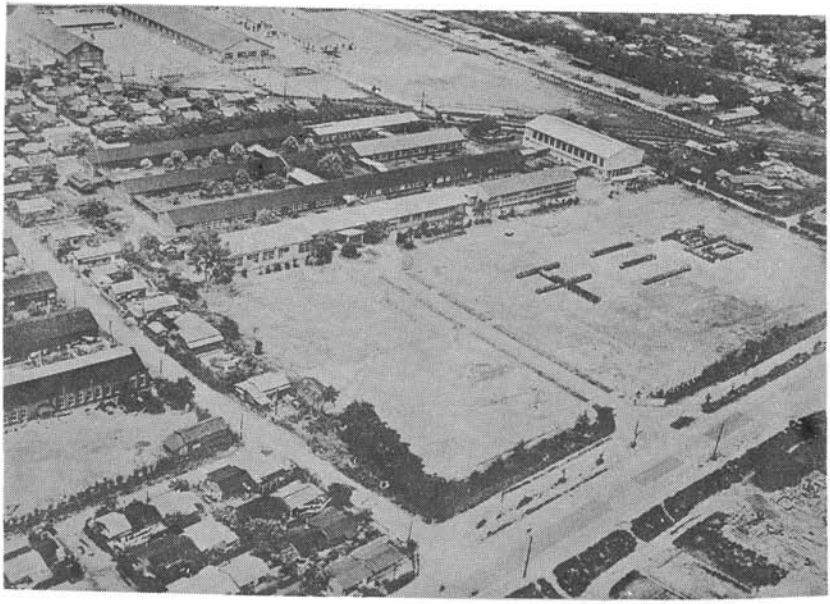
である。かくして、現在のような校庭の状況に近づいてきた　のである。

## 校地校舎全図

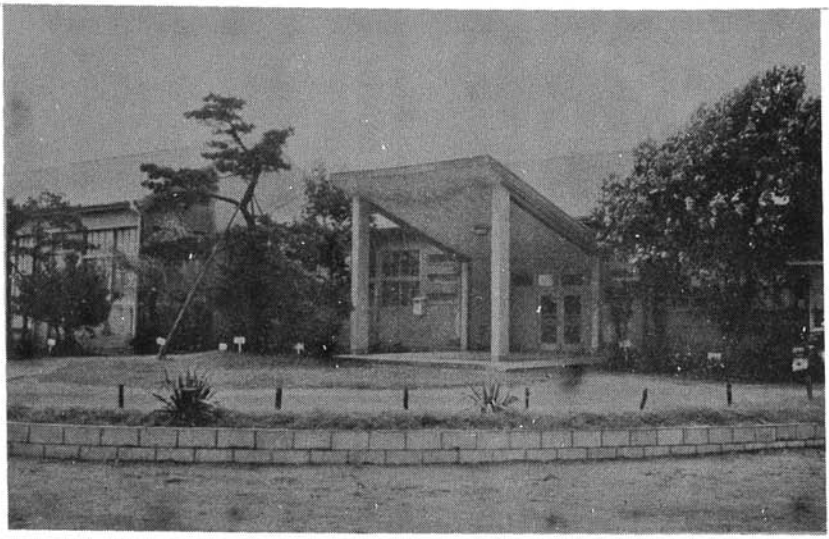
（1：1,200）

校　　地　33,534.6㎡
建物延面積　6,120.4㎡
運 動 場　16,968.6㎡





三　高　全　景



正　面　玄　関

## 3　創立十周年記念行事

昭和二十六年、本館管理棟の新築落成、運動場造成事業の竣功をみるにあたり、その祝いも兼ねて創立十周年記念行事が実施されることになった。六月七日、八日、九日と記念行事計画について慎重な審議、検討が行なわれ、多彩な催物の実施計画が立案された。次いで六月二十八日記念音楽会の会場には県教育会館ホールがあてられることになり、その際新たに作られた校歌、応援歌の披露を行なうとともに、第一線の音楽家を招いて記念演奏会を開催することになった。また、七月十二日には記念バザーについての職員生徒の連絡協議会が開かれた。記念式典と同時に文化祭が行なわれることになったので、生徒側も生徒会本部〈当時、会長平方（加藤）一枝、副会長武藤勇、書記積田（八幡）和子、房枝　功、会計尾身（青野）泰子、藤沢光章の各氏〉を中心に、各クラブ、委員会を通じて全面的に協力、参加することになった。さらに九月八日ＰＴＡ、同窓会、学校側三者合同の実行委員会が図書室に於いて開かれ、準備が整えられたのである。

十月六日　創立十周年記念大運動会

快晴の空の下、全員七時半に集合し直ちに準備に入り、八時四十五分入場行進開始、開会式、生徒代表宣誓、合同体操が行なわれ競技に入った。紅白対抗戦で各種競技が展開され、応援合戦も華やかに行なわれた。呼びものはクラス対抗の仮装行列で、それぞれ工夫を凝らした扮装や奇抜なアイデアは観衆を大いに喜び沸かせ、特別招待参加の翠幼稚園児の可愛らしいダンスが花をそえた。また、小講堂を利用して開かれた食堂では、おそば、みつ豆その他の軽食が提供され、大変な賑わいで好評であった。多数の来賓、父兄の方々にも御参加をいただき、天候にも恵まれて盛況を極めた。



十周年記念大運動会

十一月二日　創立十周年、本館落成、運動場竣功記念式典

式典当日、空はどんよりと曇り今にも降り出しそうな天候であったが、記念式典は小講堂を会場とし、定刻午前十時に開式、厳粛のうちにも盛大に挙行された。衆議院議員多田勇氏、県知事柴田等氏、県議会議員鈴木長治氏。県教育委員会からは委員長長戸路政司氏、委員時田米蔵、桜井茂尚の各氏、その他県庁関係の方々、市からは市長宮内三朗氏、教育委員長尾形猛男氏、教育長楠原信一氏、市会議員山本秀一氏など、来賓百五十余

名の方々の御臨席を仰ぎ、祝辞を賜わるという盛大さであった。

十一月三日　記念祭　第二日

## 展示・発表会の部

本校としては第二回目の文化祭であったが、生徒会本部を中心に自主的、積極的に活動し研究を積み重ね、顧問の先生方の適切な指導助言もあって、恵まれない施設・設備のなかにありながら、極めて密度の濃い展示発表会が行なわれたのである。



英語劇　ジャン・バル・ジャン

主なもの、化学・電気・天気クラブ（水飴の製造工程、カリ化合物の生産と用途、イオン交換分離法の研究等）、生物クラブ（人体の解剖学的研究、蒸散作用の研究、自作植物標本展示、投影顕微鏡映写等）、社会クラブ（世界服装史、千葉市商店街、郷土の考古学研究等）、新聞委員会（報道写真展、新聞のできるまで）、文学クラブ（記念誌「蠟人形」発刊）、家政、被服、手芸クラブ（家計の比較研究、和・洋裁作品、刺しゅう、人形等）、茶・華道クラブ（点前、生花）書道、美術クラブ（展覧会）、英語クラブ（小講堂において英語劇「ジャン・バル・ジャン」を上演）いずれも好評であった。また、家庭科教室を中心に行なわれたバザーも大変な賑わいであったようである。

## コンクールの部

近隣の中学校十一校を招待、生徒一、一六九名が参加して席書大会、音楽コンクール（於小講堂）、図画コンクール（本校周辺で写生大会）が開催された。書道の部審査委員長千葉大学教授浅見喜舟氏、音楽の部・千葉大学教授石黒一郎氏、図画の部・東京教育大学教授三苫正雄氏、この催しは歴史の浅い新設の高校として、近隣の中学への本校紹介・PRも兼ねていたようである。

十一月四日　記念祭　第三日

音楽・演劇発表会が県教育会館に於いて、午前中本校生徒対象、午後は一般人を対象に開催され、盛会を極めた。

音楽会

音楽クラブ員を中心とする合唱演奏、新作校歌、応援歌（第一、第二）の被露が行なわれた。校歌、応援歌とも作詞は、国文学に造詣の深い当時の教頭沢田繁二先生（現千葉高校長）が手がけられた。校歌については、歌人兵藤昌男先生に校閲

をいただき、勅使川原安芸子先生（当時音楽担当）の母校武蔵野音楽大学教授石黒修三先生が曲をつけられたのである。応援歌第一番「扶蓉の峰に雲湧きて」は、陸軍幼年学校で使われた勇壮な行進曲をとり入れたものであり、第二番の「劫火しきりに襲い来て……」の曲は、旧制第七（鹿児島）高等学校寮歌からとり、「集いて挙る一千余」は、「集いて挙る七百余」であった。本校の発展がしのばれる。

記念演奏会

出演者　川口絹代氏（本校高女第四回　昭和二十三年卒、東京音楽学校卒、声楽）、塚本紀子氏（同高校第三回　昭和二十六年卒、国立音楽大学在学中、声楽）、大賀典雄氏（東京芸大出　声楽）、鈴木秀太郎氏（毎日新聞音楽コンクールヴァイオリン部門　第一位特別大賞受賞者）、井内澄子（東京芸大出　ピアノ伴奏）。当時の音楽界の第一線で活躍されていた方々で、その素晴しい演奏は聴衆に深い感動を与えたのである。

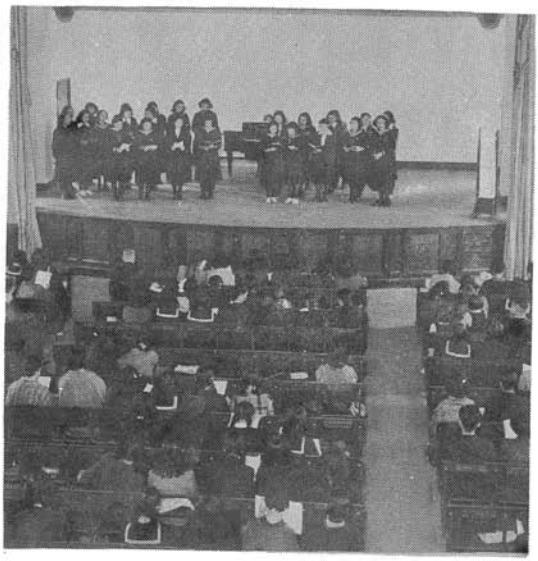
演劇発表

堀江士郎作「女の家族」を上演、スタッフ、キャストのチームワークも良く極めて好評であった。これは後に同年十二月二日の県中央発表会において、知事賞を受賞、主演の茂古沼美子さんが個人演技賞を受けている。

同窓会総会

当日別に、本校小講堂において一一〇余名の卒業生が参集し、同窓会総会が開かれた。本記念事業については募金運動等を通じて、積極的な御協力を頂いたのである。

かくて、盛会裡に記念行事が行なわれたわけであるが、諸川芳雄校長のもと「発展途上のわが三高」を合言葉に、成長、発展する本校の基礎が固められたのである。



記念音楽会新作校歌発表

## 4　男女共学の実施

六・三・三制の新教育制度の実施にあたっては、連合国軍政部の教育担当者からの強力な指導が行なわれた。中でも男女共学制の実施は全く画期的なことであった。従来の日本の教育においては、だいたい小学校四年頃から男女別学とするのが当然のならわしであった。それが小学校は勿論、中学、高校、大学にいたるまで、男女共学が推し進められることに

なったのである。なお、当時の指導では、男女共学とは、同一教師のもとに、男女生徒が同一の教育課程により、何らの差別的な待遇を受けずに学習することであり、同一校内での分離教育を行なうのはそうでないことが強調されている。

本校でも県立移管、千葉第三高等学校となるとともに、男女共学制を採ることになり、早速昭和二十五年度新入生二五三名のうちに、男子生徒六九名が入学してきたのである。全校生徒数六一二名のうち六九名なのであるから、男子諸君はさぞかし心細く、戸惑ったことであろうと思われます。それ以来、次第に男子生徒の入学数が増加し、昭和三十一年度、三十二年度には男子の数が女子を越え、三十三年度から三十七年度までは女子が多く、三十八年度以降は男子の入学者がずっと女子を上回って現在にいたっている。

男女別学、男尊女卑の分離教育から、突如として男女が机を並べて学習するという、コペルニクス的転回を遂げるわけですから、実施当初は教育を行なう側にも受ける側にも、いろいろな戸惑いや問題が起ってきたのは当然のことであり、当時様々な論議がなされた。今から二十年前のことであるが、現在に生きる古くて新しい問題である。特に男女共学の短所、長所ということが論議されましたが、次のようなことがあげられております。

長所としては

①異性に対する正しい理解と認識を得やすい。

②女生徒に進取の気風が出て来て、卑屈になりやすいところが除去される。

③両性相互の間で、よい意味での競争心が呼び起される。

④男生徒の礼儀作法や躾、たしなみが向上する。

⑤同性愛的な心理状態におち入るようなことがなくなる。

短所としては

①当初は心の平静さを失い、ともすれば見栄をはり過ぎる傾向がでる。

②男生徒が軟弱になり、去勢されたようになる。反面、女性が男性化し行動が粗野、乱暴になる。

③男女の能力差、学力差が問題になる。

④教育課程の組み方に充分留意しないと、女生徒に過重負担になりやすい。

現在からみるとあまり当を得ていないような点もありますが、本校においてもいろいろと論議されたのである。男尊女卑の風潮、社会通念の抜け切らない、又、若い男女の交際を危険視するような社会一般の状況から、一歩校門の外に出ると、ことさら別行動を取らなければならないような社会の人々の目は矯正されなければならないとか、男女の学力差については、従来の女子教育が男子に劣る教育しかしていなかった事実があったこと（女学校の方が中学校より学習内容の程度が低かった）を忘れて、心配しているのではないかなど。しかし、特に問題となり心配していた事は、男生徒が軟弱化するという点であった。本校のように、元女学校で多勢の女生徒の中に少数の男生徒が入ってくる場合、男子は容易なことではその環境に適応し得ないので、このような傾向が倍加されて、ひ弱で女性的な男子となり、剛健・溌達な男性の特質が失われてしまうのではないかと、当時の先生方は随分心配されたのである。男子にふさわしい運動クラブを多数設置し、盛んにすることによって、この問題を克服する重要な手立にしようと考えて、多大の努力がはらわれたのである。特にラグビー、剣道などが盛んになり（ラグビーは県内高校での創始校であった）、県内優勝、関東大会、国体にも屡々出

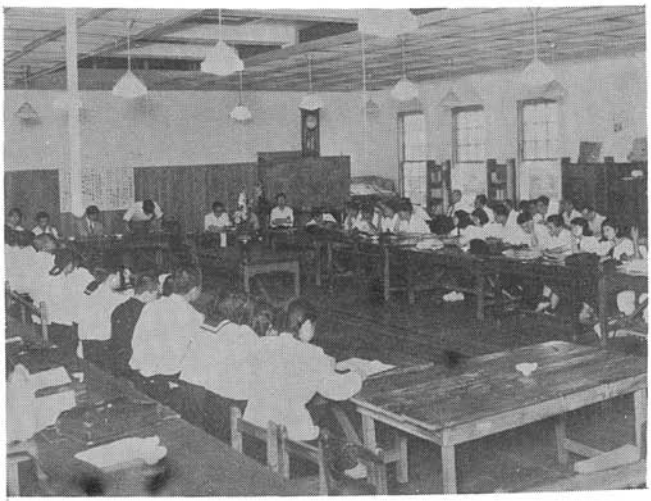
場するほどになった。

家庭的な温かさと親しみの中に、互に理解し合い、男女協力の上に、社会の発展と福祉に貢献することができるような素地を培う。新制高校発足当初の、男女共学の基本方針が受け継がれ、校歌にもあるように、男子は「をとこさび」し、女子は「をとめさび」して、男女共学の長所を発揮しようということが、本校の一つの目標となっているのである。

## 5　生徒会活動

本校に於ける生徒会の発足は、新制の市立女子高等学校となってから一年間の準備期間を置いて、昭和二十四年四月二十七日であった（前述）。教育課程上、今まで課外といわれた活動が、特別教育活動という名のもとに、教科の学習と並んで重要な教育的価値をもつとされるようになった。特別教育活動は、教科の学習を補うとともに、それを発展させて個性を伸張させ市民的教養を身につけさせるものであるということで、新制高等学校を全人的教育の場とするため、大きく取り上げられるようになったのである。具体的には生徒会本部、生徒評議会、委員会、クラブ等の活動である。生徒が自律的に社会的な活動を計画し実行していくことは、為すことによって学ぶという、当時の新しい教育原理が最も良く展開される場として重視されたのである。生徒会会則を制定し、そのもとに行動する態度を養うことは、法治国家の市民となる準備であり、生徒達が学校の問題を自分達の問題として、教師の指導のもとに、より良い解決を求めて協力し努力することは、民主国家の良き形成者となるために、極めて有益であると考えられたのである。

当時の連合国軍政部の教育担当者は、生徒会活動の充実にも大いに力をそゝぎ、学校内においても職員生徒とともに、その発展のため大いに努力した。昭和二十五年六月二十七、八日の両日、関東軍政部教育課の顧問マクマナス氏の指導のもとに、第二回生徒会の組織運営に関する研究集会が開催された。県下各高等学校の生徒会代表、顧問教師、校長等が参



加し、当時の千葉第二高等学校図書館で行なわれた。本校からは生徒会長小林（間島）正枝さん、副会長平方（加藤）一枝さん、顧問山崎一郎先生が参加された。会は全体会議と分科会に別れての熱心な研究討議が行なわれた。当時生徒会は発足したばかりで、一行事ごとに生徒会本部や顧問のはらわれる労苦は並大抵のものではなかったのである。したがって、各高校ともいろいろな問題をかゝえて悩んでおり、生徒会活動に関する研究も盛んになりつつあった。そういう時であったので、研究討議は非常に活発に行なわれ、マクナマス氏の適切な指導もあって、集会は大変に熱のこもったものとなった。小林さんは全体会議の司会者の一人に選ばれて大いに活躍され、会の運営にも積極的に協力されて貴重な経験を得られたとのことである。このような会への参加が生徒会の基礎固めに功を奏し、生徒会活動発展の飛躍台となったのである。次々に計画実施される新しい学校行事にも、また既存のクラブ、委員会活動等にも生徒会が大きな力を発揮することになるのである。先に述べたように、昭和二十六年夏の運動場整地作業にも生徒達の自主性が大いに発揮され、創立十周年記念行事にも生徒会を挙げて協力し多大の成果をおさめたのである。

その後、在校生の数が増加し男子生徒も増え、生徒会活動が活発化してくるにつれ、創立時に作成された生徒会々則では、運営上に支障を来す不備な点も出てきたので、昭和二十七年度、さらに生徒会の発展を図るために、本部（会長松本一興氏、男子と

昭和二十六年度生徒会予算　五月二十二日総会承認

| 委員会及び倶楽部 | 予算額円 | 倶楽部 | 予算額円 |
|---|---|---|---|
| 総務 | 四五、〇〇〇 | 化学 | 七、四二五 |
| 本部 | 二〇、〇〇〇 | 英語 | 二、八一一 |
| 予備 | 一四、四四七 | 文学 | 一、九二〇 |
| 小計 | 七九、四四七 | 書道 | 四、七五二 |
| 常置委員会 | 三〇、〇〇〇 | 生物 | 七、四三四 |
| 放送 | 五、二九六 | 社会 | 八、二一七 |
| 図書 | 五七、九七四 | 電気 | 七、六四二 |
| 厚生 | 三四、一五五 | 天気 | 五、三四六 |
| 美化 | 九、六二七 | 小計 | 七七、九八二 |
| 新聞 | 二七、九五七 | 運動倶楽部 | 三〇 |
| 保健 | 四〇、〇九五 | 卓球 | 一七、〇七七 |
| 小計 | 一四一、二九二 | 陸競 | 一二、四三四 |
| 文化倶楽部 | 七五 | 野球 | 四七、五二〇 |
| 音楽 | 三、九六〇 | 排球 | 一六、九五三 |
| 美術 | 六、〇三九 | 篭球 | 一二、五二三 |
| 映演 | 一二、四七四 | 庭球 | 二〇、四一三 |
| 茶華 | 二、九五〇 | ソフト | 一一、五八三 |
| 家政 | 三、六九七 | 山岳 | 六、二八六 |
| 被服 | 二、二九一 | 小計 | 一四四、七九二 |
| 手芸 | 三、四六五 | 総計 | 四三、五一四 |
| 珠算 | 四、九五〇 | | |

して初めて）を中心として、会則の全面的な検討改訂が行なわれた。現在施行されている条・章の原型はこのときに出来上ったのである。昭和二十八年十一月には、市内の高校生徒会の代表者会議が千葉工業高等学校で開かれ（一高、二高、商業、明徳、関東、工業、三高参加）、生徒会の運営方針、年間行事のあり方、予算の決定方法、風紀問題等について研究討議が行なわれた。この会合はその後もしばしば行なわれ、情報交換により視野が広がるとともに、相互に良い意味での刺激を与え、生徒会活動の発展に大いに資するところがあった。大学進学の競争が激化するにつれて、やゝ沈滞気味の様相を呈することもあったが、千葉三高時代、学校の発展とともに生徒会活動も活発化し堅実な歩みを続けたのである。

## 6　伝統的行事の出発点

新制高等学校として再出発して三年目、県立移管、千葉第三高等学校となった昭和二十五年度、次のような行事が初めて実施されております。

戦中、戦後の苛酷な社会情勢と貧しい生活状況のために実施に踏み切れなかった宿泊研究旅行が、昭和二十四年十月に甲府昇仙峡、伊豆修善寺方面を目的地として、初めて（いわば第一回修学旅行）実施されましたが、現在まで毎年実施されてきているような関西方面への修学旅行は、昭和二十五年十月に行なわれたのが、本校としては第一回目であったのである。四泊五日、参加生徒一一六名（事情により全員参加というわけにはいかなかった）、引卒職員団長諸川芳雄校長以下五名（山崎一郎、山口信夫、朝比奈英男、吉田さゆり、柴田希子の各先生）。やはり、京都、奈良を中心とする研究旅行であったが、交通事情も悪く、全くの食糧難、衣料難の時代で行き帰りとも夜行列車（現在のような新幹線、あるいは少し以前の特別列車のような立派なものではない）車中泊、主食はきびしい配給制度下にありましたから、旅館宿泊と中食分として各自八合の米を袋につめて持参する。服装も新しいものを手に入れることは極めて難しくお母さんやお姉さんのお下りで、全く色とりどりであった。現在のような日程の余裕はなく、京都、奈良市内の神社、仏閣めぐりもそれぞれ一日で行なうという強行軍であった。しかし、旅館での宿泊の夜の楽しさは今も昔も変らなかったようである。

第一回文化祭、昭和二十五年十一月十日、十一日。生徒会本部（会長小林（間島）正枝、副会長平方（加藤）一枝、書記角田（斉藤）恭子、積田（八幡）和子、会計矢野（斉藤）英子、尾身（青野）泰子の皆さん）、顧問山崎一郎先生。各クラブ委員会等が、文化祭の名において、今日行なわれているような音楽演劇等の発表会、書道美術等の展覧会、その他の文化系クラブの研究成果や労作の展示発表会、バザー等が初めて行なわれたわけである。従来は学芸会あるいは学芸発表会などといわれて小規模に行なわれたこともあったが、戦後の日本を軍国主義国家から文化国家に生れ変らせるということで、文化という言葉がもてはやされ、文化祭と呼ばれるようになり、生徒会の育成に力をそそいでいた当時、生徒の自主的な活動の場として極めて重要視されたのである。それにしても生徒達の手による初めての大行事、その労苦もさぞやと思われるのである。この努力と成果は翌年の創立十周年記念行事に受け継がれ、その後の発展の基礎となったのである。

読売新聞千葉版記事　昭和二五年十一月十一日（土）付

県立千葉第三高校文化祭は、十一日音楽演劇発表、研究発

表、展覧各会、バザー、十二日前日行事と同窓会総会、茶道実演があるが、十二日には本社新聞研究室植草委員が、新聞製作工程の講演を行なう。

第一回耐寒マラソン、女子のコース　正門―県営住宅前―関東高校（現工商高）前―穴川十字路―天台弁天社（スポーツセンター陸上競技場前の弁天様）前往復、距離五千米。男子のコース　正門―作草部―穴川十字路―天台弁天社前―長沼十字路先折返し点往復、距離一万米。以後毎年実施され、伝統となっていたのであるが、自動車交通の激化によって中止せざるを得なくなり、昭和三十八年度をもって終止府がうたれた。その後中止になったり、学校周辺をぐるぐるまわったりしたこともあったが、現在では検見川総合グラウンドにおけるクロスカントリー競争に生れかわっている。

## 7　帽章の制定

女学校時代の校章は、八咫の鏡を型どり、その中にオリーブの葉を描き、気高さとかおり高いものを表現した。八咫の鏡が用いられたのは女子が常に姿を正すという意味でつくられた。このデザインは本校美術担任の小川恒雄氏のものによる。八咫の鏡を型どったことはいかにも戦時中の時代風潮を示している。創立時から用いられたが、昭和二十五年四月一日、県立移管により校名が千葉県立第三高校学校となり、男子生徒の入学にともない帽章を制定することになった。

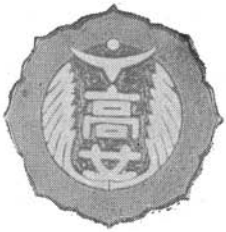
検討の結果、本校旧職員、生物担当の吉田さゆり氏の縁故の方で高橋春人氏（二科会員・商業美術審査委員）にお願いすることになった。第三高等学校の帽章の原案は氏のものによる。

原案の意図は、いかにも若人むきにして、颯爽生鮮感を与え、高校生の矜を高めようとする。月桂樹またはオリーブの葉は、あくまでも栄光を表わし、双翼は大空に張るようにして、希望を表現し、総体的構成は外へ外へ伸びる若人の心姿を表徴している。

氏の原案をもとにして第三高等学校の帽章が成立した。昭和二十五年から十年あまり、その帽章に親しんできたが、昭和三十五年以後、校章をふたたび改訂することになった。改訂の理由は、近隣の学校で本校のものとはなはだ類似したものがあり、生徒指導上不都合が生じやすく、また金質も劣っているなどであった。現在の校章は現教頭草葉章氏が美術担当の教諭時代に起案修正された。



千葉東高等学校
（現在のもの）




高等女学校時代



第三高等学校時代

## 8　女子制服制定

創立当初から制服はセーラー服と決っていたが、戦時中のことでもあり、布地の不足などで実際はどんなものでも良かった。制服も本人の身体に合ったものは少なく、大ざっぱに大中小の三型に統一されて、身体のほうで制服に合わせて着ていた。昭和二十年の終戦から二十七年まで本校の制服は自由であったが、昭和二十七年五月三十日に、家庭科の教諭が中心となって現在のものに決定した。（図参照）

紺サージスーツと白ブラウスに本校のき章等を上衣の左胸につける。夏季は上衣を脱いでもよい。

- 上衣 ― テーラー型シングル三つボタン
- ジャンパースカート ― 四角えり、ひだ数二四ベルト付き
- ブラウス ― 白ブロード長袖、えりは角型ショールカラー又はワイシャツ型




## 9　努力目標の設定

十年の長きにわたって、本校の基礎づくりと飛躍的発展のために、粉骨砕身の尽力をされた諸川芳雄校長がお隣りの千葉商業高校に転任されました。その後を受け継がれた石毛貞雄校長は、本校教育内容のなお一層の充実深化を図るために、全生徒職員の学校生活のよりどころとなる、次のような「努力目標」の設定を提案されたのである。

努力目標の設定とその達成

つねに理想的あり方を探求し、師弟ともに考え、ともに語りあって、学校全体および個人としての努力目標をさだめ、その達成にはげみ、日々の向上進展をはかってゆく。

学校全体の共通的努力目標

1　自律節制

自らの生活において、また人間関係、特に新旧世代相互、労資相互、国家相互において、相互の自律節制ということがなければ、人類の願いである平和と幸福は、永遠に期待できないであろう。

2　研究創造

原子力時代、第二の産業革命といわれる日進月歩の時代であるから、あくなき科学的研究心と、積極的創造性は、何人にも強く要望されるところである。

3　親切奉仕

道義心を忘却してしまったような今日ではあるが、明日の歴史を作るという若人の使命を自覚し、日常生活の上において、善意にもとづく親切奉仕を進んで実践する実行人でありたい。

標　語

「花一輪さしてはぐくめよき校風」

花一輪のヒューマニズムを実行して、よき校風、よき家風、よき社会の建設に、切れ目なき精進を続けてゆきたい。われわれ一人では何事もできない。しかし、一人から、しかも小さい事から始めなければならないことを知るべきである。

昭和三十五年四月、以上のような努力目標の設定とともに、次の千葉東高等学校時代を迎えることとなるわけである。

## ◆通信教育の部

### 1　本校に設置されるまでの概況

高等学校の通信教育は、昭和二十三年一月九日付で文部次官通達「中等程度通信教育実施要領」が発せられ、次いで昭和二十三年五月に「高等学校通信教育規定」が定められて実施されることになった。当初は各実施校とも専任教員は一名いるかいないかであり、実施科目も国語甲だけで出発し、翌二十四年に人文地理・解析1・地学の三科目、二十五年には漢文・一般社会・幾何・解析2の五科目というように逐次増加してはいったが、昭和二十九年度までは通信教育のみでは卒業に必要な単位数は修得できなかった。従って、一部の科目の学習だけでは満足できない者は、定時制で残りの科目を修得して高校卒業資格をとるほかなく、このため定通併修という制度が作られたのである。これが昭和三十年度に二十六科目、単位数にして百七十九単位の実施が認められ、同年四月一日の文部次官通達によって、初めて通信教育のみによって高等学校卒業の資格を得られるようになったのである。

さて、千葉県では昭和二十三年三月十五日、高等学校課程として国語甲を、中学校課程（通信教育は高校と同時に中学校も発足したが、本県では昭和二十八年度で打ち切られた）として国語・理科・社会を開講し、両者合わせて二百三十名の生徒を男女に分けて千葉高等学校と千葉女子高等学校の両実施校に収容し、それぞれ二名の専任教員によって学習指導が開始されたのである。しかし教師も生徒も初めての通信教育のため、両者の努力は空回りに終ることが多く、四年目の昭和二十六年度になって初めて十六名の単位修得者を出すという状況であった。そこで昭和二十七年に従来の男女別を改め、県を南北に区分して両実施校が分担することとなった。このため全県に散らばっている密度の極めて小さい生徒の掌握がやや楽になり、本校の他に県内各地を巡回して行なう面接指導も実施されるようになったため、単位修得者が増加しだした。これに勢いを得て実施科目も増加させたが、全国平均十六科目の中にあって、本県では六科目（国語甲・解析1・幾何・一般社会・人文地理・地学）しか開講できず、その指導も多くを兼務教員にまかせる始末で、少ない専任教員（両実施校は校名が千葉第一高等学校・千葉第二高等学校と変わったが、専任教員は依然として主事を含めて二名ずつしかいなかった）や運営予算（昭和二十八年度両実施校合せて三十七万八千円）では他県に遅れをとるばかりという状態が続いた。

この頃、全国的に通信教育に対する関心が増大し、実施科目の増加や通信教育のみによる高等学校卒業資格取得を要望する声が高まっていたが、本県でも昭和二十九年三月、県教育委員会は両実施校を統合してその陣容を強化することを決

定した。かくして同年四月、揺籃期を終えた千葉県の通信教育は本校（当時の千葉第三高等学校）に於て統合実施されることとなったのである。

## 2　千葉第三高等学校時代

昭和二十九年度　本校に統合設置された通信教育部は、諸川校長のもとに秋山主事以下教諭八名、事務職員二名の陣容で出発した。生徒は新入生を加えて四百八十六名、まだ系統的に各科目を履修するには至らなかったが、新たに日本史・世界史・一般数学・生物・英語・書道の六科目が開講されて、教員面、科目面とも格段の充実をみたわけである。しかし、通信教育を少しでも知っているのはごく少数の者だけで、仕事はまず教員の学習からというわけであった。幸いと言おうか、提出されるレポートは僅かしかなく、時間は充分にあった。すなわち、当時は「誰でも、いつでも、どこでも」というのが通信教育のキャッチフレーズであり、生徒は自分の好きな科目を都合のよい時に勉強し、随時その学習結果をレポートとして提出し、或いは暇を作っては登校して面接指導や試験を受けるというような自由な学習をしていたのであるが、期限を決められていないということが学習の遅々として進まない原因ともなっていたため、教員の方は歯がゆい思いをしながらも割に暇だったのである。そこで通信教育に関しては白紙の状態の教員は、直面する指導研究はもとよりのこと、過去の分析から通信教育の将来のあり方に至るまでを検討して、連日のように討議を重ねたのであるが、これが後日の本校通信教育の発展に大いに役立ったわけである。一方、県の学務課・指導課・社会教育課の指導後援のもとに、「人の集まる処には必ず通信教育が忍び寄る」と言われた程、各方面への啓蒙にも力を入れていた。この年、定通連携（松尾高校二川分校六十八名、船橋高校定時制四十三名、翌年には更に校数生徒数が増え、昭和三十二年度まで続いた）（註1）が実現したのを始め、後の学習会（註2）の母体となった青年学級との関係も芽生えるなど、殻に閉じこもらずに外部へ向かっての精力的な活動も繰り広げられたのである。

（出発時の陣容）

| | | |
|---|---|---|
| 主事 | 秋山 | 利雄 |
| 国語 | 徳永 | 實 |
| 国語 | 安藤 | 幸輔 |
| 国語 | 兵藤 | 益男 |
| 社会 | 佐倉 | 光子 |
| 社会 | 喜多 | 歩 |
| 数学 | 齋藤 | 昭 |
| 理科 | 佐藤 | 敏之 |
| 事務 | 湯浅 | 多美子 |
| 事務 | 伊倉 | 千代 |

（註1）定通連携とは、卒業に必要な単位をとれない通信教育の生徒が定時制を利用して卒業できるようにと設けられた定時制と通信教育を併修する制度だが、この時は逆に定時制の専任教員の不足とか生徒の就業時間の関係から単位不足になる定時制の生徒のために通信教育が利用された。

（註2）学習会とは、逢う機会が少なく、孤独な学習を強いられている生徒が自発的に集まって互いに励まし合うために生まれた小グループで、その内容は学習を主体にはしているが、多分にレクリエーションの要素を含んでいる。この頃はスクーリングも弱体で、生徒間の横の連絡は殆んどなかったために、友人と一緒になれる学習会は非常に効果的であったが、一面その維持にはかなりの努力を要した。最盛期には二十数ケ所で活動していたが、スクーリングの強化された現在はやや衰退している。

昭和三十年度　通信教育が一人立ち出来た年である。すなわち、この年文部省は通信教育のみによる高等学校卒業を認

めたのである。これを受けて、十月十八日から三日間館山市で開催された東日本地区定時制教育通信教育研究協議会に本校から管理運営に関する中心資料を提出することになり、前年に続いての部内研究と生徒に関する実態調査をもとにして、資料作成のため六月から八月にかけて暑さを吹きとばしての努力が続けられた。この資料をもとに、「教育課程の編成、指導組織特に協力校による指導の充実強化、放送利用の方法と基準、他の教育機関との関連強化」についての協議が行なわれ、予期以上の成果を得たのである。これを機に、社会教育的色彩が強く、かつ「誰でも、いつでも、どこでも」を看板とした本校通信教育の姿が、極めて徐々にではあるが普通の高校教育に近付きつつ発展してきたわけである。なお、この年十月に「通信教育に於ける協力校の運営について」（註3）文部省より実験校の指定を受け、翌年三月まで県立匝瑳高校の協力を得ての実験的運営が延べ六回にわたり行なわれたが、未だ機熟さず、幾つかの問題点を提起したにとどまった。

（註3）協力校とは、通信教育の面接指導のために施設・設備・講師等を提供してくれる高等学校のことで、本校への通学が困難な生徒のために設けられ、本校からも若干の教員が講師との連絡や指導のために出張してスクーリングを行なう。協力校以外にも公民館等の施設だけを借用して生徒を集め、教員がこれらを巡回して面接指導を行なう場合もある。

**昭和三十一年度**　卒業を目指しての種々の試みが実施段階に入った年である。すなわち、生徒の修得単位に応じてクラス分け（イロハの三組に分けた）をしたり、できるだけ面接指導の機会を増やすために本校スクーリングだけでなく、銚子・館山等県内数ケ所に定期的に巡回スクーリングに出かけたり、それまで随時行なっていた試験を定期化（年四回、六・九・十二・三月実施）したり、生徒相互間及び教師生徒間の心の結びつきをねらって、初めて合宿スクーリング（於鹿野山神野寺、男二十五名、女十七名参加）（註4）を行なったりしたのである。しかしこの年最大の出来事は、何と言っても最初の卒業生を出したことであろう。いずれも編入学者ではあるが、三名が卒業できたのである。生徒にとっても、職員にとっても、それまでの苦労が大きかっただけに、その喜びもまたひとしおであった。

栗原愛子
牧野實
吉野博弼

（註4）合宿スクーリングは孤独な生徒を勇気づけ、同時に消化しきれない位多かった体育の面接時間を与えるために始められた。内容には各教科の指導も加えられたが間もなく消え、体育とレクリェーションを通して友人作りを第一の目的とするようになった。これに参加した生徒は絶対に脱落しないという伝説ができた程その効果は絶大である。初めは一泊二日男女別で実施したが、三回目から男女一緒で二泊三日に改められ、昭和三十六年度からは参加者の増加に伴なって場所を御殿場市の国立中央青年の家に移し、二百五十名の規模で実施している。

**昭和三十二～三十五年度**　一人でも卒業生を増やすための、一人でも脱落者を減すための、種々の試みが次々に実行され多大の成果をおさめた時期である。新入生がとりつき易いように工夫された教育課程の八つのコース（註5）、少しでも

答え易いように考えられた報告課題や懇切丁寧なガリ版刷りの補助教材、どうすれば魅力がでるか検討された面接指導、生徒の孤独感を和らげるよう努力されたホームルームやクラブ活動の運営等々、職員の奮闘が続いた。これに応え、職員生徒一体となって、その効果をあげた時代である。なお、たまにしか逢うことの出来ない生徒は職員を頼りにし、職員もまた親切丁寧に応待しましたので、相互の関係は他の課程には見られない密接さができていたが、この伝統は今に受け継がれている。

（註5）生徒の好む科目から学習できるように六つのコース（A～F）が用意され、その後准看護婦の高看進学用のGコースと、農業科目を取り入れたHコースが追加された。いずれも標準修業年限を五年間とし、入学時には通信教育に慣れさせるためにごく少ない履修ですむように配慮して編成された。しかし元来通信生の学習時間がまちまちであることから、この教育課程表は極めて柔軟性に富むものとされ、四年に短縮したり六年以上に引伸ばすことも、或いは途中で他のコースに乗り替えることも自由なもので、教育課程は生徒一人々々について考えられるのが通信本来の姿とされているのである。

一方、外部との連絡も依然として通信教育のコースを作ったり、県職員の研修（昭和三十五年度より）や千葉刑務所の受刑者の研修（昭和三十年度より）のお手伝いをしたり、「何でもやってみる」との態度を保持していた。これらのことが認められて、昭和三十四年度には文部省実験学校の指定を再度受けて「通信教育における学習指導の効果的運営について」の研究をし、三十五年三月研究報告書を発表して多大の反響を招き、また三十五・三十六年度にNHK通信高校講座放送研究委嘱校も引き受けるなど、全国に「千葉三高」の名を轟かせたわけである。

ところで昭和三十四年度に宿願かなって通信教育専用校舎の建築国庫補助を受けることが出来、翌三十五年五月に二階建の新校舎が落成した。それまで全日制の図書室の片隅や、逆冷暖房完備の手狭な部屋で我慢してきた通信教育関係者は、二階建（当時学校中で二階があるのはここだけだった）の新独立校舎に移転した。これで本校通信教育部は名実共に基礎造りが終わり、一つの峠を越えたというところである。この校舎新築について、また、通信教育の発展に活躍された秋山主事は昭和三十六年に栄転された。

## 回想

# 三高時代をふりかえって

旧職員（元校長）　諸川芳雄

私が千葉東高に勤務したのは昭和二十四年から三十四年の十年間であった。約四十年間の私の教育生活から顧みると元気一ぱいガムシャラに思う存分働かせて頂いた懐しい思い出の多い時期である。

当時学校は四年制の旧制市立高女から戦後五年制となり、六三制実施とともに新制高校としてスタートを切ったばかり。中一、中二、中三、高一、高二、高三、の名で六個学年併存していた。高三の生徒数は僅かに三十二名、みな懐しい良い生徒であった。

歴代の校長は、初代瀧熊之助先生が昭和十六年から二十年八月の敗戦まで四年間、二代楠原信一先生が二十年八月から二十二年十一月まで二年三ケ月間、教頭の親泊朝晋先生が暫く校長事務取扱いとなり、二十三年四月同先生が三代校長就任、二十四年四月まで一年四ケ月間それぞれ在任された。私が四代校長として二十四年四月から三十四年三月まで丁度十年間勤めさせて頂いた。

私は学校を出てから金沢や愛知の師範学校勤務、愛知では師範付属小学校主事をも兼務、その後ながく東京の専門学校、都立高校の教頭等を歴任、昭和二十四年懇請されて東京から着任した。若くて血気盛んな時であった。

それまでの本校の校舎は市内亥鼻台の三ケ所に分散していてひどい仮校舎であった。

丁度私の着任の一年前に現在の轟町に移転して来たばかり、初めて借家住いから土地つきのマイホームに移り住んだようなものだ。轟町の校舎は旧陸軍の被服倉庫の転用でバラックのお粗末なもの、屋根は黒いトタンぶき、うなぎの寝床のような細長い天井の低い建物が幾棟か列んでおり、窓ガラスは殆んど破れ、床板はボロボロで素足で歩くと怪我をする。夏は熱く冬は寒い。学校の体をなしていなかった。敗戦日本の戦災都市のシンボルである。

当時国内は物心二面ともに荒廃虚脱のみじめな有様で、戦争の爪跡が至る所に露呈されていた。

四月始め私の着任の前日、改築中の木造新校舎第二棟が突風のため倒壊した。着任してみると惨たんたる残骸をさらしていた。着任の第一夜は学校に泊った。戦争末期私が兵隊に引っぱられて大陸で苦しい戦争に参加中に東京の自宅は戦災を受け、家族は外房御宿の小山荘に疎開中、その夜は御宿へ帰れなかったからだと思う。宿直室はない、普通教室をベニヤ板で間仕切りしただけのうす暗い仮宿直室に裸電球が一個ぶら下がり、うす汚ない蒲布が片隅に積み重ねてある。綿がはみ出して真黒に汚れており人間の垢と膏で臭くてテラテラに光っていてうす気味が悪かった。久保田清風先生（現松戸専大附高教頭）と宿直の山口信夫先生（現横浜市内高校長）が夕方までおられたが、二人の先生は構内職員住宅に居住、職員住宅は校舎同様バラックで黒トタン屋根のお粗末なもの、数世帯の職員の仮住居、それで両先生に住宅へ帰ってもらった。たった一人の小使の大川老人は病弱の奥さんのため以前から自宅通勤という特別措置になっていて帰宅してしまった。気がついてみると広い校内に校長の私ただ一人となってしまった。夕食をつくらねばならぬが何がどこにあるやらさっぱりわからない。物置兼用の小使室備え付けの七輪と土鍋で建築工事場からカンナ屑を拾い集め、持参の米を炊き昼間学校で配給を受けた粉醤油をふりかけて食べた。箸は竹切れを庖丁で削って即席につくった。着任第一夜の思い出深き夕食である。まるで過ぎし大陸の野戦そのままだ。

大学時代教練の野外演習で下志津の廠舎に泊った夜の空を思い出す。広い校庭に立って星空を仰ぎながら「このオンボロ校舎を堂々たる立派な高校につくり上げるのは男子の仕事としてやり甲斐のあることだ」と一大勇猛心を振いおこして決意を固めると同時に、一方「何の因果で都落ちまでしてこんな所へ来てしまったのか」と思わず後悔の念さえ覚えたことを正直に告白する。

先生方はみな親切なよい人ばかりで家族的雰囲気に満ちていた。男の先生が少なくて、教頭の有田先生以下、久保田、山崎、安塚、池内、山口、小林熊治、大河原、木島清（現日

本橋女学館教頭）、愛敬、斉藤（正チャンの愛称、現都立高校）の先生方である。服装は国民服、戦闘帽、兵隊靴の人もかなりおられた。女の先生方が数多く、しっかり者の吉田さゆり先生を始めとして、金子、松本、一条、麻生、柴田、中島、篠田、福原、石田、森日出子、西村等の先生方である。戦後の住宅難のため遠距離通勤の先生も多く、又前記職員住宅には、久保田、吉田、佐々木、山口、福原の諸先生方が住んでおられた。生徒の服装も上級生にはまだ戦時色のモンペ姿の者も多かった。そして同じ市内の県立千葉女子高生に対しコンプレックス感を多分に持っていた。

そこで学校経営の基本方針として当面㈠校舎の増改築、㈡職員組織の改善強化と増員、㈢学級増による生徒数の増員と質の向上を心に誓った。校舎の増改築は生徒増により帰結される。もっとも苦心したのは劣等感を解消して、プライドを持たせること。それには生徒の質の向上が必須要件となる。それには多くの職員が全力を傾倒した。先生方の中にも「どうせ市立だから」という自嘲的気分がなかったわけでもない。

私の着任後教頭の有田先生が病弱で休みがち、二学期から長欠になった。事務におられた、森俊雄先生、大森菊野先生も気持のよい親切な好人物であったが、教職から事務へ移られた方で専門の事務職員ではない。私は四十一才の少壮気鋭のつもりで大改善をしようとおめでたく気負っていた。毎日を校長兼教頭兼事務長兼小使の如くキリキリ舞をしていた。今にして思えばドンキホーテだ。御宿の寓居から通勤片道二時間二十分かかる長距離汽車通勤、朝四時に起きて弁当二食分携行、汽車の中で朝食を食べたり食べなかったり、茂原から通勤の山崎一郎先生とは、学校の帰り道、西千葉駅までカケ足で二人でチョコチョコ走ったことを微笑しく思い出す。

二十六年から私は千葉市登戸に公舎を確保して移り住んだ。先生方は戦時中の国民協力体制の気風の名残りでもあろうか、全校家庭的ムードでよろず不自由な中で協力一致されたことは有難い極みであった。

当時の知事は民選初代の川口為之助先生（後参議院議員、英国紳士風の人、故人）、発足したばかりの県教育委員会は、教育長に太田徳蔵氏（現十文字短大事務局長）、千葉市教育長は、本校二代校長の楠原信一先生であり、県教委管理財政課長は、文部省より私と同時着任の白面の青年木田宏氏（現文部省大学学術局長）、私の前任者三代校長で学生時代からの親友親泊朝晋氏が高校係長（後に学務課長、教育次長、病死）であった。千葉市長は、加納金助氏（後参議院議員、故人）、地元県議は宮内三朗氏（後千葉市長）、吉原鉄治氏（今も健在）のお二人が健闘しておられた。

当時米軍の占領政策の一環として全国的に実施された高校再編成統合の問題が起った。西日本ではジョーンズ旋風、ケーンズ旋風と呼ばれ高校の統合が暴力的に強行断行された。九州方面では、普通、男女、商業、工業、農業、水産等の六校が一校に統合させられたケースも多かった。千葉県は米軍の教育担当官がブラウンというまことに穏やかな軍人で高校再編成は旋風化しなかったが、それでも新制高校切替時の生徒減を対象に小規模高校は整理統合されて分校又は分離校舎となった。政治問題でもあった八街、野田の清水、一宮実業長者実業、御宿女、銚子女、望陀農、周准農、小御門農等である。この時千葉市立女子高も解消の危機にさらされたが、禍を転じて福となして県立移管の方向に持ちこんだ。千葉市当局に財政的見地から本校と千葉商業の二校につき県立移管の動向があることが導火線となり、急転直下県立移管が実現

したわけである。

昭和二十五年四月から県立移管、新たに男女共学実施、校名も県立千葉第三高校と改称した。学級増、職員定数増、専門の事務官、出納員が任命され、形式的に稍々学校の体をなしてきた。教頭有田先生は病気休職となり、後任に沢田繁二先生（現千葉高校長）を安房高教諭からスカウトして教頭として来任して頂いた。沢田先生も暫くは館山から長距離通勤を続け、その後市原郡八幡に転居された。

当時は、男女共学の可否論がマスコミ等で盛んに論議された。千葉市でも、千葉一高（現千葉高）、千葉二高（現千葉女子高）ともに共学にふみ切ったものの男女生徒数のアンバランスのため千葉女子高では間もなく男子募集を打ち切った。千葉三高は県庁所在地における共学の実験校として注目され、それだけに施設面、授業面、職員組織面で苦心も多かった。入学志願者の増加と質の向上や、男女生徒のバランス保持には大いに意をそそいだ。二十五年三月入試直後、第一志望、第二志望調整の便法措置が行なわれ、市内四人の公立高校長（滝先生、安田先生、佐久間先生、諸川）の打合せ会で千葉一高受験者の男子を相当数本校へ廻してもらったが、これらの生徒は共学第一回の男子生徒でいずれも優秀であった。共学はその後県下及び全国で定着した。

今日女性の「ウーマンリブ」や、男性の女性化が世相に反映しているが、その原因には社会的諸条件がいろいろと考えられるが、その幾分の一の原因が男女共学にあるのではなかろうかと、ふと思うこともある。県立移管後、校歌、男子の帽章等を制定した。校歌は歌詞を国文学に造詣の深い沢田教頭に委嘱し「シャロンの花」が作られ、歌人兵藤益男先生（当時県立安房高校長、後本校通信教育部講師、明徳高校長）に手を加えて頂いた。曲は音楽の勅使川原先生の母校武蔵野音大の石黒脩三教授に作って頂いた。同時に応援歌も二つ三つ生まれた。共学による男子の女性化を防ぐため体育部長の綱島竹治先生（現敬愛短大教授）とはかり生徒会の組織中に柔道部、剣道部、野球部、ラグビー部等勇壮な男性的クラブを新設した。ラグビーは私が会長であった県高体連の組織に組み入れたが、県下に三校しかなかった。ラグビーは、田中良先生（宮城県教委）指導のもとに剣道とともに屢々県下で優勝した。剣道は、綱島先生、次に佐藤清英先生（現京葉高校長、県剣道連盟理事長）が顧問教師となり、国体には県代表として屢々出場し、田島、永井、湯本、清水、前島、伊藤（君）、本橋等優秀選手を輩出し三高剣道部の黄金時代を作り上げた。

昭和二十六年夏、校庭整地作業を計画し、全校職員、生徒が自発的に夏休みを返上して、ツルハシ、鍬をふるい、リヤカーを引張って流汗淋漓、九月中旬まで二ケ月の勤労奉仕作業によって二百米トラック、野球場、排球コート等を作り上げたことは戦後の放縦な気風からみてほんとうに感激の深い思い出である。

この年十月創立十周年に当り、県立移管にともなう千葉市寄附の小講堂落成式と、新しいグラウンドを使っての十周年記念大運動会とを同時に開催、記念式典を朝野の名士多数列席のもとに挙行した。全校の先生方は「躍進発展途上の学校」をキャッチフレーズにして、市内の他校に追いつき追い抜く闘志闘魂で生徒にぶっかって下さった。その後、年々歳々一学級増或は二学級増を断行、生徒数も千数百人、教職員も百人近くを擁するに至った。施設面もPTAと協力、県より増改築等の予算確保に成功し、理科教室棟、家庭科普通教室棟、

体育館兼講堂、第二棟改築、通信教育棟を逐次完成させた。堂々たる大校に成長した訳である。

昭和二十九年には、県下唯一の通信教育部を新設した。従来千葉一高と、千葉二高に別々に設置されていたものを能率化、合理化の観点から統合して千葉三高に設置せんとするものである。県教委の親泊先生、相川先生（現千葉市立高校長）と三校の校長（岡部、安田先生、諸川）が協議の末、円満裡に統合完了、通信関係の教職員は、全員そのまま両校より千葉三へ身分を移動し、更に内容の整備拡充と教職員の大増員を行なった。秋山利雄氏（現茂原工業高校長）は通信教育のベテラン、主事として新構想を練り、多くの先導的試みを実施、埼玉県、神奈川県とともに千葉三高の通信教育は全国的に指導的役割を果すようになった。私も文部省の教育課程審議会の委員に加わり勤労学徒の定時制通信制教育振興にいささかの貢献をした。当時文部省には、勤労青少年教育の鬼ともいうべき極めて熱心な鮫島文男氏（現鹿児島県教育長　愛称サメチャン）がいてその教育に健闘しておられた。本校通信教育の川添、佐藤（敏）の両先生は十七年間終始此の教育に健闘しておられる。

本校のＰＴＡは終始和気靄靄で学校一体となり、極めて強力且つ協力的で親愛融和の伝統を作りあげた。歴代会長副会長の名を思い出すままに記すと、多田勇先生、大木静子さん、鈴木潤一氏、外川延明氏（現千葉商工会議所専務理事）、小林金市先生（加藤病院長、現県野球協会長、県教育委員）、新城洋治氏（現ニューパークホテル会長）、小笹精一氏（元千葉市助役、故人）、田畑国利氏（田畑百貨店社長、故人）、平山滋春氏、能勢節郎氏、戸川真吾氏（元県農林部長、故人）等の方々は後々まで親交を続け数々の懐しい思い出がある。

多田さんは始め衆議院議員であったが、温厚で謙虚な幅広い人であり、特に平山さんは多年千葉市の名助役として又俳人独木先生として無欲恬淡、人格高潔、真に敬服できる方であった。次々とお子さんが入学され最も長い間会長であられた。親睦のため皆さんの合意でＰＴＡのＯＢ会もつくった。

まことにお恥しいが私は張り切りワンマンの独裁者タイプで今から思えば冷汗三斗の思いである。それを通用させて頂いたことは、先生方やＰＴＡの寛容と温情によることで顧みてまことに慙愧に堪えない。同窓会々長の永江栄さんは第二回卒業生、学校の近くに住み、女性ではあるがおおらかで同窓会のために永い間終始努力を傾倒しておられる。

先生方も積極的な教育熱心な人が多く、勇ましいさむらいや猛者が揃っていた。生徒は先生方に手とり足とり、引張られ、後押しされて伸びていった観がある。私は教育の要諦は教師その人にあり、さまざまの教育論は教師論に帰一するという信念を持っている。近代学校教育の必要条件としての教育環境、施設、設備ももちろん重要ではあるが、それにもまして良教師確保が第一の緊要事である。

従って教職員採用にはがらになく神経質に配慮したつもりだ。そして適格者の栄転、人事の新陳代謝をはかり、絶えず新風の注入をはかった。教育ではマンネリズムが最も恐ろしい。日々伸びる教師にして始めて教師たり得る。学校が若々しいから先生方も溌剌颯爽、活気、迫力に満ち溢れ、それでいて上下融和、ウエットな家庭的雰囲気が充満していた。私は別に酒飲みの先生のみを採用した訳ではなかったが、偶然の結果とはいえ飲んべえが多かった。勇猛にして純情の活気あふれる先生方がエネルギー過剰のほとばしり、活力の発散のはけ口として夜ともなれば千葉の巷に一団となってバイタ

リティーを発散させ、飲み屋でケンケン・ガクガクの教育論を闘わせたようだ。前夜如何に深酒を飲んでも翌朝学校に絶対に一分たりとも遅刻せず、校務遂行、生徒指導については一歩も人にひけをとらないという自負心とほこりを持っていたらしい。色々珍談奇話もある。その勇士の面々は、佐々木鉄太郎（現四街道高校長）、寺田義栄（現金沢市の高校長）、草葉章（現千葉東高教頭）、千田恭一（現鶴舞高教頭）、大河原良知（現千葉商高）、松本貞雄（現教育センター）、木島与左衛門（現千葉高）、久保木千寿（現国府台高葛南分校主事）、菅宮和夫（現原子力情報センター）、岩本層三（現松戸高教頭）、野村松三（現千葉東高）、松葉昭（現成田農商事務長）等の先生方の一団である。リーダー格の佐々木先生は剛毅闊達の熱血漢、人情味の厚い親分タイプ。寺田先生は遠謀熟慮の参謀タイプ。他の先生方は少壮気鋭の青年将校である。愛すべき先生方である。学校での仕事は積極性を競い合い奔馬の如く、私が「それほどまでにしなくてもよい」と手綱で制御する程であった。その一団が登戸の私の家へ酔余夜間来訪、徹宵流飲、教育論を大声で闘わせていた姿を今もなつかしくさまざまと思い出す。それから飲んべいの先生や其の他の先生方を含めて多数の方が管理職になっておられる。千葉三高の教育員出身で現在県内外の高校長に十一人（前記以外に吉田孝一氏・御宿家政高校長、宮本文彦氏・野田高校長）、教頭には約二十人を算し、その他、大学、研究所、県教育庁関係等々須要職場でそれぞれの個性を発揮して活躍しておられる。学究としては、石田誠（東大航空研究所）中村忠久（お茶水大付属・都指導主事、都中学校長）、久坂三郎（現都立高校）、島田良二（現学習院大）、佐藤定義（現昭和女子大）、新谷敏夫（現県教育センター所長）、書道教育に徹底の現千葉東高安塚正一等の先生方を思い出す。まことに頼母しい限りである。

女性の先生では、吉田さゆり先生（愛称皇后陛下）、松本正子先生、一条あき子先生が印象に深い。二十余年間終始変らず教育の権化とも言うべき方々だ。松本先生の夏休み自転車で担任全生徒の自宅訪問による厖大な記録作り、一条先生の毎時間数分間の英語テストの採点等、黙々として名利度外視の縁の下の隠れた教育情熱の徳を大いに讃えたい。

私の校長在勤十年の後半は学校を不在にすること多く、自分から良い校長ではなかったと思う。多年千葉市の校長職を勤めた関係で県校長協会、全国校長協会、県高体連、定通振興会、その他数々の教育団体の役職をおしつけられ寧日なき思い、もうぶっ倒れるかと思ったことも屢々であった。その間県高教組の委員長にも選挙された。非常な激務である。当時は現在と違って教員組合には全校長、教頭も加入しており穏健中正な組合であった。教員給与三本建て（大学・高校・義務制）運動の時は自民党の人事委員長川島正次郎先生や副委員長赤城宗徳先生にも度々陳情に行った。御馳走にもなった。又一方三本建て給与体系に反対の千教組幹部とも度々折衝、凹凸是正の角度から諒解合意の線に達し遂に実現をみるに至った。人事についても山下県教育長に対して校長・教頭・主事の管理職推せんを折衝の上効果的に実現した。県高体連の関係から、県体協副会長に就任、国体に際しては体協会長の柴田知事の代りに県役員選手団の団長として開会式入場行進にも屢々参加、千葉三高の剣道国体選手の奮闘ぶりをまざまざとまぶたにおさめたことも感激深い。

当時毎年県高教組文化部主催で市内高校教師の親善野球試合を開催。教頭の沢田先生は往年の東大野球部の選手、投手

として、打者として縦横の活躍、本校教員チームが毎年優勝した。昭和三十一年六年間の女房役であった沢田先生が栄転され、柏市教育長の寺村紘二先生を後任教頭に迎え、更に昭和三十四年三月末山下教育長の懇請で旧知の畠山一郎先生を千葉女子高校教頭から本校教頭に迎えることに決めた。畠山先生は少壮積極的な世話好きの活動家、前に県教委社会教育課在任時代から本校の教員採用に際して適格者推せんの相談に乗ってもらっていた。三十四年四月私が三高を去ってから校長として石毛貞雄先生が着任、校名も千葉東高と改名、其の後、内藤貫一先生、沢田繁二先生、現在の村田泰次郎先生と歴代校長が相次ぎ、歴史は流れていった。年移り、星変わり、千葉東高の内部も発展と時代の揺れを積み重ねていったようである。沢田先生が校長就任当時しみじみと校長室で私にもらされたことを覚えている。

前述の通り校長の仕事は教育環境の整備と良教師の確保が中心であるが、その教師には人間である以上、長所あり、短所あり、個性もさまざまである。校長が常住学校に居ても居なくても、教師がそれぞれの個性に応じて創意性を発揮し、生徒に対し思う存分教育実践をして頂ければ、まず大いに多とせねばならぬ。パラドックスめく表現だが『教育の自己否定』の論理である。教育の極致は校長不要の学校、教師不要の生徒指導、これが自己否定の考え方である。或はこの考えは誤っているかもしれないが、現在の高校教育は、下手な植木屋の盆栽作りのように、余りにも手を加え刈りこみすぎる傾向がある。教師の創意性はチェックされ、多くの教育法規や規則で画一的形式的にがんじがらめに規制され、細分化され、神経過敏に手入れが行きとどきすぎている。夢多き青少年の野性味や未完成のたくましさの涵養がおろそかにされているのではなかろうか。教育関係の各分野のそれぞれの立場からの一応もっともな意志や筋論が対立的に余りにも強力に打ち出されすぎて却って葛藤を惹起し、教育の大本や本末を誤らせているのではなかろうか。

千葉東高の創立三十周年を心より祝福するとともに、回顧と所懐の一端を述べる次第である。

（現敬愛短大教授）

## 思い出すままに

旧職員（元教諭）　久保田　清　風

創立三十周年をお迎えになったことを先ずもってお祝い申し上げます。三十にして立つの時を迎えたのであります。今後の発展活躍の程をお祈りいたします。

この三十年間は実に我国にとって変転極まりない時代であったことは申すまでもありませんが、この中で育った現在の千葉東高の歴史も又生まれながらにして苦難の道をたどり、今日の隆昌を招いたことは先輩各位の御努力と深く感謝申し上げます。

さて私はこの三十年の中程十二年間お世話になったので、先の二十周年記念誌に回想を申しのべたので今更珍しいこともありませんが、思い出すままに二、三申しのべることにします。

私と東高

私は郷土で教壇に立ったのは東高が最初で、昭和二十三年から三十五年までの十二年間で非常に楽しく勤めさせて頂きました。厚く感謝申し上げます。千葉市がまだ戦災から立ち

上がらぬ住宅難の時で、私らのためにわざわざ校地内に住宅を造って頂き六年間をここに世話になり思い出は格別です。これについては二十周年記念誌に詳しく書いたので省略しますが全く感謝の外ありません。私の東高に対する思い出の最たるものであります。その後たまに訪問しても当時のおもかげが一片もなくなったので本当に淋しいが、東高の発展のあとがしのばれて嬉しくも思います。矢張り私にとって東高は三高時代の思い出が強烈に残ります。しかも創業当時の柵もない校門もないバラック校舎時代がなつかしい。

県立移管について

三十年間は戦前、戦後にわたり、学制改革などあり幾変転もした。校名も千葉市立高等女学校から現在の千葉県立千葉東高等学校へと、又市立から県立にあるいは女子より男女共学へと。

昭和二十四、五年頃は生徒数も減少し他校に合併の噂さえ起こり独立が心配された時もあった。校長以下職員は大いに心配し入学試験の時は生徒獲得に奔走したのも今は夢のような思い出となった。特に大河原、木島先生など直接交渉に当った方は感無量であろう。

早く県に移管せねばとの機運は盛上がり職員生徒一同請願の署名運動をするようになった。諸川校長の獅子奮迅で校運はようやく開け県移管は実現し生徒は増加する。かくして今日の隆盛を見る基礎が築かれたのである。今日の東高の隆昌から見れば当時のピンチは全く夢のようである。

校名思出

三高時代は千葉県では校名に番号を用いておったが何となく順位格付を示すように思われるので学校間で問題になっておった。職員室の雑談の中でもさてどんな校名がよいか議論になることがあった。

しかし名案は中々ない、そのうち諸川校長は「中央高校」がよいと考えて千葉高に話したら先生方は気に入らなかったと申しておった。

教育庁では各地とも東とか南とかつけるようにきまったらしい。従って西千葉近くにあるのに東高となって一寸異様に感じた次第だ。

もっとも東は太陽の昇る方角で前途洋々たる新鋭の学校にはふさわしい名前かとも思い却って祝福したい気持であった。

校章と校歌

女子のみの時はバッジで間に合ったが男女共学になると自然男子用の校章が必要になる。幸いに吉田さゆり先生の弟さんに郵便切手などの図案をなさる方があったので校章の図案を依頼する。精魂こめて作られたのが現在のもので、私の記憶では橄欖の模様化で青年の意気と希望を示すとのことでした。

次に市立時代に校歌があったかどうかさだかではないが、校歌のないのは心のよりどころがないので是非制定しようと、生徒一般に募集したが適切なものがなかったので、時の教頭沢田先生が作詞されたのが現在の校歌である。これでやっと学校らしい内容も整った。多くの校歌は部外の者の作であるのに対し内なる沢田先生の作で誠に意義が深い。

生徒心得の大改正

畠山教頭時代に生徒心得の大改正が行なわれました。終戦後の社会情勢の変化、又は教科課程の改正のため従来のものでは間に合わぬ点が生じたからである。長い間各分担毎に慎重に審議して可成理想的に出来たのである。これが恐らく二、三年前の各学校で起こった生徒心得改正のための騒動の種に

なろうとは神ならぬ身には分らなかった。僅かの時代の変遷の一断面でしょう。

有刺鉄線と堀

葛城台から轟台の現在地に移転したのは広々とした軍用地で将来大発展を期したからである。それまでは附近の市民は自由に使用しておったので学校が移転して来てもすぐには市民も手を引かない。

畑を作ったり、通り抜けは勝手である。最初の間は柵もないので境界もはっきりしないから直更である。甚しいのは校地を馬車が通ることもあった。遂に周囲に有刺鉄線を張り巡らした。すると今まで近道出来たのが不便になった。忽ち針金は切られ一寸も前と変わらぬ、学校ではすぐ修理する。切ったり作ったりの繰返しを何度もやったが駄目であった。そこで今度は内側に深い堀を掘って通れないようにしたがこれも失敗。遂にあきらめて少々開いて通れるようにすると何時の間にか通行人は減って来て遂には校地であることが附近の人々にも徹底するようになった。

学校整備時代の一駒である。

校舎倒壊

如何に戦後とはいっても三高の校舎程粗末なものはなかったと思う。材料は兵舎の廃材で柱は穴だらけで窓ガラスは極端に不自由な時だから破れたら補充は出来ないが初めからない所が多かった。

裏の校舎は全生徒を集めるために三教室連続で使用出来るように中の柱を抜いてあった。ある晩風もないのに倒壊した。小使いさんから連絡があったので行って見ると如何にもふんわりと伏せておる。全く無理のない倒れ方であった。これが諸川校長着任の数日後の出来ごとである。校長の初仕事がこれであるとは全く気の毒千万であった。この倒れた建物を更に柱を短くして再建したから背がひくくて夏は暑くて堪えられない程になった。

稲毛留守業務部

私が赴任して間もない頃と思う。親泊校長と二人で園生小学校へ机や何かの譲受けの下見に出かけた。その結果は大して目星いものは無く譲り受けなかったと思う。これと同じように稲毛の留守業務部に軍隊の使用したロッカーとか机など相当多くの調度品を譲り受けたことがある。これが私の在任中にはまだまだ可成重宝に使われておった。これらの運搬は全く生徒の手によったものであった。今なら交通妨害でそんなことは出来ないし、生徒もそんなには動かないと思う。蟻の行列よろしく運んだものである。生徒も新興の意気に燃えておったから出来たと思う。

（現専修大学松戸高等学校教頭）

## 轟ケ丘酒徒列伝

旧職員（元教諭）　佐々木　鐵太郎

私は昭和二十五年五月より昭和三十五年五月まで、当時の千葉三高にお世話になった者でありますが、固い事は抜きにして、その間において見聞しました愛飲家の先生方のことを思いつくままに書いて見たいと思います。聞き違いもありましょう、記憶違いもある事と思います。その点は御寛容の程を。

私が着任いたしました昭和二十五年に始めて男子生徒が入

って来て男女共学の学校となったのでありますが、それまでは女学校にて、先生方も温厚な方ばかり、酒などというものをお好みになる方は少なかったようであります。その中で校長諸川芳雄先生（現敬愛短大教授）、安塚正一先生（現千葉東教諭）、大河原良知先生（現千葉商教諭）の御三人は中々の飲み手でありました。

諸川先生は当時四十代の若さで、御宅が御宿にあり、交通事情がよくなかった頃の事にて、よく宿直室にお泊りになる事がありまして、我々若手を相手に宝焼酎（清酒は中々手に入りませんでしたし、給料に比して高価でもありましたので、我々の飲み料は専ら宝焼酎でありました。）を痛飲されたものであります。宿直室にゴロ寝した翌朝起きて見ると私のトレパンにブツブツ穴があいている。これは面妖なと見廻すと焼酎のビンがくだけている。議論をして空ビンでトレパンを叩いた結果であると気付きましたが。しかし先生も昭和三十年代にはピタッと酒をおやめになって、ジュース党になられました。

安塚先生はあまり群をなして飲む事はなかったようでありますが、一旦飲むと斗酒なお辞せずと申してもよい程でありました。ヨーロッパでどれ程おのみになりましたか、おききしたいものです。

大河原先生は中々茶目ッ気がありまして、興至りますとトタンにパッと走り出してかくれんぼをする。追っかけてもスッと逃げてつかまらない。酔うと走力のある方でありました。

男子が段々増えて来るようになりましてから、男子の若い先生方が続々とおいでになって、千葉三高の職員室の雰囲気は大いに変わって行きました。昼は議論、夜は酒宴と急に騒々しくなりました。この三月に退職になられた山崎一郎先生（現経済高教諭）、久保田清風教頭代理先生（現専大松戸教頭）、他多くの女子の先生方は何事かと慨嘆された事と思います。二十七年に木島与左衛門先生（現千葉高教諭、熱心な学究にて地理学の論文を多く発表）がおいでになりました。先生は東金高よりの御転任でしたが、噂にては東金市にて木島の名を知らぬ者はなかったとの事であります。着任当初は猫をかぶっておいでしたが、ある日野郎の店（旧千葉駅近くの店、おやじ二人の共同経営、汚ない事とうまい事と飾り気のない事とそして何よりも安い事にて、飲み助の愛する所でありました。）にてバッタリ顔を合わせましてからは、追々と化の皮もはがれまして一番の活躍家になりました。当時の先生のお住いは長生郡でありましたが、常宿は勝浦の三日月旅館、陶然たる夢の中に乗り越しをして終着駅にてやむなく現実に戻る事幾度ぞと申す所でありましょう。

私の事は申しますまい。酒は好きでありますが、弱い飲み手であると他は知らず自分では思って居ります。そこに行きますと二十八年においでになりました草葉章先生（現千葉東教頭）、千田恭一先生（現鶴舞高教頭）はホントの酒豪でありました。千田先生とは職員室にて隣り合せでありましたが、前任校の送別会が何回かあったとの事にて、始めて登校して席につくや否や赤い目をしてグロンサンを取り出して飲んでいます。しかも放課後、今晩どうかと誘いをかけますと待っていましたという始末。相談一決して校門を出ますと後からついてくる人がいる。酒焼けと申しますか、血管の浮出た顔をニコニコさせている。草葉先生です。群は群を呼ぶと申しますか、酒好きはすぐにすべてがわかるものと見えます。草葉先生、千田先生御二人ともどんなに飲みましても乱れない。泰然自若。草葉先生はバリトンにてホレボレとする喉をよく

聞かせてくれました。千田先生は端然たる態度で盃を重ね、どんな酔っぱらいも見事に処理して居られました。草葉先生は絵、千田先生は小説、共に大作を志して居られましたが。同年に参りました岩本層三先生（現松戸高教頭）が我々の仲間になりましたのは一学期の半ばでありましょうか。先生は高校（旧制）は新潟、大学は仙台と青春時代を寒国で過ごされた故でしょうか、豪酒家でありました。剣道四段、議論の果て夜半の道路で組打ち、共に服を泥だらけにした事もありました。電話の好きな方で、お一人で飲まれた時には、五分置きに学校に電話を下さいまして、当直者を悩まされたものであります。

この年には講師でありました菅宮和夫先生（現日本科学技術情報センター調査役）も有望な新人でありまして、酔余私の家の飼犬と縁の下で一夜をあかしたというような事もありました。二学期よりは悪童連中の飲み歩く姿を見る人は見ていた事と思います。と申しても行く先は先の野郎の店級でありました。野郎の店の向いにありました芳梅というのにもよく参りました。焼酎一杯、それに二品程にて百円と申す安直さ、そのような店が主でありました。紅灯の巷などというものには当時は縁がありませんでした。

二十八年の暮に野村松三先生（現千葉東教諭、県下バレーボール界の重鎮）、二十九年になりますと、白銀彦太郎先生（現木更津高教頭）、久保木千寿先生（現国府台高萬南分校主事）、松本貞雄先生（現教育センター副主査）とおいでになりまして、千葉三高には酒臭フンプンたるものがあるようになりました。仕事の疲れをいやすために、或いは議論の後始末をするために飲むのか、飲むために仕事をし、議論をするのか、と飲まない方は批判的に見られたかも知れませんが、とにかくよく仕事をし、よく議論をし、よく飲んだものであります。それと申すのも、諸川校長先生が、県下高校長の中で酒豪として鳴らして居られまして、強将の下に弱卒なしという絶好の口実があったからだと思います。それにしても先生方はホントの先生であった。教育に献身的であったと思っています。余談はさておきまして、野村先生の「花も嵐も」の踊りは唯今にても眼前にまざまざと浮かび上って参ります。お体ににあわぬ中々のファイトの持主でありました。白銀先生は囃の名手でありまして、弘法筆を選ばず、鍋にても洗面器にても石油缶にても見事な演奏をなさいました。いやなさいます。と申すのは去る九月一日に悪童集まりまして秘技を公開して戴いたからであります。

久保木先生は東京から転任しておいでになりましたが、東京にて修業なさいました酒量は大したものにて、それまで酒豪でならして居りました面々も顔色なしと申す有様でありました。新常磐炭坑節が御得意でよく聞かせて戴いたものであります。松本先生は毎日新聞の記者をして居られまして、二十九年十月おいでになりましたが、名にし負う新聞記者の御出身だけに見事な飲みっぷりでありました。久保木、松本両先生とも教え子と結ばれまして幸福な家庭を作って居られます。二十八年においでになりました剣持徹先生（現市立船高教頭）、二十九年においでになりました井下田博先生（現千葉女子教頭）の御二人はいける口ではありませんでしたが、よく仲間に入って居られました。所謂ムードがよかったからではないかと思って居ります。或いは強制もあったのかも知れませんが。また私と同年に参りました松葉昭先生（現鎌ケ谷高事務長）も二十九年頃より仲間にお入りになって短時日の間に長足の進歩をなされました。三十年代に入りまして、

校内における飲酒はまかりならぬという事になりました。悪童は閉口したものであります。幸にして私が校内の一隅に住んで居りましたものですから、そこがたまり場となりましたが、数多くという訳には参りません。勢い外に出る事が多くなりまして、月給日には支払いに四苦八苦するという事も有り勝ちになりました。若い先生方が気楽に安直に若さを発散させる場を設ける事は何としても必要と痛感しますが、如何でありましょうか。

（現四街道高校長）

## 通信教育の想い出

旧職員（元主事）　秋山利雄

高等学校通信教育が三高に統合されたのは、昭和二十九年の四月であった。

昭和二十三年の学制改革の際に、定時制と共に生まれた通信教育は、当時の千葉一高と千葉二高に設置されており、千葉一高は千葉県の南部を、千葉二高は北部を担当地区として活動していた。通信教育というアメリカ生まれの教育方法が一般の人々に理解されず、そのうえ当初実施していた教科が国語、解析1の二科目であり、とてもこれだけで高等学校を卒業することは出来ないのは明白であったが、それでもそれぞれ三百人程度の生徒が在学していた。

昭和二十八年になると、七月に衆議院の文教委員会で高等学校定通教育振興法案が可決され、文部省も通信教育の実施科目を大巾に増加するなど、通信教育のみで高校卒業資格を取得しようという気運がたかまって来た。

昭和二十九年、この年は正月早々から皇居に参賀に集まった群衆が、二重橋前で大混雑を起こして死傷者が出るという事件があり、さらに三月には、第五福竜丸がビキニでアメリカの原爆実験の死の灰をあびるといった物騒な事件が相ついだ年であったが、本県の通信教育にとっては、念願の合併が実現し、実施科目や専任の先生を大巾に増加して、現在の発展の基礎を樹立した年であった。

統合決定、そして移転といっても貧乏世帯同志のことで、書類戸棚一つに事務机一つ、それに事務用品をひとまとめにした風呂敷包といった程度。当時の三高は旧陸軍の倉庫で、木造平屋の鉄板葺といった逆冷暖房の建物であったが、諸川校長先生、沢田教頭先生の心づくしの一部屋を与えられてそこに住みつくことになった。その頃、諸川校長先生は職員会議や生徒朝礼で「発展途上」という言葉を盛んに使用されておられた。この言葉が当時新発足の吾々に好んで愛唱された。

通信教育は通信つまり手紙（レポート）の往復が学習活動の主要な手段であり、毎月定例的に学校から生徒に配布される印刷物は相当の量である。毎月の面接指導（スクーリング）の日程やら学習上の注意事項などざら紙一枚分の原稿が決定すると原紙を切る。輪転印刷機を廻す、紙を折る、封筒に入れる、糊付け、スタンプ押しと、一日がかりの作業である。どうみてもこれが高校教師の仕事かと情なくなる時もある。何のために大学を出たんだとぼやく者も出る。こんな時、誰かが「発展途上」「発展途上」とお題目を唱えると、大笑いの裡に仕事がはかどったものであった。

何しろ平均年令二十六・七才というヤングパワーの集団であったから、教育の機会均等―高等学校教育の拡大―新教育

の開拓者といったパターンの気負いの上に「発展途上」のお題目が相乗作用をして活気に溢れた毎日であったが、失敗もあった。

国家安泰事件というのがある。三高の通信がそろそろ世評に出始めた頃、校門に看板を出そうということになった。バス通りでもあるし、西千葉駅への通勤者にも眼につくようにと、巾一尺二寸、長さ四尺もあろうか、桧の厚板に墨痕鮮やかに「千葉県高等学校・通信教育部」と書いて正門の左側に掲げ、皆で悦に入っていた。ところが旬日を出ないうちに、新参者が本家より大きな表札を掲げるとは何事かとクレームが出る仕末。全員協議の結果、それもそうだなということで、あっさり半分に切りおとし、「通信教育部」と書き改めて恭順の意を表した。残りの板は、将来世帯を持ったら表札にしようということになり、切りこまざいて若い連中に分配した。現在、我家の門にかかっている表札がそれである。

昭和三十年であったか、この年から通信教育のみで高校卒業の免状が貰えることになり、NHKも第二放送で高校通信教育講座を放送するなど、通信教育が全日制・定時制と並んで高等学校教育の枠の中で陽の当る場所に躍り出てくると、世間では社会教育通信教育講座と称して、活花、茶道、習字から時計修理までもと通信教育花盛りの時代となって来た。この頃、法務省では刑務所の受刑者にこれらの社会教育関係の通信教育を受講させる予算措置をしたりして奨励し始めた。当時、千葉刑務所に花崎さんという教育部長がおられ、この人がとてつもなく熱心な人で、是非お宅の通信教育をやらせて貰いたいと話を持ち込んで来られた。定時制と通信教育、青年学級と通信教育、企業内訓練所と通信教育とあらゆる教育機関との連携を推進していた吾々も、全国でも有名な大物ぞろいの千葉刑務所、これにはさてと思案してみたものの、血気にはやる若武者共は、連携して何が悪いかとばかり、素人教育論を振りかざして大ハッスル。花崎さんと二人で校長室と学務課の間を往復すること一ケ月半ばかりするうちに、山下教育長も面白いじゃないかということで、開講式には山下教育長、親泊学務課長、諸川校長ら快く出席、祝辞を述べて下さった。

開講式を終って刑務所の図書室を出てくると、日頃は冗談やら馬鹿話ばかりしていた顔見識りの新聞記者諸君にとりかこまれて、只今から記者会見をしますから質問事項に答えて下さい。と真面目くさって言われた時、脇の下から横腹に汗の玉がスーツと落ちて行ったあの冷たさを今でも忘れることが出来ない。

生徒から提出されるレポートにもいろいろ特徴があった。開封すると机の上に糊がらがこぼれ落ちたり、魚の鱗がついていたり、機械油のしみついているものなど、どれも生活がにじみ出ている。当時は、NHKの通信生向けの番組が少なかったので、教科書を読んでは学習指導書の解説を読み、再び教科書を開いて先に進むといった大変な苦労があった。何とかして高校程度の学力を身につけたい、通信教育でもよいから高校生になりたい、と大きな希望を抱いて入学した生徒の中で、いつしか音沙汰もなく消えて行った者も多かった。その中でもNとKの二人の事は印象が強い。

Nは、内湾H町の漁師である。戦死した父の株をうけついで網仲間に加入していた。朝の三時から出漁して帰れば網の手入れ、勉強があるからと言って自分だけが仲間から抜けることは出来ない。漁場に向かう船のエンジンルームが唯一の勉強部屋である。勉強したい。しかし、母と年下の兄弟の生

活をどうするか。斜陽化する内湾漁業の将来を考えるとき、彼を支えるものは勉強しかなかった。俺は勉強したいんだ、と号泣するNの肩を、組合事務所の裸電球はまたゝきもしないで照らしていた。

Kは、千葉市から汽車で二時間ほど県北の農村に住んでいた。どこかひ弱い体つきであったが、解析1も国語もどのレポートも申し分のないものばかりであり、将来の学習を期待していた。そのうちに、レポート提出が間遠になり、スクーリングも欠席するようになって皆で心配していた。ある日、父親が私の自宅に来訪した。長兄は戦死し、次男は病気で亡くなり、末娘のKに早く養子を迎えて祖先伝来の田畑を守りたいが、こうやって勉強ばかりしていては養子の話も来なくなってしまうから、どうか老夫婦を助けると思って、勉強を止めるよう娘に意見してほしいとの話である。勉強しろと意見したことはあるが、勉強するなというのは古来稀ではあるまいか。とにかく校長と相談して何とかいたしましょう、と言うことでお引き取りを願ったのであるが、何回か父親の気持を解説した手紙を出したが、Kからは何の便りもなかった。その後、同村からくる生徒の話で、Kが女子青年団で活躍していることを聞いた。結婚の挨拶状が来たのはそれから二年ほどしてからであった。

折りにふれて、想い出したようにやってくる彼等の音信によると、Nは対岸の神奈川でトラックの運転手をやっている様子、Kも農家の主婦として、子供達の勉強を見ている由。今度は安心して勉強が出来ます。と書いて来たことがあった。

やがて、諸川校長先生は千葉商業に栄転され、銚子地区スクーリング会場としてお世話頂いていた銚子商業から石毛校長先生が着任され、教頭先生も沢田、寺村、畠山先生と代わられたが、常に通信教育に理解を頂き、全日制の先生方も喜んで添削指導のお手伝いをされ、「三高の通信」は全国的にも名を知られるようになり、文部省やNHKの研究校を引き受けるなど、順風満帆の発展を続けた。

通信教育というのは、生徒が家庭で学習し提出されるレポートを添削指導する方法であるので、先生方は一日中机に向って赤ペンを握るという勤務で、これでは若い連中の健康管理からみて問題であると考えて始めたのが、昼休みの全員テニスであった。何しろ、生れて初めて握る月賦のラケットである。何処へ行くのかボールに聞いてくれとばかりにコートを走り廻る者、前後衛が重なり合って転倒したり、コートは人影なく何処よりか白球の飛び交う珍プレー続出であったが、本人達は結構サッソウとやっているつもりである。余り熱中して雨の日に傘をさしてプレーをしたら、早速テニス部の生徒から苦情が出て平謝りしたこともあった。

校長室の窓から眺めておられた石毛校長先生も我慢し切れず、新しいラケットを振りながら参加申込み、畠山教頭先生も剣道の極意よろしくラケットを振るといった具合で、これに勢いを得た吾々は、隣りの女子高校や刑務所の職員チームに挑戦したり、ついには浦和高校や神奈川県の湘南高校の通信教育まで遠征するなど、相手の迷惑など考えず親善試合と称していたのであるから、いい気なものであった。

今は亡き石毛校長先生は、お見舞に伺ったとき「あの時のテニスは本当に楽しかった」と病床でしみじみ語られた。先生のお声がいまさらのように響いてくる。

千葉三高にお世話になったのは、昭和二十九年から三十六年までのわずか八年間であったが、その間、良き上司とよき同僚諸君に恵まれ、通信教育の草創という又とない仕事を与

えられた私にとって、千葉三高は想い出の宝庫である。
来るべき四十周年、五十周年へと、さらに一層の発展を祈念してやまない次第である。

（現茂原工業高校長）

## 思い出のあれこれ

現職員　青山康子

私が本校事務室に着任しましたのは昭和三十年五月一日、まだ在校生とは年令的にも差を感じない頃でした。早々に運動場で着任の挨拶をさせられどきどきする胸をおさえて真赤になってうつむいておりました。そんな私をかわいそうだと思ったのか当時私の家の近くに住んでおりました三年生が朝など迎えに来てくれました。生徒から受けた最初の暖かい思いやりの心でした。

私にはそれ以前から当時の千葉三高はなつかしい校舎でもありました。それも私の姉が本校の第一回卒業生であった関係から、市立高女時代の恩師である先生方が多くおいでになり、何かにつけて目をかけていただけたことをありがたく思っております。私もなぜか母校に帰って来た様な気持でお仕事をさせていただいております。

なつかしい当時の校舎は、平屋建三棟と管理棟、特別教室と長い廊下づたいにまがりくねっておりました。

事務室には現在の様な校内交換電話もなく、わずかに校長室との間によび出しベルがついているのみでした。先生方は教務室にまとまっておられましたが、校長先生から〝〇〇先生をよんで下さい〟といわれるたびに教務室に走りました。外線電話の呼び出しに時たま特別教室棟まで出掛けますとかなりの時間をとり、長いことお待たせする失礼もございました。おまけに廊下ですれちがった先生から、「えさをたのみます」とお昼の食事の注文をたのまれ、いい調子で室に帰り仕事にとりかかっているうちにすっかり忘れお叱りをうけたこともございました。

通信教育棟の完成する以前は別棟への呼び出しに雨の日など、最短距離をねらって傘をさして出かけますと、その姿が滑稽なのかあちこちの窓から顔が出て来てニヤニヤ笑われる仕末、はずかしくて逃げて帰ったこともあります。校内がいつもなごやかで家庭的な雰囲気がたゞよっていた様です。事務室の先生方も思いやりのある方ばかりで、私もそんな空気の中で夢中ですごして参りました。

先生方も皆お若く、はつらつとしており、時々爆発的な声をよく耳にしました。丁度事務室のありました前に第一棟の教室があり、夏など窓硝子をワクごとはずしたまゝ授業をしておりましたが、必ず後の方で三時間目ぐらいでしょうか、男子生徒が教科書を立てゝ食事をしている姿をよく見かけました。先生方も承知していらっしゃった様で時々みはりをしておりました。そして現場を見つけますとこちらの棟から第一棟に向って「コラッ何をしておる」と大声でどなりつけるのです。その響く声を耳にしますと思わずこちらの胸もひきしまってきりっとしたものです。

管理棟の木造校舎も男子生徒が増加して来た為か廊下はあちこちペコペコして穴があき、私も何度か片足を落してすりむいていました。その度に「ジャィアンツですね」とよく笑われました。現在の衛生看護科実習生が小講堂であった頃も

男子生徒の柔剣道場になっておりました関係で床は毎日の様にぬかれ、応急処置に用務員の栗林さんがトンカチを片手にかけずりまわっていたのを思い出します。

その後体育館兼講堂の落成を始め毎年の様に増改築が続き校舎もみちがえるようにきれいになりました。それに伴い管理・営繕の面でも校長先生を始め先生方の苦労は大変でございました。

又昨年完成いたしました管理棟、今年になって出来上りました新体育館の鉄筋棟をみるにつけ、近代建築のすばらしさと本校の発展に目をみはるばかりでございます。

いつのまにかすぎ去った十六年の歳月、着任いたしましたのもつい昨日のことの様に思えてなりません。血気さかんなはつらつとした生徒達や先生方にささえられて無事にすごさせていただいております。

創立三十周年をむかえ、今後ますます発展されます千葉東高のためにいくらかでもお役に立つことが出来たらと念願いたしております。

（事務室勤務）

## 〝思いつくまゝに〟

卒業生　島田侑児

このたび在学中の思い出を何かと言われ、当時を思い起してみると、卒業して二十年近くなり、時の流れの早いことに驚かされます。

昭和二十五年、田舎の小さな中学校から入学した私には、高校生活そのものが期待と不安で一杯だった。当時、千葉に出るには自転車なら一時間、バスなら停留所まで四十五分ばかり歩き、更にバスに乗り継いで三十分の不便な土地に育った私は、千葉にもめったに来たことはなく、人の話と新聞などで世相を知る程度で、全くの田舎者であった。方言丸出しの言葉遣いでは、会話も思うにまかせず、都会の高校生活に慣れるまではつらい思いだった。それに較べて、市内の中学校出身者は、同じ中学校の仲間が結構来ていて、中学校の延長のような気安さで生活しており、六十名中わずか九名、進学なんて中学校出身者には当初の生活は不気味であった。

おまけに中学校では勤労奉仕作業などが多く、その上、野山を遊びまわっていたゝめ学力の方も御粗末で、特に専門の教師のいなかった英語に至っては発音のみならず、理解力でも全く歯が立たず、入学当初の実力テストで十五点ぐらいしかとれず、先行きどうなるかと心細い限りだった。

そんな私に対し、先生の英語での質問に対し、英語で即答している実力者を見るに及んでは、何もかも投げ出したくなるような気持すらすることもあった。

入学しても上級生が女子で、下級生いびりされる苦労は無かったが、上級生がいやに大きく見え、物心ついた子供が近所のおばさんに話しかける時のようなてれくささと、妙な気おくれがし、中学校は男女共学と言え、教室は全く別で話す機会も少なかったため、全く別世界に飛びこんだ感じで、異様な気持であった。

そんなことから、しばらくたって友人もでき、ようやく高校生活にも慣れて楽しくなった。

当時の学校は諸川校長先生で、県立移管後間もない頃で、男子も加わって来ており、三高の名のもとに新しい高校の体制作りに熱心だった。特に男子の生徒に対する期待も大きか

ったとみえて、校長室に男子生徒を招き、弁当を一諸に食べながら話し合い、独得のシワ枯れ声で熱っぽく私達に語りかけたりし、独得の気迫を感じさせられた。

入学した昭和二十五年は、終戦後の欠乏期から脱してはいたものの、衣食住は必ずしも充分とは言えず、配給になった小麦粉をパン屋に頼んで委託加工してもらうようなことも行なわれていた時で、食い盛りの私達にとってはつらいことだった。パン屋で売出されるパンも午前中に買わねば無くなってしまうので、遅くなる時は弁当だけでは足りず、食糧確保のため休み時間にこっそり、垣根の有刺鉄線を乗越えてスリルを求めるということもやらねばならなかったこともあった。

生徒の服装もバラバラで、適当に個性豊かな色とりどりの姿をしていたし、私は自転車通学であったため、旧日本軍の重い軍靴を履いて通学した時もあり、また下駄で来る者も結構あった。

世の中全体が食って生きることが第一で、学校でも設備も不十分であったため、規則だとか形式に余りやかましくなく、割にゆったりしていた。

現在のように社会が落着き、学校の制度、教育方法でも一応の形ができあがってしまうと、先生でも生徒でも思い切った新味のあることが行なえず、一種のマンネリに落ち入り、行動でも思考でも本質を忘れ末梢に走り、保守的になりやすい。例えば、入試、就職にしても、統計的資料により、個人の性格、能力が判定され、進むべき方向が位置づけられてしまう。その人の努力への情熱や野心的生活を開拓しようとする選択の余地などは全く狭ばめられ、人生への感動は乏しくなり味もなくなる。

しかしそれは安易な生活展開を約束してくれるが、時流に敏感で、生活にダイナミックな新鮮さを求める若者には何かなじまないものがあるのではなかろうか。

そこで、今、当時を思うとそこには、現在は消えかゝってしまっている前述のような人間生活の姿が許される面があったように思う。

当時の東高（三高）は先生がたも一般に若く、生徒の指導には破格の馬力とファイトを発揮されたかたも多かった。

占領軍から禁止されていた柔剣道の復活が認められたのもこの頃で、学校に女子が多いために活気がないということで、スポーツ面ではテコ入れがされていたように思う。沢田先生（現千葉高校長）の作詞された校歌を歌い、全校野球応援に出かけたことなどは、学校全体の意気を盛り上げるのに意義あったように思う。

また、県下では珍しいラグビーが綱島先生によって紹介され、晴雨にかゝわらず行なうスポーツだとかで、雪の中、雨の泥水の中でも実施され、泥人形のようになって運動場を駆けまわったことは忘れられない。クラスでは面白い方が先きで、汚れても濡れても誰も苦情を言わず、タックルの失敗からシャツを切られても苦にならなかった。

学生の団体旅行もできるようになって、二年生で学年全体の三ツ峠登山に行ったことは印象深い。生れてはじめて高山に登ったことでもあって、修学旅行の関西よりも思い出深い。夜行で出発し、懐中電灯を頼りに、薄暗い山の朝の冷気をついて歩いた味は、登山への興味を起させる動機となった。

当時は登山道の整備も悪く、四つ這いになって登る所もあり、今考えると思いきった計画だったなあと思う。

三年間の在学中、大体はクラス担任は佐々木先生（現四街道高校長）であったが、このことも高校生活を思い出を多彩

にしている。

「鉄太郎」という先生の名が示すように意志の強さと、馬力と実行力の点ではクラス全員が団結しても圧倒されるくらいで、年令も三十才の頃かと思う。意気盛んで熱心に指導にあたってくれた。色白で肥っていたゝめ「ホワイトピッグ」のニックネームを生徒からいたゞいたが、口を開いて生徒を指導するときは「ピッグ」どころか「猪」という感じの方がぴったりしていた。

活動的であって、生徒を知るには家庭もというわけか、クラス全員の家庭を訪問し、不便な所へは何キロも歩くことも厭わず驚かされた。また走ることも達者で、その頃は耐寒マラソンを学校から穴川十字路を経て、現在のスポーツセンターまで実施していたが、生徒に混って常に参加し、クラスの生徒が自分より遅れてると、大きな声で気合を入れ私達は恐縮したものである。

一方乗物は余り使わない主義か？　当時、手軽な交通手段であった自転車には全く乗った姿を見せず、生徒の質問には「自転車に乗れないのでなく乗らないのだ」と答え、先生の気質の一面を示していた。

学習面の指導でも熱心で、数学ができないと言っては朝のホームルームで、数学の問題を連日やらせたり、進学のための古典と文法の補習授業を始業前に実施したりしてくれた。そんなファイトであったから、授業中教科書を忘れたり、内職、居眠りなどをすると手厚い指導の手が特に加えられたり、一瞬はっとするような雷が教室にひゞくこともあった。

生徒である私達は、指導に文句を並べるより、先生の人間的な魅力と情熱にひかれる方が強く、卒業まで脱落もせず食いさがっていた。

社会的に過渡期であったせいか、良きにつけ、悪しきにつけ思い出が多く、それをとりとめもなく記した。最近では校舎も改築され、生徒諸君の感じもすっかり当時と変って来ている。最後に新しい時代のイメージの中に東高の発展を願って筆を擱くことにしたい。

（高校第五回　昭和二八年三月卒業）

## 七年間の思い出

卒業生　宍倉史子

現在私は椿森に住んでいる。母校とは目と鼻の先と言っていい。毎日バスを乗りついで、千葉駅を通り勤め先へ通う。旧の千葉駅の前を通っているわけだ。遠い昔、あの古めかしい駅を通って、母校―市立の女学校へ通い出した頃のことをよく思い出す。

色に「みじめ色」というのがあるならば、当時の千葉駅附近は、建物も人々も、そこいら中がこの「みじめ色」一色であった。その中でも、私は又ひときわ貧弱であって、私が今つき合っている子どもたちが、仮に当時のその姿を見るとしたら、おそらくだれでもしばらくは笑いが止まらないか、ちらっと見たらみっともなくて目をそむけるに違いない。靴など殆んど売っていなかった。売っていたとしても、それを買える人はごく限られていたから、みんなが私と五十歩百歩のかっこうであった。

当時、学校は教室が足りず、新入生は四クラス共、千葉高―当時の千葉中のプールわきの校舎と、物置のような土間教

室とが、学習の場であった。相当長い間、そこまで旧の千葉駅から片道三十分もかゝってかよった。もっとも町中であっても、自動車など走っていなかったから、横に広がって悠々と歩いたものだ。千葉中の生徒とは、道で出合ってもすましているようしつけられていたから、ごく一部の人を除いては、表立って言葉を交わすことはなかった。私たちの校舎から、別の校舎へ行く通路に近づくことはタブーであった。まん中に、卓球台がでんとすえてあった。多分ここから先は行ってはいけないということと私たちは解釈していたから、現代の学生が聞いたらずい分とおかしいと思われることだろう。それでもその禁を犯して、中学生とつき合っている女学生がいるのいないのとさわいだものだ。

運動会は、千葉中のグランドを使って広々と出来たし、文化祭もりっぱな講堂を借りてやったことを楽しく思い出す。劇場のように段々になった講堂で、上級生の美しい合唱を聞いたり、劇を見たりした。印象に残っているのは、シューマンの「流浪の民」。同じくらいの女の子で、あんなに独唱がすばらしくできるとは信じられなかったわけだ。名も内容も忘れたが、衣裳をつけてのオペレッタ風のもの、その当時としては夢のように美しいものであった。

自分のことはと言えば、ちょうど二年生で英語クラブに入りたての頃のこと。クラブでは英語劇をすることになっていた。出演メンバーはすでに決まっていて、題は「ドビンカとカティンカ」。まま子が意地悪い母親の言いつけで、冬のさなかいちごとリンゴを探しに行く物語であった。主役の少女は吉田さんという、髪の黒い、色の白い、かわいい人であった。その頃仲よしになり、劇中で歌う子守歌を教わって来てあげたり、私より小さい人であったので、私の小学生の頃着たドレスを貸してあげたりした。あとから知ったが、彼女自身、継母に育てられていたから、身につまされてその役を演じたのだろうか。舞台上の彼女は仕ぐさもかわいく、声もすきとおり、私はほれぼれと見たものだった。ずっと後になって彼女がその悩みから自から命を絶ったと知った時、一時期親友としてつき合っていた私にも、全くと言っていいほどぐちをこぼさなかった彼女の、異常な程のプライドと虚栄心におどろき、相談相手にもなれなかった、たよりない子供の自分が辛く思われたことであった。

彼女の舞台での歌声と、劇中でのセリフ—strawberries and apples—という声さえ、今になっても思い出すほどである。

私自身は、お医者さんごっこの対話劇に出してもらった。借りもののダブダブの服と帽子、赤ちゃんに見たてた人形の脈を数えるone～tenの数、声が小さいからと心配されながらも、いっしょうけんめい張り上げて、聞こえたと言われたときの嬉しさ等々、楽しかった思い出はつきない。

東高のある現在の場所に移ったのは、やはり二年生の時であった。自分達の使う机やいすをやっとの思いで持ち、今の葛城中からはるばると歩きひっこしである。間借りや二部授業ともお別れである。しかし、新しい校舎へと喜こんだ私達の期待に反して、そんな古い柱を利用したもので、いささかがっかりさせられた。その柱と言ったら、古さを新しい薄い板でかこってかくしてあって、窓を閉めてもぴったり閉まらず、上が閉まっても下は二～三センチもあいているといったふうで、冬のすき間風といったらなかった。校庭は現在の整地された広々としたグランドからは想像もつかない荒地で、体育の授業は多く軍隊の建物の跡の土台—コンクリートに鉄

のつのが生えている大きいかたまりを、穴を掘っては倒しこむといった作業がつづいた。体育の先生もさしずめ女学生土方の親分といったところであった。

体育の服装といっても、大方がもんぺ式のお母さん方手製のいろいろな形の、色のズボンでなわとびをやったりした。妙な衣ずれの音がしたり、なわがひっかかったりでやりにくかったことを覚えている。中でも私がいちばん困ったのは運動靴であった。店へ行けば買える時代になってはいたが、私の家の事情がそれを許さなくなっていたからである。ただ一足の靴があるにはあったが、すでに底は大きくひびわれ、役に立たなくなっていた。夜、苦心して丈夫そうな糸で縫い合わせて安心して持って行くのだが、はくとまもなく糸は切れ、底は無残にもぱっくりと口をあけてしまうのだ。そんなことから、私は次第に体育から遠ざかり、もともと上手でないことから、体育はきらいと先生方も認め、自分もそう思いこむようになって行った。

当時の体育祭も、今勤めている中学校のそろった服装、完備した放送設備、かざりつけられた入場門、退場門、色彩豊かな応援席などとは、天と地、白と黒ほどの差があった。

秋になると、文化祭ふうのもよおし物があった。型にはまったものではあったが、それなりにすぐれた人もいて楽しかった。各クラスそれぞれに、劇をし歌をうたった。私たちのクラスでは、激論のすえ、「当世女学生気質」という喜劇をだすことになった。熱心な練習を重ね、オムニバス風のゆかいなものができ上った。当時の女学生としてはめずらしいおもしろおかしさに大かっさいを博した。それまでそんな才能などあるとも思われなかった人の意外な、とぼけた演技力にびっくりしたものだ。又、クラスでいちばん英語の朗読の上手な人が、市内コンテストに優勝した「マッチ売りの少女」を読み、ただただ感心したり、このころがいちばん学校生活を楽しんだように思う。

私たちの中学卒業と共に、東高の前身、千葉高等女学校の最後の入学者は、新しく市立女子高等学校の生徒と衣がえをした。私は家庭の都合で、何人かの同級生といっしょに進学をあきらめ、就職の道をえらんだ。幸い一年後、復学することができた私を待ち受けていたものは、思いもかけない男女共学の教室であって、始め私は全くとまどってしまった。かっての同級生は上級生となったが、考えてみれば二学年にまたがって同級生を持った幸せは、そう多くはないに違いない。

校舎は相変らずのオンボロ、加えてかなり破られていた。しかし、この見るかげもないバラック校舎に、私は強い愛着を持った。現在の新校舎のため、すっかり取り払われた跡をみて、何か昔の夢がこわされたようなさびしさを味わった。このボロ校舎での三年間、私たちはよくけんかをし、よく勉強し、そして泣いたり笑ったりして過した。私のクラスは、男子三十名余に女子がわずか七名程であったから、私たちは男子あつかいをされ、男子は他の女子組の方とけっこう仲よくしているようであった。

この同級生は、当時ナンバースクールによる高校入試制度のため、千葉高（当時一高）、女子高（二高）を希望しながら、不本意にも東高（三高）へ来たという事情もあって、最初意気が上らなかった。劣等感につきまとわれていた人もかなりいたように思う。後にくわしくそのことを知り、又教師になって、そのまちがいに気づいて、当時の先生方のやりにくさ、生徒のやり切れなさを思い返した。その影響は、今になってもそのまま残されていると言ってもよい。彼らは教育

制度改訂の犠牲者と言えるかも知れない。
私が東高で過した六年間、離れていた一年も、心は常に東高にあったから、それを加えての七年間は、私の一生に決定的なみちびきの役を果した。私は東高に長く在学したことを、常に誇りにして来たし、さまざまのぶつかり合いをし、又肉身にも劣らぬ世話をいただいた先生方や友人とめぐり合えたことを幸わせに思う。
その母校も創立三十周年とか、およそ創立以来現在まで、わが母校ほど多くの試錬、変遷を経て来た学校は、他に少ないように私には思える。私も卒業以来、すでに二十年、できることならふたたび若くなって、今度は変化の少ない、平らかな恵まれた中学生活、高校生活を送りたいと思うが、それもかなわない。
（高校第五回　昭和二八年三月卒業）

## 思い出

卒業生　細川義友

私の出た中学は、千葉市の中央から八キロメートルも離れたタヌキやキツネ、野うさぎのでる原っぱの中にあり、文明からは見放された地で（現在は内陸工業地帯）、都会の空気を吸うのは年に一回正月に百円持って映画をみる時だけでした。高校へ進学するのもクラスの六分の一程度で、その何割かが公立高校へという状態でした。それだけに高校に対する期待は大変なもので、中学の後輩に「二ケ月もすると私の態度、考え方は大きく変わるからみていろ」なんて言ったものです。が、在学して期待は言葉使いや態度をみるたびにくずれて下校の時、クラブの勧誘にきた先輩にどっつかれて決定的になりました。それでも生徒会の阿部会長に対する信頼が、三高をみなおすきっかけとなったのです。
先生方は、どこの高校にも負けない程、立派な方達で人間愛を感じさせるものであったと確信しております。校長先生は我々と会話を交える事もほとんどありませんでしたが、お姿を見るだけで存在価値が充分にあったように思われます。又始めての担任は、松本正子先生（東高在職中）で、私が引揚者のためか微に入り、細に入りめんどうをよく見てくれました。クラスでの問題、個人の悩み等、よき道しるべとなってくれました。（過日私の葛城中の教え子が遊びに来て、松本先生の御指導ぶりを聞きましたが、今だに私達に与えたのと同様、教育に対する愛情をそそがれている事に深い感動を覚えたしだいです。）。二、三年の担任は井下田先生で、感情豊かな話の判る優秀な先生でした（現在千葉女子高教頭）。常に理科の研究室におられ、数名の生徒がまわりを囲んでいる状態が目に浮かび、とてもなつかしい限りです。色々の出来事があり、そのたびに先生を青くしたり、赤くしたりしましたが、我々の時には先生と生徒の間に会話がありましたし、又一緒に悩んでもくれました。私の教えた生徒が高校はつまらないと言うのを聞くたびにそんな事はないのだがと思うしだいです。その他、いろいろな先生方にお世話になりながら卒業させていただきました。が、一人一人の先生のお名前を書いて紹介しながら思い出にひたりたいのです。特に思い出に残ったものについて紹介していきたいと思います。

「授業」

その一　先生方の指導には特徴があり、英文の佐々木先生の時間には、先に手を挙げ質問すると、その後の授業でいじ

められないので、先を競って手を挙げたものです。

その二　私の人生上最大の汚点を残した授業があります。それは先輩に借りた英語のアンチョコにより作文の宿題を写して授業に臨んだためですが、アンチョコを写した事がばれる事がまずかったので、指された時その答えはアンチョコを写したのだろうと言われたのを、がんとして認めなかったことが今なお反省させられております。（英語の吉田先生には申しわけないと思うしだいです。）

その三　書道の時間、へへののもへじを一心不乱に書いたのも、安塚先生の冗談にのせられた結果ですが、成績はかんばしくなく40点だったのもなつかしい思い出となりました。

「クラブ」

私が体操部の創設者となったのが高校二年の時です。創設にあたっては、田島、木村両先輩に格別お世話になりました。一つの部が増える事は、他の部の予算が減る事になったのですが、太っ腹の先輩達は心良く体操部を仲間に入れてくれたのです。しかし部と言っても全くひどいもので、鉄棒は鉄管で車輪をするとよくすっとんだものですし、跳馬もなく女子用の飛び箱を四、五メートル離れたところからとび越えたり、器具はまるでなかったので、千葉大に毎日のように通って練習したものです。後輩の体操部員には、沢本君をはじめ、森、斉藤、戸田、都築、沖永君等仲の良い連中ばかりで、心の安まる所でした。千田先生（現在県立鶴舞高校教頭）が体操部の顧問であられた事を知っている人は少ないようですが、名コーチだったのです。少しオツにすまして話をなされるのが気になりましたが。私が関東大会に行った時（たしか大宮だったと思います）、先生がつきそいで来られ、夕食事にビールを一本注文され、その後お銚子を次々に十数本飲んだあげくに又口直しにビールを一本注文され、それも飲みほしてけろっとしていたのには全く驚かされました。

「生徒会」

なぜ生徒会に関係するようになったのか、よく思い出せないのですが、おそらく正義感の強い阿部会長をみたからでしょう。次の会長になった三浦氏は融通のきく行動派の活動家で、皆に好かれていました。次に登場するのが田舎者の私ですが、新入生との対面式であがり、教育会館で、文化祭でこれ又あがり、しどろもどろで何をしゃべったのか判らない状態だった事を忘れる事ができません。それでも副会長の鈴木君、会計の浜島君、書記の尾形さん等の協力により無事に終った事がありがたく思い出されます。この経験により教育者となり、父兄の前、全校生徒の前で話ができるようになったのだと思います。本当に良い経験をさせていただいたと感謝しております。

「最後に」

三高の校風は先輩、後輩の間にある健全な友愛によるつながりを大切にする事であり、師を師としてあおぎ、そのつながりの中に新しい自己の発見、成長を期するものであったような気がします。三高の入学頭初の私のつまずきも、三年間の間に多くの先輩後輩そして先生に接する事で、先記のような境地になった事はなんとすばらしい学校であったかを示す事ではないでしょうか。

良き校風は、良き校長先生、諸先生方と生徒のたゆまぬ努力の結晶です。我々先輩は今後の皆さんに期待します。

（第九回　昭和三十二年三月卒業）

# 思い出

卒業生　小塚興作

母校の創立三十周年をお祝い申しあげます。

この度母校の諸先生方ならびに同窓生諸氏の御尽力により記念誌を発行する事になり、小生に回顧録をとの事でなかなか文章をかくのは苦手なものでして何をもとにする事もなく筆の動くまま当時の思い出を書いてみました。

昭和三十一年の三月、母校の合格発表を見て何故かじーんとしたものでした。何かこう急に背が伸びたような、又これからは高等学校なんだから頑張らなくっちゃなんて気になったものでした。（当時の千葉第三高等学校はまだまだ荒けずりの学校でした）

いよいよ四月、入学式はそれ程の感激があったわけではありませんが、式のあとグランドへ出てびっくりしてしまいました。おじさん達が寄って来て、「おれ達のクラブへ来いよ、いやおれ達の方が面白いぞ」と、その時はまだまだ私はすれていなかったんでしょうね。おじさん達と思ったのは皆上級生だったんですから、こんなことでしたから入学するまでは剣道部にあこがれていたのに、ラグビー部に半分強引的になんとなく入部させられてしまいました。その時はとてもこわいような気がした事をおぼえております。おかげですっかりラグビーに魅せられて今に至っています。

高校時代はクラブ活動と授業の外には考えるものもない位でしたから、授業中は先生の顔色をうかがいながらいねむり、終れば眼はらんらん、放課後となれば掃除も程々にグランドへ、もう入学以来数ケ月ともなればある程度は高校生活にもなれて勉強の方はあまり一生懸命にはやらなかった。けれどクラブ活動、特にラグビーに魅せられて一生懸命だった。とにかく夕方暗くなってボールをみがく時早くレギュラーになって試合に出たいと思って頑張ったっけ。一緒に入部した者と競争だったからなあ……。

当時はグランドも今より石ころが多く全校朝礼のあとよく石拾いをさせられたっけ。私などクラブ活動の時はよくルーズだ、タックルだ、スクラムだと良くころがるので、その分だけ切実に石拾いはやらなければなあと思っていました。それに一年生は一番ころがる率が高かったもので、今でこそ思うがその時はただガムシャラだった。夏の練習は長袖トレパン、冬は反対に半袖、短パン、それというのもユニホームが全員に行き渡らなかったせいもあるのです。生徒会の予算がいくらもなかったのですから……。

ラグビーは十五人だからユニホームにしてもスパイクにしても楽ではなかった。最も他のクラブもそうですが、野球部の弱いのもその辺に一部責任があるのかもしれません。

でも実感としてチームの強い、弱いは部員一人のやる気だと思う。それが証拠にテニス部なんかいつも予算は微々たるものだったけど関東大会入賞、全国大会にも出場。バレー部は男子だけど県大会の優勝などという記録もあるのですから。

又、当時の千葉三高は学舎にふさわしく廻りは今程開けておらず、正門の前の道路にしても砂利道だったし、商店も少なかった。車も少なかったので良く公道を利用して練習したものです。

しかし校舎は立派とは言えませんでした。一番新しかったのが現在の旧体育館だったんですから、となりの経済高校の一部が鉄筋校舎になった時、ちょっと気になったものでした。

だから当時は廊下を歩くにも気を付けて歩くよう注意されたものです。飛んだり跳ねたりすると床が抜けるのではないかと思う程でした。だからこんなに立派になった学校で勉強できる生徒はうらやましいようです。そのせいで書道部の全国優勝も出来たのかな、もちろん安塚先生の功績は偉大ですが、これからもスポーツに勉学に大いに立派な成績を上げてもらいたいものです。

今は海岸が埋立てられ昔が忘れられていきますが、当時はよくクラブ活動の練習で稲毛までかけ足をやりまして、海にあった鳥居のそばの浅間神社で休憩しました。夏休みの練習は黒砂から稲毛まで海水浴客ですごい人出があったものでした。それを横目に大汗かいて練習したものです。浅間神社の石段は足、腰をきたえるには絶好の場所だったのです。今はどうなっているのか……、宅地化が進んでいるのであの松林なんてまだ残っているかどうか……、石段をのぼりきって海をみると広々としたきれいな海、そこでだいたい二、三時間位の訓練をさせられたものです。海に入って水をあびたい事が何度もありました。しかし先輩達は一度も海に入っていいとは言わなかった。泳ぎたいといったら〃お前らはいまつかれているから、海に入ると筋肉がつかれる、練習のない時に泳げ〃といわれたっけ。やっとの思いで学校へ帰りつく。のどがかわき水飲み場へ走る。するとすぐ後を追っかけて先輩の大声、〃水をのむな〃今だからわかるけど、その時は意地のわるい先輩だと思ったりしたものです。少し休むか、休まぬ間にまた練習、入学以来一年間が過ぎて、三年生を送ったあと、私達はなんとか単位をもらい二年生となりました。ラグビー部は三年生が三人しかいなくなり、主力は我々二年生となり部員集めに窮々となるのでした。それに我々が一年生の時は千葉県で優勝以外を知らなかったチームが二年生になると新人戦を始めとして各種の試合にでると負けの試合振り、ラグビーに取りつかれたものにとってこの結果は耐えられないものでした。その結果として我々の自覚の足りない事もありまして、部員が少しずつ減っていったり、なまけ者がでるようになり、不甲斐なさをかこつことになってしまいました。先輩もこんな私達にあいそがつきたのでしょう。一週間に三度が二度、一度になり、ついには一ケ月に一度きてくれるという様な程度になってしまいました。そんなこんなで三年が過ぎラグビー部に席をおく間はついに日の目をみずに終ってしまいました。

話は変りますが、私が二年も二学期の時例年のとおり、生徒会役員の選挙があったのです。生徒会なんて場違いみたいな話ですが、お笑いなさるな、前の生徒会長だった鈴木謙輔先輩から西千葉の駅前でバスを待っている時にどういうはずみか、〃おい！お前生徒会長に立候補しろよ〃なんていわれて、私もおっちょこちょいだから〃いや、私なんてとんでもないそんな柄じゃないから〃といったら〃いや、ラグビーできたえたそのファイトが三高に必要だからやってみろよ〃なんて言われて、謙輔さんの弟さんが私と同じラグビー部でやっていたので、そんなところから私を一寸おだてるつもりがあって言ったのではないでしょうか。とにかく調子に乗って立候補してしまったのです。それというのも二年でクラス替えがあり、その時の二年六組の絶大なご支援があったればこそでしょう。だから今でもクラスメートがなつかしくクラス会というと一生懸命参加しています。おやおや話がそれてしまいましたが、立候補者が全部そろってみたら会長候補は私一人、びっくりしてしまいました。今までの例においては頭

のきれる者が立候補していたのに……。
いよいよ選挙当日、私は家業が花屋だったので、その手伝いを終って登校したが遅刻、投票にはやっと間に合いました。開票結果が大変でした。信任票が当選すれすれだったのです。任命された時生徒会顧問の先生から不信任票の多かった事を十分肝に命じてしっかりやりなさいと言われましたっけ。それからが大変です。何一つやるにしても一つ一つ先生に聞いてからにすれば良いものを、生徒会独自でと思うので殆んど聞かず、あとで予算会議、生徒総会などで顧問の先生に大分ご迷惑をおかけしたようです。なにしろ型破りだったようです。でも素直な気持でごく常識的に考えられるようにやったつもりですが、なにしろ純すいだったもので、自分でいうのも変ですが、今の政治みたいな裏工作なんてことをしなかったものですから、生徒総会が流会になったなんて前代未聞の事らしかったようです。ある顧問の先生に、〃お前が生徒会長になったのが間違いだったんだ〃なんて言われて、私だって申し訳ないと思ったけど、そうはっきりと言われてみると何言ってんだといいたくなりましたよ!!
しかし私は今になって言わせてもらえば当時としては革新的であったかもしれない生徒会運営も義務と責任を果した上で権利を主張すべきだという信念のもとにやった結果だったのです。しかしなかには私のこういうやり方を理解して下さった先生もいらっしゃいました。その先生方のおかげと私を推してくれたクラスメートを始め全校あげての絶大なる支援とで、生徒会長として一年間の任期を無事終えることができたのです。そんなことで三年になってからの私は生徒会の仕事がなにかといそがしく、思うようにラグビーの練習にも出られなかったのですが、なるべく練習に参加するようにしていました。それも最上級生になって一度でいいから県下で有数の戦績を納めておきたいと思ったからです。だから雨の日でも時間があればやりたかった。現実に練習した事もありました。でも先生に注意されて中止なんていう事が度々、だから一年生の部員にとって私はいやな上級生であったろうと思います。
そうそう三年になって新入生の男子全員を体育館（今ではおんぼろになりましたが当時はとても立派な建物だったのです）に集めて〃これは生徒会長として〃と、カツを入れた事がありました。それというのもクラブ活動も一つはやらなければならないという当時の校則みたいなものに基づいて、運動クラブに入る者が少ない実状と合わせ、部員集めも目的の一つにありました。その時の事が当時の一年生男子には印象が強いとみえて今でも時々あの頃の一年生に会うとその話がでて恐縮してしまいます。三年生になって学校側でもスポーツに力を入れるという事になったのか色々なクラス対抗が催されるようになりました。角力、柔道、剣道、テニス、バスケット、その他いろいろありました。その結果は殆んど三年六組の私のクラスが一位でした。最もその頃の三年六組はまとまりのいい事では全校一でしたから、相当いたずらもしまして、学年主任の安塚先生、クラス担任の野村松三先生にはずい分と苦労をおかけしました。そんなクラスから出た生徒会長ですから型破りも当然かもしれませんね。卒業以来十数年未だに、安塚先生、野村先生を始め数多くの先生方に悪名高い方では名を残しています。あの当時の先生方にこの際この紙面をかりて深くおわび申し上げるとともに、厚く御礼申し上げます。文筆には全然自信なく馬鹿丸だしの私です。思い出を書いてくれといわれてもこんな程度しか書けません。

箇条書きに過ぎた様ですが、そこは賢明な読者の皆様、よろしく御判読願いたく文章を終りたいと思います。

終りにあたり今後とも母校がより良く、より大きく発展されます様、又ＯＢ会である同窓会も大きく飛躍されん事を祈り回想録といたします。

（高校第十一回　昭和三十四年三月卒業）

## 病床にあった三高の通信教育

卒業生　渡辺俊雄

今回、記念誌刊行にあたっての原稿依頼を受け、私ももう卒業以来十年余り経ってしまったのかと、歳月の流れの早いことに自分ながら驚いている次第です。

私が東高にご厄介になったのは、三高時代の通信教育部でした。

戦後も遠くなりにけりですが、終戦の翌年より病を得て十数年、その混乱期にますます病状を悪化させ、父母を失い、一人、国立千葉病院に収容され、ベットに呻吟して居りました。

小康を得、中学一年にて放棄せざるを得なかった勉学に、藁でもつかむ思いでとびついたのが、昭和二八年、当時千葉二高での始って間もない通信教育、二十才の時でした。

当時は、まだベットに起き上がることもできなかった時で、秋山先生や川添先生のおかげで、特別病床にて受験させて頂き、解析1の単位を二年がかりで得た時は、なによりの励みになりました。

その後、数度にわたる整形手術で、車椅子での生活の時代から、両脚にギブスを巻いて、やっと松葉杖で歩行できるようになり、始めて三高の校門をくぐりスクーリングに出席できたのは、昭和三一年のことと思います。

学校に行くにはバスに乗らねばなりません。そのバスのステップを昇ることが、曲らぬ脚ではなかなかできません。物差しを持ってその高さを計り、幾度も幾度も練習して、やっと乗れるようになった頃は、全く命がけの思いでした。

その頃、校外スクーリングで手賀沼の古代遺跡の見学がありました。バスの片隅に乗せて頂き、十数年振りで千葉の街を出られて移り行く車窓の景色に、船橋、市川、松戸、柏と、幼き日に住んだ懐しの地と対面した時、その嬉しさに涙の止まらぬ思いでした。日本で始めてできたばかりという団地、光が岡にも立ち寄り、その威容にみんな目を奪われたことも思い出のひとつです。

また、養老渓谷バスハイクの折りには、一人バスに残された私を背負って滝のある広場まで行き、皆と共に弁当を一緒にさせていただいた佐藤先生、そして金谷君。

そのときの写真が機縁になって、幾多の友が胤算的に殖えました。お互いに大小の差こそあれ何かしらのハンデを持つ通教の友は、その共感を呼び、真の心の触れ合いの友として、大きく発展して行きました。

月に一回のスクーリングは、先生方には申しわけない話ですが、授業はともかく、その友達に逢えること、放課後の校外での集り、二次会の方が楽しみの主になってしまいました。

こうして、先生方、学友に囲まれ、励まされ、孤独と両下肢に今なお重度の障害を残している私に、とかく暗くなりがちな病院生活の後半で、生甲斐と活力を与えて呉れた通信教

育、それは切っても切り離せない心の絆とでも言うものでした。

昭和三五年、やっと八十五単位の単位が取れ、八年がかりで卒業した時は二十八才、病も固定し退院して間もない、東京の身体障害者訓練施設にいる時でした。

このように、特殊の事情にあった迷える小羊でも、救い上げて勉学の機会をつくり、学窓を巣立たせ、現に電電公社員として生計を立て、家庭を持っていられる私を思う時、通信教育と言う制度の持つ一つの大きな特色をしみじみ感じるのです。

昭和四三年、私の結婚に当り、在校中はもとより退院の際に行き所のない私を親身になってお世話下さった石川先生に仲人をお願いしました。原さんこと長谷川君を主体とする友人グループの演出の中に、御老体で如何かと思われたその先生のスピーチ、凛々として会場に響き渡った時、かって社会の時間に教壇をたたいて、ハンニバルの象のアルプス越えを講義され、聴く我々を彷彿とさせたありし日の感慨が再び蘇り、生涯忘れ得ぬ強烈な想い出になっている。

終りに、お世話になった諸先生方、学友の皆さん、そして途中意ならず学窓を去って行かねばならなかったかくれた多くの友に、深く感謝申し上げ筆を置きます。

（通信教育第四回　昭和三五年三月卒業）

# 風のような思い出

卒業生　大　木　　進

今こゝに一冊の小ノートがある。これは三十五年三月に私が三高通信教育部を卒業した時に、柏のどんぐり会（学習会）から贈られた祝いの寄せ書集である。通信教育において勉学は勿論有意義であったし、その卒業資格も職業において重要な影響を及ぼしたが、それらに劣らない効用として、人間関係における幅広く且つ深い交流がある。とかく孤独と考えられがちな通教生の人間関係において、私は多くの人と知り合い、暖かい心のふれあいを経験した。通教生の人間関係は全日制と異なり、年令や職業がさまざまなので独特のものがある。私の人生における人間関係において貴重な経験であったと思っているのみならず、その交友は未だに続いている。どんぐり会とはグループ的交流が主であったが、最も思い出が深い。

私が三高通教に編入学（全日制一年修了の資格で）したのは三十三年四月で、一年目は十五単位しか修得できなかった。通算三年で卒業できるということがわかって、二年目はピッチを上げ、三十九単位を修得して、在籍二年で無事卒業することが出来た。私が卒業を急いだのは（それは入学の動機と同じであるが）職業上において学歴の不足を痛感していたからであり、事実、私は卒業を機会に職業上において大きな飛躍をすることが出来た。卒業は急いだものの、通教生同志の交流は長く続けたいので卒業後もいろいろの機会をつくって交流している。

私が卒業した三十五年（三十四年度）が第四回で十一人の

卒業生であった。第一回三人、第二回八人、第三回十三人と合わせて僅か三十五人の卒業生であり、こゝまでが三高通教の第一期といえる。年令も職業も様々であった。ところが第五回からはがらりと変わり、卒業生の人数も一躍倍の二十数名となり、年令も中卒後すぐ入学したストレート組が大半を占めるに至った。その後この傾向はますます強まり、通教の卒業生の数もよくわからない程になった。僅か十数年で寺小屋式教育からマスコミ教育へ変わったと言えるわけで、発展と言えば発展だが、大量生産に伴う一抹のさみしさを覚える人も少なくはないようである。

私は今、東高同窓会及び通教同窓会に関係しているが、通教の同窓会がどのようにして結成されたかについて触れてみる。私が在学中の頃、在校生有志と少数の卒業生による新年会等の親睦会がもたれたが、それが発端となり、卒業生が増えるにつれて、そういう会合は自然同窓会的なものになって行った。その後正式に通教同窓会を結成した。この活動の中心となったのは原直和君、渡辺俊雄君、宮下かつえさん、それに私等である。

通教における人間交流の場として、第一にスクーリングがあり、第二に新年会とか同窓会とかがあるわけだが、もう一つ学習会がある。柏のどんぐり会、東庄学習会、それに私の居た南総町学習会、この三つが当時の主な学習会であった。この三者はよく交歓会をもった。

特に柏へはよく行った。相田和子さんをリーダーとするどんぐり会の人達のほとんどは田中学校の出身なので、会場は田中学校であった。私の卒業直前の二月、雪がちらついた寒い日、田中学校でどんぐり会と南総学習会との交歓会の模様を文化放送で録音したことがあった。この時のことはその寒さと共に皆忘れ得ぬ思い出となっているとよくいう。

どんぐり会は当時女性九人、男性一人のメンバーであったが、皆私より一廻りも若い人達で、まとまりにおいては学習会随一であった。通教生で最も多いのが農業の女性であったが、どんぐり会の人達のほとんどは農家だったので、三高通教の主流派といってよかった。この人達に私は真の通信教育の姿をみたのだ。真剣でしかも通教生活を楽しんでいる。この人達に私は感服した。私の期待通りどんぐり会のほとんどの人（その後にはいった人も加えて）は次々と立派に卒業して行った。そして次々と嫁いで行った。

南総学習会から柏へよく行ったのは私、伊藤洋一君、清水久司君の三人で、その交流ももう学習会の交歓会というよりももっと親密感のあるものであった。相田和子さん宅で新年会をやったこともあった。また交歓会の時など、手作りの料理をご馳走になったこともあった。農業に経験のある伊藤、清水両君など泊りがけで田植を手伝いに行ったこともあった。その交流は未だに続いているが、その後、原直和君、渡辺俊雄君、岩沢政善君等が加わり、その交流もますます多彩になった。二、三年前、相田和子さんの嫁ぎ先である我孫子の自宅で新年会をやったこともあった。残念なのはこの後、まだ二十代の中山一枝さんが急逝してしまったことだ。どんぐり会の中でも特に人なつこかったこの人の死はショックであった。東高同窓会総会の日、末広亭の寄席で連れて来た子供が大人しくしていないので困って後の方で立っていた彼女の姿がなつかしく思い出される。

同窓会とか学習会のメンバーの集りとか、そういう形の会合の他に通教卒業生有志によるフリーな集りも以前から続いている。その中で最も印象深いのが三十七年夏の相模湖キャ

ンプ（二泊三日）である。どんぐり会の人達をはじめ約十一人程のメンバーであった。独身時代最後の思い出として本当に楽しい心の触れ合いを得ることが出来た。

以上、いろいろの集りのことを書いたが、この交流の場に欠かすことが出来ないのが先生方である。同窓会をはじめ多くの会合に先生方はなくてはならぬ登場人物であった。そればかりか、先生を中心とした集りも何回かあった。特に石川先生の引越し先へは必ず現われて、そこで会合を開いたものである。

中途半端に終わってしまった私の高校生活、更には青春を再び甦らせてくれた通教生活……。鹿野山の透明な空気の中に、今は還らぬ時の流れを思い出す。遠く隔てた胸にキャンプファイヤーは何時までも燃えている。

（通信教育第四回　昭和三五年三月卒業）

## 断想

卒業生　長谷川　直　和（旧姓・原）

朝、小雨が降っていたので、私は長靴をはいたまま大原高等学校の地区スクーリングに出掛けた。学校に着くと、小使いさんが出て来た。

小「どちらから。」

原「三高からです。」

小「どうぞこちらへ。」

小使さん何と思ったのか、私の長靴まで持って応接間に案内した。後程聞くところによると、「三高から」と言ったので、どうやら先生と間違えたらしい。お茶が出る、お菓子が出る、スクーリングとは何とすばらしいものかと有頂天になっていると、川添先生が入って来てとうとうばれてしまった。昼過ぎになって、校庭でソフトボール大会が行なわれ、楽しい一日が終ろうとしていた。

今日は生物の試験日だ。登校すると問題が用意されていた。佐藤先生はおられなかったが、七題の問題があった。書き終わるのに二時間以上も掛かってしまったが、出来るだけくわしく解答しておいた。数日たって佐藤先生から通知が届いた。「◎問題の提出をあやまり申しわけありません。◎それにもかかわらず全問題に対しほとんど完全な解答をしており、その努力を認めます。◎雑種強勢（又は雑種強性）のしくみについては未だ判断としない点が多いです……云々」（以上原文のまま）生物としては二度目の一〇〇点だった。七題のうちで五題解答すれば良かったのだが、係りの先生が不在のため全問題を解答してしまったのである。

（通信教育第六回　昭和三七年三月卒業）

## 卒業証書

卒業生　宮　下　かつえ

スタンドの優しき灯気がつけば
学びゆく夜の楽しさに居る

学ぶことは道楽なるかと語りあいつつ
否めぬほどにわれら貧しき

一人の刻うれしと誰にも言い放ち
励みて得たる卒業証書

（通信教育第三回　昭和三四年三月卒業）

# 四、県立千葉東高等学校

## 概　説

### 1　校名の変更

昭和三十六年三月十七日付千葉県報第七四八号で、千葉県学校設置規則の一部を改正する規則が公布され、同年四月一日より、県立高等学校のいくつかが同時に校名変更になり、本校は「千葉県立千葉東高等学校」となった。

それまで本県の県立高校の校名は、たとえば、「千葉第一高等学校」というように、地区によっては、第一、第二という順序をあらわすかのような校名がつけられていた。こういう名称は、学校に序列をつけているようで好もしくないということがしばしばいわれていたが、やっとそれらの校名が改められ、第一、第二という字句は校名から姿を消したわけである。本校は、昭和二十五年四月一日に県立移管になってから十一年の間、「千葉第三高等学校」―通称「三高」―の名で多くの人々から親しまれてきた。一高、二高というのは県内にいくつかあったが、三高というのは県内でたった一校だけのものであったので、卒業生や在校生の中には、その名に強い愛着をもっていた者の多かったのは当然のことであるかもしれない。しかし、現在では「三高」の名は、歴史のかなたに去って、すっかり「東高」になじんでいる。ちなみに、そのときの校名の変わり方をいくつかあげて、県下の様子をみてみると、「千葉第一高等学校」のように、「第一」とついていたのは旧制の中学校であるが、これらは、単に「第一」をはぶいて「千葉高等学校」のようになった。「第二」がついていたのは、旧制の高等女学校で、これらがいろいろな変わり方をした。「千葉女子高」、「木更津東高」、「安房南高」、「茂原高」等という具合に、「第二」のかわりに、「女子」をつけたり「東」、「南」をつけたところもあれば、長生第二高校（旧制の茂原高等女学校）のように茂原高となって、元の名にもどったところもあるわけである。「北」とか「西」は、寒々とした感じがするとか、陽が沈む方角で繁栄隆昌という感じがしないなどということから敬遠され、そのかわり、学校の位置に関係なく、「東」や「南」が用いられている。本校では「第三」をとりのぞいたあとどうするかということで、職員会議でも話し合われた。全く新規に校名を考えるか、あるいは、千葉市も将来もっと大きく発展することであろうから、本校の大発展を願って、「千葉中央高」としてはどうかなどという意見もあったが、結局「千葉東高」ということで落ちついたわけである。

### 2　施設・設備の充実

三六・八・二二　第二棟普通教室四を焼失

この教室は三十四年に、図書館（現柔道場）と一緒に建て

られたもので、当時の本校では、新しい明るい校舎で、一年生の教室に当てられていた。八月二十二日といえば夏休み中勿論火の気はなかったはず。あとでわかったことであるが、原因は、学校教育に反感を持ったある浮浪人の放火ということであった。しかしこの焼け跡には、二階建のモルタル校舎が、翌三十七年の四月にはできあがった。一階は主として生物関係の教室、準備室で、二階は普通教室にあてられた。二階建教室というのは本校ではここだけで、ずいぶんよいのが出来たと、そこへ入る生物の先生や生徒をうらやんだものだが、あとで聞いてみると、大変お粗末な建築で、二階で生徒達がちょっとはねたりすると、一階の天じょうからはパラパラとごみが落ちてくる始末、昼食時などは特に困ったというはなしであった。これが現在の一棟と二棟の谷間にあって、生徒会関係の部室やら掃除用具収納の物置きなどに利用されている。今にも崩れそうな、あのモルタルの建物である。これも近い将来には、違法建築物ということでとり払われる運命にあるとか。

三八・二・二六　校長室、教務室、事務室、保健室拡張工事、小溝堂模様替、宿直室放送室移転工事

生徒の数が年々に増加し、それに従って職員数も多くなってきたため、右のような拡張工事が行われた。放送室も、当時のものは施設・設備ともに非常に粗末なものであったが、係の先生の指導を仰ぎながら十二分の力を発揮して活躍した。学校の放送コンクールでも何回か入賞したほどである。

この年に、天じょうの低い暗い教室全部に蛍光灯がつけられ、雨の日でも何とかがまんのできる明るさになった。

三九・三・一六　生徒急増対策校舎竣工

三高時代から校舎の裏側（北東部）にあった小さな職員住宅（後には生徒の合宿所に使用）がとり払われ、そのあたりに木造二階建六教室ができ上った。便所も、女子更衣室も、それから昇降口もあり、この建物は一年生が主として使用した。しかしこの校舎は、四十二年の終りころにはとりこわされてプール用地となってしまった。いくら急増対策のバラック校舎だとしても、まだまだ使えるもの、土地でもあったら合宿所として残して置きたいものだった。

四一・一二・二八　校門玄関間舗装工事完了

校門から玄関までのでこぼこ道がきれいに舗装され、登下校が非常に楽になった。朝、校門を入ると、道の両側に植えられた小松の緑が、玄関前の大きな松の植込みまで続き、「さあ、きょうも張り切ってやろう！」といった一種の学園らしい雰囲気を使っていてくれるような気がする。これより少し前に、グラウンドが整備され、全校生徒で小石捨いなどという奇妙な行事（？）は解消され、同時に体育時の生徒のけがも激減したということである。

四二・一・二五　新校舎建築第一期工事着工

四三・一・一七　プール建設工事開始

四四・三・一〇　新校舎建築第二期工事着工

四五・九・二　新体育館工事着工

石毛校長は昭和三十七年ころから、校舎の全面改築の希望を県に出しておられたようであるが、具体的に動きはじめたのは四十年度であった。しかしこれも県の都合で、いつになるかは判然としなかった。普通高校のモデルになるようなものを作りたいという石毛先生の指示に従って、各教科その他の関係者たちは一応の平面図を書いて出したが、青写真になるまでには至らなかった。

四十年の八月に国府台高校から代って来られた内藤校長は、千葉東校のオンボロ校舎にはびっくりなさったようである。四十一年度の夏休みには古い校舎のうち一番うしろの第二体育館（武道場）、芸術科、家庭科関係の校舎がとり払われ、四十二年には新年早々にくい打ちが始った。人が歩いてもガタピシひびくほどの古い木造校舎には、ズドンズドン、ガガガ・・・といった鉄筋コンクリート建築の騒音が遠慮会釈もなく入り込み、授業も一時停止ということも何度かあったが教師も生徒も、新しい立派な校舎の一日も早く完成することを願ってがまんしたものである。そしてその年の十一月には全校生徒揃って、新しい校舎に引越した。校舎建築の途中で内藤校長が退職なさったことは非常に残念ではあったが、続いての沢田、村田両校長の下で、プール、特別教室などを含む第一棟、第三棟が次々と建てられ、四十六年三月には大きな体育館兼講堂まで完成した。ここで始めて、千葉東高校の新校舎全面改築が完了したわけである。昭和二十三年、轟の丘に建てられた木造の校舎は、およそ二十年でその跡かたもなくなり、鉄筋四階建のコンクリート校舎にとって代られたが、この今の校舎は一体いつまでここに建っていることになるのであろうか。多分現在ここに学ぶ生徒達のこども、いや孫たちの代になっても、この姿をそのままとどめていることであろう。「僕のひいじいさんも、この学校で勉強したんだってよ。」などという光景を想像してみよう。

## 3　制服その他服装のこと

千葉第三高校の初期に制定された制服は、千葉東高校と校名が変っても、そのまゝ引き続いて用いられた。男子は黒の詰襟服、女子は紺の背広衿ジャケットにジャンパースカート角えりの白ブラウス。しかし遠い明治の昔から、若い学生、特に女学生の服装はその時代時代の流行の影響を無視することができず、スカートの長さが長くなったり短くなったり、靴下やソックスの色が問題になったり、はては髪のふくらませ方やリボンの色や幅にまで、若い乙女たちは神経を使い、一律に定められた服装に対する一種の反抗を試みた者も多い。これに対して教師は服装検査なるものを行って、乱れた服装を正すよう忠告をしたものである。服装については、教師の側にも硬軟両派があり、三十七年ころの職員会議録をみると、或る若い教師は「時代も変ってきているので、制服改定など検討する必要があると思う。帽子についても、生徒を納得させるだけのものがない。」などと発言している。一方、

県下の女子教育の先覚者の定評のあった石毛校長は、「女子高校生の清純美の体現をさしあたっての目標にして、女子の規律指導を徹底したい。」と、女子生徒の生活指導をきびしく行なってほしいというような意向を示された。

三十八年の夏には、上着を脱いだ男子のワイシャツを一定の型のものにしようとか、そのワイシャツの胸に校章をつけさせようとか、登山帽のような略帽をかぶってもよいなどの問題も出たが、これらは生徒にあまり歓迎されず、永続きしなかった。なお、夏になると必ず出る服装の問題に、女子のジャンパースカートがあった。ブラウスの上に背中も胸もあるジャンパースカートでは暑かろう。夏だけ普通のプリーツスカートにするか、あるいは制服のスカートを全面的に変えてしまっては、などということで、これは三高時代から、毎夏出される服装問題であった。そこで、全校の女子生徒を集めて、そのことについて話しあったり、各クラス毎に討論させてみたこともあったが、いつもきまって同じ結論が出てきた。それは「やはりわたしたちはジャンパースカートの方がよい。」ということである。男女共学の教室で、男子と隣り合った場合、薄地のブラウスでは胸のあたりが気になってしまう、というのが大多数の賛成派の言い分であった。衣料事情、経済事情のよくなった最近では、夏季には、薄地の布でスカートを作らせて着用するようになったし、また格好という点からも、ジャンパースカートが好まれるようになって来ているので、スカート改定の問題は立ち消えてしまった。

学校の制服というものは、三高時代くらいまでは、学校に着て行くだけでなく、外出時にはこれを用いるものが多く、教師も「外出する時は制服制帽で」と指導したものである。ところが、東高になったころからこの線がしだいに崩れてきた。帰宅後は、どこへ行くにも制服を着ないで私服で行く。このことは別に本校に限られた現象ではなく、全国的、あるいは世界的な風潮のようである。まず大学生が模範（？）を示した。昔は大学生の象徴だった角帽と黒サージの詰衿服、これをさっさと脱ぎ捨てて背広を着はじめたが、これもしだいに崩れてきて、くたくたのジーパンにズック靴というういういでたちで、ボサボサ髪をふり立ててご登場とあいなったわけである。こうなると、ひとり高校生のみしかつめらしい制服制帽などとはナンセンスとばかり、昭和四十年代になると制服撤廃論を持ち出す高校生も出て来たわけである。しかし、現在 ― 昭和四十六年のこのいま、わが千葉東高では男子も女子も、千葉三高時代の制服をそのまゝ受けついで、毎日愛用しているのである。ただ、登下校の際には、いま流行の長い髪の毛の上に、千葉東高のシンボル ― あの記章のついた黒い帽子をのせた姿は、非常に少なくなってきていることはいなめない事実である。

### 4　卒業生の進路・活動状況

千葉東高になってからの第一回の卒業生は、本校を卒業してやっと十年にしかならず、まだ、特に目立った活動をして

いない者が多いが、そろそろ社会の中堅として、堅実な動きをし、着々と地歩をかためているというところであろう。あと五年ないし十年先が楽しみである。

千葉三高当時は、男生徒の数よりも女生徒の数の方が多かったが、千葉東高となってからは、京葉工業地帯の発展や、団地の造成による人口増等、社会情勢の変化の影響によるためか、次第に男生徒の数が増加し、女生徒の数が減少していきここ三、四年の間は、男女の割合が三対一の比率になっている。卒業後の進路も、就職希望者が徐々に減少し、昭和四十年度以降はその数が百名にみたず、特に四十六年度は、まだ年度途中ではあるが、僅か八名しかいないという結果がでている。これは、裏をかえしていえば、年々進学希望者がふえているということである。男生徒は、百%大学進学希望者とみてよいし、女生徒も、上級学校へ行って、特技を身につけてから就職するという傾向があらわれている。

年度別　大学・短大・各種学校合格者数一覧表

| 年度 | | | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大学合格者数 | 国公立 | 新年 | 1 | 10 | 1 | 16 | 16 | 16 | 18 | 21 | 4 | 12 |
| | | 旧卒 | 7 | 6 | 3 | 5 | 1 | 9 | 8 | 4 | 15 | 10 |
| | 私立 | 新年 | 58 | 63 | 96 | 113 | 147 | 170 | 138 | 107 | 105 | 163 |
| | | 旧卒 | 29 | 50 | 36 | 26 | 30 | 53 | 68 | 113 | 127 | 97 |
| 短期大学 | | | 4 | 16 | 20 | 27 | 42 | 41 | 49 | 33 | 23 | 35 |
| 計 | | | 99 | 145 | 156 | 187 | 236 | 289 | 281 | 278 | 274 | 317 |
| 各種学校 | | | 0 | 5 | 14 | 19 | 32 | 42 | 30 | 24 | 30 | 40 |

## 就職関係

就職については、多難な三高時代にくらべ、東高時代は非常に恵まれている。京葉工業地帯の開発にともなって、新しい工場、そして銀行などが次々に建てられ、若い労働者を求めてきたからである。

昭和三十年代の我が校の生徒数は、女子と男子は大体において半半であり、その女子生徒の過半数は就職を希望した。彼女達の中には、一発で目指す企業に合格できず、数回受験してようやく合格するという例も相当数あったが、それにしても希望者の大多数は一流といわれるところに就職していった。特に昭和四十年代になると、女子の入学者数が激減し、反面求人側は大千葉の発展にともなってますます増えてきたので、就職はよりどりといった形になってきた。これらの就職をして行った卒業生の、その後の活躍振りははっきりつかめていないが、大体において、「東高出身者は、明るくて仕事振りはまじめ、熱心である。」「男女共学のよい面を身につけているので、他の仲間や会社にもすぐになじむ。」という風な評判が企業側から返ってきているようである。

男子の就職者は年々その数が減ってきているが、就職して行った卒業生諸君は、それぞれの職場でよくつとめ、その職場での模範的、中心的人物として活躍している者が多いときく。

就職先を地域別にしらべてみると、そのほとんどが、千葉市およびその周辺と東京である。これは就職した者の大部分が女子であるため、自宅より通勤できることを企業側もまた本人も希望しているということのせいもあるが、一方、これらの地区からの求人だけで、十分にすきな企業をえらぶことができるという地域的な利点と、東高の名声をこれまでに築いてくれた古い先輩達の努力のおかげも見のがせないことがらであろう。年度別就職状況は次のとおりである。

( )内は男子数

| 業　種 | 38年度 13(14) | 41年度 99(33) | 44年度 37(18) | おもな就職先 |
|---|---|---|---|---|
| 金融関係 | 47 (35%) | 17 (17%) | 9 (24%) | 千葉銀行，三井銀行，住友銀行 日本勧業銀行，第一銀行，明治 安田信託銀行，日本生命，明治 生命，千葉信用金庫，富士銀行 など |
| 生産関係 | 39 (29%) | 29 (30%) | 2 ( 5%) | 川鉄，日本建鉄，久保田鉄工， 旭硝子，三井造船， 三井石油化学，日立製作所， 住友化学，丸善石油， キッコーマン醤油等 |
| 商業関係 | 15 (11%) | 12 (12%) | 9 (24%) | 三越，平田倉庫，三井物産， 三菱商事，大丸，千葉日産， 千葉トヨタ，野村貿易， 三菱地所等 |
| 運輸通信 | 16 (12%) | 11 (11%) | 3 ( 8%) | 京成電鉄，千葉鉄道管理局， 電々公社，東海汽船，全日空 日本航空等 |
| 官公庁 | 8 ( 6%) | 9 ( 9%) | 2 ( 5%) | 千葉県庁，千葉市役所，郵政省 運輸省，外務省，日本海事検定 協会，市川市役所等， 船橋市役所等 |
| サービスその他 | 7 ( 6%) | 21 (21%) | 12 (33%) | 東京電力，ホテル・オークラ， ホテル・パシフイツク，東京， 日本交通公社，近畿日本ツーリスト等 |

## 5　生徒会活動

千葉東高時代の生徒会活動の中で、最も大きな話題は、生徒心得第九条―集会および掲示は、事前にホームルーム担任または顧問教師をへて、校長の許可をうける―に関連した一連の動きである。折角、生徒達の自主的な活動の場として生徒会活動が認められていながら、昭和四十年を過ぎる頃からしだいに、生徒自身が生徒会活動に無関心の風潮を示し始め、それがだんだんと深刻になって、昭和四十五年からは、生徒会本部役員への立候補者がいないため、役員選挙も満足に行なえなくなり、前の役員の任期が切れると、本部役員不在という誠に憂慮される状態がいつもおこっている。しかし、予算の編成、東雲祭（文化祭）などが近づくと、必要やむを得ないということで、何とか役員選挙ができるという奇妙な現象を呈している。この間、昭和四十三年度から四十四年度にかけては、「集会、掲示等の自由」を標して、生徒心得第九条の改正とか撤廃が問題になり、何度も生徒総会を開いて（四十二年度までは、特に問題もなく、生徒総会は定例に年二回開催することで済んでいた。）話し合いがなされた。

昭和四十三年度から、高校生の三無主義―無気力・無関心無責任―とか、高校の予備校化などということが、生徒間の話題になりはじめた。また、男女交際について、男女共学の長所・短所について等の題で、討論会をひらくようになり、そのうちに、なんでもよいから話し合おうということで集まったり、生徒心得第九条についての討論会もひらかれるようになった。これらの討論会に集まる生徒は、いつも大体一定した顔ぶれであることが多かった。討論会をもつということは、このころになってはやり出したことである。

話が前後するが、ここで、生徒心得第九条に関連して起こった主な事項を日をおって記してみよう。

四四・三・一九（水）生徒総会（議題―新生活運動について千葉高との定期戦について、その他）定足数に満たず流会。集まった者のうちの有志（約四十名）による討論会をひらく。議題は、「集会、掲示の自由」、「生徒心得の改訂」。はじめて「生徒心得第九条」の問題が表面化した。

三・二〇（木）前日の討論会のことが新聞に出る。

四・一九（土）千葉市本町公園において高校生約六十名が、教育長通達（註1）に抗議する集会をひらき、デモをした。千葉市内で高校生が集団でデモを行なったのはこれが初めてであり、しかも、ヘルメット、覆面姿（十名で、千葉東高生と自称）も初めてである。

五・　一（木）定例生徒総会。生徒会費の決算報告承認されず、このため新年度予算の審議もできず、総会はやりなおしになる。

五・　九（金）生徒総会。決算、予算ともに承認された。予定された議題にはなかったが、動議―生徒心得第九条の廃止しが出された。学校新聞の原稿がなおされたこと、詩、（澤田繁二元校長）の「思い出すこども」に全文引用されている）が掲示できなかったこと等を例に出して提案理由を説明する。

五・一五（木）「学校封鎖」という情報が流され、不寝番をおいて警戒する。何事もなく無事。

五・二二（木）二・三年、学年集会。学校側から、新聞原稿のこと、詩のこと等について説明質問に答える。

五・二三（金）一年、学年集会。入学する以前に起きたことであるが、二・三年生にしたのと同様の説明をし、質問に答える。

六・二五（水）生徒総会。「生徒全員参加による（全校生徒が集まれるだけの施設がないので、生徒総会は、各クラス半数出席の代議員制をとっていい都合で）、校長をまじえた集会を六月中にひらくことを要求する。この集会で、生徒心得第九条に関する決議がなされたときは、それを強く学校側に要求する。」と決議する。（本部役員の任期が六月三十日までであるので、任期中にはっきり解決してしまいたいという役員の意向であったが、村田校長が病気のため、集会は九月になってからもたれた。）

七・中旬　新本部役員によりアンケート（集計の発表は九月ははじめ）をとる。主なところは左記のとおり。

生徒心得第九条について

① 関心

| な　し | あ　り | |
|---|---|---|
| 97 | 222 | 1年 |
| 79 | 271 | 2年 |
| 73 | 219 | 3年 |
| 249 | 712 | 計 |

② 自分の考え

| もっていない | 迷っている | まとまっている | |
|---|---|---|---|
| 37 | 112 | 168 | 1年 |
| 49 | 125 | 177 | 2年 |
| 39 | 59 | 186 | 3年 |
| 125 | 296 | 531 | 計 |

九・　一（月）「始業式粉砕・安保反対・教育長通達反対」と叫んで、反戦高協の生徒十名が運道場に侵入。直ちに正門から追い出す。

九・上旬　生徒会本部は学校に対する生徒の質問事項をまとめた。これは六月二十五日の生徒総会の決議にもとづくものである。

九・二六（金）生徒総会（全員参加）前記質問事項に対し、村田校長は遂条丁寧に回答をしたが、回答の途中でさらに質問が出たりして、時間切れのため、準備された質問全部には答えきれなかった。（註2）

九・三〇（火）学校の一部（第二棟の四階西側半分と屋上）封鎖さる。午前四時頃より封鎖し正午ころ自主解除。二・三年生集会。臨時休業。（註3）

一〇・　一（水）二・三年、学年集会。放課後、全校集会。

一〇・　四（土）東雲祭第一日。

一〇・　五（日）東雲祭第二日。校庭での集会を要求す。他校生もこれに応援したが、集会を持たせず。

一〇・一六（木）生徒総会（全員参加）生徒心得第九条について討論。参考までに選挙によって下記のような資料をとった。

生徒心得第九条について

| | |
|---|---|
| 現状維持 | 三七二 |
| 現状に不満 | 四二五 |
| 計 | 九八四 |
| 中立 | 一六七 |

「クラス討論、従割り集会をもった上で総会をひらく」ということでこの日は終り。

十一・　一（土）生徒心得第九条についての「本部案（本部への届出制とする）」が示された。

十一・一〇（月）「生徒心得第九条の問題について」と題する文書を、ＰＴＡ会長名で、保護者にあてて郵送す。（註4）

十一・一三（木）ホームルームより出された質問事項について、校長と生徒会本部役員との話し合いがもたれる。

十二・　二（火）「生徒心得第九条運営要領」を職員会議で決定する。（註5）

十二・一八（木）評議員・中央委員会　会議「生徒心得第九条の問題に関して生徒総会をもつかもたないか」各ルームの状況を調査する。結果は次表のとおり。

十二・二四（水）総会本部役員が「生徒心得第九条運営要領」「第九条に関する生徒総会について」についてのアンケート集計する。結果は左記のとおり。

「第九条に関する生徒総会について」

| | 必要あり | 必要なし | 棄権 |
|---|---|---|---|
| 1年 | 621 | 255 | 376 |
| 年 | 153 | 158 | 311 |
| 3年 | 55 | 306 | 361 |
| 計 | 329 | 719 | 1048 |

「必要なし」の理由

| | 時期的にあわただしい | 十分に討議されてない | 必要なしと認める | その他 |
|---|---|---|---|---|
| 1年 | 33 | 57 | 78 | 15 |
| 2年 | 18 | 31 | 70 | 28 |
| 3年 | 20 | 12 | 53 | 9 |
| 計 | 71 | 100 | 201 | 52 |

「生徒心得第九条運営要領」について

| | 良い | 一部改正 | 悪い | その他 |
|---|---|---|---|---|
| 1年 | 178 | 56 | 19 | 31 |
| 2年 | 145 | 72 | 41 | 33 |
| 3年 | 93 | 20 | 11 | 13 |
| 計 | 416 | 148 | 71 | 77 |

「その他」の主な意見は、「撤廃」である。

生徒心得第九条に関連して起った事柄の概略は、大体以上のとおりである。本部役員は任期が十二月三十一日までであるが、七月に役員になってから半年の間、前任の役員からの申し送りをうけてこの問題に正面からとりくみ、精神的な面での苦労は非常なものであったと思われる。一部に反対の意見もあって、全校が完全に一つの考えに統一されたわけではないが、生徒心得第九条については、どうやら生徒自身が結論を出したようである。

註1.

教指第五八八号
昭和四十四年四月十一日

各地方出張所長殿
各市教育委員会教育長殿
県立高等学校長殿

千葉県教育委員会教育長

高等学校生徒指導の充実強化について（通達）

学校教育における政治的中立性の確保については、憲法、教育基本法等の諸法規に示されているとおりであって、教育が外部の不当な勢力によって乱され、学校の秩序と正常な教育機能が阻害されることは許されない。

また、法律の定める学校の教職員は、全体の奉仕者であって、特定の思想的立場から、判断力の未熟な生徒を不当な行動に巻き込むことがあってはならない。

最近、大学紛争等にみられる一連の過激な学生運動に刺激され、高等学校生徒の一部に政治的活動を目的とする組織の結成やデモ等に参加する事例が発生し、また本県においても去る三月三十日、県内公立中学校の卒業生が、同校卒業学年担任教師宅を訪問する途次、東京国際空港事業阻止反対集会場附近を通行したため、あたかも中学校生徒が反対集会やデモ等に参加したかのごとく報道され、社会的な誤解を招いたことがあった。

各学校においては、この際、高等学校生徒指導のあり方について認識を新たにし、公教育の使命と重要性をいっそう自覚し、不測の事態が生ずることのないよう全職員あげて共通理解を深め、いっそう指導の徹底を期せられたい。

記

一、各学校においては、校長を中心とした生徒指導体制を確立し、全職員が一致協力して、平素の生徒指導の充実を図ること。

二、生徒指導は、すべての教育活動の中で行なわれるようにすること。特に教科学習の指導の中に生徒指導の機能を生かし、全職員が生徒に対し、人間的接触を深め、家庭との

連絡をいっそう密にし、その環境、性格、心情等についての理解に基づき、生徒ひとりひとりに対して愛情と責任をもって接し、思いやりのある指導を進めること。

三、平素の教育において、生徒の政治的関心を無視したり、放任したり、いたずらに抑圧したりすることなく、機会をとらえて、政治的教養を高め、公民的資質の育成に努めること。

四、生徒が政治的行動、集会等に参加することは、社会的経験に乏しく判断力も未熟な点等から考えて望ましくなくまた不測の事故等を起こすことも予測されるので、生徒の本分は、あくまで学業に専念し、将来社会人としての基礎をつちかうことにあることを徹底指導すること。

五、全職員あげて生徒指導の徹底を期するにもかゝわらず、万一指導方針に反する事例の生じた場合は、校長は適正な方法により、生徒の反省、自覚を促し、厳正な態度をもって臨むこと。

六、学校は生徒指導上、特に重要と思われる事項等については、機を失せず県教育委員会に連絡して指示を求めること。

## 質問事項に対する校長の解答要約

(1) 九条の具体的内容（問題点を明らかに）と何を基準にして問題のポスターやビラ等を許可しないのでしょうか。またそれらは本当に第九条にある通り校長先生の許可を受けているのでしょうか。

解答 学校教育の一貫として学校生活の目的にかなっていれば許可する。運営上、校長がやる場合と校長ができない時に校長代行がやる場合があるが、どんなものに関しても責任は校長にあるので除くわけにはいかない。

(2) 校長先生は絶対心得第九条を変えないといったのになお我々に話し合わせるのはなぜか。また先生方の中にはくい違いがあり生徒会の顧問の先生は「要望があれば変えることもある。」とおっしゃり又ある新聞に教育委員会談話として「心得は絶対に変える事が出来ない。」とあった。一体どれが本当なのか。

解答 HRとは学校生活の基盤であり生徒会の母体であり正しい世論の生まれる場所であってほしいと考えるものであるのでHRごとに話し合いをしてもらいそこで共通の理解を全校生徒に求めた。顧問の立場としては当然の答弁であり基本的には校長となんらかわる所はない。校長の責任において学校の管理を行なっているのであるから生徒心得に関して教育委員会と関係はない。

(3) 九条について職員会議でどんな意見がでたのですか。

解答 現在のままでよいという共通理解ができている。

(4) 校長先生個人としては第九条をどう思っているのか変える意志があるのですか。

解答 第九条は全校生徒の教育上重要なもので全校生徒の幸

不幸にかかわる問題であるので、みんなによく考えてもらわねばならない。九条の内容は決して禁止しているのではなく望ましいものは進んで許可するものである。学校における掲示物の位置は教育上の効果をねらった方法の一つでありたとえそれが生徒のものであっても教育活動の一貫であるので校長が責任をとらねばならない。例えば誤字があれば直し、考えが足りないものは訂正するのが教師の任務であり学校生活の正しい充実と発展のために先生と生徒が協力していかねばならない。又生徒もそれを望んでいると思う。仮に第九条を改正又は撤廃したならば広島県の某学校の前例のように学校の政治的中立秩序を保つ事が不可能になるので東高が教育の場であるという事を放棄すると同じ事になり校長としてその様な無責任な事はできない。

(5) 生徒心得の決定までの経過をはっきりしてもらいたい

解答　校長が職員にはかり決める性質のものである。

(6) 生徒会則と心得の相違は

解答　会則は運営上つくられたものであり心得は一般的に生徒の成長と発展のために集団生活のルールとして作られたものである。

(7) 生徒側で最終的に改正及び撤廃にまとまった時どんな態度を示しますか。又、保留権の期日等具体的にしてほしい。

解答　仮にそうなったとしても全校生徒に重ねて協力してくれる様にお願いするしかない。保留権は内容によって違い又決められるべきものではない。

(8) 現在の校内の状態をどう思っているのですか。

解答　校長として苦しんでいる。信頼と協力とによって、努力して行きたいと思っている。

(9) 何故高校生が政治運動に参加してはいけないのか、又運動をしている人が退学したとかしないとかうわさがありますが事実はどうなのですか。

解答　特定の政治目的を達しようとする排他的な集会や行動になったり責任者や組織が不明確であり、参加する者の身心に危害の及ぶものがあるので、個人的な事を校長の口から全校生徒に発表する事はできない。

(10) 心得第九条と第一条は矛盾しているのではないでしょうか。又生徒の自治的活動をどう思っているのでしょうか。

解答　第一条で政治的精神をうたってあるが自治的精神とは諸問題を民主的なルールに基づいて解決する事である。生徒の自治的活動を助長する場合教師の適切な援助がいるので第九条と矛盾はない。

(11) 校長先生は自分自身の意志で（物事を考えていらっしゃるのでしょうか。うごいていら）

解答　自分自身の考えで行動している。

(12) 校長先生のおっしゃられる社会に役だつ人間とは具体的にいってどのような人の事をいうのでしょうか。

解答　(1) 真理と正義を愛する人間

(2) 個人の価値を尊ぶ人間
(3) 勤労と責任を重んずる人間
(4) 自主的精神にとんだ人間
(5) 身体精神共に健康な人間

註3.

昭和四十四年九月三十日付某紙夕刊に、「千葉東高を封鎖」という見出しで、次のとおりの記事が出た。

三十日午前四時ごろ、千葉県立千葉東高校（千葉市轟町一の一八、村田泰次郎校長、生徒千二百九十人）で、白ヘルメットをかぶった全学連スタイルの同高校生約十人が突然、一団となって同校新館（四階建て、普通教室二十七、特別教室五）に押しかけ、無人の同校舎の一部を、中にあった机やイス、シャッターなどでバリケード封鎖、中に立てこもった。

学校側は直ちに全職員を集めて緊急職員会議を開き、対策を協議したが、新館封鎖で授業がほとんどできないため、とりあえず三十日と一日の両日を臨時休校とすることを決める一方、村田校長が登校してきた生徒を同校体育館に集め、事情を説明し二日間の授業を中止する旨を伝えた。

封鎖の原因は、同校の生徒心得の修正問題。生徒たちが学校の掲示板に文書を掲示する場合は学校の許可が必要だが、これを届け出制に改めよというのが生徒側の要求。さる三月から紛争が続き、四月中旬に行なわれた千葉県下の高校生デモに同校生数人が参加、さらに、その後、高校生の政治活動を禁止する県教育長通達が出されたのに反発、五月中旬にも同高校の反代々木セクトのシンパ数人が校舎封鎖の動きをみせていた。

封鎖生徒は、新館の四階西側四教室に立てこもり、屋上に「千葉県高校生安保闘争委員会」と「千葉県反戦高校生協議会」の二本の旗を立てている。「高安委」の旗は、さる二十八日、成田市で行なわれた空港反対デモの際、赤軍派が持っていたのと同じ旗で、成田デモ参加者が、封鎖生徒の中にかなりまじっているらしい。

この朝午前六時過ぎ、校長、教員ら学校側十人が自力で封鎖解除を図ったが、生徒たちは屋上からジュースビンや石、机イスなどを投げて〃応戦〃。危険なので解除をあきらめ引き揚げた。

以上が記事の全文である。この記事の中に、封鎖をした生徒が、本校生のように書かれているが、何処の誰であるか確めることはできなかった。他府県でも、大学、高校がいくつか封鎖されたが、いわゆる「外人部隊」と称して、本校生よりもむしろ他校生の方の人数が多い状況であった。また、他校の例では、封鎖は何日にもわたるので、本校ではとりあえず二日間の臨時休校をきめたが、実際には、その日の昼頃、すきをみて封鎖生徒が逃げてしまったので、臨時休校は封鎖のあった当日一日だけであった。

## 生徒心得第九条の問題について

昨今の憂慮すべき紛争を起こしている名大学高校では、それぞれの問題解決に苦心しているようですが、それらの問題はある意味で共通した性格があるようです。

千葉東高等学校では、とくに生徒心得第九条のことがとり上げられ、ホームルーム、学年集会、生徒総会等で審議を尽して来ましたので、これらの事情について、ＰＴＡの皆様にもその内容をお伝えし、皆様のご理解をいただきたく存じます。

### ◎　生徒心得第九条とは

集会および掲示は、事前にホームルーム担任または顧問教師をへて、校長の許可をうける。

このことについて、生徒の一部から撤廃または改正を主張する動きが出ましたので、職員会議ならびに生徒総会において慎重に検討が加えられました。その結果、職員相互の共通理解のもとに、生徒会役員と話し合って、学校長が、生徒総会の席上において、生徒の質問に応じて、その取り扱いを説明いたしました。

### ◎　生徒質問事項

ア、第九条の具体的内容
イ、その運営の方法と許可の基準
ウ、学校の姿勢と今後の方針
エ、第九条に関連して高校生の政治活動についての校長の見解等

### ◎　校長の解答

ア、生徒心得は、本校教育の目的を達成するためにつくられている集団生活のルールであるから、この学校の生徒として入学をして来た者は、進んで自主的に従うべきものである。

望ましい集会ならびに掲示については拘束するものではない。教育的にみて生徒の成長発達を促進するものであれば、むしろ進んで許可するものである。

イ、運営上は、校長または校長の代行者が許可するものであるが、その責任は校長がとる。許可の基準は学校教育の一環として学校生活の目的にかなっていれば許可する。

ウ、学校における集会ならびに掲示の意義は、教育上の効果をねらったひとつの教育方法であるから、当然、学校の教育活動の一環であって、いかなる場合も、校長は管理者として全責任を負わねばならない。

従って、学校が教育的責任から、その目的にしたがって検討することは当然のことである。つまり、一応眼を通しておくということは、校長またはその代行者がその任務の遂行上必要なことであり、生徒諸君もそれを望ん

でいるはずである。例えば間違った字があれば、それを放任しておくことはできない。考え方の足らない場合には、それを補い、学校生活の正しい充実発展のために、先生と生徒は常に協力していくべきものと考える。

学校生活においては、教師は生徒に対して、直接間接に指導の責任がある。もし九条を撤廃または改正をした場合、東高の生徒諸君ひとりひとりにどれだけ利益があるか。現段階では誰がそれを保証できるか。それは、恐らく本校が教育の場であることを放棄するのと同じ結果になってしまうと私は確信する。

某校では、集会や掲示の許可制を届出制にした結果、学校の政治的中立を確保し、学校生活の秩序を維持していくことが、できなくなったという実例がある。

繰り返して言うが、千葉東高で九条を、改正か撤廃したらどうなるか。どう考えても学校にとっては、マイナスになることだと判断されること、否、大変なことになると、判断されること。それを敢えてやるというような無責任なことは、とうてい私にはやれない。

先般来、学校の基本方針として、撤廃や改正ができるものではないということを、はっきり言っておきながら、今日までホームルームでよく話しあい、学年集会から生徒総会と敢えて時間をかけてやって来たのは、全校一、三〇〇人の本心に訴えて、ひとり残らずの人に、良識をもってよく考えてもらい、理解と協力をしてもらわねばならない本校教育上の重大問題であったからである。

エ、高校生が、特定の政治目的を実現しようとする、教師や親も入れないような排他的な集会や行動に参加し、学校の指導の手が届かない独善的行動をとることはよくない。

かかる集会や行動の責任者や組織の実態は、不明確であったり、または責任者自体に問題がある場合が多いので、参加することは望ましくなく、参加する者の心身に危害が及ぶおそれもあるので、冷静に事態を判断して、動揺することなく、真に高校生らしい健全な道を邁進すべきである。

以上記述いたしましたことは、ありのままのご報告でありますので、ご賢察の上、各ご家庭におきましてもよろしくお話合いくださるようお願い申し上げます。

なお、本文書は過日（十月七日）ＰＴＡ役員会を臨時に招集して「生徒指導の問題」について協議いたしました際の提案にもとづいて、お届けいたしたものです。

昭和四十四年十一月一日

千葉東高等学校ＰＴＡ会長

労　網　由　雄

各保護者　殿

## 生徒心得第九条について

許可の手続き

一、ホームルームおよび個人提案によるもの――→　ホームルーム担任

二、生徒会関係機関の提案によるもの――→　顧問

備考　1. 集会は、目的・内容・日時・場所・責任者等を明確にする。

2. 印刷物掲示物等は、責任者を明記して案文を提出する。

3. 1.2.いずれの場合も、原則として事前一週間前までに届け出る。

4. 許可をする例

ア、顧問または担任等の指導のあるもの

イ、正常な学校生活をさまたげないもの

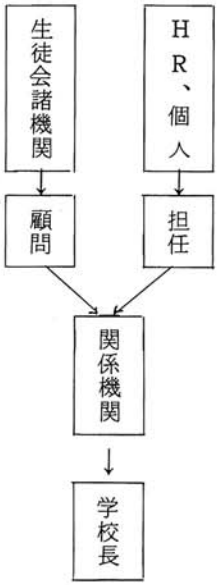
ウ、政治的宗教的目的の実現をはかるものでないもの。

エ、事実をまげたり、誤解をまね　おそれのないもの。

オ、個人および団体を誹謗したり、名誉を傷つけないもの

附記　保留事項については、当事者が必要と認める関係機関の審議を経て検討する。

説明図




## 6　修学旅行の変遷

三高時代の終り頃と同様、十一月の中・下旬に二年生が関西旅行を行っている。行く先は、その年々によって多少異なるところもあり、吉野へ行ったり、四国にまで足をのばした年もあるが、主軸はいつも奈良・京都で、宿泊も京都が中心である。ただ、昭和四十年代になると、市川、船橋地区出身の生徒の中には中学時代に関西旅行に行った者が多く、また神社仏閣めぐりばかりが修学旅行でもあるまいなどという声も出てきたりして、修学旅行を再検討する気運が出てきた。修学旅行を行うべきかとか、旅行の目的、行き先などについて、職員、父兄、生徒を対象にアンケート調査をしたり、各クラスで討議してみたりしたが、結局関西旅行の形が現在まで継続している。ただ、五、六年前から、クラス単位で見学コースを選ぶ方法が採用され、更に四十六年度では、奈良吉

野地方を数人のグループで自主的に見学することも実施され、その結果は生徒、教師ともに高く評価しているようである。

東京―京都間の乗物は、長い間、修学旅行専用車（ひので号、わかくさ号）を利用していた。この頃は大体帰りは一泊車中でというやり方で、費用の節約をはかったわけであるがこの車中泊を生徒はこの上もなく楽しいものとしていたようである。ところが、四十二年頃から新幹線を利用するようになって、朝千葉を出て、その日のうちに京都見物の一部を済ませ、そして帰りは午後京都を立って夕食は家でなどということになってしまうので、この車中泊の楽しみや冒険は味わうことができなくなった。

修学旅行の費用は、四十一年十一月実施の京都・奈良・国国地方の旅館四泊、車中泊一泊で一人約一万二千円で、五年後の四十六年十一月実施、奈良・京都四泊では一人約一万七千二百円であった。

## ◇通信制の部

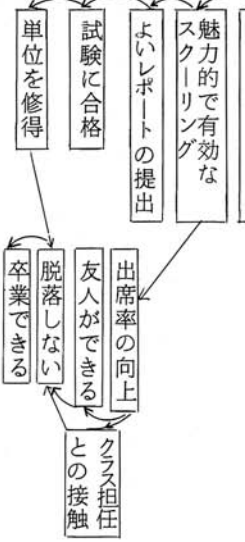
### 1. 千葉東高時代

**昭和三十六年度**　千葉三高が千葉東高と改名されるとともに、新しく山川主事を迎え、更に十月三十一日付の学校教育法の改訂により「通信制の課程」として高校通信教育が一人前に扱われるようになった画期的な年である。この年の人事移動で主事以下専任教員の半数近くが入れ替わったため、新風を容れて過去の積上げに再検討を加えながら、いよいよ内容の充実に入ったのである。即ち、これまで月一回の本校スクーリングと、銚子、館山で行なわれていた巡回スクーリングが、規模としては小さいが本校でもう一回行なわれるようになったり、合宿スクーリングの会場を御殿場の国立中央青年の家に移すなど、より多くの生徒により多くの面接指導の機会を持たせるよう改められるとともに、生徒会発足の準備や学習会の指導援助の強化などが、次々と企画されていったのである。

**昭和三十七～四十二年度**　生徒会の発足で始まった昭和三十七年度は、単位修得者延べ数が在籍生徒数を上廻った記念すべき年であった。即ち、多年の努力が実って、やっと生徒一人一人が平均一科目以上を修得するようになったのである。このことは生徒のレポート提出数の増加、スクーリング出席率の向上によって充実したわけであり、翌三十八年度からの新教育課程の実施に当たっては、個別的指導から集団的指導への考慮がはらわれ始め、それまでの八つのコースが四つに減らされるとともに、自信をもって新入生の初年度履修科目が三から四科目へと増加されたのである。このころ、生徒の自発的学習グループである学習会も花盛りで、県下各地に二十を越える小集団が、互いに逢う機会の少ない通信生同志の

激励し合う場を作っていた。これに伴う昭和二十九年以来の種々の研究実践が認められて、全国通信制実施校にさきがけて「読売教育賞」を受賞したのがこの年であり、通信制のために力を尽くされた今は亡き石毛校長が代表として受賞式に出席された。昭和三十九年には、植草学園で洋裁を学びながら通信制での勉強も同時に行なうという生徒と国立准看護学院（千葉）の生徒が集団で入学した。続いて松戸、下総の国立准看護学院の生徒も入学し始めて、これが現在まで続いている。全国的にも集団入学という新しい傾向が出始めたのがこの頃で、現在では数的に全通信生の半数に迫ろうとしている。

一方、一般生の方も徐々に軌道に乗ってきた感じで、三十八・三十九年度の学習状況から判断して、もう一歩強い指導法をとった方が更に好結果を生むのではないかとの意見が優勢になり、三十九年度後期に予告をした上で四十年度から学習に関する規制措置をとるようになった。これは図に示すような理論で、学習進度を揃えることが全ての前提になるから、レポート提出日を指定しようというものであり、これに関連してそれまで四つあった教育課程のコースも一本にしぼられ（表では四年コース・五年コースと二通りになっているが内容は同じ）また巡回スクーリングを全廃して本校で月二回の充実したスクーリングを行なうことになった。こうしたことは個人に適した学習を好きな時に好きな所で行なうという通信発足以来のやり方を根本的にくつがえすものであり、数年後に「学習規制」という名称で全国的に流行して失敗する例が多かったが、幸い本校では先に定期試験という制度を設けるなどの積上げがあったために飛躍的な単位修得者の増加となって現在に至っている。そしてこの年には卒業生が八十名に達し、卒業式を単独で行なえるようになったのである。ただこの改革で一部の生徒は遠隔地からの通学を余儀なくされたが、幸いにも多年の念願がかない、国鉄の割引回数券が四十一年に実現した。これにより交通費が半減したわけである。昭和四十二年度にはいわゆる学習規制の効果が現われて遂に卒業生が百名の大台を突破し、四年前から協力校を引き受けていた日本放送協会学園高等学校との合同卒業式の模様はＮＨＫの電波に乗って全国にテレビ放送されたのである。




このようにして改革を成功させた本校通信制は三十六年度以来七年間また一つの峠を乗り越えたと云えよう。この間本校のみならず全国の通信教育の充実発展に献身的な努力をされた山川主事が昭和四十三年に退任された。

## 2. 現在の姿

昭和四十三年四月から早川俊一主事、昭和四十六年四月からは現在の中野舜一郎主事が着任し、過去の遺産を受け継いでなおじりじりと実績を上げているという、いわば安定期の状態となっているが、その概況は次のようである。

面接指導面、生徒は月平均二回登校し、年間二十日以上の面接指導を受けることになっている。内訳は年十七回のスクーリング、二泊三日の合宿スクーリング、運動会、卒業式などである（日曜日を主とするが、平日にしか出校できない職種の生徒のためのものであるので、学校が用意する面接指導日は試験も含めると年間七十三日に達する）。年度始めには殆んどの生徒が登校するものの、夏頃から段々欠席者が目立ち始めるという現象が残念ながら今だに続いているが、全体的にみて出席率の向上は目覚ましく、一回のスクーリングに約八百名（十年前には二百名位であった）の生徒が登校する。このため少ない教員の手ではさばききれず、内約二百名の集団生を平日に廻してしのいでいる状態である。次にスクーリングの内容は、八時四十五分から十六時三十分まで、五十分単位で教科五、HR一、クラブ活動一単位時間となっている。このうち、教科の面接指導は国語・社会などでは少なく、理科・英語のような実験・実習を伴う教科に多く割り当てられているが、いずれにせよ一科目当り年間四～十七年単位時間しか用意されていない。従ってこの少ない時間をいかに有効に使うかを教員も生徒も真剣に考えているため、その内容、雰囲気ともに全日制などの授業とは大部異なったものとなっている。しかし絶対量が少ないので教科指導としての比重は小さく、むしろ学習の刺激程度と考えざるを得ない。これに対してホームルームの役割が重視され、スクーリング日には必ず一時間のロングホームがあり、予め決められた年間計画に従いながらも各組独自の工夫のもとに活発な話し合いなどが行なわれている。これは他県にはあまり見られないことで本校がスクーリングの第一目標を生徒の友人作りや教師との接触に置いている現われである。この時間を全校集会に使うこともあるが、僅かな機会をつかでの生徒会活動も盛んで、合宿スクーリングや運動会の運営は殆んど生徒会中心に行なわれるが、練習なしで立派にやってのけているのは、生徒が社会人であるとは云え大したものである。クラブ活動（運動部九、文化部三）は時間の関係上（遠隔地の生徒特に女子は十六時半までいられないことが多い）希望者だけに止めているが、定通文化大会や定通体育大会に参加するクラブも多く全くの寄合い世帯という感のあるチームで結構善戦するなどよく頑張りかつ楽しんでいる。この他に必要な生徒にはカウンセリングの準備もあり、特に親許を離れている生徒が多いのでその悩みの解決に役立っている。このように盛りたくさんのスクーリングを実施しているわけだが、教員に比べて余りにも生徒数が多いため、学年始めなどには教室から溢れ出る生徒がいる始末で、必要を感じながらも、もやは個別指導

が殆んど出来なくなっているのは、通信教育の特性からみて極めて重大な問題であり、早急に解決が望まれるのである。

添削指導面。教科書と学習書（教師の代りになる学習指導書）、それに放送（ラジオ・テレビによるＮＨＫに高校通信講座）や補助プリントなどで自宅学習した経過をレポートにして提出させ、これを添削（採点ではない）して指導するものである。一単位当り三通位、普通の生徒で年間六十通余りを提出することになり、通信教育の学習の主体とは云え、生徒は大変な苦労を強いられているわけである。一方これを添削する教員の方はと云えば、平均して一人当り二千五百通余りをさばくのだが、これだけが仕事ではないため（全仕事量の三～五割位に当たる）特に提出が集中する試験前には悲鳴をあげることになる。ところで、このレポートのもとになる報告課題は学習書に載ってはいるのだが、更に実状にあった望ましいものをと本校独自に作成・印刷していて、年々改訂もされている。しかしこの課題に関してはまだまだ検討の余地があり、校内はもとより全国的にも研究の積重ねが期待されるのである。

試験面。一単位当り一回の割合で試験を設けているが（法令に基づく）、年四回の定期試験日（七・九・十二・三月）に受験させている。この点は昭和三十一年以来殆んど変わってないが、通信教育生には時間の余裕が少ないために夏休みなどとっていられないために（教員もこれに付合って、八月にも汗を流しながら添削する。）一般の学校とは違って年間を四つに区切っているのである。それでも一回分の試験範囲が広く、また多い場合には一日に六科目以上も受験しなければならない生徒がいるなど、何とかしてやりたいがどうにもならないでいる面があり、これは今後の課題と云えよう。

その他。昭和四十年頃まで若年化しながら増加し続けた生徒数は、以後横ばい状態となって千三百～千四百名の間を上下していて、その殆んどが卒業コースを選んでいる。そして年令は再び高年化の傾向を示し、また徐々に集団入学生（女子）の割合が増してきたため、女子が男子の二倍以上となっている。居住地は千葉市を中心とした都市部への集中化が目立ち、農村地帯は極めて少なくなっている。従って職業も男子では工業関係と公務員、女子では各種学校の生徒と看護婦の占める割合が多くなっている。次に単位修得者は年々増加して、昭和四十四年度には、遂に年間五千を越えるに至り、三十七年度に生徒一人当り一科目の修得を喜んだ時から僅か七年位で四倍以上に増えたわけである。従って卒業生も増加して百名以上を維持、その修業年限も段々短かくなっている。これに比して専任教職員数は七年前の十五名が二十名になったに過ぎない。

なお、昭和四十八年度からの新指導要領実施を控えて、教育課程・新しい形の定通併修・技能連携・機械や放送を使っての多様な指導方法などが現在の研究課題となっている。

（川添）

## ◇ 衛生看護科

千葉東高校三十周年の歴史の中で、ごく新しい部に入る昭和四十一年に千葉県唯一の衛生看護科が本校に設置されることになり、耳新しい職業課程の新設にとまどったのも昨日のことのように思われる。

高校教育に取り上げられたばかりの看護教育であるから、内容にも運営上にも多くの問題があるのは当然であった。他の諸学科が何十年もの歴史を持ち、論議され研究改善されて現在に到っていることを考えると、衛生看護科はまだあゆみ始めたばかりの幼児期ともいえよう。この幼いあゆみも多くの先生方に支えられすでに六年となり三回の卒業生が巣立っている。

歴史が浅いため県下でもあまり知られていないので、この機会に衛生看護科の内容や設置されるに到った推移の概略を述べることとする。

高校の教育課程に看護を組み入れることは、昭和三十五年頃から文部省・厚生省において取り上げられていたが、深刻な看護婦不足という社会的要請の影響によって、昭和三十九年神奈川県に看護高校が創設されるや、全国的に拡充し、現在では百校をこえるに至ったのである。

その教育課程は「職業教育を主とする学科」として高等学校学習指導要領の定めるところによると同時に卒業生が准看資格を取得することができるよう編成してある。

千葉県でも看護要員の不足に加えて、人口増にともなう急激な医療需要の増加と、高校進学率の上昇にともない昭和四十一年度看護教育を高校に取り入れることにふみきったのである。当初の目標は、広い視野に立って保健活動全体をとらえさせること、あわせて看護業務に従事する者の育成、女子教育の振興などがあった。その後文部省では、内容の検討を進め、教科「看護」は高等学校学習指導要領に加えられ（昭和四十五年十月告示）四十八年度から実施の運びとなったのである。

従来看護教育は、徒弟制度の色が濃く先輩が後輩を指導する臨床指導に重きが置かれていた。特に准看護婦の場合、中学卒業後二年間の専門教育を受け都道府県の試験に合格しなければならないので年令や能力に応じた教育を行なうことが出来ず、無理を承知で盛り沢山の内容を難解な表現方法や医学用語の引用などにより指導している。

高校衛生看護科での内容は、前述の職業教育から一歩をふみ出し健康のあらゆるベルに立つ人間の看護をとおして、生徒自身が人間性豊かなしかも実践力に富む社会人となるよう弾力的な教育を目指している。看護の技術は今後さらに進歩を続けるであろう。目先の細かい技術より、基礎的な看護の原理を、しっかりとらえることによって、具体的場面に応用することが出来るはずである。今すぐ役立たなくても、科学的に看護を研究する前向きの姿勢を身につけることが大切で

ある。

さて本校第一回生の入学当初は、生徒会本部であった教室をホームルームに、旧玄関を入ってすぐ右の会議室を実習室に改造し、中庭にプレハブの教室を建てて、臨時の器材室、リネン室とした。実習用の器材は、数回の入札によって、徐々に整えられていったが、困ったのは、授業の進度とずれがでてくることであった。小さな品でも一つ納入がおくれると授業の展開ができない。系統だてて実習ができないため、三十名の一回生の前で当惑する場面もしばしばであり、本当に気の毒なことをしたと思っている。

専門教科のうち基礎医学、臨床医学にあたる教科は、国立千葉病院、千葉大附属病院からの非常勤講師に委嘱し、並々ならぬお骨折りをいただいたのである。

実習用のユニフォームは、須藤、坂本両先生の御意見をいただき水色のワンピース型に白の丸いカラー・カフスをつけすがすがしい、また可愛らしいデザインを選んだのである。

こんなこともあった。解剖生理の教材として一年の初めに骨骼模型が必要であるのに、年度はじめのことでもあり購入が間に合わなく一時千葉高から拝借することになった。バラバラに分解した骨を箱に入れ、タクシーで運んだのも思い出深い。

医療器材の必要品目を書き出し、予算を組むため、一つ一つの価格を調べることも大仕事であった。普通に使用している器械でも、実際に購入するのはどれも始めてであり、頭にある品目の仕様を書き出して、十分説明したつもりでも業者の持ってくるものは、意外な材質であったりする。例えば、タオル一枚にしても、縦横と色の指定をすると、安価な大変うすい品が届けられ、重さの指定をしなかったことに気づく始末であった。一般にタオルを買うとき重さが材質の表示になることを知っている方は少ないのではないだろうか。「エナメル製品は何回塗装のものにしますか」とか「ガラスの質は」などと問われてまごついたり、商品知識がふえて苦笑したものである。もっとゆとりをもって選択することが出来たらと今でも残念に思っている。

看護の教科のうち半分以上を占める看護実習は、校内と病院に二分して基礎的な事項の多くは校内において、反復練習させ理論をふまえた実習を病院で展開するのが望ましいのであるが、設立当初は、その点きびしいものがあった。なお病院における実習では、実際に患者に接しさまざまな場面における医療看護を見学や実習をとおして経験させたいのであるが、受入れ側の病院は看護婦の欠員が多く、加えて数校の看護実習生であふれている。病院実習の効果は大きいものでありながらこの現実から教育への協力を求めることは、誠に苦しい所であった。幸なことに本校では主な実習病院として、国立千葉病院が引受けて下さり、以来今日まで引き続きご協力いただいているのである。

戴帽式については諸説まちまちであるが、看護学生として実習病院に行く直前に行なっている。一段階というとらえ方

もあって、それなりに意義があると思う。

病院実習で初めての受持患者の治療食を見て、自分も夕食の焼魚を無塩で食べてみたいというAさん、看護婦室を出入りするつど最敬礼をして病院職員をまごつかせたBさん、小児病棟で子供達に校章をねだられて困っていたCさん、貧血してたおれたDさん、エピソードの数々も得がたい体験となったことと思う。健康であることの素晴しさを強く感じたのは、全員であったようだ。

運営上の無理から、満足な教育が行なえないのではないかと危ぶむ声もあったようだが、昨春三回卒業生まで、全員が准看資格を取得し、それぞれの立場で立派に活躍していることは、一応の成果として良いのかも知れない。若い彼女達が勉強の意欲を失わずに良い仕事を続けていって欲しいと願う。

近年看護への関心が高まり、認識が深まったとは言え、近代看護の理想にはほど遠いのが現状である。誰しも健康を害した時信頼のおける看護婦を期待する。すぐれた看護婦の育成は一朝一夕で出来ることではない。社会的な理解が必要である。

本校の衛生看護科は特別教室の建築がいまだに実現されず教師の工夫と努力では、もう補ないきれない。今後病院実習はますます困難となるであろう。校内実習を充実させ、看護高校生のプライドをもって、短い病院実習にのぞむことができるように、衛看特別教室の建設を急ぎたい。衛看棟の完成をみて本当に千葉東高校の落成ではないだろうか。

## 回想

# 石毛校長さんのご指導のもとに

旧職員（元教頭）　畠山一郎

石毛校長さんと同時に千葉三高に赴任し千葉東高時代を迎える。

昭和三十四年八月二十日千葉第三高校経営上の問題点としてとりあげたことは、次の諸点である。

一、㈠男女生徒数の不足とその対策について。男女生徒数の不足であることは、教育課程の編成、学級編成、職員構成上に極めて不便、かつ不安定である。（当時七学級三五〇人募集）

㈡当分は中高連絡会等を通じて男女同比率に近づくよう中学校側に調整を依頼する。

㈢将来は、八学級墓集として男四・女四学級の同比率募集にしたい希望である。

二、男女同比率共学校としての特色発揮と施設設備の整備充実対策について。

㈠男女同比率であることは、教育上いくたの利点があるが、施設設備の整備に多額の経費を要することが難点である。

例、男子、武道場、合宿所、運動場の拡張、理科設備等の充実、進学指導の強化。
女子、家庭科用施設・設備、札法室、ピアノ、活花、茶湯等、女子便所、更衣室の特設、就職指導の強化。

㈡この資金として県当局に特別の配慮をお願いする。

三、通信教育部運営上の問題点について

㈠生徒数の増加と産業技術教育充実のために担当教員の増員を要望中である。

㈡運営費の不足対策として後援会を設置計画中。

四、鉄筋またはブロック建築計画の推進と運動場の拡張

㈠木造平家建は校舎面積を多く要し、耐用年数も短かい。

㈡今後校舎を改増築する場合は、鉄筋またはブロックの二ないし三階建とし、かぎられた校地を運動場等として有効に使いたい。

五、水不足の対策と清掃の徹底について

㈠特に夏期における水不足はまことに忍びがたいので早急に何等かの方途を講じたい。

㈡水道管のとりかえ、または井戸による自家給水の実施等。

㈢校舎内外の清掃については、用具の整備と生徒の積極的活動によって、可及的速やかに徹底をはかりたいと努力中である。

以上は校長さんの着任一学期の後におまとめになられたもので、八月二十日ということは県の当番等の機会に公表されたものと思われるが、第二学期の頭初の職員会議にかけられ、その方法を説明されておられる。私の在任中とくにこれらの問題点の改訂という作業はなされなかったが、各項目等その後しだいに充足されている。回顧してみると、校長さんはおだやかな言葉で終始先頭にたってご指導くださったことが、今でもありがたく忘れられない。

男女共学のことは、千葉東高の特色として、着実に位置づけられているようであるが、定数の上で男女比を定めることはできなかったか、中学校側の協力もあり、ほどよい男女比で学習でき、現在は女子用の家庭科用施設・設備等すばらしく整備されているようで何よりである。

校長さんは、親切奉仕を生徒指導の一大スローガンとされ校内いたるところに自筆の標語等をはられた。三十四年十一月七日にはJ・R・C校内組織を提唱され、新任の数学担当の増田教諭が指導者に選ばれ、校内花いっぱい運動や、西千葉駅附近の道路清掃等めざましい活動をしている。その後校長さんを会長とする全県的なJ・R・Cの組織の中でたくさんの生徒が指導的立場で活動するようになり、校内に着実に根をおろすようになった。

今日の鉄筋校舎に在学されている皆さんには、想像することもできないことであるが、木造時代の清掃美化のことである。風のはげしい季節には、グラウンドから吹いてくる砂塵

が廊下に一〇ミリもたまり、教室で授業を続けるのにも支障したくらいである。加え、水不足の時にはどうすることもできない。午后は授業休止にしようと提案の先生もでてくるしまことに苦しんだものである。そのような環境で、校舎内に花をかざり、塵一つない学園にしようとされる校長さんの意気ごみは大変なものであった。朝登校されると先ず、校長室の清掃を自らぞうきんをもってなさる。私共もみかねてかわりにしますからと申しあげてもほとんどおききとどけくださらず、私の在任中は、毎朝おやりになっていた。職員に呼びかけて、校内清掃の巡視に協力を求めたり、かなりの神経を使ったものである。その中に、中庭にバラの移植をしてくれた職員や、図書館前に小公園を生徒と共同作業で造園する職員もでて、清掃美化の精神は浸透していったのである。

クラブ活動と勉学の両立は特に強調していた問題で、若い職員は進んでクラブの顧問を担当し、活発に展開した。三十五年一月十一日の早朝寒げい古の記録をみると剣道に七人、柔道に六人、早朝ランニングに多数の職員が参加して指導している。三十五年一月三十日の全校耐寒マラソンは男子が長沼往復十キロ、女子は穴川十字路おり返し四キロのコースで行なわれ、校長さんと共に全コースを完走した思い出がある。私の剣道は、千葉東高の時代、綱島・岩本・佐藤・石川・谷本・高山の諸先生からご指導いただいたもので生涯忘れることのできないことであり、誌上をかりて厚くお礼申しあげる次第である。松ケ丘町から自転車で学校まで暗い中を通勤し皆勤した剣道の寒げい古、また校長自身防具をつけてけい古をして下さったことなど、深い感銘をおぼえることである。

進学指導のことで特筆のことは、私学への入学は大体順調にのびてきたが、県立の学校として国立へも相当数送りたいといろいろ方針をたて、進路指導にいちだんと努力したことである。その学年は一学年当初より進学準備と生徒指導の両立をめざし、平素の授業に全力を傾けるという方針をうちだし、無届けの遅刻欠席には、直ちに保護者に電報をうつということを、保護者の了解をとりつけて実施した。また家庭との連絡を重視し、家庭訪問を活発に行なった。

たとえば、歯科に行くので早退という生徒があったので、さっそく家庭連絡をしてみるとその事実はなく、怠学ということであったり、学校と家庭との連絡を密にした結果、今までとはうって変って生徒の遅刻・早退・欠課等が減少し、学校全体がしまってきた。授業をまじめに受け、学校の個人指導を適確にしたその学年は、三年後には国立に二十名近い合格者をだしている。一度そういう習慣になると、その後はその実績をふまえて、着実にのびているようである。

このようなことについて、学年主任の決意、統率力、学年会のチームワークといったものが、いかに重要であるかということがわかる。

生徒指導については、後に校長さんが、県下の生徒指導研究会を結成し、自ら会長におされ、私も副会長としてお手伝いをさせていただいた。千葉東高職員を中核として執筆した。

「新らしい高校生活の創造」は、今日もなおホーム・ルーム指導のテキストとして、県下高校生に活用されている。校内ではロングホーム・ルームには何をなすべきかということでいろいろ討論をした。進学に熱心のあまり課外授業にふりむけてしまう職員がいたり、フォークダンスばかりやらせておく放任主義の職員もいて、初期には、意志統一・共通理解にかなり苦労したが、後にはホーム・ルームの公開研究会も開けるほどに実績をあげている。

通信教育部の充実は、諸川校長さんの時から四人の在学生になったらお祝いしましょうと協力をしてきたわけであるが、秋山主事のすばらしい企画と熱意で、まもなく専用の鉄筋教室ができるし、四人も突破した。そのうちに通信制の生徒も大学へ進学するようになり、卒業生の中には高校教員採用試験に合格するものなどもでてきて、内外に実力を認められるようになった。同じ校舎内のことなので、主事の秋山さんは、一寸外出される時にも、行先をきちんと連絡してくれるし、こちらの不在中のことなどもいろいろ協力していただいて、大変良い協力体制をとってくださったことを感謝している。これらもまた、校長さんのご指導の賜である。校長さんを先頭にして、毎日昼休み、通信制の職員とテニスを楽しませていただいたことは、その後の教員生活に味わうことのできないことである。おそらく秋山さんもそうではないでしょうか。前衛も後衛もわからなかったものまでも、どうやらボールがうち返しできるところまで成長したのも千葉東高通信制の皆さんのおかげである。

あまり碁のできない私は、校内のその種類の遊びに比較的冷淡であったので、碁の好きな校長さんは、あるいはおこまりになったのではないかと反省している。中間や期末の試験の時になると、教頭さん今日はやってもよいでしょうと、校内の碁大会を主催しておられた。土曜の午後おそくまでやっている連中に帰宅をすすめると、納得してその場は終了したように見せかけるが、校内一巡後、再び戻ってみると、パチン・パチンやっているなどという風景も時々あった。あまり私の趣味を強制するのもどうかと思い、離任の時、碁盤をおくり、罪ほろぼしとした次第である。

七学級から八学級になる学級増加の過程では、県内外からきわめて優秀な職員を毎年お迎えして、明かるく充実した学校経営ができたことは、校長さんのよきご指導と、同僚諸氏のご協力の賜でありここに深く感謝する次第である。

今日の記念式にお迎えすべき石毛校長さん今やなし。三十周年の偉容を、天上の先生はどんなにか感慨深く眺めておられることでありましょう。

またP・T・A会長としてご後援くださった小笹・田畑両氏もすでに故人になってしまわれた。現職を退かれてからは東雲会というP・T・A・OBの組織をつくられ、いつも学校を激励くださった亡きお二方のご冥福をお祈りする次第である。

新らしく偉容を誇る学び舎につどう在校生諸君が、先人の

あとをしのび、いっそうの努力を積まれ、千葉東高をさらに発展させていただくよう心からお祈りする。

（現東金高校長）

# 東高の思い出

旧職員（元校長）　内藤貫一

三十周年をお祝いし、東高の発展を心からお祈りします。又新校舎が立派に落成したことは、教育を充実させるための基礎条件の一つが整えられたという意味で、大いに喜ぶべきであると思います。この期に、東高の思い出を書けとのこと、悪筆を顧みず重いペンをとった次第です。

東高は、私にとって生涯の思い出の学校です。と申しますのは、教員生活三十余年の最後の学校であったからです。最後を飾るという言葉がありますが、人並みに一生懸命やったつもりでしたが、なにしろ一年八ケ月という短かい勤務期間であり、鈍才の私には、東高の発展のため、何らの貢献も出来なかったことを顧みて恥じています。

昭和四十年七月二十一日、前任校の定時制の第一学期修業式のため、分校に到着したとき、東高へ転任の電報を受け取り、あまり突然のことで、茫然としました。定年まで一年余の私に何ができるのか、一年余といえば、その学校の歴史と現状を知るだけの期間である。私は、この県の人事は間違っていると主張した。しかし、既に教育委員会の決定であり、私の主張は無視された。のみならず、千葉市にある高校に栄轉させてやったのに、何を文句を言っているか、と行政の最高責任者が言ったとか、全く不愉快であった。このことは、私の教育意欲を減殺したことは事実である。現在は、このような学校の教育を二の次にしたような人事は行われていないことと信ずる。こんな具合で、東高への赴任は、心の晴れたものではなかった。学校長の仕事は、一つには、教育諸条件の整備であり、二つには、与えられた条件の下で、望ましい教育活動が展開されるよう配慮することであろう。第一の問題は、校舎とか運動場の整備とか職員の定数とかの問題を含むものであり、問題点を客観的に捉え易いが、第二の問題はその学校の歴史とか、生徒の質の問題、地域の事情などを知ることなくしては、教育活動の方針を樹立することは困難である。普通、新校長は一年位は前任者の方針に従うのが一般である。私は、第一の問題、即ち教育諸条件の整備に、学校教育の重点を置かざるを得なかった。この点東高は、大きな問題をかかえていた。東高は、昭和二十五年、千葉県高等学校再編成によって、千葉市立高校から、県立に移管された。当時の校舎は、兵舎を改造したものであり、校舎としては、誠に不完全なものであった。後千葉市が移管条件として、校舎の一部が新築されたが、これも十数年を経て、ガタガタとなり、校舎は、改築の時期にきていた。又、運動場は、軍の使用当時の礫が、ゴロゴロしており、校庭における生徒の負傷が非常に多い状態であった。短かい期間に、東高の歴史に何かプラスのものを加えようと決意した私は、施設設備の整備に全力を挙げた。寝ても覚めても、ボロ校舎と、校庭が頭から去らなかった。幸にして、校庭は、全校庭に山砂を十糎位一面に盛土することによって、安全な運動場にすることができた。赴任後三ケ月位の着工だったと思う。生徒がはだしで運動場を走り廻っているのを見て、私には生徒が喜んでいるように見えた。校舎の改築については、赴任前から計画があ

るとのことを耳にしていたので、赴任はその計画の実施を意味するということにしたかったが、これは、希望通りになった。校舎の改築について思い出されることの一つは、関係の先生方と新校舎の設計は、こうしよう、ああしようと、検討し会ったことである。経験ある先生方の設計に対する希望は殆ど、県に取入れられた。当時の県の建築課長は、斎藤正氏であったが、課長の現場の意見を殆ど取入れられた態度と、期日の関係で課長自から、夜を徹して設計に当られたことは忘れることができない。こうして、北側の校舎の杭打ち工事は、赴任後約一年の十一月に着工され、本体は、たしか翌年二月と思うが着工されたのはうれしかった。予定では四十一年九月着工、四十二年三月第一期工事完了であったが、残念であった。しかし、東高全面改築計画（校舎延面積一万三千二百平方米、期間三ケ年、総建設費三億六千万円）がすべり出したのは幸であった。校舎改築についての所謂地元負担については、苦慮した。県立高校の校舎の建設費は、全部県負担とすべきであるとの考えを強く持っていた私は、東高発展のためには、改築はしなければならないし、改築には、約五千万円の地元負担が必要だし、この負担は父兄負担となるし、全く弱った。結局、父兄に協力していただくことにしたが、一部の父兄に強い反対があった。多数決で押切ったものの今でもあとあじが悪い。今でも、地元負担はあるようだが、千葉県も大県になったのだし、この辺でやめてもらいたいと願っている。施設整備については、プールの問題があった。四十二年度建設を要望したが、目的を達せず、四十三年建設約束に止まった。四十二年三月、私は三十数年の教育生活に終止符を打った。東高での生活は、職員の温かい協力と、PTA会長中村作次郎氏の心からなる援助があって、誠に愉快なものであった。

退職後四年余、毎日の新聞で最も注意を引くのは、教育に関する記事である。最近の教育関係記事で大きいものは、学生運動と教育改革の問題であろう。学生運動の激しかった時期の一般国民の受取り方は「学生の気持はわかるが過激な方法には賛成し難い」であったと思う。気持はわかる、ということは、大学又は高校などの教育には改革が必要である。ということを認めたものである。学校関係者もそれを認めたのであったが、改革は進んでいないように思われる。そして、学校側は、あのような激しい運動を防ぐには、どうしたらよいかということに全力が注がれているように思える。新聞の報ずるところによれば、日本で最も名の知られている高校で、校門で来校者のチェックが行われ、生徒会、クラブ活動が禁止されているという、全く驚く外はない。改革の行われない根本は何か、自分がかわいい、という考え方にあるのではないか。中教審は日本の教育改革について答申を行った。どんな制度もその運用が大事である。運用がよければ、制度の欠点もカバーできる点が多いと思う。制度を生かす充分な努力もなされないで、その制度を批判するのはどうかと思う。校長十八年の経験で、痛感させられたことは、終戦後生れた高校は、創設当時の精神を生かすためには、どうしてもしなければならない努力が誠に不十分であったということである。例を挙げれば、新制度の高校教育に、ふさわしい教員の確保に対する努力が少なく、従って結果的に、旧制中学教員の横すべりに終ったし、教育を行うに必要な校舎の整備についても、発足後二十数年を経た今日でも終っていない状態であり整備された学校も、校舎だけは、鉄筋の堂々たるものでも、整備等の内容にいたっては、教育の目標生徒の年令、収容す

る生徒の数等を考えると、旧制の中学より劣っていると言っても過言ではあるまい。

教育の重要性は、何人も口にする。たしかに、我が国の科学、技術の進歩、経済のめざましい発展は、教育の賜であり経済発展に伴う色々の好ましからぬ問題、国内的、国際的な政治の混迷、これらは、究極的には人の問題であるから、教育はこの点でも責任を免れることはできない。教育投資説には賛成し難いが、人を人として生かし、世界の平和を実現するには、教育の振興以外にはあり得ないと思う。教育の遂行には、金が少なすぎる。

# 思い出すことども

旧職員（前校長）　沢田繁二

## 1. まえがき

私は東高に二度のおつとめをしました。最初が昭和二十六年一月から三十一年三月まで、諸川先生の時代で、千葉三高の名前もまだういういしいころでした。次ぎが四十二年四月から二年間、通算して七年三か月ですが、東校だけに生涯をかけた先生も多い中で、私の勤務年数ごとき大した期間ではないのです。

従って、しいて書くべきこともないように思いますけれど、せっかくの御依頼でもあるし、ひょっとして沿革史の裏がわの記録として書いておいた方がいいかとも思い、己れを語ることをあまり好みませんけれども、一応与えられた頁をふさがせていただきたいと思います。

もっとも、2.の方は何かの機会に朝礼台でちょっと触れた記憶があります。3.の方は某誌に求められて随想風に書いたもののぬきがきです。後者は校長時代のにがい思い出の一つですが、私が去ってまもなく東高は紛争の渦にまきこまれることとなりました。東高にはまえまえから門戸開放的な自由な空気がありましたから、思えばその萌芽は早くからめばえていたかと思います。不覚ながら在職の時はあのような事態になろうとは予想もしませんでした。しかし、そういう問題よりも、ああいう時点でマスコミが一方的な扱いをしたということが、大学といわず高校といわず、紛争をエスカレートさせた一つの原因だと思っています。

ともあれ、いろいろ困難の多かった時代を経て、立派に成長していく東高のすがたに敬意を表したいと思います。

## 2. 校歌とその周辺

昭和二十六年は本校の十周年記念の年で、新参の教頭の身で、その大事業の立案と準備に当たりました。記念行事の一つとして校歌の制定ということがありまして、誰かに頼むかということもありましたが、学校では他よりもまず生徒の気持ちを尊重したいということで校内から募集することになりました。しかし、おいそれとは集まらず、二度、三度呼びかけて、数点の作品が出て来ましたが、なかなか思わしいものはなく、式典の秋は近づいてくるし、万事窮したすえ、命によって私が十日間ほど日数を与えられて、記念祭歌と校歌とを作ることとなりました。

記念祭歌は今はすっかり消えてしまいましたが、第一節は次のとおりだったと思います。

すだく虫の音　うつろう星の
影冴えし　秋のさやけさ

学び舎に　時は移りて
十年経し　いさをしここに
賛えよや　われらが母校

この歌はわれながらすらすらと気持ちよく出来上ったと思っています。第二節までありました。

校歌の方はかなりの難産でした。当時通信制の方に出講しておられた、歌人兵藤益男先生と合作という形で作りたいと思いましたが、はたから口を入れるべきではないからという御遠慮から孤独切迫の中で事に当たりました。結局少々型破りながら「シャロンの花」ではじまるあの校歌となったものです。

もともと本校は女子高からの転身で、女子生徒にまじって男子が数少なくはいっていた当初でしたから、男生徒の女性化などということが本気に問題にされていたころの話です。

そういうわけで校歌も女性上位の形になってしまったことは先見の明に欠けるところがあったようです。曲は勅使川原先生の恩師武蔵野音大の石黒脩三教授にお願いをしましたが、記念祭歌の方は作曲もすぐ出来上ってきました。校歌の方は予定より遅れぎみになりましたが二曲も用意してあったことは作曲者の良心に感じ入ったものでした。音楽担当の勅使川原、川口の両先生の御意見も聞きリズム感に富んだ現在の曲に落ちついた次第です。

二十年後の今日、はたして歌詞がふさわしいかどうか、作詞した本人だけに気になっております。いずれ良き詞を得て取り換えていただきたいものと私は願っております。

話題は多少それますけれども、記念行事の一つとして運動場の整備があり、全校職員、生徒、父兄の方まで動員して夏休みを返上して事に当たりました。当時の体育担当の愛敬先生の情熱と施工に当たった河瀬氏の献身で炎熱のもと一夏を明けくらしたことは強烈な思い出の一つです。工事は非常な難工事でしたが最後に機械力を入れ仕上った時、そろそろ秋風が吹きそめたグランドに立ちつくしてしばし感慨にひたったことでした。愛敬先生はまもなく教職を退いて野田に去られ、施工の河瀬氏は若い身空で筋ヂストロフィという奇病で他界され、今となっては奇しき因縁でした。

さて、千葉三高チームが高校野球に初出場したのはグランド整備ができた翌年からだと思いますが応援歌がほしいということで大急ぎでこしらえたのが「劫火しきりに」と「芙蓉の嶺」の二つです。作曲を他に依頼する余裕もありませんので「劫火」は私の出身高校の寮歌に「芙蓉」は私がかって勤務した陸軍の学校の行進曲に合わせて詞を作りました。応援歌にはよくあることです。何しろ乱世のころの話ですから、このくらいのことは許していただけると思います。しかも実際的には、黒岩という社会科の先生（現在毎日新聞本社勤務）と私とで音痴の声をはりあげて生徒諸君に指導したのを勅使川原先生が譜にしましたため、現在歌われているのは本歌の曲とは少々違うように思われます。

以上校歌の成立過程など申しましたが、ともかく十周年前後は新生千葉三高の名にふさわしく諸川先生の情熱的な発想とあいまって極めてディオニソス的な「行動の時代」であったと素朴な感激をもって追憶することができます。

3. 小さな紛争

私はやってきた
何かを求めて
何かをさがしにやってきた

そして一年たちやがて二年もおわり三年
その間ある時は考え
ある時は失望し
何かをさがし　一人孤独に
誰にもたよらなかった
誰にもたずねなかった
誰も教えてくれなかった

この詩は生徒の作品かどうかつまびらかに致しておりませんし、また鑑賞のために、ここに提示したものでもありません。しかし、一言論評を加えさせていただくならば、この詩は高校の新聞や雑誌でよく見かける程度の普通の作品で、少年の孤独な学校生活がすなおに表現されているというぐらいの批評をつけ加えるかもしれません。また、この詩の作者が通信教育を受けている少年か何かであったなら働きながら学ぶ意欲と孤独な学習への努力に激励のことばを惜しまないでありましょう。

しかし、この詩が高校一般の問題として、高校の実態を、疎外され閉鎖された世界だとする形で迫ってくれば、現場をあずかるものとしては、それは小々片よった受けとめ方で、少なからず自己疎外的な傾向のあることを反論しなければならないでしょう。実はこの詩は、東高で次のようないきさつのあった因縁の詩なのです。

高校では入学式を迎えるにさきだって父兄同伴の説明会をもつことが行なわれています。その説明会の前日、生徒会長以下二、三人の生徒が教務室に現われ、さきの詩を掲示したい、あわせて解説的な一文をそえて迎えることばとしたいという申出がありました。生徒会の顧問の先生と教頭先生とが相談して、詩のほうはともかく、つけ加えられた解説文のほうに、高校の生活を希望のない、悲観的なものとする表現があるがそれはどうであろうか。せっかく希望に燃えて、はじめて校門をくぐる新入生に対し、少し刺激的すぎるのではないか、希望がもてず、悲観的という見解も、どういう内容にもとづいてなされているかがはっきりせず、全生徒の代表的な意見とも受けとれない。その箇所だけは削るなり、改めるなりしたほうがよいという先生側の指導が加えられたようです。しかし、生徒たちはなかなか納得せず、結局ものわかれになったということでした。

その後、この問題は多少の経過をたどったのち、新聞社の知るところとなりまして、「表現の自由認めよ」という大見出しで、地方版のトップを飾る破目に至ったわけです。「詩など掲示拒否が発端」という形で、詩だけが引用されたため、私自体も多くの詰問にさらされなければなりませんでした。「あの詩のどこが悪いか」、「詩もわからない圧制的な校長では話にならぬ」という電話で、ただ恐れ入るばかりでした。

この問題は、校内だけの問題としては、さほど深刻なものではなかったはずです。反体制の初歩的段階として、あるいは生徒心得の民主化をはかるという程度の事件ではありますが、マスコミの路線に乗ると、いかにも紛争めいた印象を世間にも与え、及ぼす影響の少なくないことを痛いほど知らされた事件でした。

与えられた枚数もだいぶ超過したようです。読みかえしてみて、2.と3.とでは明暗の差がかなり大きいように思われ、それだけに時勢の推移を強く感じさせられます。

そういう点から千葉東高三十年の歴史を築き、そして守ってこられた先生方、生徒諸君に深甚の敬意を表し、今後の御発展を祈って筆を擱きたいと思います。（現千葉高校長）

# 思い出のままに

旧職員（元主事）　山川達二

この度、創立三十周年記念誌を編集するに当たり、通信制課程に在職中の想い出を書いてほしいという依頼を受けたので、何のためらいもなく気易く引き受けてしまった。ところが依頼状を見なおして驚いた。校史の一部としての要求であることがわかったからだ。「これはしまった」と思ったが後の祭り。年代など手もとに何の記録もないし、統計らしいものもない。おまけに年寄りのせいか、物忘れがひどく、史的に記述することなど思いもよらない。まよ、詳細は通信制に記録があるのだから、引き受けた以上は何とか思い出すまま書いておけば、何らかの参考にはなるだろうと、安易な気もちになって筆をとることにした。敢えてお許しをいただきたい点である。

わたしが東高の通信制に勤務するようになったのは、三十六年四月からで、当時はもう通信制の創設期は終わったといってよかろうと思う。開設の当初は限られた教科、科目の履修だけであったものが、先輩諸氏のご努力で通信制だけで卒業の認定もできるところまで発展してきていた。そして困難な学習環境にもかかわらず、二十名台の卒業生が出るほどになっていたし、小規模ではあったが専用校舎もできあがっていた。この専用校舎のあったことが、どの位通信制の発展に力になったか計り知れないものがあると思う。ここが各種問題点の討論の場であり、研修の場であり、各種作業の場ともなり、また生徒との交流の場でもあった。もちろん日常の仕事の場であって、喜びも悲しみも、しゃくに障ることもお互いに話し合える場であった。

この場にも不安や疑念のあったことはもちろんで、第一に二階の床の強度が不明で、どの位の収容人員に耐えられるかわからないということだった。いくらなんでもあまりに時代離れした話なので不安にも思わなかったが、念のために各方面に問い合わせてみたが、全く不明であったのには驚いた。けれども在職七年間は無事故だったし、今もって健在であるのだから幸いというものだろう。それよりも気になったのは入学生の多いのにくらべて、卒業する人たちが僅かであるということだった。何も卒業生だけを多く出すのが教育の効果が上がったとはいえないと、自らに言い聞かせても、毎年三百名もの入学生があって、二十名台の卒業生しか出せないのは、その原因がどこにあるのか究明したくなるのは当然であろう。ところがここにまた不思議な現象があるのに気がついた。それは、わたしの永い教員生活でも経験したことのないほどの、職員と生徒との交流が親密にできているということだった。その上に面接授業その他で登校してくる生徒たちの自主的活動が、申し分のないほどよく実行されていることも驚きといってよいほどだった。こんなによい生徒たちが多いのに、どうして学習効果の一つの目標である卒業生が少ないのかとの疑問が湧き、申しわけないが、教員の指導のどこかに手ぬかりがあるのではとの疑念さえ持つようになってしまった。

ところでこの疑念の解決には時間はかからなかった。それは学校教育を全日制課程の教育ばかりを中心に考えていた自分の認識不足にあることに気がついたのだ。働きながら学ぶ通信生は、学習時間さえとりにくい生活環境にあること、そ

こから起こる学習不振、学習書相手の孤独な勉強では、疑問につき当たったときに解決の方法がないこと、さらに教科書と学習書を同時に読み進めなければならない不自由さなど通信生の学習形態の根本に考え及ばなかった誤りがはっきりした。ここから勤労生徒の環境改善は、学習効果の向上は、どうすればよいのかとの改善策の問題をかかえて、遂に頭から離れることがなかった。

幸いに関東地区に位置している通信制高校ということで、全国高等学校通信制教育研究会の事務局との連絡も密にできたし、文部省中等教育課やNHK通信教育部などとの接触もあって、通信制のかかえている根本問題も把握できたし、また全国の通信制高校の実態もつかめるようになり、この教育を根本から考えることができたことはしあわせであった。それにしても前任者の秋山先生を中心にして作成された研究録や統計を参考資料として、この教育に経験の深い川添、佐藤などの諸氏を中心として、あくことのない研修や討論がくりかえされたことは有意義であった。報告課題の在り方とか、面接指導の本質は何かなど、これという一線を打ち出せないむずかしいものばかりだったが、若干の改善が時を追って実施されるようになった。報告課題は毎年のように改められ、面接指導にもいろいろと新しい手が加えられだした。こうして報告課題の提出数が伸び、従って単位修得数が増加してきたことを喜びとしたことを記憶している。

この報告課題の提出数の増加の一因は学習規制を実施したことにもある。この規制は日本放送協会学園が全国的規模で、生徒数が多いために報告課題の提出期日を設定して、その添削指導の能率を高めようとした処から始まったものと記憶するが、これの指導の能率化が認められて急に全国的に波及したものであった。東高でもこれが議題として採り上げられ、数回に及ぶ討論の末に実施に踏み切ることとなった。けれども生徒の学習環境を考慮して、この規制は強制的なものではなく、報告課題提出の目安としての期限の設定に留めた。それ以後は報告課題の数回分を一括して提出してくるような傾向も若干ではあるが減少してきたし、添削指導も同一の回数のものが主となって能率の向上したことは認められた。このようにして次第に課題の提出数が伸びてはきたが、これを提出してくる生徒はほとんどきまってしまっていて、学習の進みにくい生徒は、いつまでもそのままの状態を続けている傾向があった。かれらへの指導こそが大事な教育活動だと考えて、対策を考えて実施しようとしたが、全県下、いや県外にまでひろがって居住している生徒の指導は、それでなくてさえ教員不足に悩んでいる通信制としては、どうしようもなかったのが実状であった。

この教員数の不足から、面接指導の協力校としての銚子、館山両高校の借用も、本校への出席者の増加によって、どうにも教員のやりくりがつかなくなって、遂に取りやめの処置をとるよりほかなくなってしまったのは、いまでも心残りとしているところである。もっともここまでするにはいろいろ苦心もし、対策もたててみたことだった。銚子、館山両校の先生方に講師をお願いする処置をとったのもその一対策であったが、日曜日に出勤するため、両校の先生方は代休をとろうとしても自校の勤務の関係上、どうにもならない処から、遂に一年間実施しただけで終わってしまった。こうして両協力校での面接指導は、とりやめるよりほかなくなってしまった。この教員不足については、県の教育委員会に何回となく足を運び、また全国高等学校通信制教育研究会と協力して、

文部省にも陳情を繰りかえした結果、ようやっと教員定数の若干の増加が認められたことは、せめてもの慰めだった。それにしても現在でもなおこの問題は悩みの種になっているのではないだろうかと心配される処である。

このほかNHKの通信高校講座視聴の問題、これに伴う学習書の改善―これはNHKの放送テキストと合同編集する処まで発展している。――放送講座の視聴を面接指導時数に代替する問題、さらに受信機の斡旋と、次から次と問題点と取り組まなければならなかった。しかも放送講座を継続視聴できる生徒は、よほど恵まれた生活環境の人たちで、他の大多数の生徒たちの視聴督励をどのようにしたらよいのかが、全国的な問題として関係当局などと話し合った。この解決は政治的な大きな課題とも関連してくる処から、これといった結論の出ないままで過ぎてしまったのは残念であった。現在ではどのように発展し、どのように指導しているのだろうか。いまでも関心のある点の一つである。

放送視聴の問題とは直接の関連はないが、日本放送協会学園の設立に伴って、面接指導の依託を全国の通信制高校に出された時など、大問題として全国の役員会で論争されたことがあった。東高でもいろいろ曲折はあったが、理解ある全日制の職員のご協力で順調に依託にこたえることのできるようになったのは、喜ばしい限りであった。

さて、現在でも大差はないと思うが、通信制には独得な事務があり、それも量として膨大なものであるのに、これをさばいていく事務職員の少ないこともまた悩みの種であった。例えば教科・科目の単位認定の事務処理は、単位修得数の増加とともに悲鳴をあげたくなるほどの事務量だった。これを何とか簡略なものにしようと、何回か試案を考えてみたが、遂に迷案に終わり、冥案として沈んでしまった。結局どこかで手を抜くよりほかはないと、単位認定証の発行を取りやめてしまって、その代わりに年度末に一覧表として通知することに切り替えた。これだけでも年に何回かあった証書の発行、封筒書き、発送の事務などが省略できて、幾分かの負担の軽減はできたことだった。その後もこの種の簡略化は進めなければと予定していたが、予定だけに終わってしまった。

ここまで書いてきて、何だか苦労や忙しさだけの通信制であったように読み取られはしないだろうかと、心配されだした。通信制には他の学校では体験できないような喜びもあり、やりがいもあったのは、経験者だけが知っていることかもしれない。そこでこれはそのままとして、他のことを紹介することにしたい。それは生徒の学習会に対して、ご理解とご援助をしてくだされた外部の方々のことである。もともとこの学習会は、生徒の自主性によって地域的に集団を作り、互いに励まし合い、助け合う形のものである。この全県下各地の学習会に対して各方面から援助の手がさしのべられたのであった。その最初は香取郡の東庄町であった。たしか二十九年度からと記憶しているが、通信生へ格別の関心を寄せられ、町の教育委員会が援助の手をさしのべられたことに始まっている。それ以来、現在でも続いていると思うが、予定表を作り、特別に講師の依嘱までして、笹川公民館を開放して学習の援助をしているのである。わたしの知る限りでは、東庄通信教育講座といってよいほどの肩の入れ方であった。その後、県下の各地にいろいろな形で援助の手がのべられ、あるいは個人的に自宅を開放して集会の便宜を図ってくだされた方、あるいは中学校、高校の先生方が積極的に指導を買って出られるとか、または東庄式に市町村の教育委員会が援助してく

だされるとか、形としては種々だったが、まったく感謝のほかなかった。

この学習会の相互のまたは合同しての交歓会が何回となく催されたが、その会場についても県立木更津青年の家を始め、各地の公民館、学校などをお借りしていろいろと便宜を与えられたし、進んで指導される方もあったしで、恵まれた会合を持ったことだと思う。このように想い起こしてくると、通信制の課程はご理解ある人たち、積極的に援助された方たちのお力と、創設以来の荒野を開拓するに似た職員の協力一致が実を結んでここまできたのだとの感を深くする。図らずも四十年度に読売教育賞を受けることのできたのも、こうした善意と努力の結果であると確信している。

職員の協力一致も着々と成果をあげたことも敢て誇りとしたい。いろいろな生徒指導上の改善、種々の新しい事象への対応等、目まぐるしい程だったが、すべて協力によって処理できたことを想い起こす次第である。後援会（振興会）の設立に当たっても、当時の内藤校長のお骨折りはもちろんであったが、職員一同よく奮闘して、懸案の組織を持つことができるようになったのである。このほか生徒相談室の開設、放送（通信高校講座）の録音を充実して、生徒の学習用に貸し出すように整備したこと、県の職員研修、あるいは刑務所の補導教育の一翼となって活動したことなど、どれ一つとして容易な仕事ではなかったのに、それぞれ担当された職員は真剣にとり組んで、成果を示されたことは、全職員が一丸となって恵まれない生徒たちに、何とか力になろう、社会的にもできる限り力になろうとの意欲がそうさせたものと、今さら感激しているところである。

このほかにも、定通併修の問題、技能教育との連けい、集団入学生の指導方法等、どれを見ても簡単に解決できるものではなかったが、大勢に順応することなく独自な見解を示してくれたことは助かった思いであった。けれどもこれらを含めて、通信制のかかえている問題の多くは、再三にわたり今後も慎重審議をくりかえさなければならない条件を備えていると見なければならない。今後の一層のご努力をお願いしたい処である。通信制といえば陳情とすぐ結び付くほど、よく国会や大蔵省にまで出向いて、夜半まで動き回ったことも想い出であるし、全国通信制高校の大会のときなど、下働きで忙しい思いをしたことなども、かえってなつかしい想い出である。

想い出といえば、通信制に勤務して始めてラケットを握って、あの小さな白いボールにきりきり舞をさせられたこともなつかしく感じている一つである。現在でも続けていると思うが、忙しい中の一ときの楽しみであり、体力作りにもなる庭球は、また全職員の和合にもつながると考えられるので、ますますへたの横好き式で楽しんだわたしのように続けてほしいものである。

思いつくままに雑然とならべてきたし、蛇足までついたようなので、この辺でお許しを願って、七年間想い出多い教育の場で働かせていただき、各方面のご援助、ご協力をいただいたことに感謝の意をささげて終わりとする。

## 十年の重み

教諭　山根　茂

本校の「三高時代」を私は三年経験しただけであるから、

そんなに古いことを知っているわけではない。しかし、十年ひと昔のたとえもあるので、何かそれらしいものを思い出してみよう。

いまでこそ「千葉東高」の名はだれでもが知り、本校の名にふさわしいものと感じるが、十年ほど前の改名論議では、いろいろな案が出る中でそれなりの迷いがなかったわけではない。当時私たちは言いなれた「三高」の名で結構だと思っていたが、県下一斉にナンバースクールの名称を廃することになってやむをえず変更したものだ。はじめは所在地の町名によって「轟高校」かという声もあったし、西千葉の方角から「西高校」という名もあがっていたが、結局方位を新らたに入れる校名はいずれも「東高」の名を用いることに統一されて、この名が誕生した。おかげで、「千葉東高は西千葉駅でおりて……」などという言い方を気にするはめになってしまい、いちいち事情を説明したりしていたのに、いつのまにかこれもおかしくなくなって、最近では「千葉東高」は当然本校につけられるはずの校名だったように思っている。

次に特筆すべきは、何といっても鉄筋校舎の完成であろう。ホコリや騒音、雨もりなどに苦しめられた旧木造校舎での日常にくらべてみると、たしかに隔世の感をいだかずにはおれない。とにかくすばらしい学校になったものだ。昭和四十一年の冬、第一期工事の最初の杭が轟音とともに打ち込まれたころの期待がいまは現実のものになっている。しかしその一方で、建築の場所にかゝった旧校舎の取り壊しが始まった時は、未練などないはずの建物に急に愛着じみた気がわきおこって来て、解体作業のなりゆきをあかず眺めていたものだ。新校舎の構想も最初から現在の形に決まっていたわけではない。校庭の南側へ道路に沿って一列に置く案や、現在のテニスコートと通信棟などがある西隅に三棟重ねて並べる案があったじ、少しでもグラウンドを広くとろうとして、五階建てのプランも話題に上ったこともあった。体育館やプールについても、その場所や向きについてさまざまの検討が加えられながら、結局現況の構想と位置に落ち着いていった。そしてこれらの大工事は三期に分けて進められることになったのである。やがてそれぞれに特色のある建物が竣工したのであるが、設計上の考察と予算上の配慮とに多くの問題をかかえ、また建物ごとに担当業者が変わって、それらに対する校内の意向の調整をはかりながら、めでたく完工を迎えるまでの足かけ五年の歳月は、数々の体験に学んだ尊い日々となった。

校庭の様子にもさまざまの遷り変わりがある。正門からの通路の舗装やグラウンドの土盛り、多くの植樹や花壇作りなど、今日の景観を呈するまでの年ごとの苦労もまた懐しい。歴代の校長が樹木を愛好されたせいもあって、校庭美化への配慮が常々なされて来た。玄関前の丸い植え込みにある枝ぶりのよい松や、その前の通路に並んだ黒松は、私の赴任する前からあったものだが、植え込みに大きな葉をひろげているソテツは奄美大島からとり寄せたものであるし、その脇のツタがからまる五噸の庭石は「三波石」といい、群馬県南部の三波石峡からの到来だ。またグラウンド南側のブロック壁に沿っては椎の木が、東側の万年壁沿いのところにはアオキがたくさん植えられているが、これらは植木の産地埼玉の安行までわざわざ出かけて求めて来たものだ。このほかヤナギやつゝじなどもおりおり各所に植えこんで、四季の眺めを楽しませて来た。なお、植え木のことでは、建築の進展に伴って移植をしなければならないものがたくさんあって、これもひと仕事だった。旧図書館前には、池があって、てごろな憩い

の場所となっていたが、これは工事の際とりこわしてなくなったまゝだ。適当な時期にぜひ復元してほしいものだと思っている。

行事ではいろいろなことがあったけれども、私には、夏のキャンプ・冬の寒稽古が印象的だ。会津磐梯山のバンガローから茶褐色の雄大な山肌を見上げていたら、ものすごい雷雨が襲来して大騒ぎになったり、富士の精進湖のキャンプファイヤで皆につられて音痴の「湖畔の宿」を精いっぱい歌った思い出がある。冬の寒稽古はなかなか盛んで、OBの参加も加えて早朝から元気のよい気合いがかゝっていた。ところで寒稽古といえば柔剣道と相場はきまっているようだが、それでは一般の生徒が参加できないから、ぜひマラソンの部をとりあげてほしいと希望して、いつの年からか実現させてもらったので、私は毎年これに参加した。そのころは、二月の下旬に校内マラソン大会なるものがあって、全校生徒が穴川や長沼の方面までカケッコをやった。この時はマラソンの寒稽古に参加した生徒が大いにハッスルしたことを覚えている。

このようにあれこれたわいなく書きつらねてみても、本校ひと昔の重みは語り尽せるものではない。私の無辞のせいではあるが、とにかくこの歳月は私にとってもすこぶる感銘の深いものであった。去る人来る人さまざまの想いをいだくであろうが、高校時代を本校に送った卒業生諸君に会うと、その在校当時を異口同音に懐しく語ってくれるのは嬉しい。彼等の心境の中には、かつての校舎の不備もとくべつの不満として残っていないばかりでなく、むしろそれは恰好の話の材料として親しまれているむきさえある。そんな意味で、昔日の多少土くさかったかもしれない学園生活は、それなりに土壌の肥料がよくきいていて、そこに培われて来た草木はみごとな花も咲かせ、実もつけて、その気運がどんどん根をはり枝をひろげることになって、今日の本校の発展をささえて来たのだと思う。

## いろいろな事

教諭　野村典平

三十周年記念誌に原稿を依頼されましたが、私のようにふだん毛虫を採集飼育したり野球のバットを振ったりしているものに記念誌向きの文章が書けるはずがない。うっかり引受けた事を後悔しながら思い出すままに書いて見ようと思います。

### なつかしき地

私が本校にお世話になったのは昭和三十六年でした。大多喜の「山おろち」（大多喜の生徒のつけた私のあだな）がこんなスマートな都会の学校に勤まるか内心不安でしたが、以来何もする事もなくあっという間に十年間が過ぎてしまいました。私が本校の校門をくぐった瞬間私にはこの地が非常になつかしく思い出の地である事を感じました。何故かというとこの附近一帯はかっての第二次大戦中陸軍兵器廠のあった場所なのです。思えば昭和十八年から十九年私たち中学生は学業を捨てて勤労奉仕という名のもとに月に数回兵器廠で兵器の荷造りや運搬等の作業に汗水流して働いた所なのです。戦後十六年その当時の面影は何一つありませんが、この思い出の地で、当時の私たちと同じ年代の生徒と思いきり学業にクラブ活動に励む事が出来る喜びは私にとって感無量です。そして平和とは本当に素晴らしいという事をつくづく感じました。

## 校名変更

三十六年四月より千葉三高が千葉東高と校名が変更になりました。校名変更といっても学校が変わったわけでもなし、内容が変わったわけでもないので、生徒の間にはこれと言った不満はなかったようでした。しかし二・三年生は三高の入学生で、校名変更に反抗してではないが、使いなれたせいか母校への愛着か生徒の間では三高という生徒が多かった。特にクラブ活動の練習中とか対外試合でハッスルした時などは東高の名は一言も聞く事が出来なかった。が以来年々三高という言葉も聞かれなくなり今ではすっかり東高となりました。在高生の中には三高という学校が東高の前の名前だという事を知らない生徒もいるのではないでしょうか。

## 火事

三十六年八月二十二日夜十一時頃本校が火災になり四教室を焼失した。さいわい風がなく最小限で済んだ事は不幸中の幸でした。当時管理者でもなし、又宿直教員でもない私が何故火事の事を書くかと言うと、着任早々適当な家がなく、当時合宿所と呼ばれた（旧体育館裏）バラックで自炊生活をしていた関係上学校内の出来事はいやでも情報が早く入るのでした。当日は尚更そろそろ寝ようとして外を見た途端校舎より煙が出ているのを見ました。驚いてハダシで現場に行って見たが教室内は火の海でどうする事も出来なかった。もちろん消防署への火災通報もされていなかった。おそらく当時の職員生徒の間では一番初めに発見したのではないでしょうか。それだけにあの時を今でも時々思い出します。

なお、その翌年建設された二階校舎（当時は本校唯一のモダンな校舎）の一室が私の部屋であり、又新校舎が建った今もなお、ひっそりとその面影を残している事を思う時、当事の事が思い出されてなりません。

## クラブ

当時のクラブ全般については知る由はない。私が当時関係したクラブは、ラグビー部と生物部（大先輩吉田先生が指導されていて私は名ばかりの顧問）でした。

### （一）ラグビー部

当時のラグビー部と言うとおそらく元気のいい生徒の集まりといって過言はないでしょう。ところが元気がいいだけではなく又、強かった。

県内では常にビッグ三の中に名をつらね、関東大会は連続出場していた。しかし受験校のなやみ、全国大会にはつねに三年生の練習不足のためについに実現出来なかった事は今でも残念に思っております。

思い出のゲームとしては、三十八年全国大会予選決勝で部員十五名の本校が千葉工業と対戦一点差で惜敗した試合でした。しかもノーサイド直前ゴール成功すれば逆転という手に汗をにぎる試合でした。この試合の場面が今でも思い出されます。後にこの試合で活躍した大西君は明大に進学し、坂内君、村内君は早大に進学し、それぞれレギュラー選手として活躍した事も本校ラグビー部のみならず運動クラブとして特筆すべき事と思われます。

### （二）生物クラブ

三十四年より始めたミツバチの研究は年を追って研究が深まり、ついに三十六年には、県読売科学賞で入賞さらに三十七年には県最優秀賞の栄冠を獲得しました。これもひとえに

吉田先生と生徒の五年間の涙ぐましい努力の結晶のたまものに他なりません。私としては唯、良く研究されましたと賞賛する他はありません。

なお、化学クラブも雄蛇池の水質調査をテーマに着々と努力しておりましたが、三十七年九月不幸にして調査中ボートが転覆し、当時の一年生赤地君が亡くなられた事も本当に悲しい出来事でした。赤地君は、私の組の生徒でもあり私も水質調査にでかけた事もある関係上なおさら思い出されます。

三十六年から二～三年位の事についてと原稿を依頼されましたが私の胸に残っている思い出としてはこんな所です。

ここ十年本校はめざましい発展をつづけています。校舎もすっかり四階建ての立派な校舎になりました。本校も創立三十年を経過しました。人間にたとえればこれからが人生です。今後の発展をお祈りすると共に私も現職員として微力ながら協力するつもりです。

# この十年

教諭　鈴木二朗

風が吹くと、廊下に小さな埃の渦が立った。ざらざらと白っぽい廊下には、穴をふさぐ板が、何ケ所もうちつけてある。もちろん歩くたびに、ギシギシと音をたてた。

三十七年四月に、本校に転任してきた頃の校舎は、そんな感じである。今は、面目を一新して、鉄筋四階建ての堂々たるものであるが、当時は、古びた校舎が三列に低くならんでいた。校門を入って突きあたると、左手隅に、現在の通信教育部の建物があって、その隣に、小講堂と呼ぶ卓球部の練習所がつづいていた。卓球台四台、ステージの両隅をベニヤ板でかこって、右が男子、反対側が女子の更衣室兼用具置場になっていた。講堂などによく見られる二つの大きな出入口は一度あけると、なかなかうまく閉まらないので、釘付けになっていて、右隅の開き戸で校舎と往き来していた。

卓球部の顧問になった私は、六限目が終わるとすぐ更衣してこの小講堂にかけつけた。埃がたゝぬように打った水を、モップでふきとり、練習を始めるのが、三時半頃、常時、二十人位の部員が練習していたと思う。前任校は定時制の夜間部であったので、練習時間が少なくて物足りなかったが、東高に移ってからは、夜になるまで熱中した。あまり遅くなって鍵をかけられてしまい、窓から飛び出して庭をまわり、正面玄関から校舎に入れてもらうことも時々あった。一緒にとびだしたS君、N君、T君など、特になつかしい。

一年ほどして、この小講堂は改築され、職員室と校長室になった。その後、さらに模様替えしたものが、現在の衛看棟である。この頃の建物で現存するのは、旧体育館と図書館（今は柔道場になっている）と、生物棟（現在の卓球部とブラスバンドクラブ等の練習場）だけであろうか。見るもみすぼらしいこの建物が、その頃では、最も立派なものであったといえば、当時の校舎の様子が、すこしは理解してもらえるであろうか。

暖房設備も、今のようにガスを使うのではなくて、石炭をたくダルマストーブで、太い煙突が、室の入口附近のストーブから立ち上って、天井近くを横にはしっていた。トタン張りの自転車置場の隅に石炭が積んであって、朝早く教室に来た人が（一応日直の仕事になってはいたが）、その前にな

らべてある石炭を入れたバケツと、細く割った付け木とを、教室に運んで行って燃すのである。慣れない生徒も多く、なかなか燃えつかない。とくに雨の日など、付け木がしめっていて難渋する。うちわであおぐ者、どこかに付け木を探しに行く人、朝のホームルームそっちのけで、ワァワァ・バタバタ、青い煙が、雨の薄暗い教室からあふれて、廊下にモクモク。また、風向きによっては、煙が押されて外に流れにくく、うすく教室にたちこめる日もあったし、煙突がつまってくると、継ぎ目から、タールが、ポタポタ落ちてくることもあった。

転任してきた三十七年に、はじめての二階建て校舎（現在の生物棟）が建ち、三十九年、二つめの二階建て教室が、旧体育館のそばに出来上った。その場所は今のプールの更衣室のあたりで、当時六畳が三間と炊事場のついた「合宿所」と称する瓦屋根の平屋があった。まわりには雑草が生い茂り、日にやけた畳はやぶれ、炊事の汚水もたれながしの廃屋に近い感じのものであったが、夏の合宿には結構役に立った。この合宿をつぶして、昇降口とトイレのついた二階建て六教室、もちろん木造で、どういう設計の、または、建築の都合か、排気口がほとんど役に立たず、悪臭にみちた建物であったが、ともかく新館。「新入生につかわせろ」「いや、三年生に最後の一年をこゝで送らせるべきだ」、喧々誇々、おもえば、なつかしい会議であった。

こうして、つぎつぎに教室が増えるころから、東高の体質も変化を示し始めた。一学年七学級であったものが、三十八年には、九学級になり、四十一年、衛生看護科が新設されると、生徒数千四百数十人というマンモス高校になってしまった。ただ数が増えただけでなく、男女の比率が逆になって、ついには、各組男女混成のままでは、時間割が組めない状態にまで、男子の数が増加し、現在のような変則的組編成になってしまった。校舎のことといい、ほんとうに大きく変わった十年であったと思う。

数年前、私は、故郷に一夏を送った。久し振りの長い滞在であったが、町は私に、よそよそしかった。何故かしっくりとこないのである。散歩の途中、小川の堤が、コンクリートでかためられ、日を白々とかえしているのにふっと気付いた。ここは、昔雑草が生い茂り、中学校に行く朝、ズボンのすそが、露にぐっしょりとぬれたところである。私は、町をあっちこっち歩いて、そして失望した。毎日のように釣糸をたれたあの利根の川岸は、埋めたてられて、新しい名の町になっていたし、親の目を盗んで買い喰いをした暗い土間の駄菓子屋は、きれいなショーウインドの明るい店になってしまった。名も知らぬ人に、ただすれちがうのが楽しみで通ったあの小道も、区画整理で、今はない。私は、故郷を遠く感じた。

「日に新たなり」、進歩発展のために古いものが捨て去られていくのはやむを得ないことであろうが、昔を偲ぶ「よすが」が、だんだん消えていくのは、さびしいものである。改築途中で卒業した諸君は、母校をどう偲ぶのであろうか。今こうして、この十年の変化のお蔭で、施設面では快適な学校生活を享受しているわけだが、時々、心の隅で、あとかたもなくなった合宿所や、薄暗い雨の日の教室や宿直室、不便であったがために起こったもろもろの事柄をなつかしむことがある。私にも、老化現象が始まったのであろうか。

# 通信の四季

教諭　須賀　賢悟郎

ここ三、四年の間に、いくつかの建物を除いて、木造平屋建の古い校舎はとりこわされ、鉄筋四階建のモダンナ校舎に変わってしまった。そのいくつか残った建物の一つ、正面玄関の丸い植込みのところを左に曲がって一番はずれ、四角い鉄骨二階建の小じんまりした建物こそ通信制のメッカである。ちょっと声をかければ、隅から隅まで届いてしまうほどの一階の職員室に、二十名の全職員が机を並べてひしめいている。一見雑然としているようだが、すべてが無駄のないようにうまく配置されて、ここから四季を通じて通信制のほとんどすべての仕事が展開される。

春四月。グラウンドの周囲のツツジや通信制職員室の窓際の花壇に草花がいっせいに咲き出す頃は、入学者の面接試験も終わりに近く、二階の小部屋では連日のように志願者が先生にいろいろ質問され、神妙にかしこまっている。毎年こうやって四百名前後の新入生が入学するが、試験のたびごとに次第に脱落していき、卒業する者はその半分もいないのだ。通信制という制度のなかった戦前戦後、働きながら学ぶ若者は夜間部とか第二部とか言われた夜学校に通ったり、独学して資格試験を受けたりしたが、妙に悲壮感がただよっていたものだ。今の通信制は学費も安く、何年かかろうと自分のペースでかなり自由にやっていけるし、その気になって努力すれば、いつ頃卒業できるかという見込みも立つのだから、もっとのびのびしているはずだと思うのだが―。

春は、入学式、新入生のオリエンテーション、単位修得数による新しい組編成などで、あわただしく過ぎていく。校庭のニセアカシヤ、スズカケ、柳、ザクロなど、ツンツン伸び出す若葉の緑が、ういういしい未来の輝きを感じさせる。

梅雨の季節になると、学校のあっちこっちにユッカが、あの先のとがった堅い葉の間から長い花茎をのばして白い花をつけ、裏庭の隅などにアジサイが咲く。校長室と衛生看護科との間に美事なアジサイがあったが、衛生看護科の新設のとき引き抜かれてしまった。そばにある大きな柳も、校舎新築のときブルドーザーで根こそぎ掘り出されてしまうのではないかと思ったが、幸いにも残され、今その豊かな髪の毛を風になびかせている。東高随一の名木であろう。

梅雨が明けると、そろそろ御殿場での合宿スクーリングの準備が始まる。いつか御殿場までの行き帰りのバスで、石毛卓雄校長と山口道夫先生といっしょだったときがある。「通信の生徒をどう思いますか。」と石毛校長に聞かれたので、私は、「通信の学校行事はすべてぶっつけ本番であり、それにおたがいに顔もよく知らない者が多いのに、予定どおりうまく行くのを不思議に思う。」というような返事をした。その石毛校長も山口先生も今は故人になられてしまった。

夏の花で思い出すのは、バス停留所「東高校前」のところにあったネムの木である。こんなところにこんな花が、と意外な気持ちだった。山川達二先生（元通信制主事）が、「あの薄紅色の花がボウッとかすんだところなんか、かんざしかなんか髪にさしたようでなんとも言えないねえ。ああいう繊細な花も都会からどんどんなくなっていくんでしょう。」と諦めたように言っていたとおり、道路工事で倒されてしま

った。

月に二回ほどあるスクーリングの日のほか、ふだんは生徒は来ないし、ほとんど職員室にばかり閉じこもっているので、なんとなく外の変化や様子に心を引かれ、ふらっと職員室から外に出てみたくなる。毎年相変わらず賑やかなのは蝉の声くらいであろう。一度コーモリがグラウンドにピラピラ飛んでいるのを見かけたが、スズメ、蝶、蜜蜂、たまに来る野鳥のほか、これといった目ぼしいものはなく、トンボなどもめったに見かけない。机に向かって添削ばかりしていて疲れると、「アーア」と背をのばしたり、たいした用もないのに立ったり坐ったり、お茶を飲みに席を立ったついでに人にもついでやったり、便所に行きながらラジオ体操のまねをしたり、すべて我々の気分転換であり、一種の健康法なのである。生徒の来るスクーリングの日は書入れどきだ。授業やホームルームのほか、生徒の個人的な苦情や相談なども一ぺんに処理するので、職員室の雰囲気も静から動へ、生徒がひっきりなしに出入りして、戦場のごときあわただしさである。

秋は、運動会、修学旅行、定通文化大会などの行事がある。面白いのはザクロの実だ。生徒はかねてから目をつけているのであろう、大きなうまそうなやつから順にいつの間にか消えていく。こっちはもっと色づいて食べ頃になったらとひそかに待っていたのに。

四十四年の運動会の前日、雨がクランドにたたきつけるようにザアザア降っていた。実行委員の生徒が何人か仕事の都合をつけて学校にやって来て、「これじゃ、明日はだめだな」と言いながらも、二階の大部屋でせっせと運動会の準備をしていたときの姿が印象的である。ところが一夜明けて運動会の日は、抜けるような青空であった。私は三十九年に東高の通信に来てから八年になるが、最初の頃、通信の生徒はほとんど私服で、それに女性の方が多く、巷の若者がそのまま教室に入り込んで来たような色とりどりの色彩には、何か感動めいた驚きを感じた。年齢も十代から四十代までさまざまなので、とくにホーム・ルームの時間などは、どんなふうに、話したらいいのか困ってしまったものだ。三年ほど前までは珍しかったミニスカートも、最近では洋裁学園の生徒を除いて圧倒的多数がミニスカートの裾からきらめく若さを覗かせている。男子も、長髪、もみ上げの長いの、ゲバルト風など、いわゆるカッコいいのがいる。自動車で通学する者も珍しくない。

今でもたまにはあるが、四十三年に優秀な成績で卒業した山崎さんは、子供を連れてよくスクーリングに来た。そんなとき彼女は教室の一番後の席にいた。授業中に廊下や外で遊んでいた子供が、そっと教室の後から入って来て、母親に何事か耳打ちすると、何か言われて納得したようにまた外に出て行くことがあるからだ。

校舎の新築が始まって、一棟と三棟との間、旧校舎の中庭にあった池、芝生、花壇、スズカケなどが次々と消えていくなかにあって、通信制職員室の窓際にある二つの小さな花壇の草花がひときわ鮮やかであった。

冬。あのただでさえ狭苦しい職員室にストーブが入る。もとは不恰好なコークスだきのストーブだったが、今は便利な石油ストーブになり、かなり暖かい。それでも数メートル離れると、暖気の循環が悪いのか、透間風のせいか、しばらくすると足腰がスウスウしてくる。そこで自然に二人三人とストーブの回りに集まって来て、炉辺談話に花が咲く。時事問題、生活的人生論、失敗談、事件、レポートの迷答案…など

たまりかねて飛入りまで加わり、屈託のない情報交換の場となる。我々の臨時ホーム・ルームの時間とも言うべきか。井戸端会議もなかなか妙味のあるものだ。

三月から四月にかけての年度末と年度始めはやはり一番忙しい。卒業式の日にはすでに入学者の面接試験が始まっている。新学年度の学習計画書を出さなかったり、継続手続をしなかったりして脱落しそうな生徒の対策。継続する生徒各個人の新しい受講科目の決定。進級する者、しない者、止めていく者などの各種書類やカードの分類、整理。いろいろな印刷物や毎月発行する「連絡通信」などをいちいち封筒に詰めて発送すること・・・など、まるで会社の営業部かなんかの事務屋ではないかと思ったりする。

卒業式で思い出すのは、四十二年三月、旧体育館で行なわれたNHK学園と合同の卒業式がNHK総合テレビで全国中継されたときのことである。式の最中、風にあおられたカーテンが照明にかぶさり、ライトの熱で突然燃え上がった。それを消し止めた数分後、今度は飛び火で天井の一部が燃え出し、消火器の白い泡が壇上に飛び散った。式は消火のため二度中断されたものの無事済んだが、テレビの実況放送は中止されカメラマンなどがしばらくうつむいてしょんぼりしていた。自分達のちょっとした不注意のため、仕事を果たせなかった悔しさに泣いていたのであろう。

春三月。職員室の窓際の花壇に水仙やデイジーが咲く。ちょっと見のがしてしまうが、花壇の外の砂利のところに、可憐なムラサキ菜ノ花が咲いている。

人事異動が発表されるのはこの頃である。三十九年から八年の間に、校長は四人、主事は三人、教諭は半数、事務職員は全部変わってしまった。通信教育そのものも、集団生、企業連携、多様化などの問題で変わっていくにちがいない。

亡き山口道夫先生はふだんから言っていた。「通信教育の生徒がこれほど多くいるのは、本来、望ましい社会のあり方だろうか。定通教育の振興などと称して、社会が若い労働力の確保に大童なのはよくわかるが、私の理想といえば、働きながら学びたい者はすべて、例えば、午前中は仕事をやり、午後は学校へ行くとかして、とくかく毎日学校へ行って学べることである。そういう意味で、高校の通信教育は定時制教育に発展的解消すべきである。通信教育は、職業教育、社会教育、成人教育に役立つ場として成立することが望ましい」

いずれにしろ通信制の諸君は、妙なコンプレックスなど少しも感じる必要はない。社会が諸君を必要としているのである。諸君こそちっとやそっとの挫折には負けない逞しいエリートであるはずだ。健闘を祈って止まない。

## わがクラス

卒業生　須田　朗

開校三〇周年、おめでとうございます。

東校に入る数年前、三級上の従兄から、東校二〇周年記念の人文字の写真を見せてもらったことがある。高校を出て、何年か経ち、もう三〇周年記念と聞き、時の速さに驚いた。

そう言えば、先日、何年振りかで訪れた東校は、その外貌をすっかり変えていた。鉄筋コンクリート造りの近代的な校舎が、二つも聳えている。我々が三年間学んだ二棟の木造の教室や柔剣道、美術音楽室のあった一棟は、今は全くその影

すらもない。グランドが、辛うじて、昔の記憶を想い出させてくれるだけである。この外貌の変化を目の前に見て、我々が卒業してからも、はや、五・六年の月日が経っているのだと知り、再び驚ろいた。

卒業後の二・三年の間は、例年のように正月になると、三年間担任された先生の御宅を訪れ、仲のよい友人達と酒宴をはっていたが、それもこの頃は、先生の加減やら友人達それぞれの都合やらで、もはや一堂に会して痛飲する機会もほとんどなくなった。皆、それぞれ自分の生活のサイクルを持つようになったのだろうか。又、仲の良い数名の友人同士の間でさえ、こうである。五〇名に近いクラスメイトはどうしているだろう。

高校時代の思い出はと、いざ思い出すとなると、なかなか頭に浮かんで来ない。それでも、いくつか印象深い思い出が、心の中に残っていなくはない。そしてその中心は、何といっても、クラスメイトの事である。

我が校は、前身が女子校だったそうで、三高当時はまだ女子の数の方が多かったようだ。東高と校名が変わった頃から、男子が急に増え、我々が入学した頃は、男子生徒と女子生徒の数は、ほぼ同数になっていた。今も続いているかもしれないが、我々の学年から始めて、一年生では、八クラス全部が男女混合のクラス、二年生からは、男子クラス、女子クラス混成クラスというような、進路別の変則クラスを組むようになった。私は、二年生から、男子クラスに入ったが、この頃からの思い出が、やはり一番心に残っている。というのは、このクラスは、特に全校に注目されていたからである。けれども、尊敬の目で注目されたのではなく、むしろ、悪名が高かったといった方がよいだろう。かくいう私が、先ず第一にそうであった。

修学旅行の時である。私はその頃生徒会長をやっていたので、旅行の団長にさせられた。団長は、旅先でも仕事が多く、自由に行動する時間があまりなかった。それでも、色々と寸暇を惜しんでは黙って、かってな行動をした。集合時間には、常にまず最初に、集合場所を決めなければいけない役なのにこの秘かな自由行動で思わぬ時間を食い、発車に遅れそうになったこともあった。京都では、帰宿時刻に遅れ、先生に大目玉を食い、翌夕は、罰として自由時間を取り上げられたりもした。とんだ旅行団長であった。

生徒会の活動でも随分と無鉄砲な所があった。多くの先生方の反対を強引に押し切って、喫茶店やエレキ演奏を、文化祭や予餞会のプログラムの中に初めて入れたり、又反面では、多くの生徒の反対をよそに、生徒会総会の定員数を半分に減らしたりもした。先生方に対しても、生徒諸君に対しても、あまり良い生徒会長ではなかったようだ。その他の、生徒会役員の主要な人々も、悪名高い我がクラスの出身者であったので、クラスの雰囲気が、生徒会活動にも反映したのかもしれない。又我々のクラスには、運動クラブのキャプテンも多かった。何となく一癖ありそうなクラスであった。

昼食時前の休み時間に弁当を食べる早飯組もいるし、柔剣道場裏の空き地で、角棒のスティックを持ち、木片のボールを打って短かい休み時間を遊んでいるホッケー組もいた。私もこのホッケー(?)の仲間によく入ったが、上履きのまま下へ降りるので、小使のおじさんに見つかって、追いかけられ、垣根を越えて、校外にまで、大挙して逃げた事もあった。その次からは、おじさん用の見張りまで立てた。

あるいは又、クラス委員も含めて、何名かが喫煙で停学処

分になった。今でこそ言うが、これは氷山の一角で、半数近くが喫煙経験者だったようだ。冬など、休み時間に吸った煙草の煙を、授業開始直前に窓を開けて、懸命に追い出している風景をよく見かけた。ホームルームの時間に、喫煙の是非を真剣に話し合ったりした。

三年生の最後の文化祭の時であった。発表会にクラス出演しようということになり、毎日遅くまで練習したことを覚えている。当日は、唯一のクラス出演とあって、野次は飛ぶ、物は飛ぶの大反響だった。中には、テープだけでなく、トイレットペーパーや胡椒まで舞台に投げた生徒もあった。その生徒が他校の生徒だというので、終演後裏庭で大喧嘩しそうになった。

思い出せば切りがないが、ともかく大変なクラスであった。悪い事をする時にはすぐまとまり、一致協力した。男子クラスだったから、多分知らず知らずのうちに、一種の蛮カラがクラスのモラルになっていたのかもしれない。今から思えば随分無茶な事をしたものだと思うが、不思議とそういう悪事が印象深く心に残っていて、高校時代を思い出すと、必ずまず第一に、あの無茶なクラスメイト達が頭にうかぶ。多分その理由は、他人の目はともかく、少くとも我々自身が、一人一人自分の思ったことを伸び伸びとやり通したからであろう。勿論、だからといって楽しい高校生活を送るために、悪事を勧めるつもりはない。それぞれが、平々凡々にでなく、自分自身にとって本当に悔いのない高校生活を送ることが、何よりも大切なことだと思う。このことは、何周年記念であれ、変わらないことであろう。

（第一七回昭和四〇年三月卒業）

# 思い出すこと

卒業生　石橋　まつ子

今年は東高が三十才になるとのことで「文章を」と頼まれてはみたものの、私は学生時代から筆をとるのが好きでなかった。だから筆が走るままにまかせてみようと思います。

今私は教える立場にある職業についていますが、考えてみれば筆に関係があるので、よくこの仕事をやろうと思ったものと不思議な気もしますが、それ以上に魅力を感じるものがあったように思います。

今年で三年目。まだまだ若いつもりで、小さな子供たちと毎日を過ごしていると、自分の年を忘れてしまう。そんな時町などで高校時代の友達に逢い「しばらくぶりね。何年ぶりかしら。」などと会話が始められ「五年ぶりかしら。」なんていうと月日がそんなに過ぎたのかしらと思い、ふと現実の年を感じるのでした。

卒業して、学校の近くを訪ねるたびにりっぱな校舎に生まれかわっていき、うらやましく思うのです。プールもでき、高校生はカッパになり泳いでいることでしょう。今の高校生はりっぱな施設をおおいに利用して何か得るものを自分でさがすと良いと思うのです。

私たちの高校時代を思い出してみました。高校受験の時、ベビーブームだから大変狭き門ですと言われながら入った学校、私達の年代をはさんで二、三年続きました。これは一生ひびきそうです。定員がふえたとのことで教室も足らなくなり、新しい木造校舎を作り私達がはじめてその教室に入ったよう

に覚えている。その頃いちばん印象に残っているのは一時半。いつも国語の朝比奈先生の授業の時ちょっとの休みをとる。校舎のうしろにある引き込み線に汽車が通る時間なのです。日に一本位しか通らなかったのではなかったかと思います。今の世の中はSLブームなどと言ってめずらしがられている。その頃も汽笛を鳴らして通る汽車もめずらしかった。

二年の夏、生徒会の役員任期が半年になり、私も生徒会役員の経験をした。このことが私が教える立場の職業をやっている上で生きていると思う。消極的な私だったが多少なり積極性が出てきたことからも。それまでは、東雲祭も外から見ていたようですが、自分達が東雲祭を催しているんだなと思いました。

私達が三年になる四月から東高に衛生看護科が設けられた。東高にはいろいろな科が集まる。ふしぎだ。

三年間かよった東高。物理室・化学室に電気がついていたのか、わからない。というのは前の先生がかすんで見えることがたびたびだった。でも話しがおもしろいのを覚えている。そういえばあの用務員さんはいまでもいるかしら。東高の全部の人が「アポロさん」と呼んでいたのではないでしょうか。夜おそくまで東雲祭の準備をしていると「しめてしまうぞ。」とどなる。そんな時ほんとにこわかった。でもいまだになつかしい。わたしの担任の先生も実にりっぱな先生だったと思います。時々夜おそくまで仕事をしている時思い出されるのです。夜二時頃までは自分の勉強を毎日して朝五時すぎに家を出るそうです。少しでも見習いたいと思いながら二日位やるのですが、そのあとはもう続かないのです。授業の時いろいろな先生に教えていただいたけど、勉強以外の話をした先生は数少ない。やはり今思うと、なぜ自分から話をしにいかなかったのかとくやまれます。

私達が高校を卒業した頃でしょうか。社会では大学紛争と呼ばれる動きが出てきたのは。東京大学の安田講堂に始まり教育大、日大と輪が広がっていった。中には一年近くも休校になり、大学が勉学の場ではなく闘争の場と化したところもあった。私は直接その立場に立つことがなかったせいかもしれないが、理解しがたい点が多かった。この波が高校にもやってきたようです。社会に出ても高校生であっても、どうしたら人とよく交わることができるかを考えることが大切なことだと思う。また、卒業して東高の同窓生になり、だれでも母校を思う気持は多少なり持っているでしょうけど、遠のいていく人も多いことでしょう。そういう人にもいつかはまた母校を思い出す日がきっとあることでしょう。私もそのひとりかもしれません。

（第十九回昭和四二年三月卒業）

## 思い出－そして今

卒業生　長妻啓子

千葉東高衛生看護科第一回卒業生とは、まぎれもなく私達の事ですが、当時この看護科を知っていた人はそう多くはいませんでした。あたりまえのことですが、東高自体は、旧三高と言えば土地の人ならだれでも知っていました。卒業して二年半になります。少しは世に知られるようになったことでしょう。少なくとも私達の仲間の近くにいる人達、看護科をさがし歩いた人達にはです。特に印象に残ったことを書くとな

ると思い出がたくさん出てきてなかなかまとまりませんが、そのいくつかと現在の心境を書いてみたいと思います。

私達は、いわば新しく伝統を築きあげなければならない立場だったのだと思います。出来ればよい伝統をです。でも一回生としての誇りや大きな責任感などあったかしら？ただただ夢中ですごしてきた感じがします。先生二名、生徒三十名で出発し、二学期には一名増え三十一名という理想的とまでいかなくても、それに近いクラス構成でした。今思うとほんとうにこじんまりした感じで、クラスに余裕がありました。あるクラスの男の人が、衛看の女の子はみんな同じようにみえる（どうみえたのかはいいませんが）ドングリの背くらべみたいだと、一感想めいたことをもらしたことがありました。なるほどと思ったものです。何となく注目されているようで、目立たない常に自分たちの殻に納まっていて抜けきれなかったところがあったようです。ある一面では、おもしろみのないクラスだったのかもしれません。みんなで衛看は孤立しているのではないかと心配したこともありました。当然のことだが、普通科とは違う事を行なっているし、女性だけのクラス、第一回生、看護婦の卵等々が、私達自身、意識過剰だったのかもしれません。それも実習が始まり、後輩が出来てから話題に上らなくなってきました。

初めての校内実習、たしかベット作りをした覚えがあります。先生の注意、その一つ一つが今でも、思い出せるような気がします。薄ブルーに、白カラー、白カフスをつけ、一生懸命髪をアップにし、今はもうない当時第一棟の実習室へ、人にみられるのを気にしながら、恥かしそうに、いそぎ足で行ったのです。一人で実習衣のまま校内を歩くのが恥ずかしかったものです。ここ狭しと並んでいる十床のマットレスに、全部シーツがかかり、ベットが整頓されたとき、何とも言えないうれしさが感じられたのです。そして、ベット作りって大変だなあ、動けない看者さんが寝ていた時、はたしてうまくつくれるのか心配でした。当時は何でも新品の看護用品で、ベッド作りのとき、まだゴムシーツが届いていなかったのです。先生いわく「実際の場ではゴムシーツをつかいます。今はありませんが、みなさん、あるつもりで作って下さい。」何とも実感が全々わかなかったものでした。先生達と共に、時間をみつけては物品の整理をしました。知らない器械、看護用品がたくさんあり、先生に質問しても、とても覚えきれるものではありませんでした。未知への希望に燃えていたのでしょうか？しかし授業中のウツラ・ウツラ、とても気分のいいものでした。おしゃべりをして注意されたこともありました。又課目の多いことにはおどろきました。テストのときには、いけないと思いつつ、何課目か手をぬいたりして赤点など取ったり、でも一生懸命勉強しても点の取れなかった解剖生理学、一番苦労したと思います。先輩がいなくて、とまどうことの多かった私達は、せめて後輩には、よき先輩でありたいと気をつかっていたものです。

第一期生として、ぜひ参加したかった文化祭、どんな形でもいい、参加したという気持ちがほしかったのです。話し合いの結果、結局私達がいるときにということで、やることに決定し、一・二・三年合同参加になりました。半年も前から資金を集め、貯金して、出しものを討議し、着々と進めていきました。当日場所もよいせいか、血液型判定、血圧測定、映画に人気集中し、まずまずの成績でした。ある先生は、この映写の為に映写法を習得してくれ、先生方の協力もひとかたならないものでした。始めてにしては大きくやりすぎて、

まとまりがなかったような気がします。でもとにかく、やり上げたという満足感がありました。

現在、三十一名はほとんどちりぢりになってしまいました。結婚した人もいるし、保健婦、助産婦の道へ、又働きながら夜間の看護学校で勉学にはげんでいる人も、私のように正看で働きはじめて、半年になる人もいます。BGになった人もいます。青春時代の何ページかを一緒にすごした仲間達、これからもずっと看護をみつめていきたいものです。経験は何ものにも変えがたい、貴重なものです。ただ何となくというのではなく、その経験に合った学び方があるはずです。さて、そうすると、もっと本を開いても当然のはずですが、ところがなかなかこれは大変なことです。意志薄弱というのでしょうか、初心を忘れたいというべきなのでしょうか。何ということもなしに、半年すごしてしまったようで、このまま一年二年とすぎていくのかと思うとやりきれなくなってしまいます。何となく、自分自身が頼りなく、秋の夕暮時、感傷的になったり、深く考え込んだりしてしまいます。自分の進んできた道、よかったのだろうかと不安になり、とはいっても、他の仕事に移ろうという気はさらさらないから不思議です。やはり看護に何かしらの魅力とおもしろさがあるのではないでしょうか。人間相手の、ほんとにこれでいい、そう思うことのない職業だと思っています。衛看には、白衣の天使にあこがれたわけでもなく、これといったすばらしい動機を持って入ったわけでもありませんが、今は、よかったとほんとうに思っています。クラス会のとき集まった仲間達、それぞれの場で、一生懸命生きていることを知り、新しい気持もわいてきました。東高もすべて校舎が新しくなり、後輩達もきっと希望を持って勉学にはげんでいることと思います。「頑張ってよい看護婦になって下さい。でも、現実はきびしいですよ。」と私達は言いたいと思います。

（衛生看護科第一回昭和四四年三月卒業）

## 三十周年にあたって

三年五組　山崎有子

創立三十周年。この長い年月を経て、現在の東高があることを思わずにはいられません。昭和十六年に千葉市立高等女学校として設立され、三十年の間には戦争を味わい、戦後、現在までにいろいろな喜び、悲しみを見てきたのでしょう。

しかし、さまざまな思い出を含んでいた木造の校舎はなくなり、現在は、新しく鉄筋の設備の良い校舎に変わりました。また体育館も、今もなお使っている古いものとは別に、バレーコート二面を使用できる広い体育館が今年完成しました。新しい体育館は明るくて気持ち良く使えるけれども、旧体育館には郷愁というものが感じられます。先輩たちがここで体育の授業を受けたと思うと、私たちも同じ場所で、飛び箱を、マットを使用し、バスケットを、ダンスを行なったんだと思う日が、そしてそれらの日々を懐かしく思う日がすぐ来てしまうんだと思われ、古い体育館のこわれた壁板をも、脳裏に残しておきたいと思う時があります。もうじき卒業する私にとって、そういう思いが身近なものとなって、ときには、不安にさえなってしまいます。

私が一年生の時には、まだ旧校舎が一棟残っており、特別教室や事務室、校長室として使用されていました。それは暗

く、歩くと床がミシミシときしり、雨が降れば、雨漏りがしそうな古い建物ではありましたが、そこには、また何とも言えない伝統という古めかしさが感じられました。その校舎も、今では取りこわされてしまい、先輩がたの思い出の教室はなくなってしまいました。しかし、時代が変わってゆくのですから、古いものが新しいものに変わってゆくのはあたりまえなのかもしれません。

ところで、私たち青春時代には、いろいろなものに対して不安や疑問をもっています。現在の教育に、人生に、友情にと、いろいろな方面の物事に興味を示し、考え、悩む時期だと言えるでしょう。そんな中で、私たちが入学したころには、学生運動が非常に盛んになり、大学の封鎖、デモなどが頻繁に起こり、世間を騒がせていました。私たちの東高でも、一部の生徒によって、封鎖されたことがありました。わずか半日か一日たらずのことでしたが、そのことが、全校生徒に一つの問題を真剣に考えるという機会を与えてくれました。

今では、目立って行動する人も減ってはいますが、高校生活において、勉学するだけでなく、いろいろなことを考えてみても良いと思います。学生運動の是否はわかりませんが、何でも知ろうとすることや、仲間同士で討論することは必要なことだと思います。

そしてそれが、東高をますます発展させてゆくのだと思います。よりよい学校生活を作ることこそ三十周年の伝統にこたえることだと考えています。

# 衛生看護科に思う

三年九組　猪俣照美

衛生看護科が、この東高校に設置されて今年で六年になる。ただなんとなく入学し、その日暮しをしてきた無気力な毎日。そしてこの私は、看護学生でもあり高校生でもある。しかしこの高校生というのも単なる肩書きにしかすぎない。またこの約二年半の間に、入学当時感じたKというバッジ、水色の制服に対する引けめえも看護科に対しての偏見なども今はもうすべて慣れの中にうすれていってしまっている。しかしながらここで今一度衛生看護科というものについてみつめ直してみようと思う。そもそもこの衛生看護科は、看護婦不足を補う為のものとして試験的に設けられたものである。そして、これには、高校卒と准看護婦の受験資格とを同時に得ることが出来るという利点をもっている。しかもその後二年の修業年限で正看護婦になれる。しかしその反面三年という期間に高校生としての一般的な教養と看護学とを習得しなければならないのだ。その為一般教養と専門科目とに要される時間も必要最低限度のものとなってしまう。そのような理由で高校卒の資格を有すると言っても、実際に高校卒の資格を有すると言える程充分な知識を得られる事が出来ているのかどうか疑問だ。専門教科についてもそれは言える。したがって当然校外実習においても他の看護学生に比べて、あらゆる面において差が生じてくる。しかしそのような技術的な面の差こそあるにせよ、この校外実習は、看護というものを通して私た

ちに、高校教育にない人間的な、たいせつなものを教えてくれる。例えば、病院ではあたりまえの事のような人間の死に直面して人間の存在というものの意味を、いかなる精神も滅びゆく肉体の前において無に等しいという事を、深く考えさせられた。また社会の中でいかに対人関係というものがむずかしいか、協調・協力というものが大事であるかという事を感じさせられた。そしてこのような一般病院、身体障害者施設、精神病院など健康な精神と体をもつ人々にとって日常かけ離れた忘れられがちな存在である所でのこのような体験は、卒業して将来看護婦になるならないにかかわらず、人生においての貴重な体験になったのではないかと思う。また高校生だという安易な気持ちからなかなかぬけきれない私たちですが、同時に看護を学ぶものの一人であるという自覚も忘れてはならないと思う。普通科とともにあってこの衛生看護科というものの特殊性、目的、自己のおかれている立場などはとかく忘れられがちなのではないかと思う。

最後にこの東高校衛生看護科が質より量の看護婦養成とならぬよう、そして社会に立派に通用する看護婦となる養成教育の場として、より発展する事を願う。




東雲祭風景（話研）



耐寒マラソン（四十三年一月）

# 十年一昔

卒業生　椎名礼子

長かった秋風もやみ、このところよいお天気が続く。洗濯をしたり、ふとんを干したりしながら、ふと幸福な自分に気がつく。と同時に、学ぶという事からしばらくご無沙汰をしていた自分にも気がついて、通信教育時代がなつかしく想い出される。

十年一昔というが、一昔なんてあっという間に過ぎてしまった。通信教育というものがどんなものかよく知らず、学びたい一心で、職場の先輩につられて東高の門をくぐったのが昭和三十六年の三月、そして四月の入学式。同じクラスに従兄がいるのにびっくりし、心細さで緊張していた私に勇気をあたえた。

四年間にあったいろいろな行事やできごとは、一つ一つ私の生活の軸になり、私の生活のすべてともいえた。月一回のスクーリングでは、様々な年代や職業のクラスメートに会えるのが楽しく、又、レポート作成の相談をし合ったりした。一番楽しかった思い出は、何といっても合宿スクーリングであろう。毎年御殿場の青年の家で過ごした数日は、のびのびとした中にも規律正しく、学生であることを謳歌したものだ。四年の間に友人達と地区学習会を設けてリーダーシップを養い、銚子地区スクーリングにも出席して、初対面の仲間と積極的に話をし合う努力もした。

私は学校の図書館に勤務という恵まれた条件にあって、四

年間は大した苦労もせずに過ぎてしまい、その点働きながら学ぶことの厳しさ、苦しさを訴える人達には大変申し訳ないような気がする。

何でも知りたかったたくましい精神は、卒業して六年半を過ぎた今、少々たるんできている。毎日育児に追われて暮らしていると、世の中の出来事にもそう驚かなくなってくるし、深く考えてみることも面倒になってしまった。これではいけない。まだ若いのだ。学生時代の勉強不足をこれからだって補える。子供のため、夫のため、そして自分の将来のためにもっともっと勉強して、賢い主婦にならなくてはと反省した。

何だか世の中が明るく楽しくなったようだ。張り切って夕方の買物に行ってこよう。

（通信制第九回、昭和四〇年卒業、　旧姓小堤）

## 四年間をふり返ってみて

卒業生　村山富美子

踏まれても踏まれても又芽を出し、根強く自分のある限りの力を出して生きている「雑草」、そんな意味をかみしめながら卒業してから、初めて生徒会雑誌の「雑草」を読みなおしている。とても懐かしくて、いろいろな記憶がよみがえってくる。

私は植草学園へ入学すると同時に東高の通信制の生徒としても出発したのだが、最初は何もわからなくて、通信制といってもピンと来なかった。

一年の始めの頃、学習会の勧誘の葉書が届いたので何の気なしに行ってみたが、そこで初めて自分は東高の通信制の生徒なんだなと感じたのを覚えている。もし一般生と親しく知り合うそういう場所がなかったら、いつまでも私は友達のレポートを写していたり、植草学園の生徒は団体だから何かと学校で甘やかされているというのを聞くと何故か反発したくなって、私達も一般生が勤めている時間は学園で洋裁をやり家に帰れば夜遅くまで洋裁をやることもあり、またレポートも提出し、一般生と同じではないかという甘い考えをもっていたかもしれない。

学習会の中の一般生、教室の中の一般生を見て、私は自分の置かれた環境と全然違う一般生は苦しいんだなということを自然に感じとった。私達には植草学園の授業に洋裁のほか一般科目が入っていたし、先生の援助があった。ところが一般生は勤務中は勉強できないだろうし、毎日教えてくれる先生も身近にいない。頼れるのは自分一人。なんとなくそんな違いがわかってきて、東高の先生方、学習会の先生や仲間達に私は甘えて卒業して来たのかなと思ってしまう。もし普通高校を卒業していたら、きっとこういうことはわからなかったかもしれない。通信でしか学べないものを学んで、それが私の土台となって進んでいて良かったと思う。

学習会での仲間作りの大切さ。現在私は別の通信教育をうけているが、自分一人だと思うようにはいかず、同じ目的をもった仲間がいるということは本当に大切なことじゃないかと思う。高校に、大学に、ただの見栄や虚栄心で入ろうとする人よりも、通信で学ぶ方が何倍も大変で、そういう人達にはわからないだろう。

私は回りに甘えて進んできて、今、社会に出て初めて大変だなと感じている。それに回りの人達もあまり高校とか大学

の通信があるということをしらないようだ。勉強したくても出来ない人、そういう人達に少しでも通信のよさを教えてあげられるのは卒業生の役目だと思う。

（通信制第一五回　昭和四六年三月卒業）

## 通信教育に学んで

通信制三組　野城　てい子

試験が終わって夏休みに入った。夏休みと言っても、私達通信の生徒には、休みなどとのんびりしてはいられない。のんびりしていては皆に追いついてはいけないからである。

中学校を卒業してだいぶたつと、やはり習った事も忘れてくる。十五・六の若い人達がつくづくうらやましいと思うこの頃である。もっと早く気がついたらと思うとくやしい。クラスではほとんど年下の人ばかりらしい。やはり同年配の人がいないのは張合いがない。

困るのはレポートなどでわからない問題がある時で、友達がいたら、相談したり、聞くことができるのにとつくづく思う。今、どうしても自分で考えてわからない場合は、そのままレポートを提出してしまう。そしてレポートが返ってきて先生が書き添えてくれたのを見るという方法をとっている。しかしレポートだけではなく、すべての点でいっしょに学べる友達がほしいと思う。

通信制は全日制の生徒にも学べないいろいろな事も学べる。みんな社会人であり、社会人としての責任、行動、考え方など自分の意見を持っている。教室の雰囲気もちがう。私はスクーリングはたいてい日曜日だが、勤務の都合で、平日スクーリングにくる事もある。平日は人数も少ないので、のんびりした感じ。小さな子供がいたりする。家庭の主婦がきているのだ。子供がいても、結婚していても、学ぼうとする気持ちが私を感心させる。ほんとうに偉いと思う。そういう人達を見て、私も負けてはいられないと張りきっている。

平日スクーリングは、先生とのふれあいも持てる。人数が少ないから、それだけ近づく事ができる。なごやかだ。大勢の人よりも小人数の方がよく頭に入る。それは緊張しているからだと思う。先生と一対一でひや汗をかきながら一生懸命だった事もあるが、それも私には大いにプラスになった。その時間だけではなくて、ほんとうに頭に入るからなのだ。

試験が終わるたびにホッとする。こんな気持ちは学生でなくては味わえないかもしれない。スカッとさわやかな感じだ。若いうちは進んで苦しさを味わいたいし、楽はもっと年をとってからしたい。若い今のうちに、いろいろな自分の知らない事を学んでおきたい。一歩でも前進していくのは、ほんとうに満足な生き方だと思う。

今、私が通信で学んでいる事は、妹と友達だけしかしらない。最初は、はたして最後までいけるかどうか不安だったから、だれにも内緒で始めたのだが、妹に知れてしまった。今では彼女が良きアドバイザーになってくれている。数学や英語のわからないところは、少ししゃくだけど彼女に聞いている。無事卒業できるところまでいったら、家の人達にも話してやろうと思っている。きっと驚くだろう。喜んでくれるだろう。最後まで絶対やりとげるという自信は持っているつもりだが、やはりだまっていよう。楽しみはあとにのこしておきたいから。

三年たった今思う事は、この時期が大切だという事。中だるみになりやすい。現に今、私も少したるんでいると思う。レポートに追いかけられている。毎日勉強しなくてはと思っても、疲れて帰ってくると、どうしても手につかない時がある。悲しくなってしまう。みんなどういうふうに勉強しているのかなあと考えたりもする。でも、コツコツとあせらず、マイペースで一歩一歩進んでいこう。今の私は卒業という目的があるから充実している。がんばろうと心にちかって仕事にも勉強にも励んでいる。今に、ああ、通信で学んでよかったなあ、と思う日がきっとくる。いつの日かその日が待ちどおしい。

# 仕合わせ

通信制四組　市村ユキ子

「哲ちゃん、裕ちゃん、仲良しで、おりこうして待っていてね」

「うん、わかった。何時になったら帰ってくるの」

「そうね、四時半頃かな」

「そう。おかあさん頭が良くなるようにうんと勉強してきなね」

え、わかったわ」

クーリングの朝のわたしたち親子の会話である。

長男六才、次男四才、わたしはこの二人の母親であり、通信制課程の高校生でもある。わたしが通信制課程で勉強を始めた頃は、長男は三才、次男は一才だった。子どもの大きくなるのが待ち切れなくて通信制課程に入学したのだが、スクーリングの朝家を出るのが一苦労だった。「おかあちゃん、いっしょにつれてって」泣いてすがりつく子どもを振り切って家を出るのだが、それがつらくて何度休んでしまおうかと思ったか知れない。「大丈夫だよ、心配しないで早く行きなさい」そう云ってくれる夫に子どもたちを託して家を出かけてくるのだが、出かけては来たものの今度は、「今ごろどうしているのだろうか」「泣いて夫を困らせているのではないだろうか」等々、子どもの事が気になって仕方がない。夫だって口では「二人ともおとなしいもんだよ、心配するなよ」などと、わたしを安心させるような事を云ってくれるけれど、あのやんちゃ坊主二人の相手をするのだから、どんなにか大変だろう。日曜日も何もあったもんじゃないだろうに。家の事で頭を一杯にしながら登校するのだが、こんなわたしでも学校に一歩足を踏み入れたとたん不思議に家の事は余り気にならなくなる。それぐらい学校で勉強するということに魅力を感じていたのだ。テストの前などは、勉強する時間が作れなくて、イライラし、わたしの思うようになってくれない子どもを怒ったり、ねむくもないのに無理に寝かせたりした事もあった。子どもにとってこんな迷惑な話はないだろうに。こんな事は覚悟の上で勉強を始めたはずなのに、自分の勝手さに腹が立ったり、後悔したりした。

こんな風にして三年間は夢の様に過ぎた。

そして、長男は今春小学校に入学し、次男は幼稚園に入園した。今では夫や子どもたちに励まされてスクーリングに出かけて来るようになってしまった。登校の途中、夫や子どもたちの励ましの言葉を思い出し、ひとりでほゝえんでしまう。

このような生活の中で、わたしは、学ぶ喜び、知識を得る

喜び、そしてたくさんの人たちと交わえる喜びを持つ事ができたのである。今のわたしは学ぶ苦しみを感じさせない程喜びに満ちている。

仕合わせとは一体何だろう。仕合わせとは、「一般に心身の要求が満たされた状態である。」と定義されている。その人の生活状態、性格、年令などによってその感じ方も種々さまざまであろう。いつも貧しく、その日の暮しにも困っている人にとって仕合わせとは、経済的に何不自由なく暮せる事であるかも知れない。自分の職業に満足していない人にとって仕合わせとは、自分を打ち込める仕事を持つ事であるかも知れない。恋人のない人にとって仕合わせとは、素晴しい恋人にめぐり逢う事かも知れない。もっと小さな事でも、仕合わせを味わう事は限りなくあるだろう。今のわたしにとってやさしい夫や子どもたちに囲まれ、精一杯生きている事が、何ものにも替え難い仕合わせなのである。勿論、通信制で学べる仕合わせも含めてである。小さな仕合わせかも知れないけれど、わたしはこの仕合わせを、両手一杯にぎりしめて生きてゆこう。

## 通信教育に学んで

通信制三組　柾木美子

四、五年前は、とても考えられなかった高校ですが、友人に勧められて東高に入り、いつのまにか三年になりました。

本の重さで肩にあざをつくった一年の時、朝でかける頃になると頭痛がして来るのです。後で聞くと、よく小学生にある「緊張性頭痛」とか。私も小学生なみなのかしら、と悲観した事が忘られません。どの教科書を開いても、聞きなれない言葉、新しい事ばかりで、本当に無我夢中と言う言葉がぴったりの一年間でした。

そしてやっとの思いで二年に進み、その頃になると多少学校にもなれ、友達もでき、頭痛も一年の時ほどではなくなり、当然の事のように学校に来るようになりました。でも三学期に生活が変わったため、雑用が多く、勉強も思うようにはかどらないのでとくに苦しかった。

三年になってからは、卒業まであと一年間だ、二年の時の分まで頑張らなくてはと思いながら、思うように計画が進まないこの頃です。

レポートをやろうとして取り出すと、すぐ睡魔におそわれるのです。足をつねったり、コーヒーで追いはらったりするのですが、三度に一度は睡魔に軍配が上がります。明日の仕事にも影響するから、と都合をつけて寝る事にしてしまう意志の弱い私です。こういう時、本校に進学する際に父に言われた事が頭をかすめるのです。

「なみたいていの努力ではないぞ。卒業まで四年間あるのだぞ。それも若い人達の間でやるのだから、遊ぶ事はもとより、睡眠時間もけずる事に当然なる」もともと体のあまり大きくない私です。「健康に自信があるのならやってみればいい」という父の言葉が、今さらながら思い出されます。

一生のうちの四年間です。それも、遊びではありません。好きな事をするのは、とにかくこの四年間をすぎて卒業してからと思っています。

すっかり忘れてしまった事を思い出し、新しい言葉を覚え、新しい友人もでき、これから先、多少なりとも自分のために、目に見えない厚い壁を乗りこえる事が、私の今の願いです。

# 通信教育に学んで

通信制三組　菅野豊子

希望と不安の入り混じった複雑な気持ちで入学したのが昨今のように思われるが、早三年にもなる。

初めの頃は通信高校講座のテレビを見たり、ラジオを聞いたり、両方やって行ったつもりであったが、日がたつうちにだんだんと疎かになってしまった。「初心を忘れるべからず」もどこえやらの状態である。今思うと、やはり一年生のころが一番真面目だったのではないかなと思う。最近では、レポート提出に追いかけられる有様である。

余暇というと、私などには充分にありながら、いざ勉強しようと本を開くまでには大変な時間がかかってしまう。それだからいつもテストの時に人一倍苦労する。どういうわけか、試験勉強を始めると、趣味や娯楽のほうに心が飛んでいってしまったり、又は物を食べながらやっているうちに眠くなったり、その日はそれで終わってしまう。これと同じような事をいつも繰返す有様です。そんな時は気持ちがすっきりしないものです。

一日一日といくらかずつでも進んでいるならいいのだが、全く前進していない自分に気がついた時に、テストの日が目の前に来ていることがある。どうでもいいという投げやりな気持ちで受けた時は、喜びなどは全然感じられません。わからないながらも一生懸命に勉強をして受けた試験後の喜びは、結果は良くても悪くても、とても嬉しく感じられるものです。

私はこの夏初めて山登りをして強く感じたのですが、それはなんと困難なのだろうという事です。いくら登っても登っても、長時間の休息は許されず、水も充分に飲む事も許されない。一歩一歩着実に前進し、なんと忍耐を要する事かと。登っても登っても頂上は見えず、足がガクガクと震えてきてしまう。自分はどうして何の為にこんな　苦しみながら登っているのだろう、などと思ったりする。だが頂上に着いた時のあの感激は何ともいえないくらいで、山を下りながら、こんなところを本当に登ったのだろうかと思う。

これにくらべると、高校の勉強は大変だと思っていた私は、なぜか自分の怠惰があまりにも多すぎると感じられるのです。許されない怠けもの、醜いものだと思う。私は通信教育においていろいろ知らされました。勇気と希望を持たせてくれ、それには忍耐や克己がとても重要であることを……。

教科書を開いて勉強した日というのは、なんと気が休めて、その一日が充実した一日であったと強く感じられることか。本当に登山のように、一歩一歩前進しないと頂上にはいつまでも着かないのだと思う。

昨年は、次から次といろいろな事が起き、学校はややあきらめた気持ちがありました。郷里の母の入院、その間の父の急死、といろいろ続き、しばらくは本も開く気持ちにもなれなかった。机に向かうと、亡き父を思い出す。だが日がたつうちに、テストの日が近づいて、気持ちがテスト、テストでいっぱいになり、以前のようには思い出さなくなってきました。やっぱり通信教育をやっていてよかった、とつくづく思ったものです。

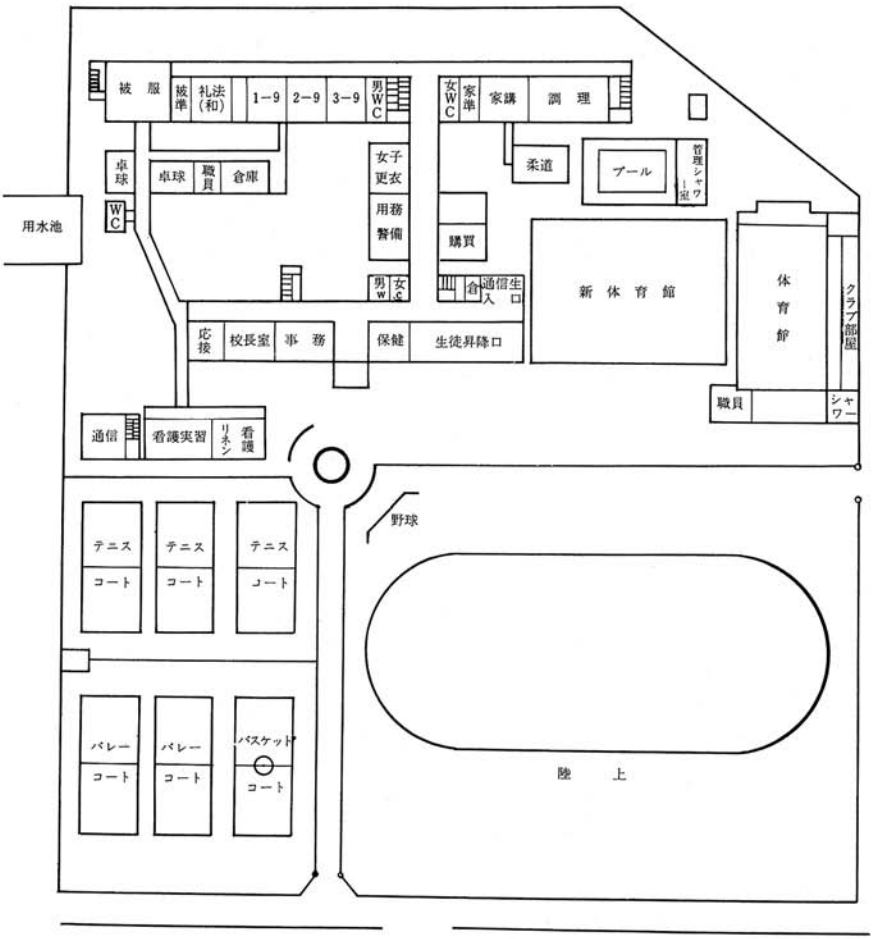
小さな頃には、一時間、一年とか時間的な事にはあまり強く考えなかったが、最近はとても貴重なものであることを感じさせられる。

# 付

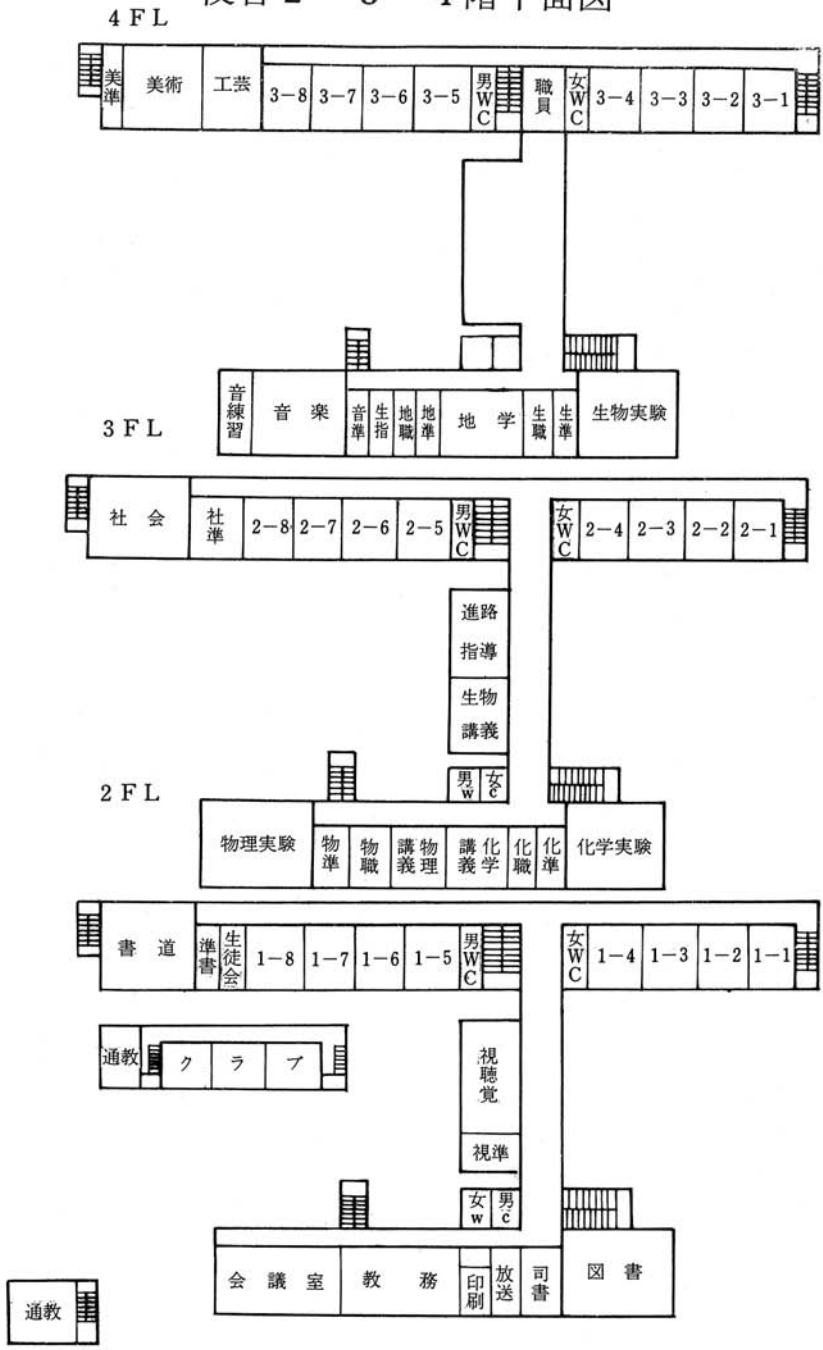
# 記

# 校舎1階平面および配置図

敷地面積　33,594.21㎡
新校舎延面積　9,210.00㎡
プール面積　820.00㎡
新体育館面積　1,449.00㎡



# 校舎２・３・４階平面図


4FL
美準
美術
工芸
3−8
3−7
3−6
3−5
男WC
職員
女WC
3−4
3−3
3−2
3−1
3FL
音練習
音楽
音準
生指
地職
地準
地学
生職
生準
生物実験
社会
社準
2−8
2−7
2−6
2−5
男WC
女WC
2−4
2−3
2−2
2−1
進路指導
生物講義
2FL
男w
女c
物理実験
物準
物職
講義
物理
化学講義
化職
化準
化学実験
書道
準書
生徒会
1−8
1−7
1−6
1−5
男WC
女WC
1−4
1−3
1−2
1−1
通教
クラブ
視聴覚
視準
女w
男c
会議室
教務
印刷
放送
司書
図書
通教

昭和23年度

| 学科 / 科目・単位数 / 教科 | 普通科 | |
|---|---|---|
| | 科目 | 単位数（○印必修） |
| 国語 | 国語 | 9 ○ |
| 漢文 | 漢文 | 2 ～ 6<br>2 ～ 6 |
| 社会 | 一般社会 | 5 ○ |
| | 東洋史 | 5 |
| | 西洋史 | 5 ○ |
| | 人文地理 | 5 |
| | 時事問題 | 5 |
| 数学 | 解析(1) | 5 |
| | 幾何 | 5 ○ |
| | 解析(2) | 5 |
| 理科 | 物理 | 5 |
| | 化学 | 5 ○ |
| | 生物 | 5 |
| | 地学 | 5 |
| 体育 | 体育 | 9 ○ |
| 外国語 | 外国語 | 5 ～ 15 |
| | 音楽 | 6 |
| | 図画 | 6 |
| | 工作 | 6 |
| 実業 | 一般家庭<br>（以下略） | 7 ～ 14 |
| | | |
| 必修科目<br>単位数計 | | 6 科目<br>（38単位） |

昭和２６年度

| 学科 / 科目・単位数 / 教科 | 普通科 | |
|---|---|---|
| | 科目 | 単位数（○印必修） |
| 国語 | 国語（甲） | 9 ○ |
| | 国語（乙） | 2 ～ 6 |
| | 漢文 | 2 ～ 6 |
| 社会 | 一般社会 | 5 ○ |
| | 日本史 | 5 |
| | 世界史 | 5 ○ |
| | 人文地理 | 5 |
| | 時事問題 | 5 |
| 数学 | 一般数学 | 5 |
| | 解析(1) | 5 ○ |
| | 幾何 | 5 |
| | 解析(2) | 5 |
| 理科 | 物理 | 5 |
| | 化学 | 5 ○ |
| | 生物 | 5 |
| | 地学 | 5 |
| 保健・体育 | 体育 | 9 ～ 11 ○ |
| | 保健 | |
| 外国語 | 外国語 | 5 ～ 15 |
| 芸能 | 音楽 | 2 ～ 6 |
| | 図画 | 2 ～ 6 |
| | 書道 | 2 ～ 6 |
| | 工作 | 2 ～ 6 |
| 家庭 | 一般家庭（以下略） | 7 ～ 14 |
| | | |
| 必修科目単位数計 | | 6 科目（38単位） |

昭和３１年

| 学科 / 科目・単位数 / 教科 | 普通科 | |
|---|---|---|
| | 科目 | 単位数（○印必修） |
| 国語 | 国語（甲） | 9 ～ 10 ○ |
| | 国語（乙） | 2 ～ 6 |
| | 漢文 | 2 ～ 6 |
| 社会 | 社会 | 3 ～ 5 ○ |
| | 日本史 | 3 ～ 5 ○ |
| | 世界史 | 3 ～ 5 ○ |
| | 人文地理 | 3 ～ 5 |
| 数学 | 数学Ⅰ | 6 ・ 9 ○ |
| | 数学Ⅱ | 3 |
| | 数学Ⅲ | 3 ・ 5 |
| | 応用数学 | 3 ・ 5 |
| 理科 | 物理 | 3 ・ 5 ○ |
| | 化学 | 3 ・ 5 ○ |
| | 生物 | 3 ・ 5 |
| | 地学 | 3 ・ 5 |
| 保健・体育 | 体育 | 7 ～ 9 ○ |
| | 保健 | 2 ○ |
| 外国語 | 第一外国語 | 3 ～ 15 |
| | 第二外国語 | 2 ～ 4 |
| 芸術 | 音楽 | 2・4・6 ○ 科から6単位以上（全日制のみ）三教 |
| | 美術 | 2・4・6 ○ |
| | 書道 | 2・4・6 ○ |
| | 工芸 | 2・4・6 ○ |
| 家庭 | 家庭一般（以下略） | 4 ○ |
| | 農・工・商・水 | ○ |
| 必修科目単位数計 | | 10 ～ 12科目（45単位） |

昭和37年度

| 教科 | 科目 | 学年 | Ⅰ年 | | | | | | | | Ⅱ年 | | | | | | | Ⅲ年 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 学級 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 国語 | 国語用 | | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 |
| | 国語乙 | | | | | | | | | | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| | 漢文 | | 2* | | 2 | | 2* | | 2* | | 2*2 | | | 2*2 | | | | 2*2 | | | 2*2 | | | |
| 社会 | 社会 | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 |
| | 日本史 | | | | | | | | | | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | | | | | | | |
| | 世界史 | | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 人文地理 | | | | | | | | | | | 3*1 | | | | | 3*1 | | | 3△ | | | 3△ | |
| 数学 | 数学Ⅰ | | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 数学Ⅱ | | | | | | | | | | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | | | | | | | | 3 |
| | 数学Ⅲ | | | | | | | | | | | | | | | | | 3△ | 3△ | | 3△ | 3△ | | |
| 理科 | 生物 | | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | | | | | | | | | | | | | | |
| | 物理 | | | | | | | | | | 3*1 | | | 3*1 | | | | 5* | | | 5* | | | 3 |
| | 化学 | | | | | | | | | | 5* | | | 5* | 3*1 | | | | 3*1 | | | 3*1 | | |
| | 地学 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3*1 | | | 3*1 | |
| | 体育 | | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| | 保健 | | | | | | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 外国語 | 英語 | | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 美術 | 音楽 | | 2° | | | 2° | | | 2° | | 2° | | | 2° | | | 2° | | 2° | | | | | |
| | 美術 | | | 2° | | | 2° | | | | | 2° | | | 2° | | 2 | | 2° | | | 2° | | |
| | 書道 | | | | 2° | | | 2° | | 2° | | | 2° | | | 2 | 2 | | | 2° | | | 2° | 2 |
| 家庭 | 家庭一般 | | | 2* | | | 2* | | | 2* | | | | | | | | | | | | | | |
| | 被服 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 食物 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 増加科目 | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | | 5 | | | |
| 特教活動 | | | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 計 | | | 34 | | | | | | | | 34 | | | | | | | 34 | | | | | | |

昭和38年度

| 教科 | 科目＼学年 | 1 | 2 文 | 2 理 | 2 一般 | 3 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 国語 | 国語甲 | | 3 | 3 | 3 | 3 |
| | 国語乙 | | 3 | 3 | 3 | 2 |
| | 漢文 | | °2 | | °2 | ◑2′ |
| | 現代国語 | 3 | | | | |
| | 古典乙Ⅰ | 2 | | | | |
| 社会 | 社会 | | | | | 4 |
| | 日本史 | | 5 | 5 | 5 | |
| | 世界史 | | | | | |
| | 人文地理 | | | | | ×3 |
| | 地理B | 4 | | | | |
| 数学 | 数学Ⅰ | 6 | 3 | 3 | 3 | |
| | 数学Ⅱ | | 3 | 3 | 3 | |
| | 数学Ⅲ | | | | | ×3 |
| 理科 | 物理 | | | | △3 | ◐5 ◑3 |
| | 化学 | | 3 | 5 | △3 | ◑3 |
| | 生物 | 4 | | | | |
| | 地学 | 2 | | | | ◑3 |
| 保体 | 体育 | 男4 女2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| | 保健 | | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 芸術 | | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 外国語 | 英語 | 6 | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 家庭 | 家庭一般 | 2 | °2 | | °2 | |
| | 被服 | | | | | ◑2 |
| | 食物 | | | | | ◑2 |
| 増加 | | | | | | 5 |
| 特教活動 | | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 計 | | 35 | 34 | 34 | 34 | 34 |

昭和46年度

| 学科 | | 普通科 | | | | | 衛生看護科 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 類型 | | 文科 | | | 理科 | | | | |
| | | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ |
| 国語 | 現代国語 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 3 | 2 | 2 |
| | 古典甲 | | | | | | 2 | | |
| | 古典乙Ⅰ | 2 | 3 | | 3 | | | | |
| | 古典乙Ⅱ | | | 3 | | 3 | | | |
| 社会 | 倫理社会 | | 2 | | 2 | | | 2 | |
| | 政治経済 | | | 3 | | 2 | | | 2 |
| | 日本史 | | | 4 | | 4 | | | |
| | 世界史 | | B2 | B2 | B2 | B2 | | | A2 |
| | 地理 | B4 | | | | | A3 | | |
| 数学 | 数学Ⅰ | 6 | | | | | 5 | | |
| | 数学Ⅱ | | B5 | | B7 | | | A2 | |
| | 数学Ⅲ | | | 3 | | 5 | | | |
| 理科 | 物理 | | B3 | B2 | B3 | B3 | | | A3 |
| | 化学 | | B2 | B2 | B3 | B2 | | A3 | |
| | 生物 | 4 | | | | | 3 | | |
| | 地学 | 2 | | | | | | | |
| 保体健育 | 体育 | 男4女2 | 男4女2 | 3 | 2 | 3 | 2 | 2 | 3 |
| | 保健 | | 1 | 1 | 1 | 1 | | 1 | 1 |
| 外国語 | 英語 | B6 | B6 | B6 | B6 | B6 | A3 | A3 | A3 |
| 芸術 | 音楽 | 2 | 2 | 2※ | 2 | | 1 | 1 | |
| | 美術 | | | | | | | | |
| | 書道 | | | | | | | | |
| 家庭 | 家庭一般 | 女2 | 女2 | | | | 2 | 2 | |
| | 被服Ⅰ | | | 2※ | | | | | |
| 普通教科計 | | 33 | 33 | 33 | 33 | 33 | 24 | 18 | 16 |
| 看護一般 | 看護原理 | | | | | | 1 | | |
| | 解剖生理 | | | | | | 2 | | |
| | 病原微生物 | | | | | | 1 | | |
| | 薬理 | | | | | | 1 | | |
| | 衛生 | | | | | | | 1 | |
| | 看護基礎技術 | | | | | | 1 | | |
| | 食事療法 | | | | | | | 1 | |
| | 看護関係法規 | | | | | | | | |
| 成人看護 | 内科系疾患と看護 | | | | | | | 3 | 1 |
| | 外科系疾患と看護 | | | | | | | 3 | 2 |
| 母子看護 | 母性看護 | | | | | | | | 1 |
| | 小児看護 | | | | | | | 1 | |
| 看護実習 | 基礎看護実習 | | | | | | 3 | 2 | |
| | 成人看護実習 | | | | | | | 5 | 8 |
| | 母子看護実習 | | | | | | | | 5 |
| 専門教科計 | | | | | | | 9 | 16 | 17 |
| 特別教育活動 | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 合計 | | 34 | 34 | 34 | 34 | 34 | 34 | 35 | 34 |

※印選択

## 入学状況

| | 年度 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 募集人員 | 普通科 | 450 | 450 | 400 | 392 | 384 | 376 | 368 |
| | 衛生看護科 | | 40 | 40 | 40 | 40 | 40 | 40 |
| 志願者数 | 普通科 | 594 | 554 | 444 | 506 | 477 | 462 | 484 |
| | 衛生看護科 | | 48 | 43 | 60 | 59 | 62 | 68 |
| 入学者数 | 普通科 | 456 | 451 | 400 | 393 | 378 | 368 | 362 |
| | 衛生看護科 | | 30 | 30 | 40 | 37 | 38 | 40 |

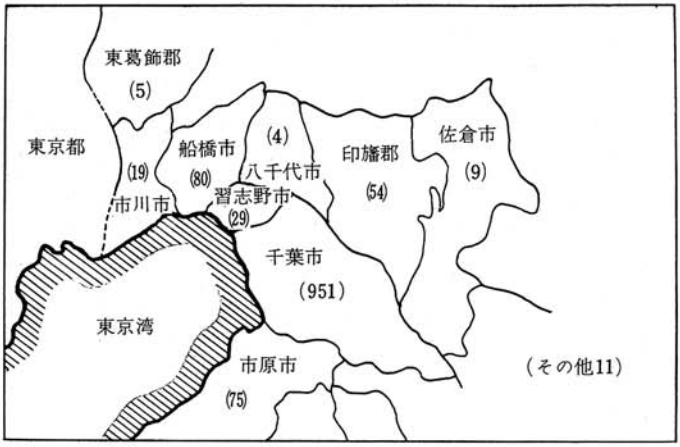
出身中学別（全日制普通科）46. 10. 11現在

| 地区 | 千葉市 | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学校 | 葛城 | 椿森 | 花園 | 轟 | 緑町 | 新宿 | 稲毛 | 蘇我 | 付属 | 加曽利 | 小中台 | 川戸 | 幕張 | 松ケ丘 | 末広 | 誉田 | 千草台 |
| 人数 | 104 | 89 | 75 | 71 | 66 | 59 | 48 | 44 | 37 | 37 | 35 | 33 | 33 | 32 | 32 | 21 | 20 |

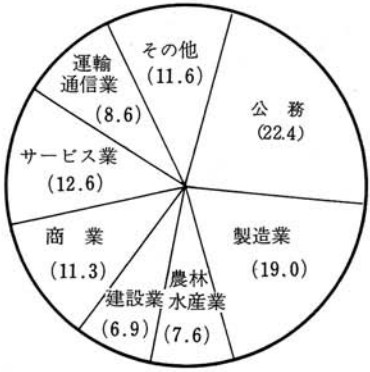
| 地区 | 千葉市 | | | | 船橋市 | | | | 習志野市 | | | | 市原市 | | | | 四道街町 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学校 | 生浜 | 白井 | 花見川一 | 犾橋 | 前原 | 船橋 | 高根台 | 海神 | 習志野一 | 習志野二 | 習志野三 | 習志野台 | 辰巳台 | 八幡 | 五井 | 三和 | 四街道 |
| 人数 | 12 | 9 | 8 | 6 | 19 | 9 | 8 | 7 | 14 | 6 | 6 | 6 | 15 | 14 | 7 | 6 | 43 |

※（注）出身者4人以下はその他とした。その他（95）在籍者数1126人

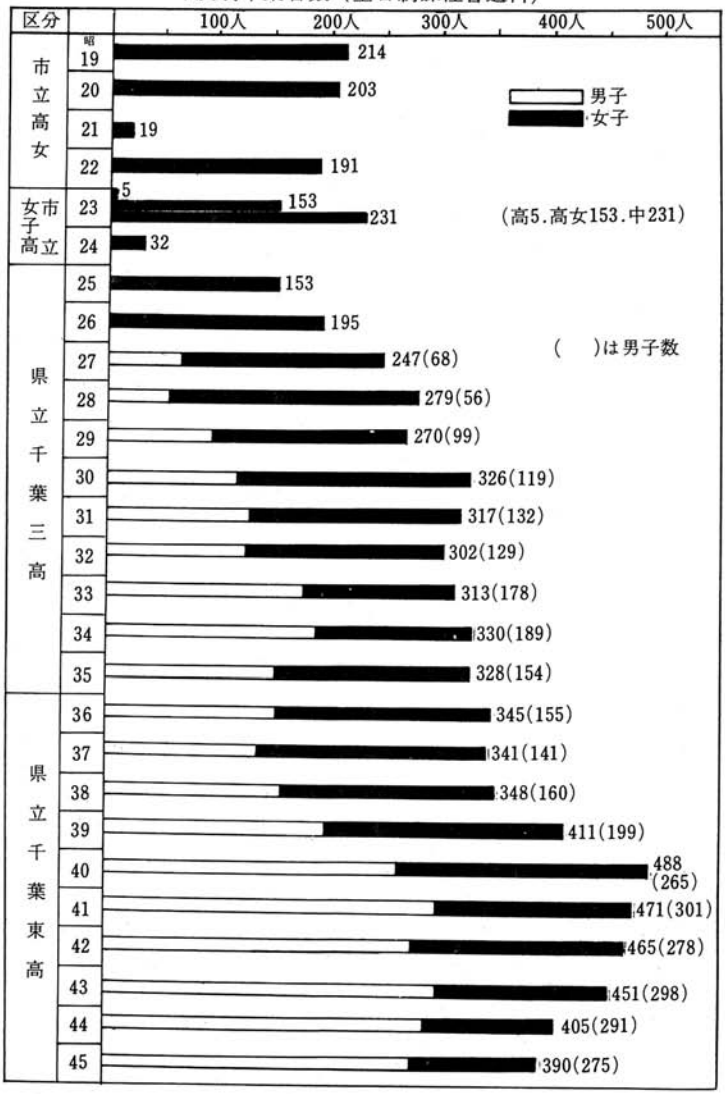
生徒通学区域別（全日制課程）　1,237名（46.5.1）




保護者職業別（46.5.1）
（　）内は%



年度別卒業者数（全日制課程普通科）



## 在　学　生　徒　数

4 6. 5. 1現在

| 一年 | 在籍数 | | | 二年 | 在籍数 | | | 三年 | 在籍数 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 男子 | 女子 | 計 | | 男子 | 女子 | 計 | | 男子 | 女子 | 計 |
| 1 | 21 | 25 | 46 | 1 | 47 | | 47 | 1 | 25 | 23 | 48 |
| 2 | 21 | 24 | 45 | 2 | 22 | 25 | 47 | 2 | 25 | 24 | 49 |
| 3 | 21 | 24 | 45 | 3 | 21 | 26 | 47 | 3 | 36 | 12 | 48 |
| 4 | 21 | 24 | 45 | 4 | 21 | 26 | 47 | 4 | 35 | 13 | 48 |
| 5 | 46 | | 46 | 5 | 23 | 23 | 46 | 5 | 30 | 18 | 48 |
| 6 | 45 | | 45 | 6 | 46 | | 46 | 6 | 48 | | 48 |
| 7 | 45 | | 45 | 7 | 47 | | 47 | 7 | 49 | | 49 |
| 8 | 45 | | 45 | 8 | 47 | | 47 | 8 | 48 | | 48 |
| 9 | | 40 | 40 | 9 | | 38 | 38 | 9 | | 37 | 37 |
| 計 | 265 | 137 | 402 | 計 | 274 | 138 | 412 | 計 | 296 | 127 | 423 |

総計　男子…… 835　　男女計…… 1,237

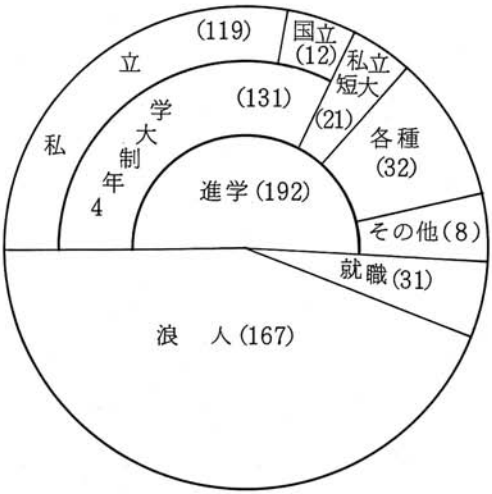
女子…… 402

年度別・男女別入学生徒数・在校生徒数（県立移管以後）

| 年度 | 入学生徒数 | | | 在校生数 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 男子 | 女子 | 計 | 男子 | 女子 | 計 |
| 25 | 69 | 184 | 253 | 69 | 543 | 612 |
| 26 | 47 | 213 | 260 | 116 | 596 | 712 |
| 27 | 101 | 173 | 274 | 207 | 593 | 800 |
| 28 | 116 | 204 | 320 | 262 | 607 | 869 |
| 29 | 129 | 171 | 300 | 335 | 569 | 904 |
| 30 | 137 | 166 | 303 | 370 | 574 | 944 |
| 31 | 187 | 140 | 327 | 456 | 498 | 955 |
| 32 | 190 | 148 | 338 | 504 | 462 | 966 |
| 33 | 166 | 181 | 347 | 528 | 473 | 1,001 |
| 34 | 159 | 190 | 349 | 495 | 527 | 1,022 |
| 35 | 146 | 196 | 342 | 465 | 559 | 1,024 |
| 36 | 163 | 183 | 346 | 470 | 574 | 1,044 |
| 37 | 199 | 210 | 409 | 508 | 597 | 1,105 |
| 38 | 271 | 220 | 491 | 627 | 619 | 1,246 |
| 39 | 300 | 165 | 465 | 772 | 598 | 1,370 |
| 40 | 277 | 183 | 460 | 850 | 573 | 1,423 |
| 41 | 304 | 180 | 484 | 883 | 534 | 1,417 |
| 42 | 292 | 138 | 430 | 872 | 510 | 1,382 |
| 43 | 276 | 154 | 430 | 871 | 478 | 1,349 |
| 44 | 292 | 124 | 416 | 866 | 424 | 1,290 |
| 45 | 273 | 134 | 407 | 846 | 415 | 1,261 |
| 46 | 265 | 137 | 402 | 835 | 402 | 1,237 |

45年度卒業生進路状況（390人）

（　）内は人数




最近4年間の卒業者進路状況

(1) 進　路　概　況　（普通科）　　（46.4.15）

| 年度 | 卒業生 | 進　学 | 就　職 | 家事・家業 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 42 | 466 | 238 | 66 | 5 | 157 |
| 43 | 451 | 201 | 54 | 6 | 190 |
| 44 | 405 | 156 | 37 | 5 | 207 |
| 45 | 390 | 182 | 28 | 0 | 180 |

（衛生看護科）

| 年度 | 卒業生 | 進　学 | 就　職 | 家事・家業 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 43 | 31 | 12 | 16 | 2 | 1 |
| 44 | 31 | 19 | 11 | 0 | 1 |
| 45 | 38 | 26 | 10 | 0 | 2 |

(2) 進 学 状 況 （主な大学）

| 進学先 | 42年度 | | 43年度 | | 44年度 | | 45年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 現 | 浪 | 現 | 浪 | 現 | 浪 | 現 | 浪 |
| 東京芸術大学 | | | | | | | | 1(1) |
| 東京工業大学 | | | 1 | | | | | |
| 千葉大学 | 8 | 2 | 2(2) | 3 | 1(1) | 8(2) | 2 | 1 |
| 東京外国語大学 | 1 | 2 | | 1 | | | | |
| 東京学芸大学 | | 1 | 4 | 1(1) | 1(1) | 1(1) | 4(3) | 1 |
| 秋田大学 | 1 | | | | | | | 1 |
| 山形大学 | 3 | | | 2 | | | | |
| 埼玉大学 | 1 | | 1(1) | | | 1 | 1(1) | 2 |
| 横浜国立大学 | | | 1 | | | | | |
| 東京水産大学 | | | 1 | | | 1 | | |
| 東京農工大学 | | | | 1 | | | | |
| 電気通信大学 | | | | 1 | | 1 | | |
| 新潟大学 | | 1 | | | | 1 | | |
| 茨城大学 | 1 | | 2(1) | 1 | | 1 | 1 | |
| 静岡大学 | | | | | 1(1) | | | |
| 山梨大学 | | | | | | | 1 | |
| 岩手大学 | 1 | | | | | | | |
| 帯広畜産大学 | 1 | | | | | | | |
| 一橋大学 | | 1 | | | | | | |
| 福島大学 | | 1 | 1(1) | | | | | |
| 大阪府立大学 | | 1 | | | | | | |
| 金沢大学 | | | | 1 | | | | |
| 信州大学 | | | | 1 | | | | 1 |
| 宮城教育大学 | | | | 1 | | | | |
| 高崎経済大学 | | | 1 | | | | 1 | |
| 三重大学 | | | | | | | | 1 |
| 宇都宮大学 | | | | | | | | 2 |
| 北海道教育大学 | | | | | | | 1(1) | |
| 東京都立大学 | | | | | | | 1 | |
| 日本大学 | 40(1) | 7 | 27(1) | 6 | 12 | 11 | 22(1) | 7 |
| 明治大学 | 6(1) | 10 | 5(1) | 11 | 6 | 8 | 12 | 8 |
| 早稲田大学 | 2 | 6 | 3 | 12 | | 3 | 2 | 5(1) |
| 中央大学 | 10(2) | 5 | 6(2) | 8 | 4 | 9(1) | 8 | 8(1) |
| 法政大学 | 6 | 5 | 5 | 10 | 2(1) | 7 | 16(2) | 4 |
| 拓殖大学 | 2(1) | | | | 7 | | 1 | |

| 進学先 | 42年度 | | 43年度 | | 44年度 | | 45年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 現 | 浪 | 現 | 浪 | 現 | 浪 | 現 | 浪 |
| 立教大学 | 2 | 1(1) | 1(1) | 6 | | 2 | 4 | 8(1) |
| 慶応大学 | 1 | 3 | | 4 | | 1 | 1 | 1 |
| 東洋大学 | 2 | 1 | 5 | 4 | 9(2) | 4(1) | 10(4) | 3 |
| 東京農業大学 | 1 | | 1 | | | | 1 | 2 |
| 千葉工業大学 | 8 | | 13 | 4 | 5 | 5 | 9(1) | 9 |
| 共立薬科大学 | | | 2(2) | | | | | |
| 星薬科大学 | 2(1) | | | | | | | |
| 東京理科大学 | 2(1) | 4 | 1 | 7 | 1 | 1 | 2 | 4(1) |
| 相模工業大学 | | | 1 | | | | | |
| 流通経済大学 | | | 1 | | | | | |
| 国学院大学 | 3 | | 1 | 7(1) | 1 | 1 | 1 | 3 |
| 青山学院大学 | 4 | 2 | 1 | 2 | 2(1) | 3 | | 4 |
| 明治学院大学 | 1 | 1 | 3(1) | 3 | 5 | 1 | 5(1) | |
| 上智大学 | 1 | 2 | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 専修大学 | 5 | 4 | 4 | 4 | 2 | 3 | 5 | 1 |
| 東京電気大学 | 2 | 1 | 2 | | 2 | | 6 | 4 |
| 女子美術大学 | 1(1) | | 2(2) | | | | | 1(1) |
| 大妻女子大学 | 3(3) | | | | | | | |
| 昭和女子大学 | 1(1) | 1(1) | 1(1) | | | | 2(2) | |
| 共立女子大学 | 1(1) | | 2(2) | | 2(2) | | 2(2) | |
| 実践女子大学 | | | 1(1) | | 1(1) | | 2(2) | |
| 立正大学 | | | 1 | | | 1 | | |
| 神奈川大学 | | | | 2 | | 1 | | 2 |
| 北里大学 | | | | | | | | |
| 大東文化大学 | 1(1) | | 2(1) | 2 | 2 | | 2(1) | |
| 国立音楽大学 | | | | | | | 1(1) | 1 |
| 亜細亜大学 | | | 1 | | | | | |
| 成蹊大学 | 1 | | | 1 | 2 | | 3 | 2(1) |
| 駒沢大学 | 1 | 1 | 1 | | 7(1) | 3 | 3 | 1 |
| 東邦大学 | 2 | 1 | 1 | 1 | | | 1 | 2 |
| 工学院大学 | 1 | 1 | 1 | 2 | | 2 | 5 | 1 |
| 東海大学 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 | 4 | 1 |
| 二松学舎大学 | 3(2) | | | | | | 3(3) | |

| 進学先 | 42年度 | | 43年度 | | 44年度 | | 45年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 現 | 浪 | 現 | 浪 | 現 | 浪 | 現 | 浪 |
| 成城大学 | | | | | 1 | | 1 | |
| 東京家政大学 | | | | | | | 1(1) | |
| 跡見学園大学 | 1(1) | | 1(1) | | | | 1(1) | |
| 国士館大学 | 1 | | 1 | 1 | 4 | | 1(1) | |
| 昭和大学 | | | | | | | | |
| 竜谷大学 | | | | | | | 1 | |
| 関東学院大学 | | 1 | | | | | | |
| 都留文科大学 | | | | | | | | |
| 明星大学 | | | | | | | | 1(1) |
| フェリス女学院大学 | | | | | | | | 1(1) |
| 別府大学 | | | | | | | | 1(1) |
| 京都産業大学 | | | | | | | | 1 |
| 中央学院大学 | | | | | | | 1 | |
| 女子栄養大学 | | | | | | | 1(1) | |
| 創価大学 | | | | | | | | 1 |
| 武蔵野美術大学 | | | | | | | 1(1) | |
| 日本福祉大学 | | | | | | | 2 | |
| 日本社会事業大学 | | | | | | | 1(1) | |
| 防衛大学校 | | | | | | | 1 | |
| その他（短大各種学校） | 86(85) | 2(2) | 73(66) | | 47(39) | 9(6) | 68(59) | 4(4) |

（ ）内女子内数

42年度　現238　浪 82　計320

43年度　現201　浪129　計330

44年度　現156　浪105　計261

45年度　現182　浪107　計284

(3) 就 職 状 況　　（ ）内は女子数

| 業種 | 42年度 66 (49) | 43年度 57 (45) | 44年度 37 (17) | 45年度 28 (14) | おもな就職先 |
|---|---|---|---|---|---|
| 金融関係 | 19 (17) | 14 (13) | 9 (7) | 1 (1) | 千葉銀行、三井銀行、住友銀行、日本勧業銀行、安田信託銀行、日本生命、第一生命、千葉信用金庫、船橋信用金庫、千葉相互、第一銀行、明治生命 |
| 生産関係 | 20 (17) | 20 (17) | 2 | 9 (6) | 川鉄、日本建設、久保田鉄工、旭硝子、三井造船、三井石油化学、古川電工、住友化学、東芝、日立、富士電機 |
| 商業関係 | 9 (6) | 15 (8) | 9 (5) | 9 (5) | 三井物産、伊藤忠自動車、千都日産モータ、千葉日産、千葉トヨタ、野村貿易、三菱地所、日本楽器、日産プリンス、西友ストア |
| 運輸通信 | 4 (1) | 2 (1) | 3 (1) | 1 (1) | 京成電鉄、電々公社、全日空、日本航空 |
| 官公庁 | 2 (2) | 3 (2) | 2 | 0 | 千葉県庁、千葉市役所郵政省、日本海事検定協会、市役所、外務省 |
| サービスその他 | 12 (6) | 8 (4) | 12 (4) | 8 (1) | 東京電力、日本交通公社、近畿日本ツーリスト、ホテルパシフィック、平田倉庫 |

昭和四六年度

# PTA役員一覧表

| | | |
|---|---|---|
| 会長 | 市川安太郎 | 千葉市検見川町二―八二 |
| 副会長 | 下向利雄 | 〃 東本町二五 |
| 〃 | 根本貫修 | 〃 中西町二六〇 |
| 常任理事 | 伊藤英蔵 | 印旛郡四街道町鹿渡九八二 |
| 〃 | 清水辰雄 | 千葉市千草台二―二九―五〇四 |
| 〃 | 菊原邦夫 | 〃 長沼町一六七 |
| 〃 | 鶴見遼 | 〃 花園町一―二二―一一 |
| 〃 | 三須康市 | 印旛郡四街道町栗山一〇五二 |
| 〃 | 鈴木茂正 | 千葉市大宮台一―一七五 棟一〇三 |
| 〃 | 山口滋也 | 市原市宮原四八三 |
| 〃 | 戸田四郎 | 千葉市愛生町八九―二 |
| 〃 | 宮島芳郎 | 〃 長沼町一八七 |
| 〃 | 鈴木純 | 〃 宮崎町四九六―二四 |
| 〃 | 安藤弥吉 | 〃 検見川町三―一八八八―七 |
| 〃 | 塚本達夫 | 佐倉市馬渡一四六一 |
| 〃 | 児玉俊明 | 千葉市穴川一―二―九 |
| 〃 | 千脇五郎 | 〃 天台一―一九―八 |
| 〃 | 石井四郎 | 〃 園生町三九三―一三 |
| 〃 | 玉井敏雄 | 〃 花見川六―一一―四〇六 |
| 〃 | 中村廉 | 〃 弥生町二 |
| 〃 | 小田寿夫 | 船橋市習志野台五―三三―一七 |
| 〃 | 大野利男 | 千葉市作草部一〇四九 |

| | | |
|---|---|---|
| 常任理事 | 福井滋良 | 千葉市武石町二―八七八―三 |
| 〃 | 菊地留蔵 | 〃 轟町一―一三 |
| 〃 | 野本俊夫 | 〃 星久喜一一五八―一五 |
| 〃 | 高橋浩 | 八千代市島田台九九八 |
| 幹事 | 高川四郎 | 千葉市松波町一―四―一三 |
| 〃 | 福岡正博 | 〃 稲毛海岸五―五 三五棟二〇六 |
| 〃 | 木内達弥 | 〃 花園町一六四三 |
| 〃 | 山崎喜久治 | 〃 二―一三―一三 |
| 〃 | 篠崎辰雄 | 〃 若松町三六一―一〇 |
| 〃 | 平野勝二郎 | 〃 稲毛海岸三―三―一一棟四〇三 |
| 〃 | 山本五郎 | 〃 花園町四―七 |
| 〃 | 高木馨 | 〃 稲毛海岸四―一〇―三 |
| 〃 | 勝山文夫 | 〃 黒砂町四―七―一七 |
| 〃 | 草川剛 | 〃 轟町五―七―五 |
| 〃 | 近藤照男 | 〃 千城台北二―四―一八 |
| 〃 | 久保田浅雄 | 〃 朝日ケ丘町三二一五―一〇 |
| 〃 | 高井嘉郎 | 〃 検見川町三―四一七 |
| 〃 | 保立隆男 | 〃 轟町一―一七―一〇 |
| 〃 | 鈴木二郎 | 〃 朝日ケ丘町三二三四―二五 |
| 〃 | 黒川和一 | 〃 椿森町四―三―八 |
| 〃 | 石井昇 | 〃 野呂一七九一 |
| 〃 | 渡辺稔 | 市川市市川二―一二―三 |
| 〃 | 岩井清 | 千葉市川戸町四二一 |
| 〃 | 小倉孝 | 〃 葛城町二 |

| | | |
|---|---|---|
| 幹事 | 吉田隆治 | 市原市八幡一〇二四 |
| 〃 | 斉藤功 | 千葉市新宿町二―三一―一 |
| 〃 | 神子忠 | 〃 弁天町二三五 |
| 〃 | 広方功 | 〃 中央三―一五―一五 |
| 〃 | 岩井健二郎 | 〃 稲毛台町二二―一四 |
| 〃 | 長浜正一郎 | 〃 大森町四八六―一 |
| 〃 | 早川安久 | 〃 幸町二―一六―一三―三〇三 |
| 監査 | 松崎一康 | 〃 葛城町四二 |
| 〃 | 根本隆 | 〃 緑町一―一三―三 |
| 会計 | 根本婦美江 | 〃 〃 一―一三―三 |
| 顧問 | 楠原信一 | 〃 新宿町一―二一四 |
| 〃 | 多田勇 | 〃 亥鼻町一〇六 |
| 〃 | 鈴木潤一 | 〃 吾妻町一―一一 |
| 〃 | 大木静 | 〃 長洲町一―四一 |
| 〃 | 諸川芳雄 | 〃 花園町一八六四 |
| 〃 | 平山滋春 | 〃 登戸町三―一九〇 |
| 〃 | 外川延明 | 〃 本町二―五一 |
| 〃 | 能勢節郎 | 〃 亥鼻町三〇二 |
| 〃 | 内藤貫一 | 館山市山荻一一六 |
| 〃 | 中村作次郎 | 千葉市松波町四―一 |
| 〃 | 澤田繁二 | 〃 葛城町三二六 |
| 〃 | 岩網由雄 | 〃 春日町一―一二―一一 |

| | | |
|---|---|---|
| 校長 | 村田泰次郎 | 千葉市柏井町字追館一五〇四―一四 |
| 校内幹事 | 草葉章 | 〃 千城台東四―二〇七―六 |
| 〃 | 田中進 | 夷隅郡岬町東中滝五五一 |
| 〃 | 安塚正一 | 千葉市松波町二―一三―一〇 |
| 〃 | 松本正子 | 〃 中野町一五五 |
| 〃 | 朝日伊豆雄 | 東金市東金三九五―二 |
| 〃 | 藤本明弘 | 船橋市飯山満町二―六〇二 |
| 〃 | 谷本茂雄 | 佐原市佐原口二〇九七―九五 |
| 〃 | 佐藤敦 | 船橋市宮本町七―九―七 |
| 〃 | 山辺泉 | 千葉市長作町八一一―一二 |
| 〃 | 勝輝夫 | 船橋市海神五―一一七―三 |
| 〃 | 山根茂 | 千葉市作草部町八六四県住二二四 |
| 〃 | 野村松三 | 〃 椿森三―一三―八 |
| 〃 | 黒川泰治 | 習志野市藤崎町五―七―二 |
| 〃 | 高山孝 | 東京都江戸川区松島四―二〇―一四 |
| 〃 | 斉藤光秋 | 市原市八幡九一七 |
| 〃 | 秋山一郎 | 千葉市長沼町三九三―一八二 |
| 〃 | 大山菊代 | 〃 検見川町一―五一六 |

# 職員表

| 職名 | 氏名 | 教科 | 着任年月日 | 現住所 | 郵便番号 | 電話番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 校長 | 村田泰次郎 | 保体 | 昭四四、四、一 | 千葉市柏井町一五〇四―一四 | 二八四 | ○四七四―八三―四四六五 |
| 教頭 | 草葉章 | 美術 | 〃四五、四、一 | 〃　千城台東四―一四―二 | 二八〇 | ○四七二―三七―五二一一 |
| 教諭 | 山根茂 | 国語 | 〃三三、四、一 | 〃　〃　二―二四―二〇 | 二八〇 | |
| 〃 | 羽生正允 | 〃 | 〃三九、四、一 | 〃　小倉台四―二県住二―四〇二 | 二八〇 | ○四七二―三二―九一二三 |
| 〃 | 秋山一郎 | 〃 | 〃三九、九、一 | 〃　長沼町二九三―一八二 | 二八四 | ○四七二―五一―一三五九 |
| 〃 | 岡本正義 | 〃 | 〃四一、四、一 | 佐倉市下志津一六四五角栄団地一一四五 | 二八五 | ○四七二―八九―八二八〇 |
| 〃 | 石井久治郎 | 〃 | 〃四二、四、一 | 船橋市東中山一―六―三 | 二七三 | ○四七三―三五―七七三九 |
| 〃 | 斉藤光秋 | 〃 | 〃四四、四、一 | 市原市八幡九一七 | 二九〇 | ○四七七―四一―〇六二一 |
| 〃 | 貞末貫一郎 | 〃 | 〃四五、四、一 | 茂原市町保三 | 二九七 | ○四七五二―三―〇三一一 |
| 〃 | 菱木道人 | 〃 | 〃四五、四、一 | 船橋市高根公団二六九―三〇六 | 二七三 | ○四七四―六七―八八七八 |
| 〃 | 曽根正之 | 社会 | 〃三六、四、一 | 千葉市千城台北一―九―八 | 二八〇 | ○四七二―三七―六六七〇 |
| 〃 | 黒川泰治 | 〃 | 〃三八、四、一 | 習志野市藤崎町五―七―二 | 二七五 | ○四七四―七二―四四〇九 |
| 〃 | 大木和幸 | 〃 | 〃三九、四、一 | 茂原市東郷九四五―五 | 二九七 | ○四七五二―三―二七九八 |
| 〃 | 勝輝夫 | 〃 | 〃四一、四、一 | 船橋市本町一―二五―三〇 | 二七三 | ○四七四―二二―八五一四 |
| 〃 | 野口宏 | 〃 | 〃四一、四、一 | 千葉市千城台西一―三三―二 | 二八〇 | ○四七二―三七―三二一三 |
| 〃 | 土屋賢泰 | 〃 | 〃四一、四、一 | 山武郡大網白里町大網三〇〇二 | 二九九―三二 | |
| 〃 | 日下部武 | 〃 | 〃四三、四、一 | 千葉市花見川七―九―五〇五 | 二八四 | ○四七二―五八―九四〇九 |
| 〃 | 吉野幸久 | 〃 | 〃四六、四、一 | 茂原市中之島町三三四 | 二九七 | ○四七五二―三―二三七八 |
| 〃 | 高山孝 | 数学 | 〃三五、四、一 | 東京都江戸川区松島四―二〇―一四 | 一三二 | ○三―六五一―四六六五 |
| 〃 | 山辺泉 | 〃 | 〃三七、四、一 | 千葉市長作町八一一―一二 | 二七五 | ○四七二―五九―七一三四 |
| 〃 | 朝日伊豆雄 | 〃 | 〃四〇、四、一 | 東金市東金三九五―二 | 二八三 | ○四七五五―二―三一三八 |

| 職名 | 氏名 | 教科 | 着任年月日 | 現住所 | 郵便番号 | 電話番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 教諭 | 小高正義 | 数学 | 昭四〇、四、一 | 山武郡大網白里町駒込三七二 | 二九九一三二 | ○四七四―七四―八二四五 |
| 〃 | 長谷川滋 | 〃 | 〃四一、四、一 | 習志野市袖ケ浦二―四―一―四一〇 | 二七五 | |
| 〃 | 山川秦二 | 〃 | 〃四二、四、一 | 千葉市小仲台三―一四―四―二〇四 | 二八〇 | ○四七二―五二―八九二六 |
| 〃 | 市原喜裕 | 〃 | 〃四三、四、一 | 茂原市茂原一五五一―七 | 二九七 | |
| 〃 | 中台正 | 〃 | 〃四五、四、一 | 千葉市松波二―一四―三 | 二八〇 | ○四七二―五三―五二四〇 |
| 〃 | 山本守 | 〃 | 〃四五、四、一 | 印旛郡八街町八街に―一三八 | 二八九一一一 | ○四七一―九四―一〇三二 |
| 〃 | 野村典平 | 理科 | 〃三六、四、一 | 千葉市大宮台三―二―三 | 二八〇 | ○四七二―六二―八三五一 |
| 〃 | 谷本茂雄 | 〃 | 〃三九、四、一 | 佐原市佐原ロの二〇九七 | 二八七 | ○四七六五―二―四〇〇九 |
| 〃 | 藤本明弘 | 〃 | 〃四一、四、一 | 船橋市飯山満町二―六〇二―六四 | 二七三 | ○四七四―六五―〇八九六 |
| 〃 | 青山克 | 〃 | 〃四二、四、一 | 千葉市花園町一六一三 | 二八〇 | ○四七二―七一―七四五一 |
| 〃 | 鈴木正躬 | 〃 | 〃四二、四、一 | 印旛郡四街道町大日五二六―三 | 二八四 | ○四七二―八二―四六九三 |
| 〃 | 錦織保夫 | 〃 | 〃四三、七、一六 | 教職員住宅二の二〇一 | | ㈹ |
| 〃 | 木下忠一 | 〃 | 〃四四、四、一 | 〃〃 教職員住宅二―三〇六 | 二八四 | ○四七二―八二―四六九三 |
| 〃 | 佐野誠 | 〃 | 〃四六、四、一 | 〃〃 五二五教職員住宅一〇六 | 二八四 | ○四七二―四二―三七〇〇 |
| 〃 | 庄司拓 | 〃 | 〃四六、四、一 | 千葉市新宿一丁目一三―一四 | 二八〇 | ○四七二―五二―一三三八 |
| 〃 | 野村松三 | 保体 | 〃二八、一二、一 | 〃 松波四―一五―一八熊井方 | 二八四 | ○四七一―九四―一〇三二 |
| 〃 | 野村和 | 〃 | 〃三六、四、一 | 〃 椿森三―一三―八 | 二八〇 | ○四七二―五一―一四〇九 |
| 〃 | 松岡伸泰 | 〃 | 〃三九、四、一 | 船橋市前原東三―二八―一五 | 二七四 | ○四七四―七二―六九〇六 |
| 〃 | 高橋衍 | 〃 | 〃四二、四、一 | 千葉市都町八八一 | 二八〇 | ○四七二―三一―二九二四 |
| 〃 | 鈴木鞆 | 〃 | 〃四二、九、一 | 印旛郡八街町八街に―二三一―三―四 | 二八〇 | |
| 〃 | 佐藤昭勝 | 〃 | 〃四四、四、一 | 千葉市原町七六四―四 | 二八四 | ○四七二―八二―四六九三 |
| 〃 | 安塚正一 | 書道 | 〃一六、三、一 | 印旛郡四街道町大日五二六―三 | | |
| 〃 | 西山タカ子 | 音楽 | 〃四六、四、一 | 教職員住宅二―一〇六 | 二八〇 | ○四七二―五一―一〇五九七 |
| | | | | 千葉市松波二―一三―一〇 | 二七三 | ○四七二―八二―五九三九 |
| | | | | 船橋市海神四―一二―八 | | ○四七二―五一―八六四九 |
| | | | | | | ○四七四―三三―二六五四 |

| 職名 | 氏名 | 教科 | 着任年月日 | 現住所 | 郵便番号 | 電話番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 教諭 | 田野英夫 | 美術 | 昭三九、四、一 | 千葉市生実町一八六三ー二 | 二八〇 | ○四七二ー二七ー九九一一 |
| 〃 | 松本正子 | 英語 | 〃二二、五、三一 | 〃 中野町一五五 | 二八〇ー〇一 | 有線（一六ー四） |
| 〃 | 亀忠夫 | 〃 | 〃三四、九、一 | 〃 朝日ケ丘町三二〇四ー五二 | 二八〇 | ○四七二ー七一ー七八二九 |
| 〃 | 佐藤敦 | 〃 | 〃三七、四、一 | 船橋市宮本七ー九ー七 | 二七三 | ○四七四ー二二ー〇四六二 |
| 〃 | 鈴木二朗 | 〃 | 〃三七、四、一 | 千葉市大宮台四ー一〇ー四 | 二八〇 | ○四七二ー六二ー八八五八 |
| 〃 | 和田稔 | 〃 | 〃三八、四、一 | 〃 あやめ台二ー六ー四〇五 | 二八〇 | ○四七二ー五二ー四一一三 |
| 〃 | 西郡巌 | 〃 | 〃三九、四、一 | 佐倉市木野子二七四ー二 | 二八五ー〇一 | |
| 〃 | 原口与一 | 〃 | 〃四〇、四、一 | 印旛郡四街道町大日緑ケ丘三二八ー八 | 二八四 | ○四七二ー八二ー五九七二 |
| 〃 | 桜井功造 | 〃 | 〃四五、四、一 | 千葉市穴川二ー一一ー二二 | 二八〇 | ○四七二ー五三ー一八三一 |
| 〃 | 椿行雄 | 〃 | 〃四六、四、一 | 成田市飯仲一ー六一 | 二八六 | |
| 〃 | 須藤明子 | 家庭 | 〃三〇、九、一 | 千葉市松波一ー八ー一〇 | 二八〇 | ○四七二ー五一ー六七五四 |
| 〃 | 坂本あい子 | 〃 | 〃三九、四、一 | 〃 〃 二ー二ー五 | 二八〇 | ○四七二ー五一ー三八四六 |
| 〃 | 永井弘子 | 看護 | 〃四一、二、一六 | 〃 稲毛海岸三ー三ー二三ー二〇三 | 二八〇 | ○四七二ー四三ー五二八一 |
| 〃 | 高沢百合子 | 〃 | 〃四三、四、一 | 〃 幕張町二ー一〇一〇 | 二七五 | ○四七二ー七三ー〇五四八 |
| 助教諭 | 田村照子 | 〃 | 〃四三、四、一 | 〃 大膳野町四ー二九二 | 二八〇ー〇二 | |
| 実習助手 | 竹内久子 | 〃 | 〃四四、四、一 | 〃 松波二ー一四 松波荘 | 二八〇 | ○四七二ー五一ー五三〇六（呼） |
| 〃 | 山崎悦子 | 〃 | 〃四四、七、一 | 〃 千草台二ー二六ー一〇五 | 二八〇 | ○四七二ー五二ー七〇四一 |
| 〃 | 吉崎ヤス | 〃 | 〃四六、四、一 | 〃 幕張町五ー四一一 | 二七五 | |
| 養護教諭 | 安田末代 | 養護 | 〃三四、四、一 | 〃 弁天三ー一五ー一七米倉荘アパート | 二八〇 | ○四七二ー五一ー九五七九（呼） |
| 非常勤講師 | 安井成美 | 看護 | 〃四一、四、一 | 〃 稲毛東一ー一二ー一八 | 二八〇 | |
| 〃 | 北村玉枝 | 〃 | 〃四二、四、一 | 市川市市川二ー二六ー二四 | 二七二 | ○四七三ー二三ー三〇七〇 |
| 〃 | 青木芳郎 | 〃 | 〃四三、四、一 | 千葉市椿森四ー二ー一国立千葉病院宿舎内 | 二八〇 | |
| 〃 | 岩津英雄 | 〃 | 〃四三、四、一 | 〃 稲毛東二ー一一ー九 | 二八〇 | |

| 職名 | 氏名 | 教科 | 着任年月日 | 現住所 | 郵便番号 | 電話番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 非常勤講師 | 新美仁男 | 看護 | 昭四三、四、一 | 東京都渋谷区初台一―二二 | 一五一 | |
| 〃 | 武宮三三 | 〃 | 〃四三、四、一 | 千葉市椿森四―二―一国立千葉病院宿舎内 | 二八〇 | |
| 〃 | 大藤敬美 | 〃 | 〃 | 〃 轟町四―四―二一 | 二八〇 | |
| 〃 | 田中則好 | 〃 | 〃四四、四、一 | 市川市北国分町二六三四 | 二七二 | |
| 〃 | 奥山隆保 | 〃 | 〃四五、四、一 | 千葉市登戸町三―二三六 | 二八〇 | |
| 〃 | 宮内好正 | 〃 | 〃四六、四、一 | 〃 葛城町四三五 | 二八〇 | |
| 〃 | 太田東吾 | 〃 | 〃四六、四、一 | 〃 亥鼻町二〇八 | 二八〇 | ○四七二―二二―〇七四一 |
| 〃 | 木村敬二郎 | 〃 | 〃四六、四、一 | 〃 葛城町四二五平山方 | 二八〇 | ○四七二―二七―二七七九 (呵) |
| 〃 | 佐野元昭 | 〃 | 〃四六、四、一 | 〃 鶴沢町六七村田荘 | 二八〇 | |
| 〃 | 桑田勢津子 | 〃 | 〃四六、四、一 | 〃 要町一一高橋仁方 | 二八〇 | ○四七二―二二―三六七〇 |
| 〃 | 忍足正之 | 〃 | 〃四六、一二、一 | 〃 誉田町二―二―四九三 | 二六〇―〇三 | |
| 事務長 | 田中進 | | 〃四四、四、一 | 夷隅郡岬町東中滝五五一 | 二九九―四六 | |
| 事務主事 | 大山菊代 | | 〃三五、四、一 | 千葉市検見川町一―五一六 | 二八〇 | |
| 〃 | 青山康子 | | 〃三〇、五、一 | 〃 椿森二―三―二 | 二八〇 | ○四七二―一七一―七二九〇 |
| 事務助手 | 二上八重子 | | 〃四四、四、一 | 〃 園生団地八―一〇五 | 二八〇 | ○四七二―五一―六八一八 |
| 〃 | 石井正一 | | 〃四六、四、一 | 〃 亥鼻町二二五―四鴇田方 | 二八〇 | ○四七二―五二―八〇二〇 |
| 〃 | 今井万峯 | | 〃四六、四、一 | 〃 天台一―一五―一四 | 二八〇 | |
| 〃 | 石井才子 | | 〃四六、四、一 | 山武郡大網白里町金谷郷一四一二 | 二九九―三三 | |
| 用務員 | 栗林武夫 | | 〃三一、二、一六 | 千葉市作草部町九一〇―三八 | 二八〇 | ○四七二―五一―二〇六九 (呵) |
| 〃 | 中村勝次 | | 〃三二、四、一 | 〃 古市場町三七四―二 | 二六〇―〇三 | ○四七二―六三―四一〇二 |
| 〃 | 山本佶永 | | 〃四四、一、一 | 川口市芝中田一―二三―四第二みその荘 | 二九九―〇二 | ○四八七―五七―四六〇四 |
| 警備員 | 保科保太郎 | | 〃四二、一〇、一六 | 佐原市津宮一四二六第四中学校内 | 二八七 | ○四七六五―二―三七九三 (呵) |
| 〃 | 石井正雄 | | 〃四四、一、一 | 千葉市亥鼻町二一九 | 二八〇 | ○四七二―二二―六二八三 |

| 職名 | 氏名 | 教科 | 着任年月日 | 現住所 | 郵便番号 | 電話番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 委嘱講師 | 宮内美智子 | 看護 | 昭四二、四、一 | 千葉市長洲町一―一一六 | 二八〇 | ○四七二―二二―一〇三〇 |
| 学校医 | 佐藤清夫 | 〃 | 〃一七、三、三一 | 〃　院内町一〇四 | 二八〇 | |
| 〃 | 茂手木幸忠 | 〃 | 〃二四、三、三一 | 〃　轟町三 | 二八〇 | ○四七二―五一―六二九七 |
| 〃 | 米山博 | 〃 | 〃三六、四、一 | 〃　松波町三―一一 | 二八〇 | ○四七二―五一―四二〇五 |
| 〃 | 渡辺勲 | 〃 | 〃四一、四、一 | 〃　穴川二―一〇―九 | 二八〇 | ○四七二―五一―八二九五 |
| 〃 | 武宮三三 | 学校薬剤医 | 〃四四、一、一 | 〃　椿森四―四―一国立千葉病院宿舎内 | 二八〇 | |
| 〃 | 磯貝豊 | 〃 | 〃二四、三、三一 | 〃　本町二―六 | 二八〇 | |
| 〃 | 磯貝あい | 〃 | 〃三九、四、一 | 〃　本町二―三一 | 二八〇 | |
| 学校薬剤師 | 小野英敏 | 〃 | 〃四一、四、一 | 〃　宮崎町五二四―二四 | 二八〇 | |
| 教務助手 | 井橋和子 | 〃 | 〃四六、四、一 | 〃　椿森三―一三―八野村松三方 | 二八〇 | |
| 理科助手 | 川手美佐子 | 〃 | 〃四六、一一、一三 | 〃　轟町一―二―九越川アパート | 二八〇 | |
| 主事 | 中野舜一郎 | | 〃四六、四、一 | 我孫子市布佐二七六六―一 | 二七〇―一二 | |
| 教諭 | 椎名純 | 国語 | 〃三五、四、一 | 千葉市稲毛東三―一九―一二 | 二八〇 | |
| 〃 | 土屋睦朗 | 〃 | 〃四四、四、一 | 〃　小倉町一一七七―三 | 二八〇 | |
| 〃 | 牛島玲子 | 〃 | 〃四五、四、一 | 〃　本千葉町一三―一本千葉ビル四一六 | 二八〇 | |
| 〃 | 大岩美代 | 社会 | 〃三九、四、一 | 〃　作草部町一〇六一―四 | 二八〇 | ○四七二―五一―六五七七 |
| 〃 | 中村明 | 〃 | 〃四一、四、一 | 〃　千城台西一―二四―六 | 二八〇 | ○四七二―三七―四六四五 |
| 〃 | 高山卓 | 〃 | 〃四六、四、一 | 〃　貝塚町一一七四―六 | 二八〇 | ○四七二―三一―一六九七 |
| 〃 | 足立りつ子 | 数学 | 〃三八、四、一 | 〃　小倉台七―九―一六 | 二八〇 | ○四七二―三二―八九七三 |
| 〃 | 能重尚子 | 〃 | 〃四五、四、一 | 〃　新町一三一 | 二八〇 | ○四七二―四一―二三五九 |
| 〃 | 佐藤敏之 | 理科 | 〃二九、五、一 | 〃　千城台北一―二〇―六 | 二八〇 | |
| 〃 | 川添章彦 | 〃 | 〃三一、四、一 | 習志野市袖ケ浦六―一五―二〇 | 二七五 | ○四七四―七三―二六七一 |
| 〃 | 岩附実 | 〃 | 〃四〇、四、一 | 千葉市千城台北三―九―一四 | 二八〇 | ○四七二―三七―三四五四 |

| 職名 | 氏名 | 教科 | 着任年月日 | 現住所 | 郵便番号 | 電話番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 教諭 | 鬼海道雄 | 保体 | 昭四五、四、一 | 千葉市松波四ー一八ー四　市原清一方 | 二八〇 | |
| 〃 | 須賀賢悟郎 | 英語 | 〃三九、四、一 | 習志野市袖ケ浦二ー三ー四ー一〇八 | 二七五 | ○四七四ー七四ー八九五八 |
| 〃 | 長田宏哉 | 〃 | 〃四一、四、一 | 〃　こてはし台二ー九ー五 | 二八〇 | |
| 〃 | 佐伯智恵子 | 家庭 | 〃三六、四、一 | 千葉市本千葉町一三ー一　本千葉ビル四〇五 | 二八〇 | ○四七二ー二七ー〇〇七八 |
| 〃 | 宮代清一郎 | 商業 | 〃四〇、四、一 | 〃　高品町一二二九ー四三 | 二八〇 | ○四七二ー五二ー二五六七 |
| 非常勤講師 | 雑賀劭太郎 | 数学 | 〃四四、九、一 | 船橋市本町一ー二二九七 | 二七三 | ○四七四ー三一ー四三〇二 |
| 〃 | 立木啓司 | 英語 | 〃四五、四、一 | 千葉市花園二ー一ー一六 | 二八〇 | ○四七二ー七一ー五六〇四 |
| 〃 | 仲佐　真 | 国語 | 〃四五、四、一 | 夷隅郡大原町大原七九九六 | | |
| 〃 | 竹内保行 | 英語 | 〃四六、四、一 | 船橋市海神町東一丁目一三八六 | 二七三 | ○四七四ー三一ー四三二五 |
| 〃 | 田村繁孝 | 保体 | 〃四六、四一六 | 千葉市松波四ー一八ー四　市原方 | 二八〇 | |
| 〃 | 平野俊雄 | 数学 | 〃四六、四、一 | 佐原市佐原イ七六二 | 二八七 | |
| 事務 | 伊藤　晋 | | 〃四一、四、一 | 印旛郡四街道町大日五二六ー三　教住二ー二〇六 | 二七六 | |
| 〃 | 黒川喜美子 | | 〃四一、九、一 | 千葉市亥鼻町二七三 | 二八〇 | ○四七二ー八二ー六〇二九 |
| 〃 | 石田宏子 | | 〃四五、九、一 | 〃　七六 | 二八〇 | ○四七二ー二七ー四九一〇<br>○四七二ー二二ー〇三四八 |

# 旧職員表

| 担任教科 | 氏名 | 住所 死亡 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 校長 | 滝　熊之助 | 千葉市検見川町一の五〇（電）（七三）八三八六 | |
| 英語 | 市原初雄 | 佐原市佐原上宿イの六七二（電）佐原二三五四 | 千葉大教育学部 |
| 理科 | 林　勢司 | 千葉市辺田町三四三 | |
| 国語 | 森　俊雄 | 山武郡成東町下横地九三〇 | |
| 美術 | 小川恒雄 | 金沢市丸の内一の八 | 金沢大教育学部 |
| 体育 | 大関たか | 習志野市大久保三の三の九（電）（七二）七六二三 | 昭和学院高校 |
| 生物 | 吉田さゆり | | |
| 家庭 | 島田よね（旧金子） | | |
| 家庭 | 真田富美代（旧外山） | 千葉市松波四の二〇の三（電）（五一）七五六六 | |
| 家庭 | 山越チエノ | 千葉市寒川町三の一七三 | |
| 国語 | 塚本弥六 | 市川市菅野一の二三の一三（電）（三三）三三一四 | |
| 事務長 | 石井恒之 | 死亡 | |
| 家庭 | 平山利枝（旧鈴木） | 千葉市轟町一の八の三〇（電）（五一）七六四九 | |
| 社会 | 田　吉郎 | 千葉市弁天町七四の三（電）（五一）八四八六 | 柴田医院 |
| 家庭 | 柴田希子 | 習志野市谷津町五の一八五一（電）（七二）三八〇〇 | 千葉経済高校 |
| 社会 | 山崎一郎 | 茂原市萩原町二の一五二 | |
| 生物 | 有田保 | 山武郡大網白里町金谷郷一二九六 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 国語 | 木原功夫 | 千葉市新田町一二七（電）（四一）一五四三 | |
| 講・華 | 中村ヤエコ | 死亡 | |
| 体育 | 佐久間春枝（旧浅野） | 夷隅郡大原町大原七六六二の一 | 東金商業高校 |
| 講・数 | 鈴木保司 | 千葉市末広町二の六の五 | |
| 数学 | 粟屋励子（旧近藤） | 死亡 | 大多喜女子高校 |
| 体育 | 鳥飼よし（旧小沢） | 川崎市柳町三六 | |
| 家庭 | 土田公子（旧佐久間） | 東金市砂古瀬五八三（電）（二）三九八一 | 砂町診療所 |
| 家庭 | 飯高ヨウ | 千葉市椿森五の二の六（電）（五一）七九五九 | |
| 国語 | 大森菊野 | 市原市今津朝山七一六（電）（三）〇八六七 | 敬愛高校 |
| 数学 | 鵜山俊雄 | 千葉市緑町一の一三の三 | |
| 家庭 | 根本婦美江 | 東京都江東区東砂五の十二の二〇（電）（六四四）一三二九 | |
| 体育 | 山崎百合子（旧麻生） | 東京都中野区鷺宮六の三〇の十一 | |
| 理科 | 近藤節子 | 千葉市松ケ丘二一六（電）（六一）六八二五 | |
| 国語 | 池内勝次 | 死亡 | |
| 音楽 | 坂本勝世 | 千葉市蘇我町二の一〇三（電）（六一）二四五四 | |
| 講・理 | 高橋英吉 | | |
| 音楽 | 竹村弥生 | | |
| 家庭 | 山本貴美代 | | |
| 音楽 | 川田登四子 | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 講・英 | 折茂益枝 | 在米国 | |
| 数学 | 成田才吉 | 秋田市手形田中一四の五二　秋田大学官舎一〇号 | 秋田大学教育学部 |
| 国語 | 橘　健二 | | |
| 家庭 | 加藤幸子（旧吉野） | | |
| 家庭 | 水野静江 | | |
| 家庭 | 扇谷キヌ子（旧守山） | | |
| | | 死　亡 | |
| 家庭 | 秋元あさ子 | | |
| 音楽 | 長坂幸子 | 新潟県南蒲原郡栄村字帯織二二九三（電）帯織八三九三 | |
| 国語 | 滝沢虎雄 | | |
| 社会 | 石井総雄 | 君津郡清和村市場二七一 | 上総高校 |
| 家庭 | 名生はる | | |
| 理科 | 斉藤　健 | 千葉市大金沢町七〇四 | |
| 家庭 | 堅田フサ子（旧浜田） | 福島県平市旧城跡一二 | |
| 書道 | 高沢武雄 | 千葉市小中台四の七の五（電）（五一）五八八四 | 千葉大教育学部 |
| 国語 | 保坂　誠 | 千葉市葛城町一三五 | 東邦高校 |
| 家庭 | 金子静枝 | 千葉市春日町一の一五の一四（電）（四一）一四六九 | |
| 家庭 | 望月てい（旧渡辺） | 千葉市中央四の五の十三（電）（三二）五一六一 | |
| 社会 | 立石四郎 | 千葉市花園町二四三四（電）（七三）八九八〇 | 中央図書館長 |
| 国語 | 石出成弥 | 千葉市中野町一七一一 | |
| 理科 | 佐藤季子男 | 横浜市磯子区磯子三の九の一五（電）（七五一）五四四六 | |

家庭　那須はる　千葉市市場町九九（電）（二二）五九四九

国語　山田美恵子　千葉市新宿町一の二一四（電）（四二）二六八五

校長　楠原信一　千葉市寒川町二の五一

家庭　秋元たま子　千葉市黒砂一の七の一一（電）（四一）〇五六六

理科　矢部みえ子　（旧大庭）

社会　山西トシ子　富山県中新川郡東加積村下野九〇九

（旧守内）

英語　海保みえ　東京都武蔵野市西久保一の四九

（旧大藤）

国語　伊藤静江　市原市五井村上

（旧安藤）

体育　小林熊治　印旛郡四街道町鹿渡一〇二四

音楽　佐野日出男　千葉市弁天三の四の四（電）（五一）七四八八

国語　荒井房雄　死亡

数学　古沢正　船橋市薬園台町一の二七三（電）（六六）三五五六

（旧石井）

家庭　伊藤和子　千葉銀行

（旧中島）

家庭　伊藤圭子　千葉市轟町二の四の一二（電）（五一）八〇八七

（旧篠田）

美術　遠藤健郎　千葉市亥鼻町二六〇

家庭　森谷芳子　千葉市園生町一〇〇五（電）（五一）四〇〇八

椿森中

家庭　乗附利三子　（旧福地）　佐倉市宮小路六二（電）（八四）〇一〇七

講・英　木村輝子　死亡

校長　親泊朝晋　千葉市黒砂二の五の一五（電）（四一）八七五一

数学　深山弘

英語　篠宮正

国語　宮崎正海　君津郡君津町上湯江七七〇

講・理　伊芸重孝

理科　宇田川理　市原市国吉

美術　阿部高久

体育　西村蘭

家庭　木島道子　（旧始関）　千葉市旭町七三の三

数学　福原欣子

社会　豊田吉徳　船橋市本町六の二一の一三（電）（七二）三四六四

講・理　松本英平

事務　菰田愛子　（旧遠藤）　千葉市大宮台六の一七の九（電）（六二）八五四八

用務員　大川義忠

理科　斉藤正一郎　千葉市大森町二八六

美術　豊田敦　埼玉県川口市鳩ケ谷一三九三

国語　朝比奈英男　千葉市轟町一の一七の二〇

家庭　森日出子　東京都北区滝の川五の三三

木更津家政高校教頭

千葉電々公社

京葉工高校

東京蔵前工高

東京和光学園

| | | | |
|---|---|---|---|
| 英語 | 大河原 良知（旧秋元） | 船橋市七林町四三八の二四 | |
| 数学 | 久保田 清風 | 船橋市前原東三の二の二（電）（七二）一八七九 | |
| 社会 | 萩原 一郎 | 船橋市前原西二の一〇の一九 | |
| 社会 | 山口 信夫 | 神奈川県平塚市平塚二〇九七 | |
| 英語 | 一条 あき子 | 千葉市弁天三の六の八（電）（五一）八〇七一 | |
| 国語 | 木島 清 | 千葉市旭町七三の三 | |
| 家庭 | 愛敬 順子（旧石田） | 東京都福生市志茂六五 | |
| 校長 | 諸川 芳雄 | 千葉市花園町一六四八（電）（七三）八七二五 | |
| 事務 | 松井 代利子（旧西浦） | 川崎市平一七七の二 | |
| 音楽 | 勅使川原安芸子 | 船橋市海神六の十一の九（電）（三一）五六六五 | |
| 用務員 | 蔭山 三郎 | 印旛郡四街道町一五七一 | |
| 体育 | 愛敬 高輝 | 東京都福生市志茂六五 | |
| 講・美 | 伊藤 孝 | | |
| 講・数 | 飯田 敏 | 木更津市清見台東一の二〇の四 | |
| 数学 | 佐倉 俊二 | 横浜市港北区仲手原二の三〇の二二（電）（四二一）〇四六四 | |
| 事務 | 川又 玲子（旧西郡） | 船橋市習志野台一の一四七二 | |
| 家庭 | 川 勝雅（旧兵藤） | 静岡県藤枝市前島八一の二（電）藤枝（五）二六二四 | |
| 養護 | 桜井 登美子 | | |

千葉商高校
専大松戸高教頭

横浜市立南高校長

日本橋女学館高校

敬愛大学教授

野田ゴルフ場

木更津工専助教持

| | | | |
|---|---|---|---|
| 国語 | 佐々木　鉄太郎 | 千葉市轟町一の七の二〇（電）（五二）一四四七 | 四街道高校校長 |
| 家庭 | 松本　富子（旧鎌滝） | 広島市若草町市営アパート四の六 | |
| 教頭 | 澤田　繁二 | 千葉市葛城町三二六（電）（三二）八九〇〇 | 千葉高校長 |
| 社会 | 久坂　三郎 | 川崎市三田西三団地七の四の一〇一 | 都立一商高校 |
| 数学 | 石田　誠 | | |
| 社会 | 早崎　敏治 | 広島市若草町市営アパート四の六 | 広島大附属千田小 |
| 美術 | 松本　隆司 | 千葉市穴川二の三の三八（電）（五二）〇四三五 | |
| 商業 | 山室　新吾 | 東京都文京区本郷一の三三の七 | 千葉大教育学部 |
| 英語 | 吉田　信道 | 千葉市山王町三六四 | |
| 講・体 | 石原　文吉 | | |
| 講・体 | 大木　昭一郎 | 船橋市飯山満町二の六〇二（電）（六六）一三一三 | 敬愛短大教授 |
| 体育 | 綱島　竹治 | | |
| 数学 | 林　誠人 | | |
| 講・数 | 岩瀬　昭 | 船橋市上山町二の二四六（電）（三四）七六〇五 | 都立八潮高 |
| 理科 | 鈴木　信 | 千葉市新町一五三 | 東葛飾高校 |
| 講・華 | 大野　まさ代 | | |
| 用務員 | 増田　一郎 | | |
| 社会 | 黒岩　義之 | | |
| 国語 | 寺田　義栄 | 石川県松任市上安田町一六八 | 石川県教育庁 |
| 社会 | 中村　忠久 | 東京都板橋区東新町二の四四（電）（九五五）六四三五 | |
| 事務 | 松葉　昭 | 千葉市矢作町三〇一の三〇 | 鎌ケ谷高校事務長 |
| 講・体 | 松木　鉄太郎 | 千葉市轟町四の一（電）（五二）三四五二 | |
| 家庭 | 那児耶　千代 | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 養護 | 国分君子 | 横浜市南区弘明寺町二四二　第二水明荘 | 神奈川緑ケ丘保養所 |
| 社会 | 木島与左衛門 | 千葉市千葉寺町七〇一の二五 | 千葉高校 |
| 社会 | 宇野武郎 | 船橋市飯山満町二の六〇二（電）（六六）一五六一 | 県立船橋高校 |
| 数学 | 青山功 | 死亡 | |
| 社会 | 岩本層三 | 市川市平田一の一七の六（電）（三二）一四六九 | 松戸高校教頭 |
| 美術 | 草葉章 | 千葉市千城台東四の一四の二 | 千葉東高校教頭 |
| 国語 | 島田良二 | 千葉市稲毛台町一六の一八 | 学習院高校 |
| 英語 | 千田恭一 | 千葉市登戸四の三の二一（電）（四一）四六四八 | 鶴舞高校教頭 |
| 講・体 | 田中良 | 仙台市小田原瓦山三四の五九 | 宮城県教育委員会 |
| 社会 | 藤末篤二郎 | 東京都板橋区赤塚二の三八の一二（電）（九三〇）七七六〇 | |
| | （旧芳野） | （旧中村） | |
| 理科 | 剱持徹 | 木更津市貝渕六二五 | 市立船橋高校教頭 |
| 事務長 | 小宮清治 | 千葉市鎌取町二八七九の一五 | 上総高校 |
| 社会 | 氏家貞夫 | 死亡 | |
| 事務長 | 宮崎紀文 | 千葉市弁天四の四の二 | 千葉女子高教頭 |
| 理科 | 井下田博 | 千葉市検見川町三の一八六七の一 | 国府台葛南主事 |
| 数学 | 久保木千寿 | 千葉市椿森三の一六の一六 | 原子力情報センター |
| 数学 | 菅宮和夫 | 千葉市小中台三の三の十一 | 木更津高教頭 |
| 数学 | 白銀彦太郎 | 千葉市轟町二の四の八 | 茂原工高校長 |
| 通信主事 | 秋山利雄 | | |
| 通信国語 | 安藤幸輔 | 市川市国分町一一二九（電）（三四）七〇一八 | 都立江東商高校 |
| 通信国語 | 徳永実 | 千葉市新田町一五二（電）（四二）六四一八 | |
| 通・講国 | 兵藤益男 | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 通信社会 | 福田光子（旧佐倉） | 千葉市稲毛東三の一九の一五（電）（四三）九四四八 | |
| 通信社会 | 喜田歩 | 千葉市大宮台一の一七の五〇一 | |
| 通信数学 | 斉藤昭 | 東京都葛飾区東新小岩三の八の四の二〇五 | |
| 通信事務 | 湯浅多美子 | 死亡 | |
| 通信事務 | 伊倉千代 | | |
| 国語 | 宮本文彦 | 千葉市作草部町八六四の四五（電）（五二）一〇七九 | |
| 社会 | 松本貞雄 | 千葉市黒砂四の四の三（電）（四一）三六五〇 | |
| 国語 | 佐藤定義 | 千葉市弁天四の四の三（電）（五一）九四九四 | |
| 体育 | 山崎幸治 | 市川市八幡六の二八の一三（電）（三五）〇八七三 | |
| 体育 | 佐藤清英 | 茂原市茂原一五〇六の二（電）（二）四六七八 | |
| 数学 | 新谷敏夫 | 千葉市天台三の十二の二 | |
| 通信国語 | 鈴木光亮 | 佐倉市最上町七三（電）（八四）〇六〇四 | |
| 通信商業 | 伊藤聴 | 死亡 | |
| 通信社会 | 石川五三二 | | |
| 国語 | 安田 | 柏市豊四季台三の一の四七の三〇八 | |
| 用務員 | 若菜仁三郎 | 千葉市あやめ台二の三七の二〇一（電）（五二）五〇八五 | |
| 教頭 | 寺村紘二 | 市原郡原町山田橋一二九 | |
| 通信家庭 | 山田政子 | 船橋市習志野町一の一四六一（電）（六七）六二六八 | |
| 通信事務 | 斉藤静子（旧丹沢） | 千葉市花園町一五九九（電）（七一）七三九五 | |
| 通信国語 | 今惣吉 | 東京都保谷市東町三の八の一六 | |
| 講・理科 | 高橋重夫 | 千葉市稲毛東五の九の七（電）（四二）一九〇五 | |
| 事務 | 吉武昱子 | 千葉市青葉町六七二 | |

| | |
|---|---|
| | 千葉市立高校 |
| | 習志野高校 |
| | |
| | 野田高校長 |
| | 教育センター |
| | 相模女子大 |
| | 教育庁体育課 |
| | 京葉高校長 |
| | 教育センター長 |
| | 千葉経済高校 |
| | |
| | 山梨英和短大 |
| | 千葉女子高校 |
| | |
| | 専大松戸高副校長 |
| | 四街道高校 |
| | |
| | 千葉市立高校 |
| | 教育庁学校保健課 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 通信事務 | 中西久子（旧波戸） | 市川市本北方一の三三の一四 | 産経新聞専売所 |
| 通信社会事務長 | 石井通裕（旧三橋） | 千葉市中西町五二一 | 千葉工高事務長 |
| 事務 | 鈴木茂 | 千葉市轟町五の六の一（電）（五一）七八九六 | 京葉工高校 |
| 社会 | 吉田孝二 | 千葉市小倉台五の二〇の四 | 御宿家政高校長 |
| 図書助 | 細川悦子（旧鈴木） | 千葉市長沼原町一六五（電）（五九）五七〇〇 | |
| 通信商英 | 森田富夫 | 鎌谷市道野辺九五一 | 市立船橋高校 |
| 養護 | 渡辺貴久 | 銚子市浜町二二三 | 県立銚子高校 |
| 英語 | 吉田淳 | 郡山市菜根二の一八の二 | |
| 通信体育 | 山崎幸二郎 | 夷隅郡岬町井沢二六四の十一 | |
| 国語 | 小林芳仁 | | |

死亡

| | | | |
|---|---|---|---|
| 校長 | 石毛貞雄 | 千葉市松ケ丘町二二〇（電）（六一）〇五〇三 | 東金高校長 |
| 教頭 | 畠山一郎 | 千葉市稲毛東五の二の十四（電）（四三）九三三一 | 千葉高校 |
| 国語 | 坂本哲郎 | 千葉市検見川町三の四一三 | 検見川郵便局 |
| 数学 | 篠田義三 | 木更津市貝渕四五七 | 千葉女子高校 |
| 国語 | 藤倉守男 | 柏市西町二の二〇 | 清水高校 |
| 通信数学 | 篠塚昭吾 | 君津郡袖ケ浦町神納一二一五の七 | 教育庁千葉出張所 |
| 事務 | 関光衛 | 立川市富士見町六の一八二の二一の一一〇 | 大和一中 |
| 体育 | 佐藤龍雄 | 千葉市都町一九九の二 | 八千代高校 |
| 理科助 | 中村勢代子 | 船橋市前原西二の三六の二 | |
| 講・英 | 池田知之 | | |

| | | |
|---|---|---|
| 助手 | 加賀山欣子 | 函館市松陰町七の七 |
| 社会 | 伊津野朋弘 | 夷隅郡夷隅町須賀谷七〇二 |
| 数学 | 中村功 | 千葉市南生実町一二二一の三（電）（六三）〇二九七 |
| 国語 | 奥村浩 | 千葉市亀岡町二七 |
| 通信事務 | 高橋二郎 | 千葉市千葉寺町七二三の九 |
| 事務 | 金親和枝 | 印旛郡八街町八街にの一一八 |
| 国語 | 古沢政雄 | 千葉市今井一の一六の一七（電）（六一）二四七九 |
| 体育 | 石川宏 | 山梨県東八代郡石和町 |
| 教務助 | 天川清美（旧伊原） | 東京都杉並区西荻北二の三六の四 |
| 英語 | 高沢広吉 | 千葉市今井町一三四八の一四 |
| 英語 | 加瀬正幸 | 千葉市松ケ丘町二一八（電）（六一）二四〇五 |
| 通信主事 | 山川達二 | 千葉市亀井町一五（電）（二二）八五六八 |
| 通信国語 | 植田兵衛 | 死亡 |
| 通信社会 | 泉水信宏 | 勝浦市串浜七七四 |
| 理科 | 山口道夫 | 千葉市都町一一三二　県住三〇号 |
| 通信商業 | 土屋久雄 | |
| 用務員 | 伊原ヨシ | |
| 購買部 | 上村芳子 | |
| 理科 | 高村永言 | 千葉市千城台東二の七一の六 |
| 国語 | 星野和彦 | 千葉市千草台二の一八の四〇六 |
| 事務 | 斉藤章 | 市原市片又木二五二 |
| 通信数学 | 大堀英子 | 千葉市塩田町六四九 |
| 通信事務 | 板倉義人 | 山武郡大網白里町細草二五七九 |

| | |
|---|---|
| 中央図書館 | |
| 教育庁学務課 | |
| 天羽高校教頭 | |
| 都中野工業定時制 | |
| 淑徳大学 | |
| 千葉工業高校 | |
| 一宮商高 | |
| 千葉女子高校 | |
| 千葉市立高校 | |
| スポーツセンター | |
| 東金商業高校 | |

| | | |
|---|---|---|
| 教　助 | 金木恵和子 | 千葉市稲毛町二の三五 |
| 数　学 | 大庭幸雄 | 東京都北区西ケ原三の五九の一七 |
| 数　学 | 村越善雄 | 市原市馬立一七八 |
| 地　学 | 浅賀正義 | 千葉市花見川七の一四の五〇二 |
| 体　育 | 森吉浩 | 千葉市作草部町八六四の一〇八 |
| 英　語 | 山名勇 | 長生郡長柄町桜台四六五　美濃川方 |
| 通信英語 | 野村淑美 | 東京都港区麻布霞町二三 |
| 講・英 | 伊藤和子 | 千葉市松ケ丘町二一九 |
| 非講・家 | 田中かよ子 | 千葉市東本町七の一八 |
| 事務長 | 藤野当栄 | 千葉市椿森二の一六の四 |
| 理　科 | 今坂一郎 | 東京都中野区白鷺三の二の七の七四一 |
| 社　会 | 北根史夫 | 夷隅郡岬町椎沢九八六 |
| 国　語 | 亀原壮夫 | 印旛郡四街道町大日萱橋教住二の一〇三 |
| 数　学 | 亘　登志雄 | 八千代市米本団地三の四〇の三一五 |
| 教　頭 | 鬼島正雄 | 茂原市高師九一〇 |
| 英　語 | 佐々木輝雄 | 長生郡睦沢村上市場一一九二 |
| 事　務 | 丸　尚作 | 茂原市鷲巣三一 |
| 校　長 | 内藤貫一 | 館山市山萩一一六 |
| 通信体育 | 峯　勝一 | 千葉市汐見丘町二四の四（電）（四一）三八三〇 |
| 衛　看 | 加藤千鶴子 | 習志野市袖ケ浦三の四の五〇四 |
| 図書助 | 宇　純子（旧野沢） | 館山市八幡三七二 |
| 通信事務 | 横村和子 | 川崎市井田仲二七九　日本電気真空硝子井田寮 |

| | |
|---|---|
| | 神奈川大学 |
| | 市原高校 |
| | 鎌ケ谷高校 |
| | 千葉商業高校 |
| | 東金高校片貝校舎 |
| | |
| | 淑徳大学 |
| | 都立上野高校 |
| | 大多喜高校 |
| | 千葉高校 |
| | 千葉市立高校 |
| | 大多喜女子高校校長 |
| | 教育庁指導課 |
| | 千葉高校 |
| | |
| | 佐倉高校 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教務助 | 山田幸子 | 千葉市園生町三九〇の一 | |
| 理科 | 宇郁夫 | 館山市八幡三七二 | |
| 事務 | 高橋初枝 | 千葉市幸町二の一〇の十一の二〇五（電）（四四）一四五二 | |
| 衛看 | 藤村さゑ子 | 市川市新井二四六 | |
| 通信農業 | 山岡寛人 | 船橋市高根台町四の一一の二 | |
| 国語 | 大谷峯代 | 東京都北多摩郡久留米町南沢一一三三　日立月販社宅二一一 | |
| 通信主事 | 早川俊一 | 千葉市弁天町一八五（電）（五一）六七五三 | |
| 通信数学 | 山口茂 | 市原市八幡一五四四 | |
| 英語 | 小林義人 | 千葉市幕張町三の一〇八四（電）（七一）三〇六七 | |
| 教務助 | 榎本節子 | 千葉市松波二の一八の一七 | |
| 理科助 | 中村強子 | 千葉市松波四の二三の二 | |

（旧宮川）

セイコー光機
安房南高校
八千代高校
八千代高校教頭
千葉工業高校
鎌谷高校
神田産業

# 沿革年表

昭16・1・15　千葉市立千葉高等女学校（四年制）設立認可
一学年四学級（定員二〇〇名）所在地、千葉市港町一九番地

昭16・2・24　県視学滝熊之助本校校長に補せられる。

昭18・4・7　教室不足のため二部授業開始

昭18・11・1　新校舎一部落成　所在地　千葉市葛城町二一二番地　三年生移転

昭19・4・7　生徒の一部葛城町第二校舎および第三校舎（元葛城アパート）に移転三カ所分散授業

昭20・3・20　第一回卒業式

昭20・7・7　港町第一校舎戦災

昭20・7・9　新校舎建築中止教室不足のため隔日授業開始

昭20・8・8　校長滝熊之助県立千葉高等女学校長に転任

県立木更津高等女学校楠原信一本校校長に補せられる。

昭20・10・1　県立千葉中学校の校舎の一部を借用しての分散授業

昭21・4・1　五年制高等女学校となる。教室不足のため生徒の一部を千葉中　および収納庫に収容して隔日授業解消

昭22・4・1　六、三制発足のため生徒募集中止

昭22・11・25　校長楠言信一千葉市教育民生部長に転任、教頭親泊朝晋、本校校長事務取扱に補せられる。

昭22・11・28　借用の県立千葉中学校の校舎一部焼失

昭22・11・29　教室不足のため四・五学年は週一日第二・三学年は週二日休校

昭23・2・29　校長事務取扱親泊朝晋本校校長に補せられる。

昭23・3・31　学制改革により千葉市立女子高等学校として認可される。

昭23・4・17　新校舎に移転、所在地　千葉市轟町三番地
旧校地校舎を千葉市立第三中学校に委譲

昭23・5・15　千葉市立女子高等学校開校式

昭24・2・17　県立千葉女子高等学校に第三棟貸与

昭24・3・31　校長親泊朝晋県教委事務局管理課高校係長に転任

昭24・4・6　東京都立城北高等学校教頭諸川芳雄本校校長に補せられる。

昭24・4・12　建築中の第二棟大風のため倒壊（二四・一一・一一復旧）
昭24・4・26　新校章制定
昭24・4・27　生徒会発足
昭24・9・1　庭球コートを校舎裏に新設
昭24・9・26　千葉市立第五中学校に三教室貸与
昭24・10・27～29　第三学年昇仙峡、修善寺方面に研究旅行（第一日目の修学旅行）
昭24・11・22　職員・生徒・父兄・卒業生四者共同で県立移管問題なついて陳情
昭25・4・1　県立移管により千葉県立千葉第三高等学校と校名変更、一学級増加（以後一学年六学級）この年よりはじめて男子入学
昭25・5・1　男子帽章制定
昭25・7・13　本館建築促進運動を起し、県教委、市教委に陳情
昭25・10・25～29日）　三年生開西方面研究旅行初めて実施（四泊五
昭25・11・10～11　第一回文化祭（展覧会、バザー、音楽、演劇、研究発表会）
昭26・1・19　第一回耐寒マラソン
昭26・7・26～9・18　校庭整地作業（二〇〇mトラック、野球場、庭球、排球コート）
昭26・9・1　本館新築落成（小講堂、校長室、事務室、教務室、小使室、会議室、便所）
昭26・11・2～6　創立一〇周年記念式典挙行、行歌、応援歌制定、県下小中高校席書大会、音楽会、図画コンクール、生徒研究発表会、演劇鑑賞会、展覧会、バザー
昭27・5・30　女子制服制定
昭28・3・20　理科教室新築落成（物理教室、化学教室、地学教室、生物教室）
昭28・4・1　本年度入学生から第一学年七学級となる
昭29・4・1　通信教育部設置（県立千葉第一高等学校および県立千葉第二高等学校通信教育部を統合）
昭29・6・7　家庭科教室、普通教室新築落成、仮湯呑場を分解体育器具置場として移築
昭30・4・8　第一棟改築落成（普通教室、通信教育部室、更衣室）
昭30・7・20～9・5　校庭整地工事（グランド拡張）
昭30・10・10　通信教育部文部省実験学校に指名される
昭32・3・1　通信教育部第一回卒業生三名
昭32・4・8　本年度入学生から一学年定員三五〇名
昭32・8・31　体育館兼講堂新築落成

昭34・2・20　第二棟改築落成（普通教室、図書室）
昭34・3・31　校長諸川芳雄県立千葉商業高等学校長に転任
昭34・4・1　県立銚子商業高等学校長、石毛貞雄本校校長に補せられる。
昭35・4・1　努力目標設定、校内諸規程改訂
昭35・5・31　通信教育部校舎落成
昭35・11・19　第三棟改築落成（第二体育館、芸術科各教室、生徒会室）
昭36・4・1　千葉県立千葉東高等学校と校名変更
昭36・8・22　第三棟普通教室四を焼失（被害総額八、四九九、一〇〇円）
昭37・4・1　本年度入学生から一学年定員四〇〇名（八学級）
昭37・4・3　第二棟二階校舎新築（火災焼失による復旧）
昭38・2・26　校長室、教務室、事務室、保健室拡張工事、小講堂模様替、宿直室、放送室移転工事
昭38・4・1　本年度入学生から一学年定員四五〇名（九学級）
昭38・4・29　日本放送協会学園高等学校（通信制の課程）の協力校となり第一回入学式挙行
昭38・7・8　通信制の課程、読売教育賞受賞（第一回）
昭39・3・16　急増対策新校舎竣工（二階建六教室、便所、更衣室等）
昭40・7・20　校長石毛貞雄県立東葛飾高等学校長に転任
昭40・7・21　県立国府台高等学校長内藤貫一本校校長に補せられる。
昭41・4・1　衛生看護科（定員四〇名）設置（第一学年発足）
昭41・12・28　校門、玄関間の舗装工事完了
昭42・1・25　新校舎建築第一期工事着工（四二・一〇・一三竣工、総工費一四、二〇〇万円）
昭42・3・10　鉄筋コンクリート四階建延面積四、六五九㎡
昭42・3・11　校長内藤貫一退職
昭42・4・1　教頭鬼島正雄校長職務代理に補せられる。
昭42・4・7　千葉県教育委員会教育次長沢田繁二本校校長に補せられる。
昭42・10・13　今年度より普通科一学級減九学級となる。
昭42・12・5　第一期工事新校舎完成（普通教室、家庭科教室、書道、美術、社会科教室等）
昭43・1・17　プール建設用地の校舎取りこわし
昭43・7・26　プール建設工事開始（二五m七コース四三・七・二六竣工工費一五三四万円）
昭43・4・1　プール完成
昭44・3・10　本年度入学生から第一学年定員四三二名（普通科一学級四九名）
衛生看護科第一回卒業生三一名

昭44・3・10　新校舎建築第二期工事着工（四五・三・二〇竣工、総工費一八、七〇〇万円）

昭44・3・31　校長沢田繁二県立千葉工業高等学校長に転任

昭44・4・1　県立佐倉東高等学校長村田泰次郎本校校長に補せられる。

昭44・4・1　本年度入学生から一学年定員四二四名（普通科一学級四八名）

昭45・3・20　第二期工事新校舎完成（理科教室、視聴覚教室、音楽教室、図書室、教務室、事務室、校長室等）

昭45・4・1　本年度入学生から一学年定員四一六名（普通科一学級四七名）

昭45・9・2　新体育館工事着工（四六・三・三一竣工、総工費七、八三〇万円）

昭46・3・31　新体育館完成

昭46・4・1　本年度入学生から一学年定員四〇八名（普通科一学級四六名）

昭46・11・2　創立三〇周年、並に新校舎落成記念式典挙行

## ◇通信制の部

昭29・4・1　県立千葉第一・第二高校より本校に通信教育部を統合設置。（専任教諭八名・事務職員二名。）

4・12　秋山利雄主事以下五名着任。

6・1　通信教育機関誌「三高通信」創刊号発行。

6・13　第一回入学式挙行（三一一名入学）。

7・4　第一回本校面接指導実施。（三九年度まで毎月一回）

7・18　第一回巡回面接指導実施。（柏・大原・佐原地区）

昭30・10・27　文部省実験校に指定される（協力校について）。三二年二月七日協力校匝瑳高校で研究発表を行う。

昭31・8・18　第一回合宿スクーリング実施（至二〇日、於鹿野山、男女別各一泊二日、参加生徒四十二名）。

9・2　第一回定期試験実施。（本年度より試験定期化）

昭32・3・1　通信教育部第一回の卒業式挙行（三名卒業）。

昭34・4・9　**通信制独自の帽章、バッジ、ボタン制定。**

5・11　**文部省実験校に指定される（通信教育における学習指導の効果的運営について）。三五年三月二一日研究報告書を発表。**

**昭35・4・1　NHK通信教育放送研究委嘱校となる。**

5・22　**通信教育部専用校舎竣工。（六月二〇日移転）**

昭35・8・19　**法務大臣より感謝状を受ける。（千葉刑務所における通信教育講座開講に対して）**

昭36・4・1　秋山利雄主事転任により、山川達二主事着任。

7・15　第六回合宿スクーリング。（至一七日、本年度より会場を国立中央青年の家に移す、二五〇名参加）

10・31　「通信制の課程」となる。（学校教育法の改正）

11・6　第一回修学旅行実施（至一〇日、奈良・京都方面）

昭37・3・24　第一回学習会連合研究交歓会を行う（於木更津、県立青年の家）。

5・13　生徒会設立、第一回総会を行う。

7・15　生徒会機関誌「雑草」創刊号発行。

昭38・4・1　日本放送協会学園高等学校の協力校となる。

7・6　読売教育賞（定時制・通信制部門）受賞。（学習会の育成とそれに伴う研究実践に対して）

昭39・2・1　教科書・学習書の無償交付金第一回受領。

4・1　NHK通信教育放送研究委嘱校となる。

昭40・4・1　本年度より学習規制実施。本校面接指導は毎月二回となり、巡回面接指導は廃止される。

昭41・3・20　卒業式（第九回、八十名卒）を単独で挙行。

6・1　国鉄運賃割引制実現。（面接指導用五割引回数券）

昭41・9・17　千葉東高校通信制振興会発会。

昭42・3・19　卒業式（第十回、五十九名卒業）を日本放送協会学園高等学校と合同で挙行することとなる。

昭43・4・1　山川達二主事退職により、早川俊一主事着任。

昭46・4・1　早川俊一主事転任により、中野舜一郎主事着任。

# 編集後記

創立三十周年記念行事の一環として記念誌発行の計画が取上げられましたのは、昭和四十六年一月でした。そして同年三月下旬私ども十一人の者が学校長から編集委員の委嘱を受けました。

さてお引受けはしたもののその後が大変でした。と申しますのは、予算その他学校の様々な事情もあって発行までわずか一年足らずの短い期間で完成させなければならなかったからであります。いろいろなことがありました。今ふりかえってみますと、たゞもう時間が惜しく、ようやくの思いでともかく脱稿いたしました。作業中、痛感いたしましたことは、校内、校外ともに資料の不足していることでした。校内保管の資料につきましては、本校が数度の不慮の火災を蒙った関係でやむを得なかったとは思いますが、それにいたしましても散逸ないしは紛失が目だち、資料保管の大切なことをしみじみ知らされました。

また校外（市役所・県庁・その他）に保存されている筈の資料も意外に乏しく創立期の資料など心あたりを幾度か探索いたしましたが、一、二の発見にとゞまり多くを期待することができませんでした。その上設立の当事者や中心的な方々がみな故人となられていたことも、資料収集上大きな痛手でした。

このほか、編集委員のほとんどが、校務分掌、クラス担任、クラブ顧問、その他通常の勤務に携わりながら作業に当るというきびしい条件をかゝえていたゝめスタミナ不足で能率的にかなり影響があったのではないかということが反省されます。

完成いたしました本誌は私ども精いっぱいやらせていたゞいたつもりですがなお不備な点が多く、あるいはご期待に沿い得なかったのではないかというおそれをふと感ずるのでありますが、これはもとより才及ばざるがためと深く反省している次第であります。終りに、ご多忙中ご寄稿下さいました旧職員、卒業生の方々、ならびに貴重な資料やお写真をご提供下さいました宮内三朗氏・楠原信一氏・林勢司氏・森俊雄氏・小川恒雄氏・山崎一郎氏・吉田さゆり先生・永江栄様・小林美代子様・平野登美子様・間島正枝様に対し厚く御礼を申しあげます。

このほか、多数の方々から心温まるご協力を頂きましたが本誌がなんとか発行できましたのもひとえに皆様方のお力添えの賜と深く感謝の意を表する次第であります。

なお表紙のデザインは草葉章教頭苦心の作で、卒業記念の門柱の模様を拡大したものでありました創立三十周年記念誌の揮毫は安塚旭洞教諭の手によるものであります。

（昭和四十七年二月八日　勝　記）

編集委員名簿（五十音順）

秋山一郎　曽根正之　二上八重子
岡本正義　高山孝（通信）
勝輝夫　永井弘子　川添章彦
須藤明子　野村松三　中村明

印刷　昭和四十七年三月一日
発行　昭和四十七年三月十日

発行者　千葉県立千葉東高等学校長
村田泰次郎

編集者　千葉県立千葉東高等学校
創立三十周年記念誌編集委員

発行所　千葉市轟町一―十八―五二
千葉県立千葉東高等学校
電話〇四七二―五一―九三二一・二

印刷所　株式会社富葉印刷
千葉市要町九―七
電話千葉〇四七二―二三―四一四一(代)